

冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・ 金古北十三町遺跡

高崎渋川線道路改築(改良)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1998

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・ 金古北十三町遺跡

高崎渋川線道路改築(改良)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1998

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



1. 金古北十三町遺跡と周辺地形



2. 冷水村東・西国分新田遺跡と周辺地形



1. 冷水村東遺跡B区29号住居跡全景



2. 同カマド遺物内F A堆積状況



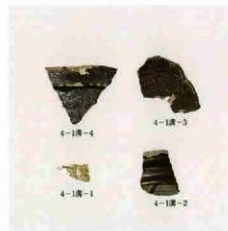
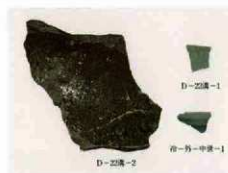
3. 同貯蔵穴内F A堆積状況



4. 冷水村東遺跡A区27号住居跡炭化材出土状況



5. 同柱材残存状況



口絵4

金古北十三町遺跡



1. 遺構外中世以降-3
2. 同-2 3. 同-5
4. 同-4 5. 同-12
6. 同-8 7. 8-64土-1
9. 同1井-1 10. 同粘-3
11. 同5土-1 12. 同粘-1
13. 同粘-2
14. 11-3溝-1



1. 遺構外中世以降-10
2. 15-1掘立-1
3. 15-1井-2
4. 同1井-1
5. 14-1壁-1
6. 14-1土-1
7. 14-3土-1



1. 遺構外中世-6
2. 同-9 3. 同-1
4. 同-11 5. 同-7
6. 同-13 7. 同-18
8. 同-19

序

主要地方道高崎渋川線は、近世の三国街道を踏襲しており、古くから往来が盛んな道路として知られております。現在では高崎市街地を南北に縦断したのち、県央部を縦貫する国道17号線と交叉して、渋川市と直接結ぶ幹線交通路として近年交通量が増加しています。本道路改築（改良）工事は現道の東側を迂回するバイパスとして整備されており、渋滞緩和のため早期の開通が囑望されています。工事に先立って昭和63年から群馬町教育委員会によって発掘調査がなされており、平成6年から県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施しております。

遺跡の西方には、保渡田古墳群や三ツ寺Ⅰ遺跡など県内の古墳時代有数の遺跡が分布し、東方には古代の政治の中心地である国府をはじめ、国分僧寺・尼寺などが分布しております。周辺では関越自動車道・上越新幹線整備に伴って発掘調査が報告されており、その中間に当たる部分の調査として、本遺跡は該当地域の歴史を考える上で重要な資料を提供することと思います。

調査された遺構・遺物には、古墳～平安時代にかけての58軒の竪穴住居を中心として、土坑、畠跡、水田跡、古墳・奈良・平安時代の土師器、須恵器、中近世の陶磁器などが出土しており、この点でも今後に資するところが大きいと言えます。

今回の報告書刊行に至るまでには、群馬県道路建設課、高崎土木事務所、県教育委員会、群馬町教育委員会、地元関係者の皆様に大変御尽力を賜りました。銘記して、心から感謝申し上げますと共に、本報告書が広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、報告書の序といたします。

平成10年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 菅野 清

例 言

1. 本書は、(主)高崎渋川線改築(改良)工事に伴う事前調査である。

2. 遺跡所在地

冷水村東遺跡 群馬郡群馬町大字冷水字村東・牛池、大字引間字三ツ屋

西国分新田遺跡 群馬郡群馬町大字西国分字新田・金古境

金古北十三町遺跡 群馬郡群馬町大字金古字北十三町、前橋市青梨子町字金古境

3. 事業主体 群馬県土木部道路建設課

4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査期間及び担当者

(1)発掘調査

冷水村東遺跡 調査期間 1994(平成6)年7月20日～1995(平成7)年3月31日

担当課長 中東耕志

調査担当 飯塚卓二 斎藤利昭 平方篤行

西国分新田遺跡 調査期間 1994(平成6)年12月1日～1995(平成7)年3月31日

担当課長 中東耕志

調査担当 松田猛 神谷佳明 横山千晶

金古北十三町遺跡 調査期間 1995(平成7)年6月15日～1998(平成10)年3月6日

担当課長 平成7年度 真下高幸

平成8年度 右島和夫

平成9年度 平野進一

調査担当 平成7年度 神谷佳明 飯森康広 遠藤俊爾

平成8年度 松村和男 池田政志 横山千晶

平成9年度 廣津英一 飯森康広

(2)整 理

整理期間 1997(平成9)年4月1日～1998(平成10)年3月31日

担当課長 平野進一

整理担当 飯森康広

新井悦子、狩野君江、渡辺フサ枝、小池緑、白井和子、矢野純子、

新井加寿恵

(3)事 務

常務理事 中村英一、菅野清 事務局長 近藤功、原田恒弘

管理部長 蜂巣実、渡辺健 調査研究部長 赤山容造、神保信史

総務課 斉藤俊一、小淵淳、国定均、笠原秀樹、井上剛、須田朋子、吉田有光、
柳岡良宏、高橋定義、宮崎忠司、岡嶋伸昌、大澤友治、吉田恵子、
松井美智代、塩浦ひろみ、内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子、
若田誠、山口陽子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、安藤友美、
狩野真子

6. 報告書作成関係者

編 集	飯森康広
本文執筆	第1章1 佐藤明人、第4章1 神谷佳明、斎藤利昭、第4章4 神谷佳明、 第5章10 廣津英一、第6章1 関根慎二、第6章3(1) 斎藤利昭、 第7章1～3 パレオ・ラボ、第7章4・5 (株)古環境研究所、 第8章3 石井榮一(世田谷区教育委員会) 上記(本文中明記)以外 飯森康広

縄文・弥生土器観察	関根慎二
住居遺物の年代比定	神谷佳明
墨書土器文字判読	高島英之(文化財保護課)
陶磁器観察	大西雅広、飯森康広
瓦観察	木津博明
鉄滓、羽口、鋸観察	大江正行
上記以外	飯森康広
遺構写真撮影	発掘調査担当者、技研測量設計株式会社(航空写真)
遺物写真撮影	佐藤元彦
保存処理	関邦一、土橋まり子、小材浩一、萩原妙子
分析・委託	火葬人骨、馬歯鑑定 宮崎重雄(群馬県立大間々高校教諭) 石材鑑定 飯島静男(群馬地質研究会) 炭化材分析・付着物の蛍光X線分析 株式会社 パレオ・ラボ 自然科学分析 株式会社 古環境研究所 遺構遺物図測量トレース 株式会社 測研

7. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい(敬称略、順不同)。

群馬県(土木部道路建設課)、高崎土木事務所、群馬町教育委員会
近藤義雄(かみつけの里博物館長)、石井榮一(世田谷区教育委員会)
当事業団職員諸氏

8. 調査資料は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センター及び(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。
9. 発掘調査にあっては、地元群馬町をはじめとし、前橋市、高崎市、箕郷町、榛名町、吉岡町、榛東村等から多くの方々が作業に従事していただいた。ここにあらためて感謝の意を表します。

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。
2. 遺構図については、下記の縮尺で掲載したが、一部縮尺の異なるものがあるので各挿図中にスケールを貼付してあるので参照されたい。

住居跡 1:60 住居跡のカマド 1:30 掘立柱建物跡・柱列 1:60
土坑 1:40 堀・溝 1:100 井戸跡 1:60

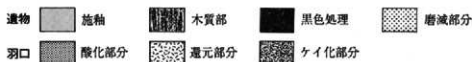
3. 遺構図中のスクリーンパターンは、下記のとおりである。



4. 遺物図の縮尺は下記のとおりであるが、それ以外のものは各挿図中にスケールを明記してある。

古銭・石銭 1:1 鉄器 1:2
土器 坏・埴輪・破片、瓦、鉄滓、砥石、石斧、こも礪石 1:3
土器 壺・甕類、縄文・弥生土器、くはみ石、砥石、石皿 1:4

5. 遺物図中のスクリーンパターンは、下記のとおりである。



なお、テフラについては記号を用い、H r - F A のみ略称として F A を用いた。正式名称と給源、降下年代は下記のとおりである。

As-Y P 浅間板鼻黄色テフラ 1.3~1.4万年前 As-C 浅間Cテフラ 4世紀中葉
As-B 浅間Cテフラ 6世紀初頭 As-A 浅間Cテフラ 西暦1108年
H r - F A 榛名二ツ岳渋川テフラ 西暦1783年

参考文献 町田洋・新井房夫 著 『火山灰アトラス』[日本列島とその周辺] 1992

6. 遺物写真は、遺物図とは同じ縮尺で掲載してある。

7. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

国土地理院 1:25,000 「前橋」・「渋川」・「伊香保」・「下室田」
1:50,000 「前橋」・「榛名山」

群馬都市計画区域図 1:10,000

8. 遺構の面積については、デジタルプランニメーターで3回計測した平均値を採用した。水田跡の面積はアゼの内側下場に囲まれた範囲を計測した。

9. 遺物観察表（土器）の法量は、①が口径、②が底径、③が器高、④はその都度記載。単位はcmである。

遺物観察表（石器・鉄器類）の規模は、①長辺②短辺③厚さで単位cm、④は重さで単位gである。

その他の遺物観察では、その都度記載した。

10. 遺物観察表（土器）の色調は、農林水産省農林水産技術会議 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

口絵

序

例言

凡例

本文目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章 調査の経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2
第2章 調査の方法	4
1. 調査の方法	4
2. 調査区の設定	5
3. 基本土層	6
第3章 地理的環境と歴史的環境	9
1. 地理的環境	9
2. 歴史的環境	12
第4章 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡の遺構・遺物	20
1. 竪穴住居跡	21
(1) 古墳時代	21
(2) 奈良・平安時代	56
2. 掘立柱建物跡・柱列	108
3. 土坑・竪穴状遺構・火葬土坑	114
4. 溝	125
5. 井戸跡	142
6. 土器集積	147
7. 畠跡	148
(1) A s - C 混黒色土下畠跡	148
(2) F A 下畠跡	150
(3) A s - B 混土畠跡	156
8. 水田跡と溝群	160
(1) F A 下水田跡	160
(2) A s - B 下水田跡と溝群	163
9. 道路跡	173
10. 旧河道・小谷地	174
11. 遺構外出土遺物	178
(1) 縄文土器 (2) 弥生土器 (3) 石器 (4) 奈良・平安時代出土遺物 (5) 中世以降出土遺物	

第5章 金古北十三町遺跡の遺構・遺物	183
1. 竪穴住居跡	185
2. 掘立柱建物跡・柱列	214
3. 土坑・土壕墓・竪穴状遺構・粘土探掘坑群・被熱土坑	234
4. 堀・溝	263
5. 井戸跡	288
6. 竪跡と溝群	292
(1) F A下竪跡	292
(2) F A上溝群	306
(3) A s - B 混土竪跡	307
7. 道路跡	311
8. 旧河道・小谷地	314
9. 遺構外出土遺物	317
(1) 縄文土器 (2) 弥生土器 (3) 石器 (4) 奈良・平安時代出土遺物 (5) 中世以降出土遺物	
(6) 時期不明出土遺物	
10. 追加 13区東	326
第6章 まとめ	327
1. 縄文時代	327
2. 弥生時代	327
3. 古墳時代	337
4. 奈良・平安時代	332
5. 中世以降	333
第7章 自然科学分析	335
1. 住居跡から出土する炭化材の樹種 —冷水村東遺跡—	335
2. 出土炭化材の樹種同定 —金古北十三町遺跡—	337
3. 須恵器底部灰色付着物の蛍光X線分析 —金古北十三町遺跡—	338
4. 冷水村東遺跡の自然科学分析	341
5. 金古北十三町遺跡の自然科学分析	351
第8章 考察	359
1. 金古北十三町遺跡3・4区検出の区画堀について	359
2. 用水路(溝)から見た金古宿の形成	361
3. 金古北十三町遺跡8区1号掘立柱建物址の検討	365

挿図目次

第1図	調査範囲図	2	第58図	A区17号住居跡出土遺物	64
第2図	調査区設定図	5	第59図	A区18号住居跡	65
第3図	土層配層図	7	第60図	A区18号住居跡出土遺物	66
第4図	基本土層図	8	第61図	A区19号住居跡	67
第5図	遺跡周辺の地形分類図	10	第62図	A区19号住居跡出土遺物	68
第6図	遺跡周辺の地質図	10	第63図	A区21号住居跡カマド	68
第7図	遺跡周辺の地割と土地利用状況	11	第64図	A区21号住居跡	69
第8図	周辺の遺跡(1)	14	第65図	A区21号住居跡掘り方・出土遺物(1)	70
第9図	周辺の遺跡(2)	15・16	第66図	A区21号住居跡出土遺物(2)	71
	冷水村東遺跡・西国分新田遺跡		第67図	A区22号住居跡	71
第10図	全体図	21	第68図	A区22号住居跡カマド	72
第11図	A区14号住居跡炭化材出土図	22	第69図	A区22号住居跡掘り方・出土遺物	73
第12図	A区14号住居跡	23	第70図	A区23号住居跡・カマド	74
第13図	A区14号住居跡カマド・出土遺物(1)	24	第71図	A区23号住居跡掘り方	75
第14図	A区14号住居跡出土遺物(2)	25	第72図	A区23号住居跡出土遺物	75
第15図	A区25号住居跡カマド	25	第73図	A区24号住居跡	76
第16図	A区25号住居跡	26	第74図	B区1号住居跡	76
第17図	A区25号住居跡掘り方・出土遺物	27	第75図	B区1号住居跡カマド	77
第18図	A区27A号住居跡炭化材出土図	28	第76図	B区1号住居跡掘り方・出土遺物(1)	78
第19図	A区27A・27B号住居跡	29	第77図	B区1号住居跡出土遺物(2)	79
第20図	A区27A号住居跡貯蔵穴・カマド	30	第78図	B区1号住居跡出土遺物(3)	80
第21図	A区27A号住居跡掘り方・出土遺物(1)	31	第79図	B区2号住居跡カマド	81
第22図	A区27A号住居跡出土遺物(2)	32	第80図	B区2号住居跡	82
第23図	A区27A号住居跡出土遺物(3)	33	第81図	B区2号住居跡出土遺物	83
第24図	A区27B号住居跡出土遺物	34	第82図	B区3号住居跡カマド	83
第25図	A区28号住居跡	34	第83図	B区3号住居跡	84
第26図	A区28号住居跡掘り方・カマド	35	第84図	B区3号住居跡出土遺物	85
第27図	A区28号住居跡出土遺物	36	第85図	B区4号住居跡	86
第28図	A区30号住居跡	36	第86図	B区4号住居跡掘り方・出土遺物	87
第29図	B区6号住居跡	37	第87図	B区5号住居跡カマド	87
第30図	B区6号住居跡カマド・出土遺物(1)	38	第88図	B区5号住居跡	88
第31図	B区6号住居跡出土遺物(2)	39	第89図	B区5号住居跡掘り方・出土遺物	89
第32図	B区6号住居跡出土遺物(3)	40	第90図	B区7号住居跡・出土遺物	90
第33図	B区20号住居跡カマド	40	第91図	B区8号住居跡	91
第34図	B区20号住居跡	41	第92図	B区8号住居跡カマド・出土遺物	92
第35図	B区20号住居跡掘り方・出土遺物(1)	42	第93図	B区9号住居跡掘り方	92
第36図	B区20号住居跡出土遺物(2)	43	第94図	B区9号住居跡	93
第37図	B区26号住居跡	44	第95図	B区9号住居跡出土遺物	94
第38図	B区29号住居跡	44	第96図	B区10号住居跡カマド	94
第39図	B区29号住居跡カマド・出土遺物	45	第97図	B区10号住居跡	95
第40図	D区31号住居跡	46	第98図	B区10号住居跡掘り方・出土遺物(1)	96
第41図	D区31号住居跡掘り方・出土遺物	47	第99図	B区10号住居跡出土遺物(2)	97
第42図	D区32号住居跡	48	第100図	B区11号住居跡	97
第43図	D区32号住居跡カマド・掘り方・出土遺物	49	第101図	B区11号住居跡出土遺物	98
第44図	D区33号住居跡・出土遺物	50	第102図	B区12号住居跡カマド	98
第45図	D区34号住居跡	51	第103図	B区12号住居跡・出土遺物	99
第46図	D区34号住居跡カマド	52	第104図	B区13号住居跡	100
第47図	D区34号住居跡掘り方・出土遺物	53	第105図	B区13号住居跡カマド・出土遺物	101
第48図	D区36号住居跡	54	第106図	D区35号住居跡	101
第49図	D区36号住居跡カマド・出土遺物	55	第107図	D区35号住居跡カマド・掘り方	102
第50図	A区15号住居跡	56	第108図	D区37号住居跡	103
第51図	A区15号住居跡掘り方・カマド	57	第109図	H区1号住居跡	104
第52図	A区15号住居跡出土遺物	58	第110図	H区1号住居跡カマド	105
第53図	A区16号住居跡	59	第111図	H区1号住居跡掘り方・出土遺物(1)	106
第54図	A区16号住居跡掘り方・カマド・床下土坑	60	第112図	H区1号住居跡出土遺物(2)	107
第55図	A区16号住居跡出土遺物	61	第113図	A区3号掘立柱建物跡	108
第56図	A区17号住居跡	62	第114図	A区4号掘立柱建物跡	109
第57図	A区17号住居跡掘り方・カマド	63	第115図	B区1号掘立柱建物跡	110

第116回	B区2号掘立柱建物跡	111
第117回	B区1号柱列	111
第118回	D区5号掘立柱建物跡	112
第119回	D区6号掘立柱建物跡	113
第120回	A区土坑	114
第121回	A区土坑全断面	115
第122回	B区土坑	116
第123回	D区土坑①	117
第124回	D区土坑②、出土遺物	118
第125回	G区1号火葬土坑、出土遺物・G区土坑①	119
第126回	G区土坑②	120
第127回	H区1号型穴状遺構、出土遺物	121
第128回	H区土坑①	123
第129回	H区土坑②	124
第130回	B区5号溝、C区1—4号溝	126
第131回	C区1号溝出土遺物	127
第132回	D区15・17号溝	128
第133回	D区18—20・22号溝	130
第134回	E区8・9・12・14号溝	131
第135回	E区25・26号溝	133
第136回	D区17・22号溝、E区8—10号溝出土遺物	134
第137回	F区5・9号溝、出土遺物	135
第138回	G区1・2号溝・2号溝出土遺物	138
第139回	G区3—5号溝	139
第140回	G区6・8・9号溝	140
第141回	G区10号溝、H区1—3号溝	141
第142回	D区1号井戸、出土遺物・F区1号井戸	142
第143回	G区1・2号井戸	143
第144回	G区3号井戸、出土遺物①	144
第145回	G区3号井戸出土遺物②	145
第146回	G区4号井戸	145
第147回	G区4号井戸出土遺物	146
第148回	H区1号井戸	146
第149回	C区1号土器窯竈遺構出土遺物	147
第150回	G区1・2号A—C混黑色土下畚跡	148
第151回	G区3号A—C混黑色土下畚跡	149
第152回	A区F A下畚跡	150
第153回	B区F A下畚跡	151
第154回	E区南F A下畚跡	152
第155回	G区F A下畚跡①	152
第156回	G区F A下畚跡②	153
第157回	G区F A下畚跡③	154
第158回	H区F A下畚跡	155
第159回	C区A—B混土畚跡	156
第160回	D区A—B混土畚跡	156
第161回	F区1号A—B混土畚跡	157
第162回	F区2・3号A—B混土畚跡	157
第163回	G区1号A—B混土畚跡	158
第164回	G区2号A—B混土畚跡	158
第165回	G区3号A—B混土畚跡	159
第166回	H区1号A—B混土畚跡	159
第167回	D区F A下水田跡	161
第168回	E区北F A下水田跡	162
第169回	C区A—B下水田跡①	163
第170回	C区A—B下水田跡②	164
第171回	D区A—B下水田跡と溝群	165
第172回	E区南A—B下水田跡と溝群①、出土遺物	167
第173回	E区南A—B下水田跡と溝群②	168
第174回	E区北A—B下水田跡	169
第175回	F区A—B下水田跡と溝群①	170
第176回	F区A—B下水田跡と溝群②	171
第177回	F区A—B下水田跡と溝群③	172

第178回	G区A—B下水田跡	172
第179回	H区1号道路跡	173
第180回	C区旧道・出土遺物・D区小谷地	175・176
第181回	F区・G区小谷地	177
第182回	縄文土器	179
第183回	弥生土器	180
第184回	石器	180
第185回	古墳時代出土遺物	181
第186回	奈良・平安時代出土遺物①	181
第187回	奈良・平安時代出土遺物②	182
第188回	中世以降出土遺物	182
金古北十三町遺跡		
第189回	全体図	184
第190回	1区1号住居跡	185
第191回	1区1号住居跡カマド、出土遺物	186
第192回	1区2号住居跡	186
第193回	1区2号住居跡掘り方・カマド	187
第194回	1区2号住居跡出土遺物	187
第195回	1区3号住居跡	188
第196回	1区3号住居跡カマド	189
第197回	1区3号住居跡出土遺物	189
第198回	1区4号住居跡	190
第199回	1区4号住居跡掘り方	191
第200回	1区4号住居跡カマド、出土遺物	191
第201回	1区5号住居跡	192
第202回	1区5号住居跡出土遺物	193
第203回	1区6号住居跡	194
第204回	1区6号住居跡カマド	195
第205回	1区6号住居跡出土遺物	195
第206回	1区7号住居跡	196
第207回	1区7号住居跡出土遺物①	196
第208回	1区7号住居跡出土遺物②	197
第209回	2区1号住居跡	197
第210回	2区1号住居跡カマド、出土遺物	198
第211回	2区2号住居跡	199
第212回	4区1号住居跡	199
第213回	4区1号住居跡カマド、出土遺物	200
第214回	4区2号住居跡	200
第215回	4区2号住居跡掘り方、出土遺物	201
第216回	4区3号住居跡	202
第217回	4区3号住居跡出土遺物	203
第218回	4区4号住居跡	203
第219回	4区4号住居跡掘り方、出土遺物①	204
第220回	4区4号住居跡出土遺物②	205
第221回	4区5号住居跡	205
第222回	5区1号住居跡	206
第223回	5区1号住居跡出土遺物	207
第224回	5区2号住居跡	207
第225回	5区2号住居跡掘り方・カマド	208
第226回	5区2号住居跡出土遺物	209
第227回	5区3号住居跡	210
第228回	5区3号住居跡出土遺物①	211
第229回	5区3号住居跡出土遺物②	212
第230回	10区1号住居跡、出土遺物	212
第231回	15区1号住居跡、出土遺物	213
第232回	1区1号掘立柱建物跡	214
第233回	1区2号掘立柱建物跡	215
第234回	1区3号掘立柱建物跡	216
第235回	1区4号掘立柱建物跡	217
第236回	1区5号掘立柱建物跡	218
第237回	1区6号掘立柱建物跡	219
第238回	1区6号掘立柱建物跡出土遺物	220

第239區	1區6號獨立建物跡出土遺物	220
第240區	2區1號獨立建物跡、出土遺物	221
第241區	2區1號柱列	222
第242區	2區2號獨立建物跡	222
第243區	5區2號獨立建物跡	223
第244區	5區3號獨立建物跡	224
第245區	5區4號獨立建物跡	224
第246區	5區1號柱列	225
第247區	6區1號獨立建物跡	225
第248區	6區2號獨立建物跡	226
第249區	6區3號獨立建物跡	226
第250區	8區1號獨立建物跡(1)	227
第251區	8區1號獨立建物跡(2)	228
第252區	8區2號獨立建物跡	229
第253區	8區3號獨立建物跡	230
第254區	9區1號獨立建物跡	231
第255區	14區1號獨立建物跡、出土遺物	232
第256區	14區1號柱列	232
第257區	15區1號獨立建物跡出土遺物	233
第258區	15區1號獨立建物跡	233
第259區	15區1號柱列、出土遺物	233
第260區	0區、1區土坑全個	235
第261區	0區、1區土坑(1)	236
第262區	1區土坑(2)	237
第263區	1區土坑出土遺物	237
第264區	2區土坑全個	238
第265區	2區土坑	239
第266區	2區、3區土坑	240
第267區	2區、3區土坑出土遺物	240
第268區	4區土坑(1)	242
第269區	4區土坑(2)	243
第270區	4區土坑(3)、出土遺物	244
第271區	5區土坑、出土遺物	245
第272區	6區1號被熱土坑、6區土坑	247
第273區	6區、7區土坑、出土遺物	248
第274區	8區土坑全個	249
第275區	8區1號粘土探掘坑群	250
第276區	8區土坑(1)	251
第277區	8區土坑(2)	252
第278區	8區1號粘土探掘坑群、8區土坑出土遺物	252
第279區	9區土坑	253
第280區	9區、10區土坑	254
第281區	11區1號土坑、11區、12區土坑	255
第282區	13區土坑	256
第283區	11區1號土坑出土遺物	256
第284區	14區、15區土坑全個	257
第285區	14區1號土坑遺構	259
第286區	14區土坑	260
第287區	14區、15區土坑	261
第288區	15區土坑、14區、15區土坑出土遺物	262
第289區	1區2號溝	263
第290區	3區1號溝	263
第291區	4區1號溝	264
第292區	4區1號溝工具痕	264
第293區	4區1號溝出土遺物	265
第294區	4區2號溝	265
第295區	4區2-7號溝セクション、6號溝出土遺物	267
第296區	5區1號溝、出土遺物	268
第297區	5區2號溝	269
第298區	6區1、3-7、53號溝	271
第299區	6區42、50-52、54、55、57號溝	272
第300區	6區1、42、53號溝出土遺物	273

第301區	7區4號溝	273
第302區	7區6、7、20號溝、6、7號溝出土遺物	274
第303區	8區1、2號溝	276
第304區	8區3-5號溝、2號溝出土遺物	277
第305區	9區4、6、9、10號溝、4號溝出土遺物	279
第306區	11區3號溝出土遺物	280
第307區	10區7號溝、11區1、2號溝、12區1A、1B、2號溝	281
第308區	13區2號溝	282
第309區	14區1、2、4、12、13號溝	284
第310區	14區6、7號溝	285
第311區	14區8、14號溝	286
第312區	15區1號溝、1、3號溝	287
第313區	15區1號溝、1號溝出土遺物	287
第314區	6區1號井戸、8區1、2號井戸	289
第315區	8區3號井戸、14區1號井戸、15區1、2號井戸	290
第316區	6區、8區、14區、15區井戸出土遺物	291
第317區	1區F A下畚跡	292
第318區	2區F A下畚跡	292
第319區	4區F A下畚跡(1)	294
第320區	4區F A下畚跡(2)	295
第321區	5區F A下畚跡	296
第322區	6區F A下畚跡(1)	297
第323區	6區F A下畚跡(2)	298
第324區	7區F A下畚跡	299
第325區	8區F A下畚跡	300
第326區	9區F A下畚跡	301
第327區	10區F A下畚跡	302
第328區	12區1、2號F A下畚跡	303
第329區	12區3號F A下畚跡、13區1、2號F A下畚跡	304
第330區	5區F A上溝群	306
第331區	6區F A上溝群	308
第332區	7區F A上溝群	309
第333區	9區F A上溝群	310
第334區	7區1號道路跡、出土遺物	312
第335區	11區1號道路跡、13區1號道路跡、15區1號道路跡	313
第336區	0區A-9-B下、F A下旧河道	315
第337區	0區旧河道出土遺物	316
第338區	2區、4區小谷地	316
第339區	縄文土跡(1)	318
第340區	縄文土跡(2)	319
第341區	弥生土跡	319
第342區	石跡(1)	320
第343區	石跡(2)	321
第344區	石跡(3)	322
第345區	古墳、奈良、平安時代出土遺物(1)	322
第346區	古墳、奈良、平安時代出土遺物(2)	323
第347區	中世以降出土遺物(1)	323
第348區	中世以降出土遺物(2)	324
第349區	時期不明出土遺物	325
第350區	13區東全個、1號道路跡	326
第351區	古墳時代住居跡F A雜設別配置及出土遺物集成	330、331
第352區	冷水村東邊樹種同定關係	337
第353區	金古北十三町道路安光X線分析關係	340
第354區	冷水村東邊地質柱狀圖	345
第355區	金古北十三町道路土層柱狀圖	352
第356區	金古北十三町道路植物結核分析關係	358
第357區	區圖解讀定及地割圖	360
第358區	金古宿周辺略圖	361
第359區	溝位置圖	362

第360回	8区1号掘立柱建物跡想定計画寸法図	368
付図1	冷水村東遺跡全体図	
付図2	西国分新田遺跡全体図	

付図3	金古北十三町遺跡全体図(1)
付図4	金古北十三町遺跡全体図(2)
付図5	金古北十三町遺跡3・4区土坑・溝群図

表目次

第1表	周辺道路一覧表	17
第2表	金古北の井底深度表	334
冷水村東遺跡	遺構計測表	
第3表	A区3号掘立柱建物跡計測表	369
第4表	A区4号掘立柱建物跡計測表	369
第5表	B区1号掘立柱建物跡計測表	369
第6表	B区2号掘立柱建物跡計測表	369
第7表	B区1号柱列計測表	369
第8表	D区5号掘立柱建物跡計測表	369
第9表	D区6号掘立柱建物跡計測表	369
第10表	土坑計測表	369・370
第11表	D区F A下水田跡面積等計測表	370
第12表	E区F A下水田跡面積等計測表	370
第13表	C区A a-B下水田跡面積等計測表	370
第14表	D区A a-B下水田跡面積等計測表	370
第15表	E区A a-B下水田跡面積等計測表	370
第16表	F区A a-B下水田跡面積等計測表	371
金古北十三町遺跡	遺構計測表	
第17表	1区1号掘立柱建物跡計測表	371
第18表	1区2号掘立柱建物跡計測表	371
第19表	1区3号掘立柱建物跡計測表	371
第20表	1区4号掘立柱建物跡計測表	371
第21表	1区5号掘立柱建物跡計測表	371
第22表	1区6号掘立柱建物跡計測表	371

第23表	2区1号掘立柱建物跡計測表	371
第24表	2区1号柱列計測表	371
第25表	5区1号掘立柱建物跡計測表	372
第26表	5区2号掘立柱建物跡計測表	372
第27表	5区3号掘立柱建物跡計測表	372
第28表	5区4号掘立柱建物跡計測表	372
第29表	1区1号柱列計測表	372
第30表	6区1号掘立柱建物跡計測表	372
第31表	6区2号掘立柱建物跡計測表	372
第32表	6区3号掘立柱建物跡計測表	372
第33表	8区1号掘立柱建物跡計測表	372・373
第34表	8区2号掘立柱建物跡計測表	373
第35表	8区3号掘立柱建物跡計測表	373
第36表	9区1号掘立柱建物跡計測表	373
第37表	14区1号掘立柱建物跡計測表	373
第38表	14区1号柱列計測表	373
第39表	15区1号掘立柱建物跡計測表	373
第40表	15区1号柱列計測表	373
第41表	土坑計測表	373-380
遺物観察表		
冷水村東遺跡・西国分新田遺跡	遺物観察表	380
金古北十三町遺跡	遺物観察表	395
動物遺存体観察表		407
瓦観察表		407

写真図版目次

図版1	冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡
1.	金古北十三町遺跡と周辺地形
2.	冷水村東・西国分新田遺跡と周辺地形
図版2	冷水村東遺跡
1.	冷水村東遺跡B区29号住居跡全景
2.	同 カマド建物内F A堆積状況
3.	同 貯蔵穴内F A堆積状況
4.	冷水村東遺跡A区27号住居跡炭化材出土状況
5.	同 柱材残存状況
図版3	冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡
出土遺物	
図版4	金古北十三町遺跡出土遺物

冷水村東遺跡・西国分新田遺跡

PL 1	1. A-C区全景
	2. A区全景
	3. B区全景
	4. C区全景
PL 2	1. E区南全景
	2. F区全景
	3. G区全景
	4. H区全景
PL 3	1. A区14号住居跡全景
	2. A区14号住居跡掘り方

3.	A区14号住居跡遺物出土状態
4.	A区14号住居跡カマド
5.	A区14号住居跡貯蔵穴
PL 4	1. A区25号住居跡全景
	2. A区27号住居跡全景
PL 5	1. A区27号住居跡遺物出土状態(1)
	2. A区27号住居跡掘り方
	3. A区27号住居跡カマド
	4. A区27号住居跡遺物出土状態(2)
	5. A区27号住居跡カマド掘り方
PL 6	1. A区27号住居跡遺物出土状態(3)
	2. A区27号住居跡遺物出土状態(4)
	3. A区27号住居跡貯蔵穴
	4. A区27号住居跡柱穴1
	5. A区27号住居跡柱穴2
	6. A区27号住居跡柱穴2土層断面
	7. A区27号住居跡柱穴4残存状態
	8. A区27号住居跡柱穴4土層断面
PL 7	1. A区28号住居跡全景
	2. A区28号住居跡掘り方
	3. A区28号住居跡カマド
	4. A区28号住居跡遺物出土状態
	5. A区28号住居跡貯蔵穴
PL 8	1. A区30号住居跡全景

	2. B区6号住居跡全景		4. A区19号住居跡遺物出土状態②
P L 9	1. B区6号住居跡遺物出土状態		5. A区19号住居跡カマド遺物出土状態
	2. B区6号住居跡カマド	P L 21	1. A区21号住居跡全景
	3. B区6号住居跡掘り方		2. A区21号住居跡遺物出土状態
	4. B区6号住居跡カマド遺物出土状態		3. A区21号住居跡カマド
	5. B区6号住居跡遺物出土状態(1)		4. A区21号住居跡貯蔵穴
	6. B区6号住居跡遺物出土状態(2)		5. A区21号住居跡床下土坑
	7. B区6号住居跡遺物出土状態(3)	P L 22	1. A区22号住居跡全景
P L 10	8. B区6号住居跡貯蔵穴		2. A区22号住居跡遺物出土状態①
	1. B区20号住居跡全景		3. A区22号住居跡カマド
	2. B区20号住居跡カマド		4. A区22号住居跡貯蔵穴
	3. B区20号住居跡貯蔵穴		5. A区22号住居跡遺物出土状態②
	4. B区20号住居跡カマド掘り方	P L 23	1. A区23号住居跡全景
	5. B区20号住居跡遺物出土状態		2. A区23号住居跡カマド
P L 11	1. B区26号住居跡全景		3. A区23号住居跡遺物出土状態
	2. B区26号住居跡F A堆積状況		4. A区23号住居跡特種車出土状態
	3. B区29号住居跡全景		5. A区24号住居跡全景
	4. B区29号住居跡カマド	P L 24	1. B区1号住居跡全景
	5. B区29号住居跡F A堆積状況		2. B区1号住居跡掘り方
P L 12	1. B区29号住居跡貯蔵穴		3. B区1号住居跡カマド
	2. B区29号住居跡貯蔵穴土層断面		4. B区1号住居跡遺物出土状態
	3. D区31号住居跡全景		5. B区1号住居跡住居内土坑
	4. D区31号住居跡カマド	P L 25	1. B区2号住居跡全景
	5. D区31号住居跡貯蔵穴土層断面		2. B区2号住居跡掘り方
P L 13	1. D区32号住居跡全景		3. B区2号住居跡カマド
	2. D区32号住居跡掘り方		4. B区2号住居跡貯蔵穴
	3. D区32号住居跡カマド		5. B区2号住居跡カマド土層断面
	4. D区32号住居跡遺物出土状態	P L 26	1. B区3号住居跡全景
	5. D区32号住居跡貯蔵穴土層断面		2. B区3号住居跡遺物出土状態
P L 14	1. D区33号住居跡全景		3. B区3号住居跡掘り方
	2. D区33号住居跡掘り方		4. B区3号住居跡カマド
	3. D区33号住居跡カマド		5. B区3号住居跡貯蔵穴
	4. D区33号住居跡土層断面	P L 27	1. B区4号住居跡全景
	5. D区33号住居跡貯蔵穴		2. B区4号住居跡カマド
P L 15	1. D区34号住居跡全景		3. B区5号住居跡全景
	2. D区34号住居跡掘り方		4. B区5号住居跡掘り方
	3. D区34号住居跡カマド		5. B区5号住居跡カマド
	4. D区34号住居跡土層断面	P L 28	1. B区7号住居跡全景
	5. D区34号住居跡遺物出土状態		2. B区7号住居跡掘り方
P L 16	1. A区15号住居跡全景		3. B区7号住居跡カマド
	2. A区15号住居跡遺物出土状態①		4. B区7号住居跡土層断面
	3. A区15号住居跡カマド		5. B区7号住居跡遺物出土状態
	4. A区15号住居跡遺物出土状態②	P L 29	1. B区8号住居跡全景
	5. A区15号住居跡カマド土層断面		2. B区8号住居跡掘り方
P L 17	1. A区16号住居跡全景		3. B区8号住居跡遺物出土状態①
	2. A区16号住居跡掘り方		4. B区8号住居跡遺物出土状態②
	3. A区16号住居跡カマド		5. B区8号住居跡遺物出土状態③
	4. A区16号住居跡遺物出土状態	P L 30	1. B区9号住居跡全景
	5. A区16号住居跡貯蔵穴		2. B区9号住居跡掘り方
P L 18	1. A区17号住居跡全景		3. B区9号住居跡カマド
	2. A区17号住居跡掘り方		4. B区9号住居跡貯蔵穴
	3. A区17号住居跡カマド		5. B区9号住居跡カマド土層断面
	4. A区17号住居跡掘り出土状態	P L 31	1. B区10号住居跡全景
	5. A区17号住居跡貯蔵穴		2. B区10号住居跡遺物出土状態
P L 19	1. A区18号住居跡全景		3. B区10号住居跡カマド
	2. A区18号住居跡掘り方		4. B区10号住居跡掘り方
	3. A区18号住居跡遺物出土状態①		5. B区10号住居跡カマド掘り方
	4. A区18号住居跡遺物出土状態②	P L 32	1. B区11号住居跡全景
	5. A区18号住居跡床下土坑		2. B区11号住居跡カマド
P L 20	1. A区19号住居跡全景		3. B区11号住居跡掘り方遺物出土状態①
	2. A区19号住居跡遺物出土状態①		4. B区11号住居跡カマド土層断面
	3. A区19号住居跡カマド		5. B区11号住居跡掘り方遺物出土状態②

P L 33	1. B区12号住居跡全景 2. B区12号住居跡掘り方 3. B区12号住居跡カマド 4. B区12号住居跡カマド遺物出土状態 5. B区12号住居跡カマド掘り方	6. H区9号土坑全景 7. H区14～19号土坑全景 8. H区25号土坑全景
P L 34	1. B区13号住居跡全景 2. B区13号住居跡掘り方 3. B区13号住居跡カマド 4. B区13号住居跡貯蔵穴 5. B区13号住居跡カマド土層断面	P L 45 1. H区29～31号土坑全景 2. H区37号土坑全景 3. H区41号土坑全景 4. H区42号土坑全景 5. H区47号土坑全景 6. H区48号土坑全景 7. H区49号土坑全景
P L 35	1. D区35号住居跡全景 2. D区35号住居跡カマド 3. D区35号住居跡カマド掘り方 4. D区35号住居跡貯蔵穴 5. D区35号住居跡貯蔵穴土層断面	P L 46 1. B区5号溝全景 2. C区1～4号溝全景 3. C区1号溝遺物出土状態(1) 4. C区1号溝遺物出土状態(2) 5. D区15号溝土層断面 6. D区18～20号溝全景
P L 36	1. D区36号住居跡全景 2. D区37号住居跡全景	P L 47 1. D区17号溝全景 2. D区17号溝土層断面 3. D区22号溝全景 4. E区8・9号溝全景 5. E区8・9号溝土層断面
P L 37	1. H区1号住居跡全景 2. H区1号住居跡掘り方 3. H区1号住居跡カマド 4. H区1号住居跡遺物出土状態 5. H区1号住居跡カマド掘り方	P L 48 1. E区12・14号溝全景 2. E区25号溝全景 3. E区26号溝全景 4. F区5号溝全景 5. F区9号溝全景 6. G区1号溝全景
P L 38	1. A区3号掘立柱建物跡全景 2. A区4号掘立柱建物跡全景 3. B区1号掘立柱建物跡全景	P L 49 1. G区1号溝全景 2. G区1号溝土層断面 3. G区2号溝全景 4. G区2号溝土層断面 5. G区4～6号溝全景
P L 39	1. B区2号掘立柱建物跡全景 2. D区5号掘立柱建物跡全景 3. D区6号掘立柱建物跡全景	P L 50 1. G区3号溝全景 2. G区8号溝全景 3. G区9号溝全景 4. G区10号溝全景 5. H区1・2号溝全景
P L 40	1. D区6号掘立柱建物跡 P 1 2. D区6号掘立柱建物跡 P 6 3. A区9号土坑全景 4. A区11号土坑全景 5. B区1号土坑全景 6. B区2号土坑全景 7. B区3号土坑全景 8. B区4号土坑全景	P L 51 1. D区1号井戸全景 2. D区1号井戸土層断面 3. F区1号井戸全景 4. F区1号井戸土層断面 5. G区1号井戸全景 6. G区1号井戸土層断面 7. G区2号井戸土層断面 8. G区3号井戸全景
P L 41	1. B区6号土坑全景 2. B区31号土坑全景 3. D区7号土坑全景 4. D区8号土坑全景 5. D区13号土坑全景 6. D区16号土坑全景 7. D区20号土坑全景 8. D区23号土坑全景	P L 52 1. G区3号井戸石出土状態 2. G区3号井戸土層断面 3. G区4号井戸全景 4. G区4号井戸土層断面 5. H区1号井戸全景 6. H区1号井戸土層断面 7. C区1号土器集積遺景 8. C区1号土器集積近景
P L 42	1. G区1号火葬土壙(1) 2. G区1号火葬土壙(2) 3. G区1号土坑全景 4. G区3号土坑全景 5. G区4号土坑全景 6. G区5号土坑全景 7. G区7号土坑全景 8. G区12号土坑全景	P L 53 1. G区1・2号A～C混黑色土下品跡全景 2. G区3号A～C混黑色土下品跡全景 3. A区F A F下品跡全景 4. B区F A F下品跡全景 5. E区南F A下品跡全景 6. G区F A F下品跡南側全景 7. G区F A F下品跡北側全景 8. G区F A F下品跡南側
P L 43	1. H区1号竪穴状遺構遺物出土状態(1) 2. H区1号竪穴状遺構全景 3. H区1号竪穴状遺構土層断面 4. H区1号竪穴状遺構遺物出土状態(2) 5. H区1号竪穴状遺構遺物出土状態(3)	P L 54 1. H区F A F下品跡全景
P L 44	1. H区1号土坑全景 2. H区4号土坑全景 3. H区6号土坑全景 4. H区7号土坑全景 5. H区8号土坑全景	

	2. F区1号A s-B混土島跡全景	2. 1区3・4号住居跡全景
	3. F区2号A s-B混土島跡全景	3. 1区4号住居跡カマド
	4. F区1号A s-B混土島跡	4. 1区4号住居跡掘り方
	5. G区1号A s-B混土島跡全景	5. 1区4号住居跡カマド掘り方
	6. G区2号A s-B混土島跡全景	P L 68 1. 1区5号住居跡全景
	7. G区3号A s-B混土島跡全景	2. 1区5号住居跡掘り方
	8. H区1号A s-B混土島跡全景	3. 1区5号住居跡カマド
P L 55	1. D区F A下木田跡全景	4. 1区5号住居跡床下土坑
	2. E区北F A下木田跡全景	5. 1区5号住居跡カマド掘り方
P L 56	1. C区A s-B下木田跡全景	P L 69 1. 1区6号住居跡全景
	2. C区A s-B下木田跡	2. 1区6号住居跡掘り方
	3. D区A s-B下木田跡と溝群全景(1)	3. 1区6号住居跡カマド遺物出土状態
	4. D区A s-B下木田跡と溝群全景(2)	4. 1区6号住居跡貯蔵穴
	5. D区A s-B下木田跡と溝群全景(3)	5. 1区6号住居跡カマド掘り方
	6. E区南A s-B下木田跡と溝群全景	P L 70 1. 1区7号住居跡全景
	7. E区南A s-B下木田跡と溝群断面	2. 1区7号住居跡掘り方
P L 57	1. E区北A s-B下木田跡全景(1)	3. 1区7号住居跡遺物出土状態
	2. E区北A s-B下木田跡全景(2)	P L 71 1. 2区1号住居跡全景
	3. F区A s-B下木田跡全景	2. 2区1号住居跡遺物出土状態
	4. F区A s-B下木田跡	3. 2区1号住居跡カマド
	5. F区A s-B下木田跡11号溝全景	4. 2区1号住居跡掘り方
	6. G区A s-B下木田跡11号溝全景	5. 2区1号住居跡カマド掘り方
	7. B区1号道路跡全景	P L 72 1. 2区2号住居跡全景
	8. H区1号道路跡全景	2. 4区1号住居跡全景
P L 58	1. H区1号道路跡	3. 4区1号住居跡カマド
	2. H区1号道路跡土層断面	P L 73 1. 4区2号住居跡全景
	3. C区旧河道全景	2. 4区2号住居跡土層断面
	4. C区旧河道近景	P L 74 1. 4区3号住居跡全景
	5. D区小谷地全景	2. 4区3号住居跡遺物出土状態
	6. F区小谷地全景	3. 4区3号住居跡カマド
	7. G区小谷地全景	4. 4区3号住居跡掘り方
	8. H区縄文土器出土状態	5. 4区3号住居跡カマド掘り方
金古北十三町遺跡		P L 75 1. 4区4号住居跡全景
P L 59	1. 調査区遺景(0区以北)	2. 4区4号住居跡遺物出土状態(1)
	2. 調査区遺景(6区以北)	3. 4区4号住居跡遺物出土状態(2)
P L 60	1. 0区全景	4. 4区4号住居跡遺物出土状態(3)
	2. 1区東側全景	5. 4区5号住居跡全景
	3. 1区西側全景	P L 76 1. 5区1号住居跡全景
	4. 2区西側全景	2. 5区1号住居跡掘り方
	5. 2区東側全景	3. 5区1号住居跡カマド
P L 61	1. 3区全景	4. 5区1号住居跡貯蔵穴
	2. 4区全景	5. 5区1号住居跡カマド掘り方
P L 62	3. 4区遺景	P L 77 1. 5区2号住居跡全景
	4. 5区全景	2. 5区2号住居跡遺物出土状態
	1. 6区全景	3. 5区2号住居跡カマド
	2. 7区全景	4. 5区2号住居跡掘り方
P L 63	3. 8区全景	5. 5区2号住居跡貯蔵穴
	4. 9・10区全景	P L 78 1. 5区3号住居跡全景
P L 64	1. 11・12区全景	2. 5区3号住居跡遺物出土状態
	2. 13区全景	3. 5区3号住居跡カマド
	3. 14・15区全景	4. 5区3号住居跡掘り方
	1. 1区1号住居跡全景	5. 5区3号住居跡カマド掘り方
	2. 1区1号住居跡掘り方	P L 79 1. 10区1号住居跡全景
	3. 1区1号住居跡カマド	2. 10区1号住居跡掘り方
	4. 1区1号住居跡貯蔵穴	P L 80 1. 15区1号住居跡全景
	5. 1区1号住居跡カマド掘り方	2. 15区1号住居跡掘り方
P L 65	1. 1区2号住居跡全景	P L 81 1. 1区1号掘立柱建物跡全景
	2. 1区2号住居跡掘り方	2. 1区2号掘立柱建物跡全景
	3. 1区2号住居跡カマド遺物出土状態	3. 1区3号掘立柱建物跡全景
	4. 1区2号住居跡遺物出土状態	P L 82 1. 1区4号掘立柱建物跡全景
	5. 1区2号住居跡カマド掘り方	2. 1区5号掘立柱建物跡全景
P L 66	1. 1区3号住居跡全景	3. 1区6号掘立柱建物跡全景
	2. 1区3号住居跡掘り方	
	3. 1区3号住居跡貯蔵穴	
	4. 1区3号住居跡遺物出土状態	
	5. 1区3号住居跡住居内土坑	
P L 67	1. 1区4号住居跡全景	

PL 83	1. 1区6号孤立柱建物跡 P 6 2. 1区6号孤立柱建物跡 P 6 遺物出土状態 3. 2区1号孤立柱建物跡全景 4. 2区1号孤立柱建物跡 P 3 5. 2区1号孤立柱建物跡 P 5	2. 8区3号土坑全景 3. 8区5号土坑全景 4. 8区5号土坑遺物出土状態 5. 8区6・132号土坑全景 6. 8区64号土坑全景 7. 8区65号土坑全景
PL 84	1. 2区1号孤立柱建物跡 P 7 2. 2区1号柱列全景 3. 5区1号孤立柱建物跡全景 4. 5区2号孤立柱建物跡全景	PL 95 1. 9区2号土坑全景 2. 9区31号土坑全景 3. 9区37号土坑全景 4. 9区43号土坑全景 5. 9区46号土坑全景 6. 9区119号土坑全景 7. 10区16号土坑全景 8. 10区20号土坑全景
PL 85	1. 5区3号孤立柱建物跡全景 2. 5区4号孤立柱建物跡全景 3. 6区1号孤立柱建物跡全景	PL 96 1. 11区1号土曜金景(1) 2. 11区1号土曜金景(2) 3. 11区1号土曜金遺物出土状態 4. 11区2号土坑全景 5. 12区1号土坑全景 6. 13区1号土坑全景 7. 13区2号土坑全景
PL 86	1. 6区2号孤立柱建物跡全景 2. 6区3号孤立柱建物跡全景 3. 8区1号孤立柱建物跡全景	PL 97 1. 14区1号堀穴遺構全景 2. 14区1号堀穴遺構掘り方 3. 14区1号土坑全景
PL 87	1. 8区1号孤立柱建物跡 P11 2. 8区1号孤立柱建物跡 P20 3. 8区2号孤立柱建物跡全景 4. 8区3号孤立柱建物跡全景 5. 9区1号孤立柱建物跡全景	PL 98 1. 14区1号土坑下面全景 2. 14区2号土坑全景 3. 14区3号土坑全景 4. 14区6号土坑全景 5. 14区6号土坑掘り方 6. 14区6号土坑土層断面 7. 14区21号土坑全景 8. 14区22号土坑全景
PL 88	1. 14区1号孤立柱建物跡全景 2. 14区1号柱列全景 3. 15区1号孤立柱建物跡全景	PL 99 1. 14区21・22号土坑土層断面 2. 14区27号土坑全景 3. 15区1号土坑全景 4. 15区5号土坑全景 5. 3区1号堀全景 6. 3区1号堀土層断面 7. 4区1号堀全景
PL 89	1. 0区1号土坑全景 2. 0区1号土坑土層断面 3. 0区11号土坑全景 4. 1区1号土坑全景 5. 1区2号土坑全景 6. 1区6号土坑全景 7. 1区8号土坑全景 8. 1区133号土坑全景	PL 100 1. 4区1・2号堀間土橋全景 2. 4区1号堀北側近景(1) 3. 4区1号堀北側近景(2) 4. 4区1号堀土層断面(1) 5. 4区1号堀土層断面(2) 6. 4区1号堀遺物出土状態 7. 4区1号堀北東角
PL 90	1. 1区176・178・179・181・195号土坑全景 2. 2区78・79・81・86・108・109・130号土坑全景 3. 2区104号土坑全景 4. 2区108号土坑全景 5. 3区2号土坑全景 6. 4区16号土坑全景 7. 4区17号土坑全景 8. 4区60号土坑全景	PL 101 1. 4区1号堀工具痕 2. 4区2号溝全景 3. 4区4号溝全景(1) 4. 4区4号溝全景(2) 5. 4区4号溝土層断面 6. 4区6・7号溝全景
PL 91	1. 4区72号土坑全景 2. 4区82号土坑全景 3. 4区83号土坑全景 4. 4区182号土坑全景 5. 4区225号土坑全景 6. 5区17号土坑全景 7. 5区35号土坑全景 8. 5区36号土坑全景	PL 102 1. 5区1号溝全景 2. 5区2号溝全景 3. 6区1・3・5・6号溝全景 4. 6区7号溝全景 5. 6区42・52号溝全景
PL 92	1. 6区1号被熱土坑全景 2. 6区1号被熱土坑土層断面 3. 6区1号土坑全景 4. 6区3号土坑全景 5. 6区19号土坑全景 6. 6区23号土坑全景 7. 6区39号土坑全景 8. 6区49号土坑全景	PL 103 1. 6区42・50・53・57号溝全景 2. 6区42号溝遺物出土状態 3. 6区53号溝全景 4. 7区4号溝全景 5. 7区7号溝遺物出土状態
PL 93	1. 7区2号土坑全景 2. 7区5号土坑全景 3. 8区1号粘土探掘坑群全景 4. 8区1号粘土探掘坑群 5. 8区1号粘土探掘坑群遺物出土状態 6. 8区1号粘土探掘坑群 P 1	
PL 94	1. 8区1号土坑全景	

6. 7区6・7・20号溝全景
P L 104

1. 7区20号溝全景
2. 8区1号溝全景
3. 8区2号溝全景
4. 8区2号溝遺物出土状態
5. 8区4号溝全景
6. 8区5号溝全景

P L 105

1. 9区4・5・6号溝全景
2. 9区9号溝全景
3. 11区1号溝全景
4. 11区2号溝全景

P L 106

1. 11区3号溝全景
2. 12区1A・1B号溝全景
3. 12区2号溝全景
4. 13区2号溝全景
5. 14区1号溝全景
6. 14区1号溝土層断面

P L 107

1. 14区2号溝全景
2. 14区4号溝全景
3. 15区1号溝全景
4. 15区1号溝土層断面

P L 108

1. 6区1号井戸全景
2. 6区1号井戸土層断面
3. 8区1・3号井戸全景
4. 8区1号井戸土層断面
5. 8区2号井戸土層断面
6. 8区3号井戸土層断面
7. 8区3号井戸土層断面

P L 109

1. 14区1号井戸全景
2. 14区1号井戸遺物出土状態
3. 14区1号井戸土層断面
4. 15区1号井戸土層断面
5. 15区2号井戸全景
6. 15区2号井戸土層断面

P L 110

1. 1区F A下品跡全景
2. 2区F A下品跡全景
3. 4区F A下品跡全景
4. 5区F A下品跡全景
5. 6区F A下品跡全景(1)
6. 6区F A下品跡全景(2)
7. 7区F A下品跡全景
8. 8区F A下品跡全景

P L 111

1. 9区F A下品跡全景
2. 10区F A下品跡全景
3. 12区1号F A下品跡全景
4. 12区2号F A下品跡全景
5. 12区3号F A下品跡全景
6. 13区F A下品跡全景
7. 6区F A上溝群全景

P L 112

1. 7区F A上溝群全景
2. 7区F A上5号溝全景
3. 7区F A上5号溝土層断面
4. 7区F A上26・27号溝全景
5. 8区1号A s-B掘土品跡全景
6. 8区2号A s-B掘土品跡全景
7. 9区F A上溝群全景

P L 113

1. 2区1号道路跡全景
2. 7区1号道路跡下断面
3. 7区1号道路跡全景
4. 7区1号道路跡土層断面
5. 11区1号道路跡全景
6. 13区1号道路跡全景

P L 114

1. 15区1号道路跡全景
2. 15区1号道路跡近景
3. 15区1号道路跡土層断面
4. 15区1号道路跡下断面
5. 15区1号道路跡最下面

P L 115

1. 0区A s-B下旧河道全景
2. 0区F A下旧河道全景
3. 0区F A下旧河道土層断面
4. 2区小谷地全景
5. 4区小谷地全景(1)
6. 4区小谷地全景(2)
7. 4区小谷地土層断面

P L 116

1. 4区縄文土層出土状態
2. 10区縄文土層出土状態
3. 6区弥生土層出土状態
4. 9区弥生土層出土状態
5. 4区西側隣地金福治稲荷石祠No. 1
6. 4区西側隣地金福治稲荷石祠No. 2

P L 117

1. 13区東1号道路跡全景
2. 13区東1号道路跡土層断面

冷水村東遺跡・西園分折田遺跡出土遺物

P L 118～P L 128 1. 堅穴住居跡(1)古墳時代

P L 128～P L 138 (2)奈良・平安時代

P L 139 3. 土坑・堅穴遺構

P L 130～P L 141 4. 溝

P L 141～P L 142 5. 井戸

P L 142 6. 土器集積

P L 143 8. 水田跡・溝群

P L 143 10. 河道跡・小谷地

P L 143 11. 遺構外(1)縄文時代

P L 143 (2)弥生時代

P L 144 (3)石器

P L 144 (4)古墳時代

P L 144～P L 145 (5)奈良・平安時代

P L 145 (6)中世以降

金古北十三町遺跡出土遺物

P L 146～P L 152 1. 堅穴住居跡

P L 152～P L 153 2. 掘立柱建物跡・柱列

P L 153～P L 154 3. 堅穴遺構・土坑・土壇・粘土採掘坑

群・被熱土坑

P L 154～P L 155 4. 堀・溝

P L 155 5. 井戸

P L 155 7. 道路跡

P L 155 8. 河道跡・小谷地

P L 156 9. 遺構外(1)縄文時代

P L 157 (2)弥生時代

P L 157～P L 158 (3)石器

P L 158 (4)古墳・奈良・平安時代

P L 159 (5)中世以降

P L 159 (6)時期不明

科学分析

P L 160

1. 冷水遺跡群住居跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真(1)
2. 冷水遺跡群住居跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真(2)

P L 161

1. 金古北十三町遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真
2. 須恵器底部灰色付着物の実体顕微鏡写真
3. 冷水村東遺跡植物柱體の顕微鏡写真
4. 花粉・胞子
5. 金古北十三町遺跡植物柱體の顕微鏡写真

P L 162

P L 162～P L 163

P L 163

報告書抄録

フリガナ	ヒヤミズムラヒガシセキ・ニシコクブシンデンイセキ・カネコキタジュウサンチヨウイセキ
書名	冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡
副書名	(主)高崎渋川線道路改築(改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第1集
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第245集
編著者名	飯森康広 神谷佳明 関根慎二 斎藤利昭 廣津英一 石井優一
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年月日	西暦1998年12月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	道路番号					
シヤミズムラヒガシセキ 冷水村東	シヤミズムラヒガシセキ 群馬県群馬町 大字冷水	10324	10005- 00403	36°23'51"	139°00'35"	19940720～ 19950331	8,360	道路建設
ニシコクブシンデン 西国分新田	ニシコクブシンデン 群馬県群馬町 大字西国分	10324	10005- 00408	36°23'60"	139°00'35"	19941201～ 19950331	7,810	道路建設
カネコキタジュウサンチ 金古北十三町	カネコキタジュウサンチ 群馬県群馬町 大字金古・前橋市青柳子町	10324	10005- 00420	36°24'23"	139°00'35"	19950615～ 19980306	20,188	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
冷水村東・ 西国分新田	集落	古墳時代	竪穴住居	15軒	土師器・須恵器	床面をFAによって被覆された竪穴住居3軒 FA直下 はば定存の鉄製鍬が竪穴住居から出土している。 A～B直下
	生産		畠・水田			
	集落	奈良・平安時代	竪穴住居	24軒	土師器・須恵器・鉄器	
	生産		掘立柱建物	6棟		
			柱列	1列		
			竪穴状遺構	1基		
金古北十三町			火葬土壇	1基		FA直下 南北170m以上の方形区画遺構 幅員2.1mを測る中世の道路跡
	集落	中世	水田		陶器	
	その他		井戸	7基		
			土坑	99基		
			溝	34条		
	生産		畠・水田			
	集落	奈良・平安時代	竪穴住居	19軒	土師器・須恵器・鉄器	
			掘立柱建物	12棟		
			柱列	1列		
			土壇墓	1基		
	集落	中近世	掘立柱建物	8棟	陶磁器	
			柱列	2列		
			竪穴状遺構	1基		
			粘土採掘坑群	1基		
			区画堀	3条		
			井戸	7基		
			道路跡	3条		
	その他		土坑	892基		
			溝	64条		

第1章 調査の経過

1. 調査に至る経緯

主要地方道高崎渋川線は県中央部を南北に縦貫し、県内の交通の要衝である高崎市と北毛の中心都市渋川市を結ぶ都市間連絡道路であり、通勤、通学等地域住民が日常生活に利用する生活基盤路線である。これが、年々増加する交通量に対処しきれなくなったことにより現道路と並行し、交通隘路を迂回するバイパスとして整備することとなった。

高崎渋川線整備事業に係る記録保存措置としての埋蔵文化財発掘調査は、群馬町大字棟高地内西三社免遺跡が昭和63年群馬町教育委員会により実施されたのを皮切りに、平成2年に大字引間地内小池遺跡、平成5年に大字引間地内諏訪西遺跡が引き続き群馬町教育委員会により実施されてきた。

本書で報告になる冷水村東遺跡、西国分新田遺跡、及び金古北十三町遺跡の3遺跡となる群馬町大字冷水、大字西国分及び大字金古地内の建設予定区域は、既にその一部が「群馬町文化財地図」に遺物散布地として記載された「周知の遺跡」の範囲にあった。このため高崎渋川線整備事業の主体者である県土木部道路建設課からの当該地の文化財状況についての照会に対して県教育委員会文化財保護課は、工事着工に先だって当該地全区域に遺跡の有無、及び範囲確認のための試掘調査を実施する必要があることを回答していた。

平成5年度当初、県土木部道路建設課より県教育委員会文化財保護課に平成6年中に当該地の一部を工事着工したいとの協議があり、これを受けて文化財保護課は工事着手時期の早い大字冷水地内から試掘調査を実施した。冷水地内を平成5年7月と同年12月、引き続き平成6年10月には大字西国分地内、さらに平成7年3月には大字金古地内の試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、冷水地内の染谷川西岸微高地部から西国分地内にかけての間に奈良・平安時代集落

跡、平安時代水田跡、古墳時代畑跡等の遺構がトレンチ内で確認され、また牛池川西岸部から金古地内の間には古墳時代畑跡等の広がりも確認された。当該区間のうち一部、牛池川東岸部の100m区間の遺構・遺物の見られない区域を除いた区間が保存措置を必要とする遺跡地とされた。この結果は県土木部に回答され、埋蔵文化財の保護と道路建設事業との調整の結果、当該地は発掘調査による記録保存措置を講じることとなり、群馬町教育委員会とも協議が行われたが、発掘調査事業規模の大きさや道路建設工事日程の緊急性等により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することとなった。

(佐藤)



2. 調査の経過

(1) 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡

冷水村東遺跡の発掘調査は、平成6年7月20日から8か月間で調査対象面積8,360㎡を実施した。調査にあたっては、便宜上調査区内を通る町道によって、A～E区に調査区を分割した。A・B・D区では古墳～平安時代の竪穴住居跡と古墳時代の畚跡ほかを調査し、C・E区では古墳時代と平安時代の2時期の水田跡を検出した。

西国分新田遺跡の発掘調査は、平成6年12月1日から4か月間で調査対象面積7,810㎡を実施した。調査にあたっては、冷水村東遺跡と同様にF～H区に調査区を分けた。F区では冷水村東遺跡に連続する平安時代水田跡を検出し、G・H区では平安時代竪穴住居跡1軒のほか古墳時代の畚跡を調査した。

整理作業は、平成9年4月から1年間の計画で実施した。

(2) 金古北十三町遺跡

本遺跡の発掘調査は、3か年にわたり断続的に実施した。1年次は平成7年6月15日から約9か月間で調査対象面積13,400㎡、2年次は平成8年8月1日から4か月間で調査対象面積6,500㎡、3年次は平成9年6月19日から7日間で調査対象面積121.13㎡の調査を実施した。調査にあたっては、便宜上調査区内を通る公道及び用水路によって、0～15区に調査区を分割した。1・2・4・5・10・15区では点在する奈良・平安時代の竪穴住居跡を調査した。0区を除く調査区全域では、古墳時代の畚跡を検出し、0区では旧河道の調査を実施した。

整理作業は、平成9年4月から1年間の計画で実施した。



第1図 調査範囲図

2. 調査の経過

日誌抄録

冷水村東遺跡

平成6年度

1994年

- 7.20 発掘調査準備の設置、調査準備。
- 8.1 B区の表土掘削及び奈良・平安期居住跡ほかの調査開始。
- 29 A区の奈良・平安期居住跡ほかの調査開始。
- 10.4 南橋市立総社小学校社会科見学生徒60名。
- 7 C区A～B下水跡ほかの調査開始。
- 19 A・B区奈良・平安期面全体を高所作業車で写真撮影。
- 30 現地説明会（参加者260名）。
- 11.8 A・B・C区をバルーンにより航空写真撮影。
- 11 A・B区F A下面の調査開始（一部住居跡調査継続）。
- 21 C区旧河道路調査開始。
- 22 E区南A～B上面溝ほかの調査開始。
- 12.2 A・B・E区を高所作業車で写真撮影。
- 6 A・B区A～C混土下調査開始（一部住居跡調査継続）。
- 15 C・E区南を高所作業車で写真撮影。
- 19 E区南F A下品跡ほかの調査開始。
- 26 E区南調査終了、埋め戻し。

1995年

- 1.5 D区表土掘削開始。
- 10 D区A～B下水跡・溝の調査開始。
- 13 A・B区調査終了、埋め戻し開始。
- 20 D区を高所作業車で写真撮影。E区北表土掘削開始。
- 24 D区15溝及びE区北A～B下水跡調査開始。
- 27 E区北A～B下水跡を高所作業車で写真撮影。
- 2.1 D区古墳期居住跡・F A下水跡及びE区北F A下水跡の調査開始。
- 17 E区北F A下水跡全体を高所作業車で写真撮影。
- 20 D区古墳期居住跡及びF A下水跡を高所作業車で写真撮影。
- 3.2 E区北調査終了、埋め戻し。
- 9 D区調査終了、埋め戻し。

西国分新田遺跡

平成6年度

1994年

- 12.1 F区表土掘削開始。
- 7 F区A～B上面・A～B下水跡調査開始。G区表土掘削。
- 20 F区A～B下水跡を高所作業車で写真撮影。

1995年

- 1.6 F区F A下面及びA～C混土面調査開始。
- 12 G区1号溝調査開始。
- 17 F区小谷地調査開始。
- 27 F区小谷地・G区1号溝を高所作業車で写真撮影。
- 30 F区旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ調査開始。
- 2.6 H区表土掘削、平安期居住跡ほかの調査開始。F区埋め戻し。
- 11 G区F A上面遺構全体をバルーンにより航空写真撮影。
- 20 G・H区F A下品跡調査開始。
- 3.3 G・H区F A下品跡をバルーンにより航空写真撮影。
- 7 G・H区A～C混土下品跡の調査開始。
- 13 H区旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ調査開始。
- 14 G区A～C混土下品跡全体を高所作業車で写真撮影。
- 20 G区旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ調査開始。
- 27 G区調査終了、埋め戻し。

金古北十三町遺跡

平成7年度

1995年

- 6.15 発掘調査準備

- 29 2・3区表土掘削開始。
- 7.7 3区1号堀ほかの調査開始。
- 11 3区全敷をヘリコプターにより航空写真撮影。1区表土掘削開始。
- 14 3区埋め戻し開始。
- 21 1・2区平安期居住跡ほかの調査開始。
- 8.10 1・2区平安期面全体を高所作業車で写真撮影。2区旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ調査開始。
- 12 4・9・10区表土掘削開始。
- 28 1区旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ調査開始。5区表土掘削開始。
- 29 9・10区近世以降面調査開始。
- 9.1 1区埋め戻し開始。
- 18 9・10区F A下品跡の調査開始。
- 21 9・10区F A下品跡をバルーンにより航空写真撮影。
- 22 4区1号堀及び5区平安期居住跡ほかの調査開始。
- 10.18 4・5区F A下品跡調査開始。
- 23 9・10区旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ調査開始。
- 26 4・5区F A下品跡をバルーンにより航空写真撮影。
- 11.6 4・5区旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ調査開始。
- 15 0・6・7・8区表土掘削開始。9・10区埋め戻し。
- 12.13 4区埋め戻し。
- 15 0区A～B下旧河道・1区西平安期居住跡ほか調査開始。
- 22 0・1区西全敷を高所作業車で写真撮影。

1996年

- 1.8 8・7・6区の順で随時F A上面調査開始。
- 2.7 6・7・8区のF A上面溝群ほかを高所作業車で写真撮影。
- 8 7・6・8区の順で随時F A下品跡調査及び0区F A下旧河道の調査開始。
- 26 0・6・7・8区をバルーンにより航空写真撮影。
- 27 14・15区表土掘削開始。
- 29 0区埋め戻し。
- 3.4 6・8区旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ調査開始。
- 6 14・15区近世土域群ほかの調査開始。
- 14 7区旧石器・縄文時代遺構確認トレンチ調査開始。
- 18 14・15区をヘリコプターにより航空写真撮影。
- 20 6・7・8・14・15区の埋め戻し。

平成8年度

- 8.1 発掘調査準備。
- 9.17 11・12区表土掘削開始。
- 24 11・12区のF A下品跡ほかの調査開始。
- 10.23 11・12区のF A下品跡ほかをバルーンにより航空写真撮影。
- 11.5 11・12区褐色土面風銅木ほかの調査開始。
- 19 11・12区全敷を高所作業車で写真撮影。13区表土掘削開始。
- 20 13区1号道路跡ほかの調査開始。
- 25 11・12区旧石器遺構確認トレンチ調査開始。
- 12.5 11・12・13区埋め戻し。

平成9年度

第1次調査

1997年

- 6.19 発掘調査準備。
- 23 2区残部表土掘削・平安期土坑ほかの調査開始。
- 27 2区残部調査終了、埋め戻し。

第2次調査

1998年

- 3.2 13区東表土掘削・中世道路跡ほかの調査開始。
- 6 13区東調査終了、埋め戻し。

第2章 調査の方法

1. 調査の方法

(1) 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡

冷水村東遺跡・西国分新田遺跡の発掘調査にあたっては、便宜上調査区内を通る町道によって、前者をA～E区、後者をF～H区の8調査区に分け実施した。なお、調査区には順状地形を素因とする起伏を持った微地形が埋没しており、調査対象遺構もそれぞれ、微高地部は堅穴住居跡や畚跡など、低地部は水田跡や旧河道などの相違が生じた。このため、調査の方法も微高地部と低地部の立地に応じて適宜方法を切り替えて実施した。

微高地部（A・B・G・H区）

①掘削機（バックホー）による表土（現耕作土およびA s-B混土層）の掘削。

②FA上面の遺構確認作業。堅穴住居跡、堀立柱建物跡、溝、土坑、井戸跡、畚跡検出。

③埋没土層堆積状況の観察用ベルトを任意に設定して、移植ゴテほかにより遺構を掘削した。

④遺構断面（縮尺1/20）測量および写真撮影。

⑤遺構平面測量にあたっては、平板を使用し任意に縮尺1/20、1/40、1/100を選択して行った。

但し、広範囲に及ぶ測量は、株式会社測研に測量委託した。

⑥記録写真の撮影には、基本的に6×7・35mmの白黒フィルムとリバーサルフィルムを使用し、全体写真の撮影は、高所作業車、気球を用いて行った。

⑦FA上面遺構の調査終了後、FAを人力で除去し、FA下畚跡、古墳時代堅穴住居跡を検出した。

⑧③～⑥の作業に同じ（以下調査は同じ）。

⑨A・B区では、FA下面遺構調査終了後に、旧石器～弥生時代の遺構確認のため試掘調査を行った。

⑩G・H区では、FA下面遺構調査終了後に、掘削機によるA s-C混土掘削。畚跡検出。調査終了後に、旧石器～弥生時代の遺構確認のため試掘調査を行った。

低地部（C・D・E・F区）

①掘削機による表土（現耕作土およびA s-B混土層）の掘削。

②A s-B上面の遺構確認作業。溝、土坑、井戸跡並びにA s-B下水田跡検出。なお、A s-Bの堆積が少なかったため、上下面並行して一括調査した。

③A s-B下面遺構調査終了後、掘削機による黒色粘質土（A s-B下水田耕土）の掘削。

④FA下面及びA s-C混土上面の遺構確認作業。堅穴住居跡、水田跡、旧河道跡を検出し調査。

⑤FA下面及びA s-C混土上面調査終了後に、旧石器～弥生時代の遺構確認のため試掘調査を行った。

(2) 金古北十三町遺跡

発掘調査にあたっては、便宜上調査区内を通る公道および用水路、調査年度によって、0～15区に分け実施した。なお、0区は牛池川の旧流路であるため、他調査区とは調査方法を変更して実施した。

0区

①掘削機による表土（現耕作土およびA s-B混土層）の掘削。A s-B下旧河道跡調査。

②A s-B下面遺構調査終了後、掘削機による黒色土・FAの掘削。FA下旧河道跡調査。

③FA下面遺構調査終了後、掘削機により試掘坑を掘削し、土層観察を行った。

1～15区

①1微高地部の①～⑤の作業に同じ。なお、6・7区を除いた調査区では、FAの堆積が少なくFA下畚跡の調査も同時に実施した。

②記録写真の撮影は、1①⑥に同じ。

③6・7区では、FA上面遺構調査終了後、FAを人力で除去し、FA下畚跡を調査した。

④FA下面遺構調査終了後に、旧石器～弥生時代の遺構確認のため試掘調査を行った。

2. 調査区の設定

冷水村東道跡・西国分新田道跡・金古北十三町道跡の調査区の設定は、下記によって行った。

- (1) 調査区の設定には、群馬県を網羅している国家座標第Ⅸ系を利用して行い、グリッドがのちに国家座標と置き換えられるように設定した。
- (2) 調査区の最小単位は、5メートル四方とし、その設定は国家座標第Ⅸ系と同様に座標軸の第2象限にあてはめ、西方向をX軸（国家座標Y軸）、北方向をY軸（国家座標X軸）とした。
- (3) グリッドの呼称は、基準となる点を1A-00と称し、アルファベットはY軸方向（北方向）に5m進むごとに1B、1Cと順次変化させ、100mを単位に頭の数字を変えて2Aと称し、以下100mごとに3A、4Aと変化させた。また、X軸方向（西方向）に5m進むごとに2ケタ数字を01、02と順次増加させていき、アルファベットと数字の組み合わせによって各グリッドを呼称した。
- (4) 冷水村東道跡・西国分新田道跡の基準点は、国家座標第Ⅸ系（第Ⅸ系の原点は北緯 36° 、東経 $139^{\circ}50'$ ） $X=44,200$ 、 $Y=-73,600$ である。また、金古北十三町道跡の基準点は、 $X=45,000$ 、 $Y=-73,700$ である。
- (5) 方眼紙の設定は、株式会社測研に委託した。



第2図 調査区設定図

3. 基本土層

(1) 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡

両遺跡は相馬ヶ原原状地に立地し、主に開析によって形成された微高地と低地が存在する。堆積土層は、両遺跡とも総社砂層を基盤とするが、その上層は微地形に要因を持つ離水時期の違いによって、若干の違いを持っている。

C区以北E区以南の調査区域では、Ⅲ(A s-B)が面的に堆積しており、直下に水田跡が検出された。これはA s-B下段階の低地部範囲と概ね一致する。Ⅵ(FA)は調査区全域で見られるが、B区古墳時代竪穴住居跡の埋土では、Ⅵの上層にⅥが堆積する。また、Ⅵに被覆された地形はやや起伏に富んでくる。A・B区は微高地であり、Ⅵ直下の島跡が検出される。C区以北E区以南の調査区域では、数条の小規模な谷筋が見られ、Ⅵ直下の水田跡が検出された。Ⅵ以下では、E区小谷地埋土にⅥ(A s-C)が10cm程度堆積する以外際立った違いはなく、ほぼ一様にⅡまで暗褐色～黒色の粘質土が堆積している。

冷水村東遺跡・西国分新田遺跡

- I 黒褐色土 表土
- II 黒褐色土 A s-Bを5～20%含む。
- III A s-B
- IV 黒色粘質土 A s-Cを1%含む。
- IV' 黒色粘質土 A s-B下田跡土。
- V 灰褐色 A s-C、FAを5～20%含む。
- 黒褐色粘質土
- VI FA
- VI' FA堆積に伴う洪水堆積物
- VII 黒褐色 A s-Cを1%含む。
- 黒色粘質土
- VIII 黒色粘質土 FA下田跡土
- IX A s-C
- IX 黒色粘質土
- X 暗褐色～黒褐色土 小礫、Ⅱブロックを5～20%含む。
- Ⅱ ぶい黄褐色砂 総社砂層

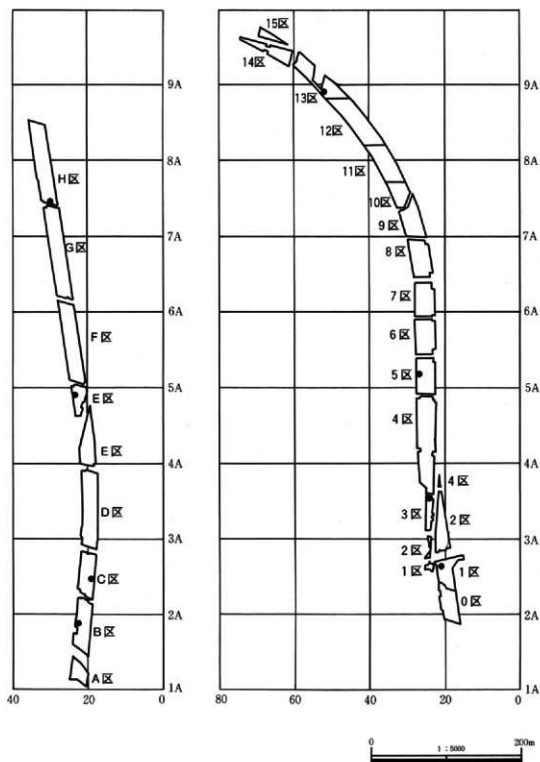
(2) 金古北十三町遺跡

本遺跡も冷水村東遺跡・西国分新田遺跡と同様な地形形成に因るが、状況は若干異なっている。2区南半部以南・5区～7区を低地部、他の調査区を微高地と区分することができる。ただし、Ⅵ以上はほぼ同様な土層堆積となっており、特に際立った様相として、Ⅲ(A s-B)は4区の微低地及び6・7区でしか面的な広がりはなく、Ⅴ(FA)は14・15区を除くほぼ全調査区で見られ、6・7区でやや厚く見られたに過ぎない。

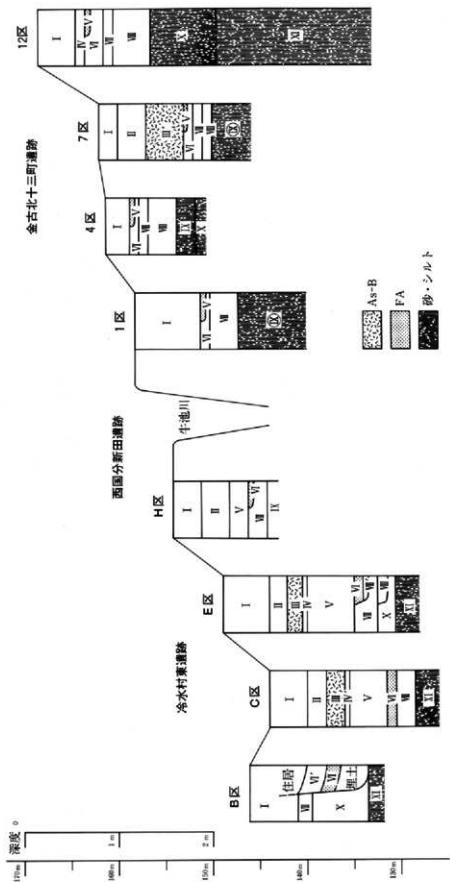
Ⅵは微高地でよく堆積しており、高燥な条件のもとに形成されたものとして、冷水村東遺跡・西国分新田遺跡とは違う特徴的な土層である。なお、以下Ⅸ・Ⅹは総社砂層に比定される。低地部では一部にⅥも見られるが、概して⑧からⅥへと堆積しており、湿潤な状況を反映したものと解される。また、⑧はⅡと近似しており漸移的に変化する。したがって、微高地部ではⅩ堆積以後離水して高燥な状況へと変化したのが、低地部ではⅨ・Ⅹが堆積せず、水成堆積である⑧を形成しながら徐々に離水したものと想定できる。

金古北十三町遺跡

- I オリーブ褐色土 表土
- II オリーブ褐色土 A s-A、A s-Bを1～5%含む。
- III A s-B
- III' 黄褐色砂礫 A s-B二次堆積。川砂利40%含む。
- IV 灰褐色土 FAを多く母材とする。
- V FA
- VI 黒褐色土 A s-Cを1～5%含む。
- VII 黒褐色土
- VIII 黄褐色土
- IX オリーブ～黄褐色砂質土
- ⑧ 灰褐色～灰白砂 砂とシルト・粘土の互層。水成堆積。
- X オリーブ～黄褐色砂質土 中礫円礫を20%含む。
- II 灰白～青灰砂 砂とシルト・粘土の互層。水成堆積。



第3図 土層配置図



第4図 基本土層図

第3章 地理的環境と歴史的環境

1. 地理的環境

冷水村東遺跡・西国分新田遺跡及び金古北十三町遺跡は、榛名山東南麓に位置し、後期更新世に形成された相馬ヶ原扇状地の扇央部分に立地する。また、その扇端は前橋台地と接しており、境界は不明瞭ながら標高約110m付近と言われる。扇状地は、褐色の火山灰質泥流堆積物によって形成され、堆積年代は約1.4万年前と推定される。この堆積物は、榛名山東南麓に分布する「陣馬岩層なだれ」と同一の事件で堆積したものと考えられ、その隣生じた流れ山が随所で見られる。この扇状地の形成は、短期間のうちにほぼ終了し、Y Pの降灰時（1.3～1.4万年前）には、すでに大部分が離水していたようである。

完新世に入ってから、榛名山東南麓では一部に新しい扇状地が形成される。前橋市総社町が載る扇状地は、「総社砂層」と呼ばれる淘汰の良い灰色砂層の堆積によるもので、その堆積年代は約1万年前と推定される。3遺跡でも、この時期に堆積した砂層が認められ、「総社砂層」に対比できる。相馬ヶ原扇状地は、雨水による表面流水の浸食作用により、樹枝状の小谷地が発達していたが、やがて相馬ヶ原を源とする中小河川へと流路が確定していき、谷を洪水堆積物が埋積していくこととなった。扇状地面を流れる中小河川は、牛頭川や井野川など計12本で、そのうち冷水村東遺跡・西国分新田遺跡は染谷川と牛池川に挟まれた区域に、また金古北十三町遺跡は牛池川とその支流下賀沢川に挟まれた区域に所在している。したがって、随所に埋没する谷地が検出され、またそれらの谷は古墳時代にはすでに埋没しており、田畠地へと利用されていたのである。

遺構検出の示標となる降下テフラとして両遺跡では、下からA s-C、F A、A s-Bが顕著に認められたが、特にF A直下及びA s-B直下で被覆された田畠面を検出することができた。

町内堤ヶ岡付近から金古及び前橋市総社町付近の

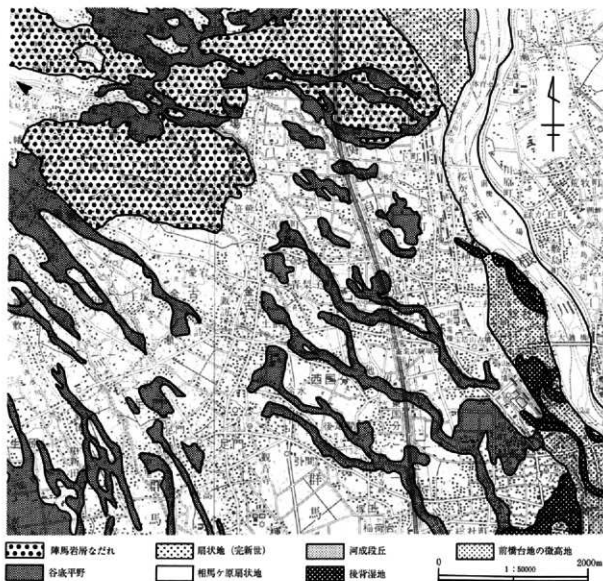
地下水は深く、相馬ヶ原扇状地の深井地帯の中心と言われる。昭和30年代の金古においては、最深19mを筆頭に13～15mの井戸が83%の多くを占めていた。つまり、近年の上水道の完備まで、本地域では飲料水確保に苦勞していたのであり、集落の立地条件として重要な案件であったことは間違いない。

本遺跡の調査前の状況は、ほぼ平坦で南東傾斜する田畠が広がっていた。それは、昭和34年完成の土地改良事業による地形改変によるものであり、それ以前は埋没谷の痕跡をとどめる微地形が存在していた。調査前の状況として田地が随所に見られるのも、この土地改良と中群馬用水の恩恵によるものであり、それ以前は本遺跡調査区内に殆ど田地はなかったのである。明治8年作成の郡村誌によれば、冷水村耕地総計11町余のうち田地4町余、西国分村耕地総計37町余のうち田地3町余、金古村耕地総計274町余のうち田地3町余と記載されており、畑地の卓越する地域であったことが知られる。

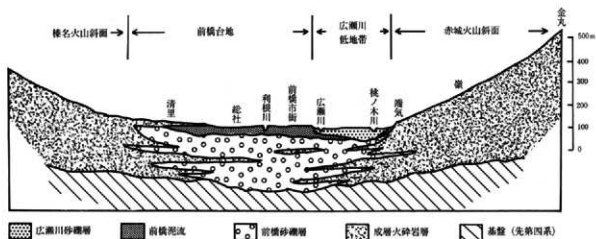
第7図は耕地図を基礎に、一部群馬町役場税務課備え付けの絵図と差し替えたものである。これと第9図の都市計画図を比較すれば、土地改良前後の地形改変が容易に看取されるものと思う。元来本地域周辺にも、相馬ヶ原扇状地によく見られる埋没谷に起因する凹凸面があり、それに適応した地割り及び土地利用がなされていたものと推測される。

参考文献

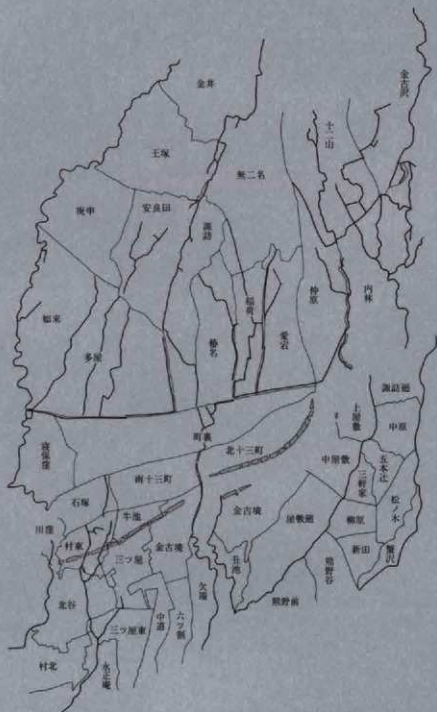
- ・早田徳・徳登健「前橋台地と広瀬川低地帯」『群馬県史』通史編1 原始古代1 群馬県 1990。
- ・沢口宏「地形と地質」『群馬町誌』資料編4 自然 群馬町誌編纂委員会 1995。
- ・矢嶋仁吉「榛名山東南麓の地下水」『地理学評論』第21巻7・8号 1948。
- ・南雲栄治「三国街道金古宿の地理学的研究」『紀要』群馬県立前橋女子高校創立60周年記念号 1970。



第5図 遺跡周辺の地形分類図（「群馬県史」通史編1より）



第6図 遺跡近辺の地質図（「前橋史より」）





第7図 遺跡周辺の地割と土地利用状況

2. 歴史的環境

冷水村東遺跡・西国分新田遺跡及び金古北十三町遺跡が所在する榛名山東南麓の周辺遺跡の各時代ごとの概要は、次のとおりである。

縄文時代では、土器片・石器等は出土しているが、遺構が検出されている遺跡は少ない。この中で上野国分僧寺・尼寺中間地域(13)では中期後半を主体とする竪穴住居跡36軒ほかの遺構が調査された。清里・長久保遺跡(39)では前期～後期の竪穴住居跡11軒ほかが検出され、長久保大畑遺跡(40)では中期中葉後半を主体とする竪穴住居跡43軒ほかが調査された。なお以上を除いて、ある程度の規模の集落をもつ遺跡は見られない。

弥生時代では、日高遺跡(43)で調査された集落・方形周溝墓の墓域と、存在が想定される谷水田からなる遺構構成が標準的と考えられる。上野国分僧寺・尼寺中間地域では後期の竪穴住居跡12軒、方形周溝墓2基が検出された。清里・庚申塚遺跡(37)では中期後半の環濠集落が調査されている。本時代は、前代の縄文時代に比較すると遺跡も遺構も増加するが、本遺跡周辺では扇状地地形が水田耕作に障害となったためか、集落跡は発見されていない。

古墳時代では、大字保渡田に所在する八幡塚古墳(56)、二子山古墳(57)、漢師塚古墳(55)の3基の前方後円墳が、5世紀末から6世紀前葉にかけて築造された一列の首長墓と考えられている。また、この古墳群の東南方近くに位置する三ツ寺Ⅰ遺跡(44)は、首長の居館跡と見られ、この古墳群との関連が想定されている。本遺跡近くでは、10基の後期円墳が調査された寺屋敷Ⅰ・蓋・鶴巻遺跡(34)や諏訪古墳(52)、金古安宕山古墳(49)、また後期の群集墳として北寝保望古墳群(50)が存在する。

集落では、上野国分僧寺・尼寺中間地域で前期26軒と後期数軒の竪穴住居跡が調査された。本遺跡近くでは、諏訪西遺跡(4)、後正間Ⅰ(5)・Ⅱ(6)・Ⅲ(7)遺跡、西国分Ⅰ(8)・Ⅱ(9)遺跡で、中期を主体とする竪穴住居跡数軒程度が調査されて

いる。また、本地域の目立った遺構として、F A下畠跡が挙げられる。特に本遺跡は、南から染谷川、牛池川、下蟹沢川に規制された南東傾斜する地形であり、耕作地を考えると、この舌状の微高地を一系統とするのが妥当と見られる。冷水村東遺跡・西国分新田遺跡が立地する区域では、南東方向近くから西国分Ⅰ遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域でF A下畠が検出されている。金古北十三町遺跡が立地する区域でも、東方近くの青梨子金古境遺跡(11)で同様な遺構が検出された。一方、染谷川南方の諏訪西遺跡、西三社免遺跡(36)でもF A下畠が調査されており、この遺構の広がりや集落との立地が注目される。

本地域の水田跡は、本時代においても前代の弥生時代と同様に谷水田が中心と考えられるが、特に本遺跡周辺では扇状地地形に規制されたために、未発達な状況と考えられる。本遺跡の東方1.5kmに所在する北原遺跡(19)では、F A上面に総面積6,190㎡に及ぶ6世紀前半から後半の小区画水田が検出された。ここは、金古北十三町遺跡が立地する区域のすぐ北側に位置し、下蟹沢川と八幡川に挟まれた区域に当たるが、河川氾濫に伴う砂礫層に被覆されており、元來起伏に富んだ谷地形と微高地が連続している。これは、相馬ヶ原扇状地の同標高地域一般に見られる地形である。したがって、本地域では現地表面からは認めにくい谷水田が、点々と埋没していると想定できる。

奈良・平安時代では、上野国の中枢である国府(65)、また国分僧寺(60)・尼寺(61)、山王庵寺(62)、東山道(75)が設置されたため、周辺地域として多くの遺跡が見られる。関越自動車道(新潟線)に伴う発掘調査では、中尾遺跡(42)約250軒、島羽遺跡(41)約1000軒、上野国分僧寺・尼寺中間地域約1200軒、国分境遺跡(14)約130軒、北原遺跡約100軒、下東西遺跡(24)約200軒、大久保A遺跡(38)約250軒と多数の竪穴住居跡が検出され、

下東西遺跡に隣接する下東西清水上遺跡(26)でも堅穴住居跡約200軒が調査された。また、青梨子金古境遺跡は堅穴住居跡14軒を検出しているが、金古北十三町遺跡の東方150mと近いことから、一連の集落址であると考えられる。

中世における本地域の有力武士としては、源平合戦記録に散見される河河氏や桃井氏の存在が知られるが、在地での動向など不明点が多い。室町時代には、上野国守護山内上杉氏に代わり守護代として入部した長尾氏が、白井(子持村)や総社(前橋市)を拠点として在地支配を行い、やがて白井長尾氏及び総社長尾氏として勢力を広げた。この総社長尾氏の居城が蒼海城(70)である。戦国時代になると、箕輪城(72)を拠点とする長野氏が、国人一揆の旗頭から地域の領主へと成長して、大永7年(1527)には蒼海城を圧迫するまでになった。しかし、このような小規模な勢力争いは隣国の戦国大名の侵攻によって無意味となる。山内上杉氏を上野国内から追った後北条氏と、それに続く越後上杉氏と武田氏が、上野国の覇権を争うこととなったのである。その結果、総社長尾氏と長野氏は、山内上杉氏を相続した上杉謙信に属したが、やがて劣勢となっていく。永禄9年(1566)には長野氏、翌年には総社長尾氏が居城の落城とともに滅亡することとなった。以後本地域は、天正10年(1582)まで武田氏領、同年中に織田家滝川一益領を経て後北条氏領となり、天正18年まで領有されたが、この間断続的に合戦がなされる緊張下にあった。ただし、本地域の状況を伝える古文書、古記録類が存在しておらず、この戦乱にどのように影響されていたかは判然としない。

冷水村東遺跡の東方には、隣接して引間城(66)があり、更に東方には中世石造物群(78)・(79)が残っている。この後正間地区では、古文書を保有しておらず、城主名など中世の状況は不明であるが、中核的な集落が存在したものと思われる。また、西国分(71)に所在する大蔵坊(63)は、上州年行事職を持つ上野国随一の修験として知られるが、文明18年(1486)越後から来訪した京都聖護院の道興准后が、

10日余り逗留したのち富岡方面に向かっており、当時の修験における権勢を示すとともに、付近を通っていた鎌倉街道(74)から分岐して西進する広域街道の存在が想定できる。

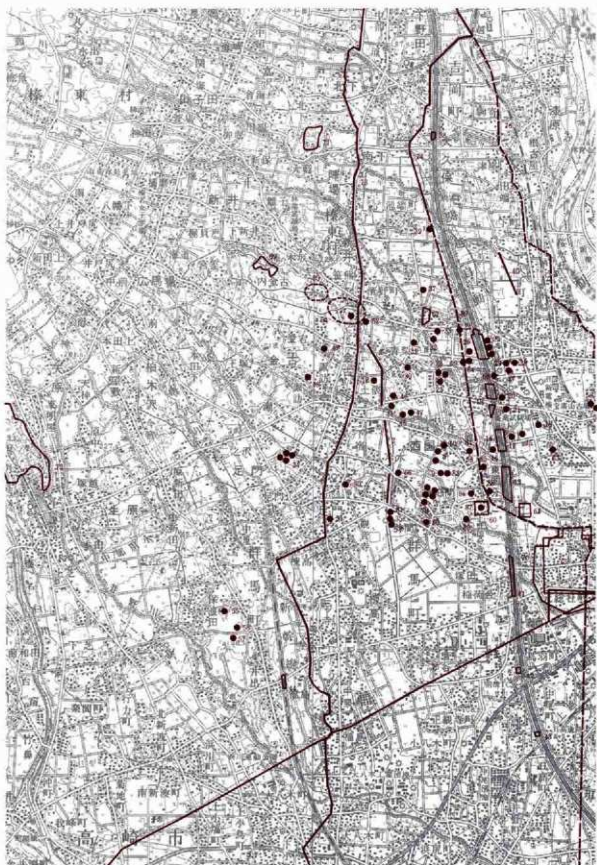
周辺遺跡では、鳥羽遺跡で館跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域で寺院跡や館跡、下東西遺跡で堅穴建物跡10軒ほか、下東西清水上遺跡で環濠屋敷跡2か所ほかを検出された。また、本遺跡の東南500mに位置する後正間Ⅱ遺跡では井戸跡1基と特殊遺構1基ほか、東方500mに位置する西国分Ⅱ遺跡では堅穴建物跡3軒と土壇墓15基ほかが調査された。

近世において本地域は、天正18年(1590)箕輪城に配置された徳川家重臣井伊直政の支配下となり、その後高崎城へ移城してからも、高崎領として受け継がれた。また、18世紀前後からは藩領に加えて天領や旗本領が点在する状態となったが、金古では宝永2年(1705)旗本の三氏に知行され、地名として上給・中給・下給と称されるに至った。

慶長年間(1596~1614)成立と言われる三国街道(73)の設置は当地域の交通史上重大事であるが、同時に宿場として金古宿が新たに成立したという。詳細は不明ながら「金古新田」という記録もあるなど、集落全体が一度に移動した集落移動を契機に成立したものと考えられる。その意味で金古宿の前段階である中世集落が、どこに立地していたのかを模索していくことが課題となっている。なお、金古宿は三国街道において高崎宿と渋川宿の間に位置しその間隔が短かったため、旅行者に通過されてしまう場合が多く、宿経営は難渋したらしい。宿の人々は、養蚕など農業に従事しながら宿を支えたと伝えられる。

参考文献

- ・十日会編『群馬県群馬郡金古町誌』金古町誌刊行会 1963。
- ・天田伝七郎「そのかみの金古」『群馬県群馬郡金古町誌』金古町誌刊行会 1963。
- ・『国府村誌』国府村誌編纂委員会 1968。
- ・『群馬町誌』資料編4 民俗 群馬町誌編纂委員会 1990。
- ・『群馬町の道跡』群馬町教委 1986。



第8図 周辺の遺跡（1）

0 1 : 50000 2000m



第9図 周辺の遺跡(2)

周辺遺跡一覧表

No	遺 跡 名	所 在 地	概 要	文 献 等
1	冷水村東遺跡		本報告書。	
2	西国分新田遺跡		本報告書。	
3	金古北十三町遺跡		本報告書。	
4	瀬田西遺跡	群馬郡群馬町引間	F A直下の住居跡3軒、品跡、古墳時代後期～平安時代の住居跡2軒を検出。	『瀬田西遺跡』群馬町教委 1995
5	後正間(I)遺跡	群馬郡群馬町後正間	古墳時代中期～平安時代の集落。	『後正間(I)遺跡』群馬町教委 1986
6	後正間(II)遺跡	群馬郡群馬町後正間	古墳時代中期～平安時代の集落。製鉄遺構を検出。	『後正間(II)遺跡』群馬町教委 1987
7	後正間(III)遺跡	群馬郡群馬町後正間	古墳時代中期～平安時代の集落。中世の特殊遺構、井戸を検出。	『後正間(III)遺跡』群馬町教委 1988
8	西国分I遺跡	群馬郡群馬町西国分	古墳時代中期～平安時代の集落。縄文時代後期の土坑、F A下品を検出。	『西国分I遺跡』群馬町教委 1989
9	西国分II遺跡	群馬郡群馬町西国分	古墳時代中期～平安時代の集落。F A下品、中世の堅穴建物、土庫基を検出。	『西国分II遺跡』群馬町教委 1990
10	西国分六ツ新田遺跡	群馬郡群馬町西国分六ツ新田	古墳時代の住居跡、溝、土坑を検出。	『町内遺跡IV』群馬町教委 1996
11	青梨子金古墳遺跡	前橋市青梨子町字金古墳	平安時代の集落。F A下品を検出。	『青梨子金古墳遺跡』県中央第一水道遺跡調査会 1995
12	金古北十三町遺跡	群馬郡群馬町金古北十三町	古墳時代後期～平安時代の溝を検出。	『町内遺跡IV』群馬町教委 1995
13	上野国分寺・国分尼寺・中岡地蔵寺	群馬郡群馬町東国分、前橋市総社町	縄文時代中期、弥生時代～古墳時代前期、古墳時代後期～中世にかけての集落遺跡。堅穴住居跡130軒、土坑200基、溝多数を検出。	『上野国分寺・国分尼寺・中岡地蔵寺』(1)～(7) 群理文 1986～1992
14	国分境遺跡	群馬郡群馬町北原	古墳時代後期～平安時代にかけての集落跡。堅穴住居跡150軒を検出。	『国分境遺跡』群理文 1990
15	国分境II遺跡	前橋市総社町字総社	古墳・奈良時代の住居跡を検出。	『国分境II遺跡』前橋市教委 1991
16	国分境III遺跡	群馬郡群馬町北原字国分境	古墳時代後期～平安時代の住居跡を検出。	『国分境III遺跡』群馬町教委 1993
17	国分境IV遺跡	群馬郡群馬町北原字国分境	平安時代の住居跡4軒を検出。	『町内遺跡IV』群馬町教委 1996
18	総社観音沢遺跡	前橋市総社町字総社	平安時代の住居跡、溝、土坑を検出。	『総社観音沢遺跡』総社観音沢遺跡調査会 1997
19	北原遺跡	群馬郡群馬町北原	古墳時代の木田跡、奈良・平安時代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土坑、及び中世の溝等を検出。	『北原遺跡』群馬町教委 1986
20	北原北下り遺跡	群馬郡群馬町北原字北下り	平安時代の住居跡1軒を検出。	『町内遺跡IV』群馬町教委 1995
21	北原村東遺跡	群馬郡群馬町北原字村東	F A以前の溝、A s-B以前の溝を検出。	『町内遺跡IV』群馬町教委 1996
22	熊野谷遺跡	前橋市青梨子町字熊野谷	縄文・平安時代の住居跡、土坑を検出。	『熊野谷遺跡』前橋市教委 1989
23	熊野谷II・III遺跡	前橋市青梨子町字熊野谷	平安時代の住居跡、溝、土坑を検出。	『熊野谷II・III遺跡』前橋市教委 1991
24	下東西遺跡	前橋市青梨子町、群馬郡群馬町北原	縄文時代の埋蔵遺構、弥生時代～平安時代の住居跡等、中世以降の堅穴民道構、井戸等を検出。	『下東西遺跡』群理文 1987
25	下東西遺跡	前橋市青梨子町字下東西	奈良・平安時代の住居跡、溝等検出。	『清里南部群島』前橋市教委 1989
26	下東西清水上遺跡	前橋市青梨子町字清水上	平安時代の集落。縄文時代土坑、奈良・平安時代住居跡200軒以上、中世の環壕遺構を検出。	『年報15』群理文 1996
27	青葉遺跡	前橋市高井町	古墳時代の住居跡を検出。	『青葉遺跡』前橋市教委 1988
28	柿木遺跡	前橋市高井町	奈良・平安時代の住居跡、及び中・近世の土坑などが検出。	『柿木遺跡』前橋市教委 1984
29	柿木II遺跡	前橋市高井町字柿木	古墳・奈良・平安時代の住居跡を検出。	『柿木II遺跡』前橋市教委 1988
30	柳原遺跡	前橋市青梨子町字柳原	住居跡と溝を検出。	『清里南部遺跡群』前橋市教委 1989
31	松ノ木遺跡	前橋市青梨子町字松ノ木	平安時代の住居跡、近世以降の土坑を検出。	同上
32	中島遺跡	前橋市青梨子町字中島・中原	奈良・平安時代～中世以降の住居跡及びその他の遺構を検出。	『中島遺跡発掘調査概報』前橋市教委 1980
33	茶臼前遺跡	前橋市青梨子町字茶臼前	縄文時代～江戸時代までの遺構。ビット、地下式土庫、溝等を検出。	『富田遺跡群・西大宮遺跡・清里南部遺跡群』前橋市教委 1980
34	寺屋敷I・Ⅱ・Ⅲ・鶴巻遺跡	群馬郡群馬町足門	古墳時代初期住居跡1軒ほか、後期円墳6基を検出。	『寺屋敷I・Ⅱ・鶴巻遺跡』群馬町教委 1991

第3章 地理的環境と歴史的環境

35	小池遺跡	群馬郡群馬町引間	古墳時代後期～平安時代の集落。F A下品、土曜基、溝ほかを出土。	『小池遺跡』群馬町教委 1992
36	西三社免遺跡	群馬郡群馬町榑高	古墳時代前期・中期の住居跡を出土。古墳時代後期～平安時代の集落。	『西三社免遺跡』群馬町教委 1990
37	清里・庚申塚遺跡	前橋市上青梨子町	弥生時代中期後半の環壕集落を中心とし、他に平安時代の住居跡、井戸、溝、土坑などを出土。	『清里・庚申塚遺跡』群馬町教委 1981
38	大久保A遺跡	北群馬郡吉岡町大久保宮前・宮田	古墳時代末～平安時代の住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝、及び鎌倉時代の道路遺構を出土。	『大久保A遺跡・七日市遺跡・滝沢古墳・女塚古墳』群馬町 1986
39	清里・長久保遺跡	前橋市池端町、北群馬郡吉岡町大久保	縄文時代前期～後期の住居跡11軒、土坑2基、土器だまりと、平安時代の住居跡1軒、土坑墓1基、6C～7Cの円墳12基が出土。	『清里・長久保遺跡』群馬町 1986
40	長久保大塚遺跡	北群馬郡吉岡町大久保	縄文時代～中世の集落。A 8～B下水田を出土。	『年報15』群馬町 1996
41	鳥羽遺跡	前橋市鳥羽町・元総社町、群馬郡群馬町福向台・塚田	古墳時代～江戸時代の集落跡、鍛冶・神社跡と推定される大型掘立柱建物跡、墓などを出土。	『鳥羽遺跡1-J-K区』群馬町 1988 『同1-M-N-O区』群馬町 1990 『同A-B-C-D-E-F区』群馬町 1992
42	中尾遺跡	高崎市市中尾町	奈良・平安時代の集落で堅穴住居跡他、中世の中尾城に開通すると思われる堀跡を出土。	『中尾（遺構編）』群馬町 1983
43	日高遺跡	高崎市新保田町	弥生時代の水田跡、方形周溝墓3基、土坑2基、及び平安時代の水田跡等を出土。	『日高遺跡』群馬町 1982 『日高遺跡（Ⅰ）』高崎市教委 1979 『日高遺跡（Ⅱ）』高崎市教委 1980
44	三ツ寺I遺跡	群馬郡群馬町三ツ寺	古墳時代の豪族の館跡、A 8～B下水田を出土。	『三ツ寺I遺跡』群馬町 1981
確認調査地				
45	前橋市青梨子町1678		遺物なし。溝一基を出土。	『市内遺跡発掘調査報告書』前橋市教委 1993
46	前橋市青梨子町字金古墳1734-5		遺物・遺構とも出土されず。	『市内遺跡発掘調査報告書』前橋市教委 1996
47	前橋市青梨子町字金古墳1730-2外		遺物・遺構とも出土されず。	同上
48	源山古墳群	群馬郡群馬町金古宇栗訪	円墳1基、古墳跡3基、内1基は径30mで周溝を有する。	『群馬県の遺跡』群馬町教委 1963 『町内遺跡Ⅳ』群馬町教委 1996
49	金古堂山古墳	群馬郡群馬町金古宇栗訪	墳径30m、高さ4mの円墳。自然石風石の横穴式両袖型石室。	『群馬県の遺跡』群馬町教委 1963 『群馬県遺跡台帳Ⅱ』（西毛編）群馬町教委 1972
50	北夜保保古墳群	群馬郡群馬町榑高字北夜保保	円墳が9基ある。内8基は径10～20m、高さ2～3mの小円墳。1基は径40m、高さ7mである。しかしそのほとんどは崩壊しており、1基のみ石室11mが認められる。	『群馬県の遺跡』群馬町教委 1963 『町内I遺跡』群馬町教委 1993
51	観音寺古墳	群馬郡群馬町榑高	円墳で古墳上に庚申塚がまつられている。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』（西毛編）群馬町教委 1972
52	源山古墳	前橋市青梨子町	丘陵頂上杜陵（源山神社）には、石室の石材らしきものが散在し、墳頂の破片も見られる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬町教委 1971
53	内金古墳群	群馬郡群馬町金古宇栗訪	横穴式石室を有する円墳。	『群馬町の遺跡』群馬町教委 1986
54	横向古墳群	群馬郡群馬町金古宇栗訪・内林	主軸長約100mの前方後円墳3基、径約30mの円墳3基、自然石利用の小円墳2基を含む古墳群。	『清里・長久保遺跡』群馬町 1986
55	番塚古墳	群馬郡群馬町保渡田	推定全長90m、後円部径約50mの前方後円墳。凝灰岩製石室。	『群馬県史』資料編3 群馬町教委 1981
56	八幡塚古墳	群馬郡群馬町保渡田	全長102m、後円部径56m、前方部径53mの前方後円墳。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』（西毛編）群馬町教委 1972
57	二子山古墳	群馬郡群馬町井出字二子山	主軸の長さ東西92.4mで後円部主軸に平行して堅穴式石室があり、中には凝灰岩製石室がおかれていた。	『二子山古墳』群馬町教委 1985
58	宝塚山古墳	前橋市総社町字総社	東西49m、南北54m、高さ12mの方墳。南面に開口する横穴式両袖型石室。	『群馬県史』資料編3 群馬町教委 1981
59	蛇穴山古墳	前橋市総社町字総社	墳丘東西43.4m、南北39.1mの古墳。石室は凝灰岩製の横穴式両袖型石室。	『群馬県史』資料編3 群馬町教委 1981
60	上野国分寺跡	群馬郡群馬町東国分字村前・引間字石堂	東西・南北、約220mの方形の中に金堂、講堂、南・南大門中・大門跡などを想定。	『上野国分寺跡』群馬町教委 1988

2. 歴史的環境

61	上野国分寺跡	前橋市元能社町字小見、群馬郡群馬町東国分	金堂、講堂などの存在を確認。	『上野国分寺跡発掘調査報告』群馬県教委1971 『上野国分寺跡・上野国二寺中間地域』群馬文 1993										
62	山王庵寺跡	前橋市総社町総社	白鳳期の寺院跡。遺構は塔中心礎石を含む土壇の一部が日枝神社境内に残る。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編)群馬県教委 1971										
63	大蔵坊	群馬郡群馬町西国分	室町～戦国時代に年行事職を有した上野国内陸一の修験寺院。史料上は文安4年(1447)から存在が知られる。	『国府村誌』国府村誌編纂委員会 1968										
64	トウノコシ	前橋市総社町高井字池田	総社町光厳寺に現存する「伝東覚寺塔」の放地。調査では遺構は検出されなかった。	『清里南道遺跡Ⅲ』前橋市教委 1980										
65	上野国府跡	前橋市元能社町	国府跡については、いまだに決定的な遺構がみられない。	『上野国府跡発掘調査概報』上野国府跡発掘調査委員会 1966										
66	引間城跡	群馬郡群馬町引間字村家	染谷川との支流にはさまれた台地に位置する。主郭は東西の幅切によって東西95m、南北75mの方形の区画をつくり出し北側に護曲輪を配する。	山崎 一 『群馬県古城址址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会 1972										
67	青梨子砦跡	前橋市青梨子町字中内出	現在は消滅して形状の推定も困難である。東西120m、南北80m程度で東から南にかけ、別郭をもっていたようである。	山崎 一 『群馬県古城址址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971										
68	検田城跡	前橋市総社町高井字検田	山沢川の北岸で、その旧河道である沼田と山沢川にはさまれた幅約200m、北高5mの台上にあった。現在は遺構を認められない。	山崎 一 『群馬県古城址址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971										
69	金古城跡	群馬郡群馬町金古字内林	金古城は東西・南北共180m程度で、内金古の村郭がその中にある。自然の地形を利用し、濠や堡障をつくったと思われる。	山崎 一 『群馬県古城址址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会 1972										
70	雲海城跡	前橋市元能社町字小見	染谷川と支流にはさまれた区域、本丸は北にあり、その南に二の丸、西南隅に櫓台があった。東側には出雲屋敷、西には五雲神社のある郭が続く。	山崎 一 『群馬県古城址址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971										
71	桃井東城(大蔵城)跡	北群馬郡吉岡町南下字大蔵	主郭は東西130m、南北120mの広さ。主郭は峰によって第一郭、第二郭に分断され、それぞれ土居や堀がある。	山崎 一 『群馬県古城址址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会 1972										
72	箕輪城	群馬郡箕輪町西明屋	峰名白川の左岸の小高い城山に立地する。南北800m、東西450mの平山城。戦国時代には西上野の拠点の城郭となる。	山崎 一 『群馬県古城址址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会 1972										
73	三国街道	中山道から分岐して越後方面に向かう幹道で、五街道に次ぐ。慶長年間に整備され宿駅を設ける。道中奉行の支配下にあった。	歴史の道調査報告書「三国街道」群馬県教委 1980											
74	鎌倉街道	鎌倉幕府成立を契機に各国から鎌倉へ通じる街道として整備されたが、中世を通じて幹道として存在したと見られる。	歴史の道調査報告書「鎌倉街道」群馬県教委 1983											
75	東山道	律令国家の整備に伴い「官道」として、各国国府への命令使の下達と各国からの上申使等や租庸調の京運送脚道等として設置された。	歴史の道調査報告書「東山道」群馬県教委 1983											
76	佐流奉行街道	江戸期当初は越後方面への幹道として整備され、三国街道の古道と言われる。佐流奉行が後世まで使用したため、このように呼称された。	歴史の道調査報告書「佐流奉行街道」群馬県教委 1981											
中世石造物				所 在	板碑	五輪塔	宝篋印塔	宝塔	石仏	石殿	輪廻塔	石幢	不明	文 献 等
77	桜井文雄氏宅	群馬郡群馬町金古	1											主に渡部淳一著「群馬郡群馬町・石造文化財」群馬県教委1976を参考にし、「群馬県史」資料編8金石文で補足した。
78	薬師堂	群馬郡群馬町松尾間		19	5	2	1							
79	薬師堂北東の墓地	群馬郡群馬町松尾間					1	3						
80	引間公民館	群馬郡群馬町引間					1							
81	引間地蔵堂	群馬郡群馬町引間	2				4		2				1	
82	妙見寺	群馬郡群馬町引間		1	2									
83	薬師堂	群馬郡群馬町西国分		17	1		2							
84	薬師廻り	群馬郡群馬町西国分			5		1							
85	薬師堂	群馬郡群馬町東国分		5	1	4			1					
86	常安寺	群馬郡群馬町東国分		1			1							
87	国分寺金堂跡墓地	群馬郡群馬町東国分						1						
88	坂田武雄氏宅	群馬郡群馬町東国分	1											
89	正法寺	前橋市青梨子町					1					1		

略称：群馬文：財団法人群馬県歴史文化財調査事業団

第4章 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡の遺構・遺物

概要 本遺跡は全体に南東傾斜する相馬ヶ原扇状地に位置し、南北を染谷川と牛池川が樹枝状に開析する。また、調査区域内では低地にあたるC区以北G区以南に数条の埋没谷が更に入り込む複雑な地形となっている。したがって、A・B・D・H区の微高地が、概ね古墳～平安時代の居住域となり、堅穴住居跡が調査された。

古墳時代の堅穴住居跡は15軒検出されており、内訳はA区で6軒、B区で4軒、D区で5軒である。なお、本遺構は概ね埋土にF Aの堆積が見られるが、F A降下直前に放棄されていたと見られる堅穴住居跡、B区26・29号住居跡、D区32・36号住居跡の4軒では、床面に直接F Aが堆積しており、特に29号住居跡では良好な残存状態を持つ貯蔵穴が検出された。また、焼失住居である27A号住居跡では、まとまった数量で土器が出土すると共に、柱材を伴って柱穴が床面にそのまま空洞化した状態で検出された。

平安時代の堅穴住居跡は24軒検出されており、内訳はA区で9軒、B区で12軒、D区で2軒、H区で1軒である。なお、8世紀第3四半期に比定されるA区17号住居跡では、壁際からはほぼ完形の鋸1点が出土している。

掘立柱建物跡は6棟検出されており、内訳はA区で2棟、B区で2棟、D区2棟で、堅穴住居跡の分布とよく符合している。また、柱列はB区で1列検出される。

土坑の分布は堅穴住居跡の分布と同様、微高地に集中する傾向がある。特にG区では10世紀半ばに比定される火葬土壇1基を調査することができた。

溝は各調査区に散漫に分布するが、D・E・F区ではA s-B下水田跡との関連が想定される溝群が検出され、他の溝とは性格の違うものとして、各区の水

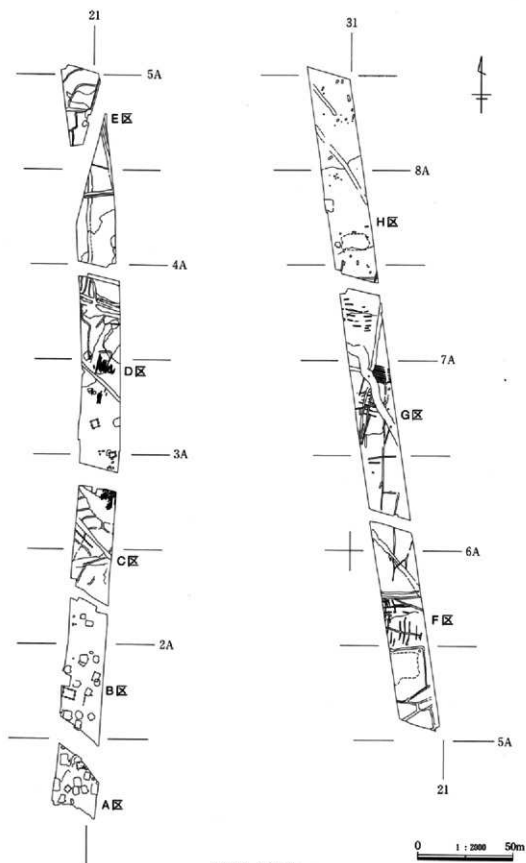
田跡とまとめて扱うこととした。また、本遺跡で検出された溝の特徴として、地形の傾斜方向に並行である北西-南東方向に走向する溝は、概して流水痕跡を持ちやや規模が大きい傾向があるとともに、時期は平安時代以前が多く、中世以降では極端に減少することが判明した。この点については別に考察を加える。

井戸の分布は、D区1号井戸やF区1号井戸、H区1号井戸が点在する一方、G区では4基の井戸が集中し、埋没する1号溝の底面やその周辺を意識的に選択する分布となっている。井戸の時期はD区及びG区が14世紀に比定され、中世の遺構に乏しい本遺跡では唯一生活痕跡を示す遺構として、近隣に所在する引間城との関連が想定される。

畠跡は、古墳時代後期のF A下畠跡が、A・B・E南・G・H区で検出されたが、G・H区ではその下層からA s-Cを含む黒褐色土(Ⅷ)を耕作土とする古墳時代前期-後期に比定される畠跡が確認された。

水田跡は、古墳時代後期のF A下水田跡が、D・E北区で埋没谷を利用した谷水田として検出され、北西方向の谷頭からの湧水を利用したものと思われる。また、平安時代後期のA s-B下水田跡は、C・D・E北・E南・F区で検出されたが、残存状態は概して悪く、1区画全てを露呈できたものも少ないことから、区画の状況など不明な点が多い。分布する範囲は、F A下段階が低地の底面のみであったことに比べ、C区以北F区以南の広範囲の低地に拡大しており、配水方法など技術的な相違を示唆する。

その他の遺構では、C区でやや規模の大きい旧河道があり、F A下段階でも谷地として検出され、特に同層位面から出土した1号土器集積は、古墳時代の坏類を集積した遺構として、周辺の住居跡や畠跡、水田跡などとの関連も含め、その性格が目される。



第10图 全体图

1. 竪穴住居跡

(1) 古墳時代

A区14号住居跡 (PL 3・118・119)

本住居は炭化物が多量に出土していることから焼失住居として調査を行った。炭化物出土状況としては、北壁際に棒状炭化物が多く見られ垂木等の建築材と思われる(第7章1参照)。住居中央部では部材の他、カヤなどの植物質が見られた。また部材等の下面の床は焼土化しており、屋根の落下後も焼けが激しかったと思われる。本住居は土器類も多量に出土しており、生活中の失火により焼失し、その後廃棄された住居と言える。

位置 1D-1E-24グリッド すぐ南には染谷川左岸の崖線がせまる場所に位置する。

重複 なし

形態 調査区外にのびる住居であり全掘はできない。

主軸方位 N-57°-E

規模 南北(4.23)m、東西(3.75)m。

壁 若干焼土が見られた。壁高は東辺32.0~41.0cm、南辺36.0~45.0cmで平均38.5cmである。

カマド 最近の農耕機械により、右袖から燃焼部にかけて壊されていた。位置は北壁にあり、燃焼部は住居内につくられる。規模は、笑口-煙道が(1.12)m、袖笑口幅が(0.37)mである。構築材は灰白色シルトを中心に若干混ぜ合わせた土を用いつくられる。左袖笑口部には補強用角柱礎を埋置している。また燃焼部中央にはやや左袖寄りに支脚として礎が埋置されていた。カマド内からの遺物はなく、土器は掛かっていなかった。火床面は床面よりやや下がる。奥壁は急に立ち上がる。掘り方規模は、主軸方向(1.12)m、幅(0.56)mである。

内部施設 北東隅に径96.0×85.0cm、深さ40.0cmの内部方形の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴にも炭化材が出土し、内部から出土した土器類の上にいる。北壁際に周溝らしき掘り込みが巡る。北西調査区際より径(63.0)×35.0cm、深さ19.0cmの柱穴を検出した。他の柱穴は攪乱溝内にあったと思われるが不明。

床 掘り方をそのまま使用し、壁際は若干掘り込まれ、床面のしまり弱い。

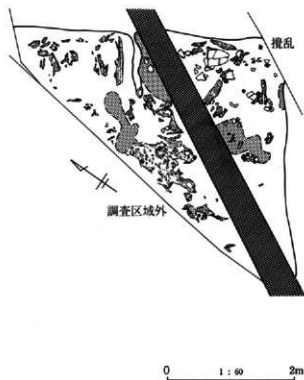
掘り方 東側が若干下がる。

埋没状況 焼失後東側より埋め込まれたような状況が窺われるが凹みとして残り、その後自然埋没したと思われる。

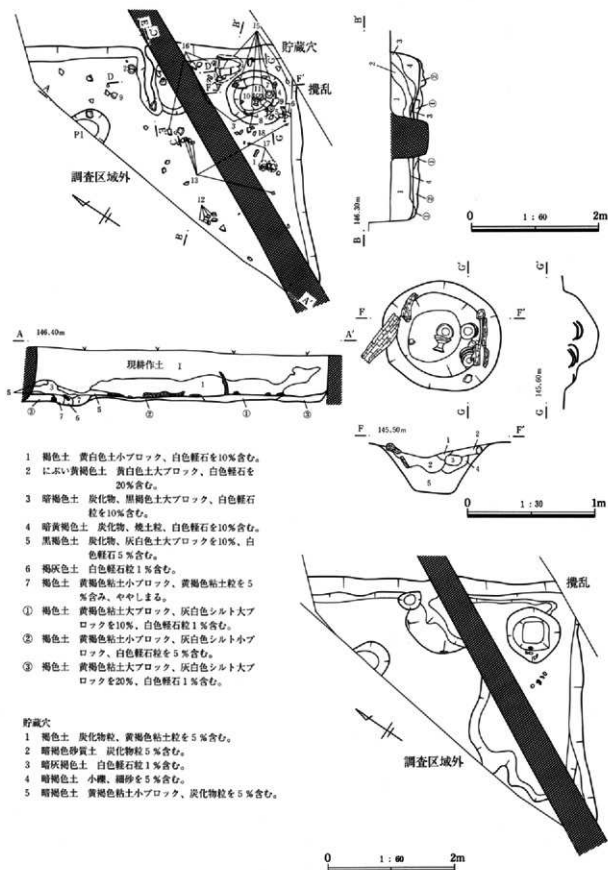
遺物出土状態 貯蔵穴では3~8の完形の土師器、10・11の高坏が重なって出土している。カマド右袖脇では15の甕が見られるが、カマドは攪乱に壊されるため遺物の出土は少ない。遺物は貯蔵穴周辺に集中するが、埋土を含め出土量は多くない。

時期 出土遺物から6世紀中葉に比定される。

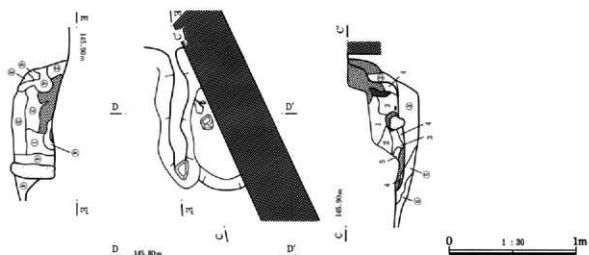
(斎藤)



第11図 A区14号住居跡炭化材出土図



第12図 A区14号住居跡



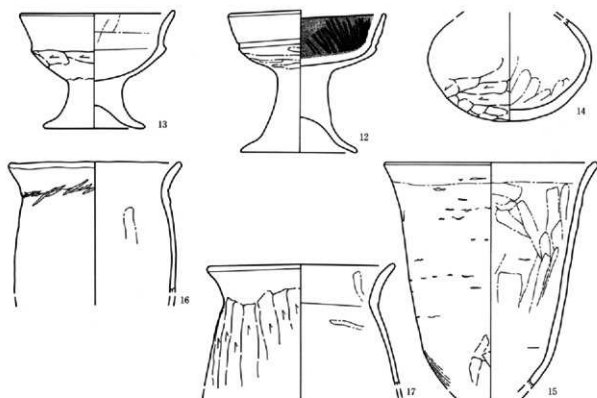
カマド

- 1 にぶい褐色シルト
- 2 にぶい褐色シルト 焼土粒5%含む。
- 3 焼土と黄褐色土の混土
- 4 にぶい褐色土 焼土大ブロック、灰白色土小ブロックを10%含む。しまらない。
- 5 灰色粘質土
- ① にぶい褐色土 わずかに焼土化。
- ② 灰白色シルト
- ③ にぶい褐色土 灰白色土小ブロック20%、白色土粒5%含む。
- ④ にぶい褐色土 灰白色土小ブロック20%、焼土粒、白色土粒を5%含む。
- ⑤ 黄褐色粘土と灰白色土の混土
- ⑥ 黄褐色土 灰白色シルト大ブロック5%含む。



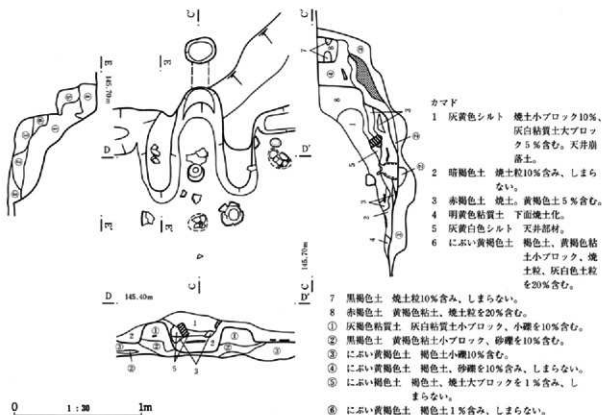
第13図 A区14号住居跡カマド・出土遺物(1)

1. 竪穴住居跡

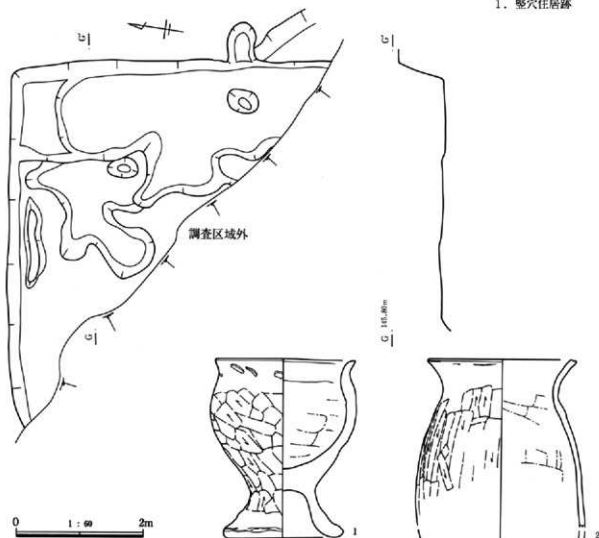


第14図 A区14号住居跡出土遺物(2)

A区25号住居跡 (P L 4・119)



第15図 A区25号住居跡カマド



第17図 A区25号住居跡掘り方・出土遺物

A区27A号住居跡 (PL 4～6・119～122)

埋没土上層にF Aの純堆積が見られ、下層の埋没土には地山ロームやA s-C混じりの黒色土が乱れた状況があり、人為的に埋められた様子が窺われる。また床面上には炭化材が散乱し(第7章1参照)、土器類などが生活当時のままで出土していることなどから、失火による焼失後、埋められ(火を消すために埋めた?)、直後に榛名山の噴火に襲われた住居と考えられる。

位置 1F～1G～20～21グリッド

重複 19・21号住居跡より古く、27B号住居跡とは新旧関係不明。

形態 整った正方形

主軸方位 N-72°-E

規模 南北4.54m、東西4.75m。

壁 壁高は北辺69.0～80.0cm、東辺38.0～84.0cm、南辺85.0～94.0cm、西辺14.0～41.0cmで平均63.1cmである。

カマド 東壁中央に位置し、芯として地山を掘り残り、灰色粘土を上部に貼り構築している。規模は、焚口～煙道が1.04m、袖焚口幅が0.30mである。燃焼部は住居内にあり、支脚として利用された高坏が倒立状態で出土し、その上に甕が置かれていた。この高坏の後ろに棒状甕が置き、これもまた支脚として利用されていたと思われる。焚口部には左右の袖に礎が立てられ、天井部には甕が横置きされ、補強材として利用されていた。火床面は床面と同じレベルであり、奥壁で急に立ち上がる。掘り方規模

は、主軸方向1.04m、幅0.83mである。

内部施設 南東隅に上面径83.0×76.0cmの隅丸方形、内部径52.0×46.0cmの同じく隅丸方形を呈する貯蔵穴を検出した。深さは70.0cmを測り、断面ルート状を呈する。埋没土上部に棒状炭化材の破片が出土し、フタの存在も考えられる。北東隅内側1.3mの所で立った状態で径約8cmの柱材と思われる炭化材が出土した。下部は腐蝕し柔らかく土化していた。この状況から床面精査時に各コーナーを結ぶ対角線内側のほぼ同距離の位置3ヶ所で径10cm程の空洞を検出し、これらは柱材の腐蝕した痕跡と判断でき、本住居は4本柱であったことが判明した。また、掘り方調査時には、同位置で柱穴を検出した。柱穴1の規模は径50.0×45.0cm、深さ52.0cm、柱穴2の規模は径50.0×40.0cm、深さ52.0cm、柱穴3の規模は一辺30.0cm、深さ66.0cm、柱穴4の規模は径50.0×45.0cm、深さ49.0cmであり、柱穴3は隅丸方形を呈し、他は上面円形で底面は方形を呈する。その他、南壁中央内側30cm程の位置に、径10cm程で内傾する柱穴を検出し、入口施設に用いられた柱穴の可能性が考えられる。

床 地山ローム小ブロック混じりの硬質の貼床面を検出した。

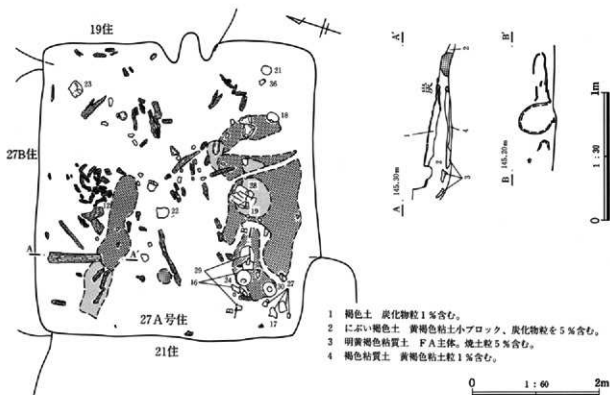
掘り方 東壁側を除き、各壁寄りが掘り込まれ、中央付近はあまり掘り込まれない。

埋没状況 前述のようにF Aが上層を覆い、焼失後人為的に埋め戻されている。

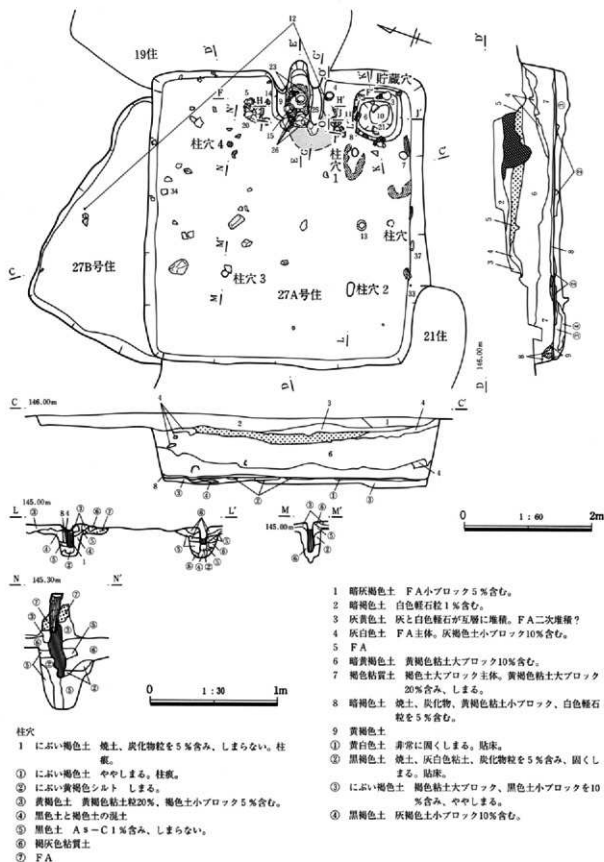
遺物出土状態 カマド内には15の高坏が支脚として倒置され、25の土師器甕が据えられていた。カマドの両袖脇にも完形の遺物が集中する。左脇には1・5・14の坏・高坏、21の甕、右脇には4・8・11の坏がある。貯蔵穴でも3・6・10・21の完形の坏・小型甕が出土しているが、その他の遺物出土量は少ない。南西隅の床面近くに、24・29・30の壺・甕が転倒して出土するが、炭化材との関係から焼失時の落下または、直後の投棄などが想定される。

時期 出土遺物から5世紀後半に比定される。

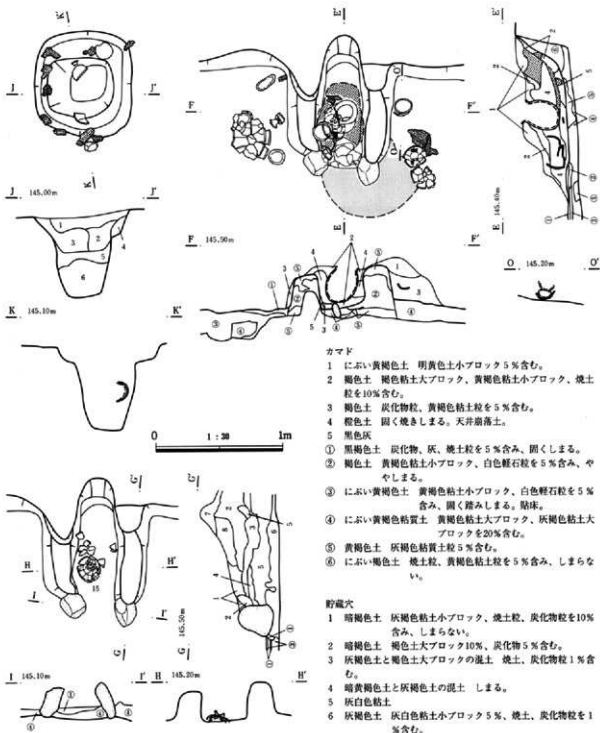
(斎藤)



第18図 A区27A号住居跡炭化材出土図



第19図 A区27A・27B号住居跡



カマド

- 1 にぶい黄褐色土 明黄色土小ブロック5%含む。
- 2 褐色土 褐色粘土大ブロック、黄褐色粘土小ブロック、焼土粒を10%含む。
- 3 褐色土 炭化物粒、黄褐色粘土粒を5%含む。
- 4 褐色土 固く焼きしめる。天井崩落土。
- 5 黒色灰
- ① 黒褐色土 炭化物、灰、焼土粒を5%含む、固くしめる。
- ② 褐色土 黄褐色粘土小ブロック、白色軽石粒を5%含む、ややしめる。
- ③ にぶい黄褐色土 黄褐色粘土小ブロック、白色軽石粒を5%含む、固く踏みしめる。貼床。
- ④ にぶい黄褐色粘質土 黄褐色粘土大ブロック、灰褐色粘土大ブロックを20%含む。
- ⑤ 黄褐色土 灰褐色粘質土粒5%含む。
- ⑥ にぶい褐色土 焼土粒、黄褐色粘土粒を5%含む、しまらない。

貯蔵穴

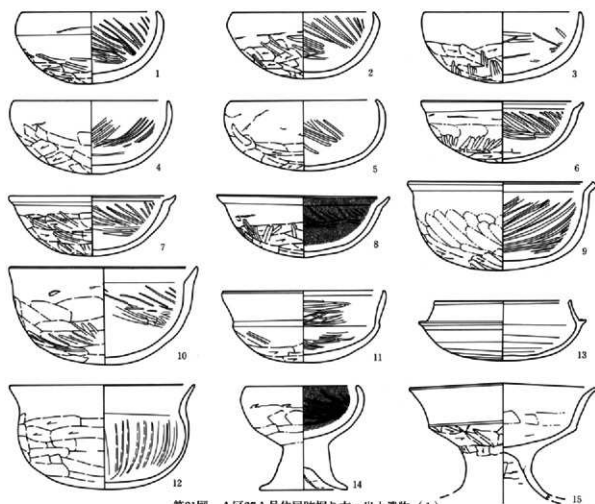
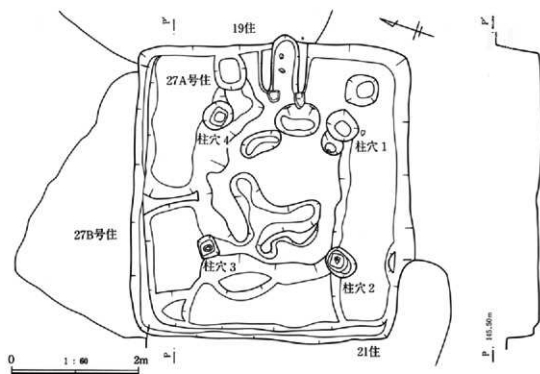
- 1 暗褐色土 灰褐色粘土小ブロック、焼土粒、炭化物粒を10%含む、しまらない。
- 2 暗褐色土 褐色土大ブロック10%、炭化物5%含む。
- 3 灰褐色土と褐色土大ブロックの混土 焼土、炭化物粒1%含む。
- 4 暗黄褐色土と灰褐色土の混土 しめる。
- 5 灰白色粘土
- 6 灰褐色土 灰白色粘土小ブロック5%、焼土、炭化物粒を1%含む。

カマド掘り方

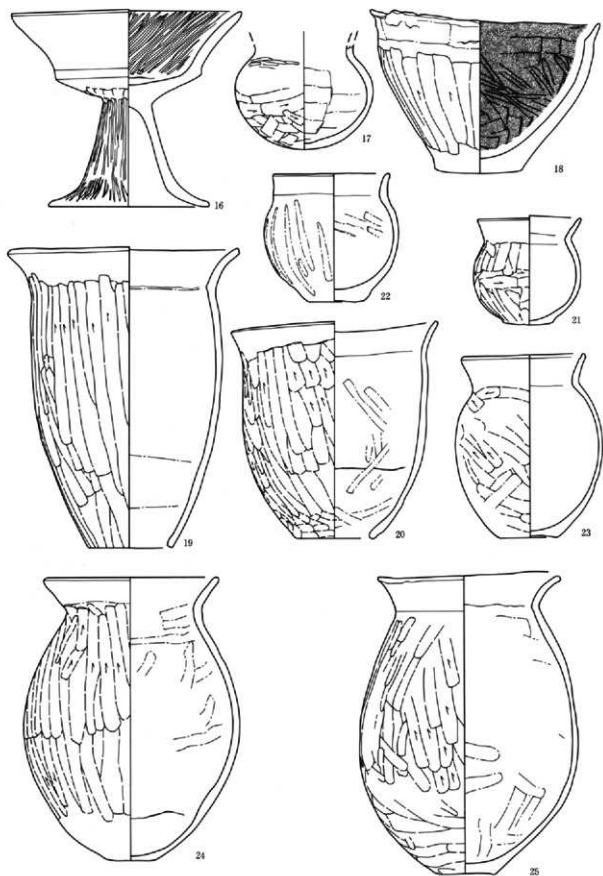
- 1 明黄色土 黄褐色粘土、焼土粒、小礫を5%含む。
- 2 褐色土 焼土、炭化物粒を5%含む。
- 3 黄褐色粘質土
- 4 明褐色粘質土 白色土粒5%含む。
- 5 褐色粘質土 しめる。
- 6 明黄褐色シルト
- 7 黒色土 A s - C 1%含む。
- 8 にぶい黄褐色土 黄褐色粘土小ブロック10%、焼土粒5%含む。

- ① 黄褐色土 焼土、炭化物、黒色土大ブロックを10%含む、固く踏みしめる。
- ② 黒褐色土 黄褐色粘土粒5%含む、踏みしめる。
- ③ 黄褐色土 黒色土大ブロック5%含む。
- ④ にぶい黄褐色粘質土 黄褐色粘土大ブロック、灰褐色粘土大ブロックを20%含む。

第20図 A区27A号住居跡貯蔵穴・カマド

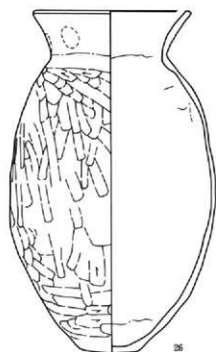


第21図 A区27A号住居跡掘り方・出土遺物 (1)

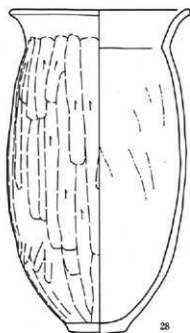


第22図 A区27A号住居跡出土遺物(2)

1. 竖穴住居跡



26



28



31 (1/1)



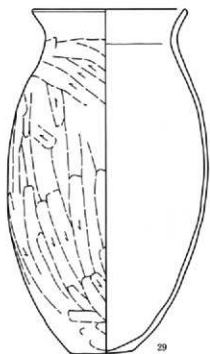
32 (1/1)



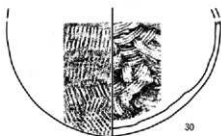
33 (1/1)



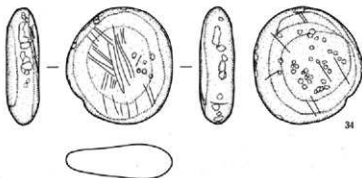
35



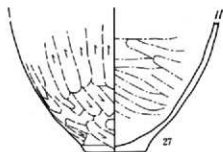
29



30



34



27

第23图 A区27A号住居跡出土遺物 (3)

A区27B号住居跡 (PL122)

位置 1F~1G-21グリッド

重複 27A号住居跡と重複するが、新旧関係不明。

形態 検出できた面積狭く不明。 主軸方位 不明

規模 南北(2.40)m、東西(3.77)m。

壁 壁高は15cm程である。

カマド 不明 内部施設 なし

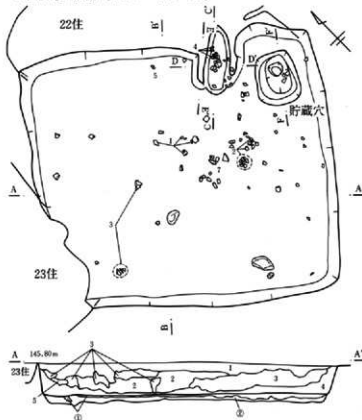
床 不明 掘り方 不明

埋没状況 均質であり人為埋没か。

遺物出土状態 北西隅壁際で1の鉄釘、また27A号住居跡の12の土師器鉢と接合する破片が出土しているが、埋土を含め遺物出土量は少ない。

時期 不明

A区28号住居跡 (PL7・122・123)



- 1 にぶい暗褐色土 白色軽石粒5%含む。
- 2 灰黄褐色土 FA小ブロック、白色軽石粒を20%含む。
- 3 灰黄褐色土 FA主体。褐色土、白色軽石を10%含む。
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 黒色土小ブロック、黄褐色粘土粒を10%含む。
- ① 褐色土 FA小ブロック40%、黄褐色粘土粒、白色軽石粒を1%含む、固く踏みしめる。(壁際はやや柔らかい。)
- ② 暗黄褐色土 黒色土小ブロック、FA小ブロックを5%含む。

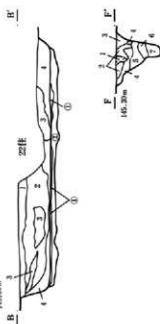
貯蔵穴

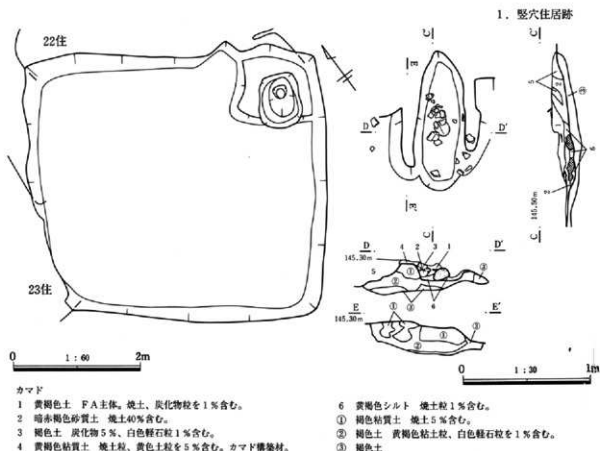
- 1 FA
- 2 黄褐色土 FA主体。灰褐色土40%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色粘土粒、小礫、砂粒を10%含む。
- 4 オリーブ褐色砂質土 粗砂粒10%含む。
- 5 オリーブ褐色土 黄褐色粘土、小礫を5%含む。
- 6 黒褐色砂質土 黄褐色粘土小ブロック5%、A6-C1%含む。
- 7 オリーブ褐色粘質土 黄褐色粘土、黄白色粘土粒を10%含む。

第25図 A区28号住居跡



第24図 A区27B号住居跡出土遺物





第26図 A区28号住居跡掘り方・カマド

位置 1D-1E-20-21グリッド

重複 22・23号住居跡より古い。

形態 横長方形

主軸方位 N-37°-E

規模 南北4.33m、東西4.77m。

壁 壁高は北辺13.0-19.0cm、東辺37.0-52.0cm、南辺38.0-48.0cm、西辺49.0-52.0cmで平均38.5cmである。

カマド 22号住居に上部を壊され、遺存状況は悪い。北壁中央やや東寄りに位置し、燃焼部は住居内にある。規模は、焚口-煙道が1.10m、袖焚口幅が0.29mである。褐色粘質土を貼り付け構築している。火床面は床面よりやや下がり、中央部に支脚に用いられたと思われる礎が出土している。掘り方は、火床面から深さ7cm程を測る。

内部施設 北東隅に隅丸長方形を呈する貯蔵穴を検出し、規模は上面で径85.0×68.0cm、内面で径60.0×38.0cm、深さ73.0cmである。貯蔵穴埋土上層には

FAの流れ込みが見られた。

床 掘り方面をそのまま利用し、地山が変質し粘性を帯び固く締まる。

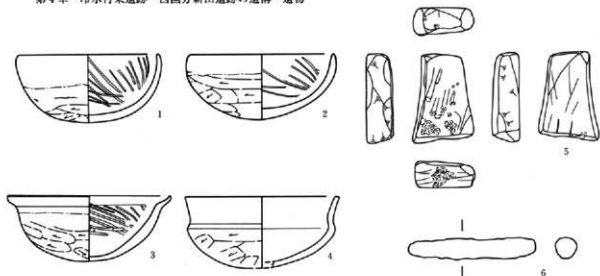
掘り方 平坦に仕上げられている。

埋没状況 中層から下層にかけてやや乱れた状態でFAの堆積が見られ、東壁寄りの遺物の集中はFA降下前後に人為的に投げ込まれ、また住居内をかき混ぜられた状況が窺われる。また、住居廃棄後から降下以前は凹みとして存在していたと思われる。

遺物出土状況 遺物はカマド及び中央部に集中するが、埋土を含め出土量は多くない。

時期 出土遺物から5世紀第4四半期に比定される。

(斎藤)



第27図 A区28号住居跡出土遺物

A区30号住居跡 (P L 8)

位置 1F-19グリッド

重複 18号住居跡より古い。

形態 大部分が調査区域外となるため不明。

主軸方位 不明

規模 南北(1.98)m、東西(1.34)m。

壁 壁高は北辺15.0~20.0cm、西辺13.0~18.0cmで平均16.5cmである。

カマド 不明 内部施設 不明

床 掘り方面を利用。

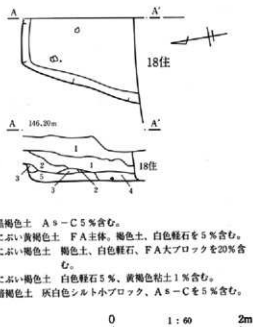
掘り方 平坦に仕上げられている。

埋没状況 北壁側にやや乱れが見られた。

遺物出土状態 遺物出土量は非常に少ない。

時期 不明

(斎藤)



第28図 A区30号住居跡

B区6号住居跡 (P L 8-9・123-125)

位置 10-1P-20グリッド

重複 5号住居跡より古い。

形態 横長方形

主軸方位 N-36°-E

規模 南北(3.66)m、東西4.14m。

壁 壁高は北辺46.0~62.0cm、東辺46.0~55.0cm、南辺51.0~54.0cm、西辺46.0~57.0cmで平均52.1cmである。

カマド 土器が掛けられた状態で確認でき、使用時のまま放棄され土圧によりつぶされたと考えられ、使用時の状況を窺うのに良好な資料である。位置は北壁やや東寄りにあり、袖部断面では芯に地山ローンを掘り残し、上部にA s-C混泥土、その上に黄褐色シルトを貼り込み構築していた。天井部の厚みは約20cmほどある。規模は、焚口~煙道が1.02m、袖焚口幅が0.38mである。燃焼部は住居内にあり、

16の甕が掛けられた状態で出土していた。火床面は床面と同レベルであり、煙道部へはおよそ40°で立ち上がる。掘り方は、火床面から深さ6cm程を測る。内部施設 北東隅に径85.0×81.0cm、深さ21.0cmの方形状を呈する貯蔵穴を検出した。上部にはF A及びF A混土が見られ、F A降下直後の埋没の可能性が考えられる。

床 掘り方をわずかに加工し、床面としている。

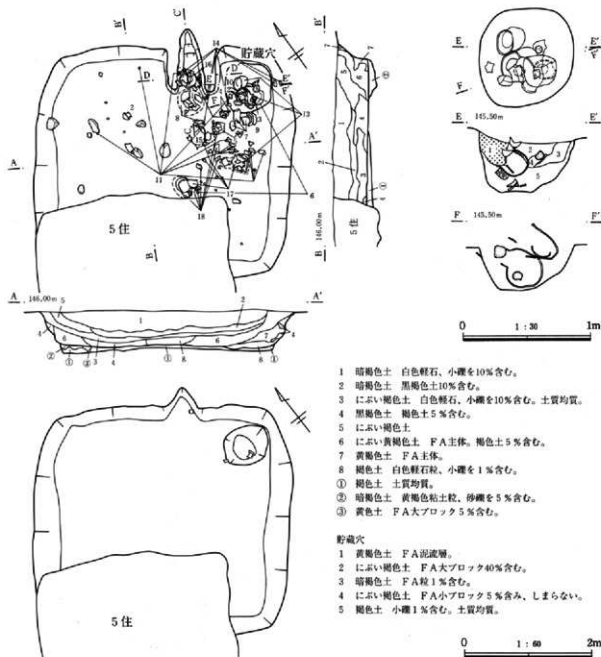
掘り方 平坦に仕上げられている。

埋没状況 東・北壁際にF Aが堆積、または流れ込んだ状況が観察できた。

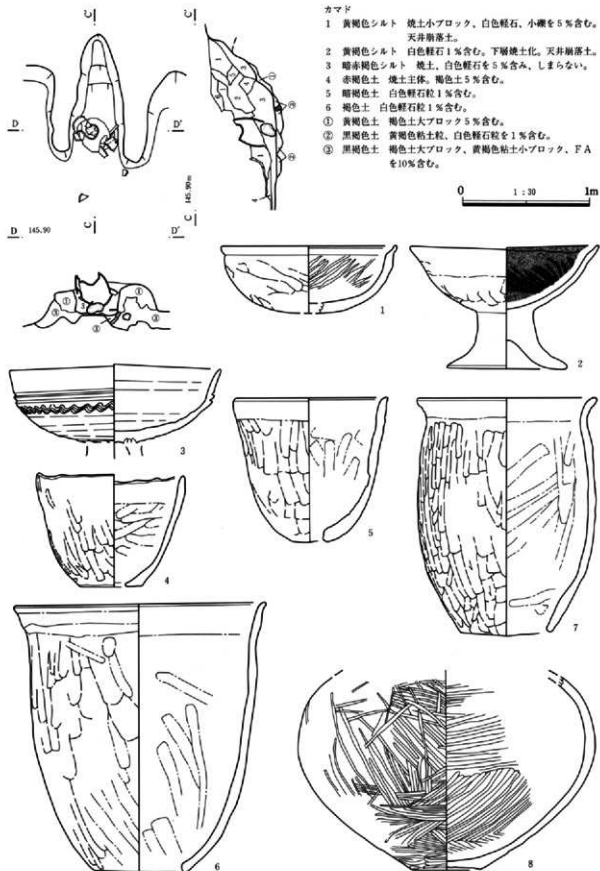
遺物出土状況 カマド内に16の土師器甕が据えられている。貯蔵穴では3の高坏、12-14の土師器甕が、カマド方向に倒れた状態で重なって出土している。遺物はカマドとその前面に集中するが、埋土を含め出土量は多くない。

時期 出土遺物から6世紀第1四半期に比定される。

(斎藤)

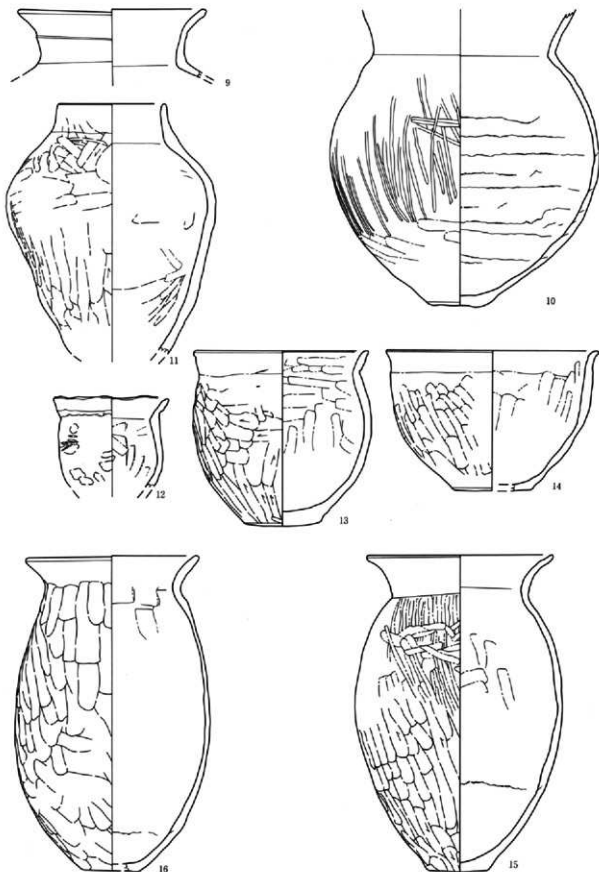


第29図 B区6号住居跡

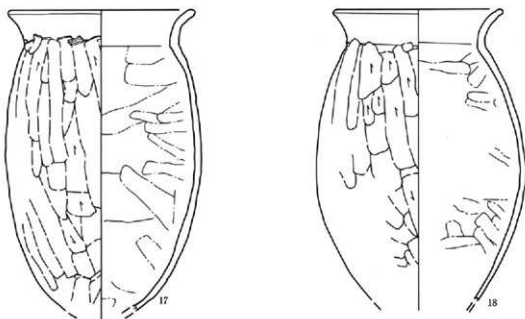


第30図 B区6号住居跡カマド・出土遺物(1)

1. 竖穴住居跡



第31図 B区6号住居跡出土遺物(2)



第32図 B区6号住居跡出土遺物(3)

B区20号住居跡 (PL10・125~126)

位置 1R~1T-22~23グリッド

重複 2号土坑より古い。

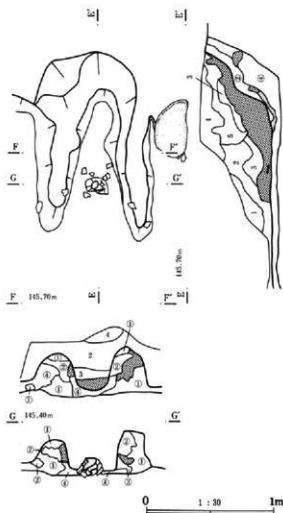
形態 半分以上が調査区域外となるが、方形を呈すると思われる。

主軸方位 N-55°-E

規模 南北7.00m、東西(7.35)m。

壁 壁高は東辺37.0~60.0cm、南辺30.0~52.0cmで平均44.8cmである。

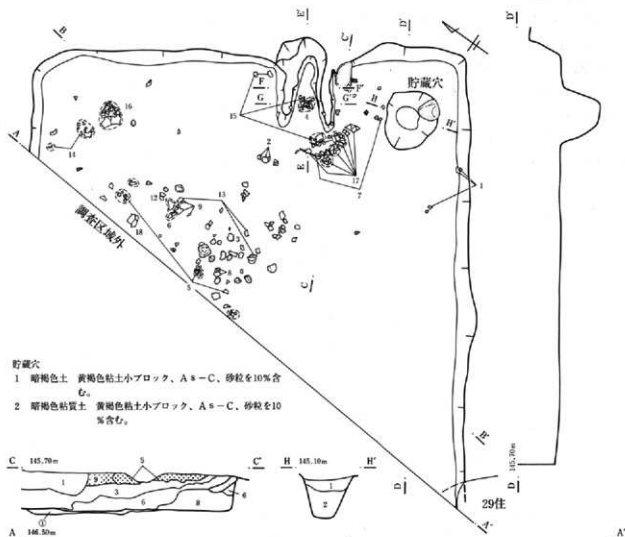
カマド 東壁中央やや南寄りに位置し、燃焼部は住居内にありV字形を呈する。規模は、焚口~煙道が1.48m、袖焚口幅が0.42mである。構築方法は芯に地山As-Cを含む黒色土やローム漸移層のブロックを置き、それらを覆うように黄褐色粘土を貼り込んでいる。埋没土中には構築材の崩落が見られた。燃焼部中央には支脚の礎が埋置され、土器が巻かれていた。火床面は床面と同じレベルで、奥壁から煙



- 1 暗褐色土 焼土粒、黄褐色粘土粒を10%含む。
- 2 焼土と暗褐色土の混土 褐色土粒10%含む。
- 3 黄褐色粘土と暗褐色土の混土 焼土粒5%含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒、黄褐色粘土粒を10%含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒、黄褐色粘土粒を20%含む。
- ① 暗褐色粘質土 焼土粒、白色粘土粒、As-Cを10%含む。
- ② 赤褐色土 焼土と暗褐色土の混土。
- ③ 黄褐色粘土
- ④ 暗褐色土 炭化物、焼土粒、黄褐色粘土粒を10%含む。

第33図 B区20号住居跡カマド

1. 竪穴住居跡



貯蔵穴

1 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック、A s-C、砂粒を10%含む。

2 暗褐色粘質土 黄褐色粘土小ブロック、A s-C、砂粒を10%含む。

1 暗褐色砂質土 黄褐色粘土小ブロック、A s-C混黒褐色土小ブロック、黄褐色粘土粒を10%含む。

2 暗褐色土と黒褐色土の混土。

3 暗褐色土 F A粒5%含み、ややしまる。

4 暗褐色土とF Aの混土 ややしまる。

5 F A

6 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック、A s-C混黒褐色土小ブロック、黄褐色粘土粒を10%含む。

7 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック、焼土粒、黄褐色粘土粒を10%含む。

8 黒褐色土 黄褐色粘土粒、A s-Cを5%含み、しまる。

9 F A二次堆積層 暗褐色土20%含む。

① 暗褐色土 黄褐色粘土と黒褐色土の混土。

第34図 B区20号住居跡

道部へは急に立ち上がる。掘り方規模は、主軸方向1.61m、幅0.93mである。

内部施設 東南隅に上端隅丸長方形の貯蔵穴を検出した。上端長辺90.0cm、短辺81.0cm、深さ60.0cmの規模を持つ。

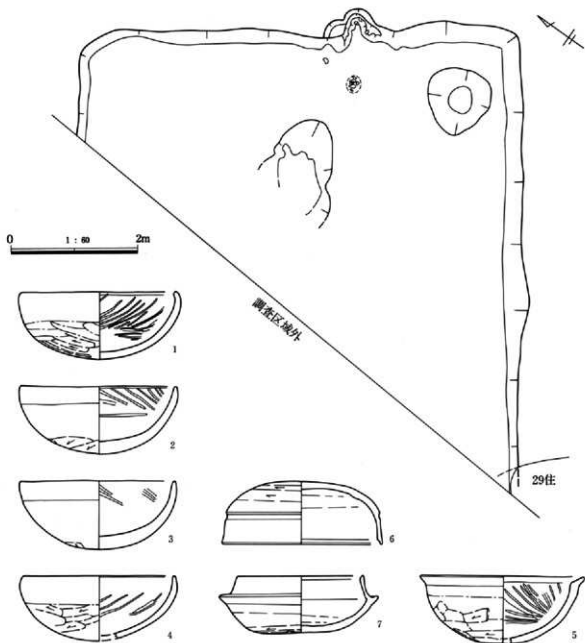
床 掘り方面を利用し床面としている。多少の凹凸が見られ、カマド前には灰・焼土粒の広がりが見られた。

掘り方 全体にフラットに仕上げられている。

埋没状況 南の29号住居跡側は地山ブロックなどの乱れが多く、29号住居を建てる際の排土を埋め込んだような人為的埋土であった。また北壁側中層には、FAの純層がレンズ状に堆積しているのが観察できた。

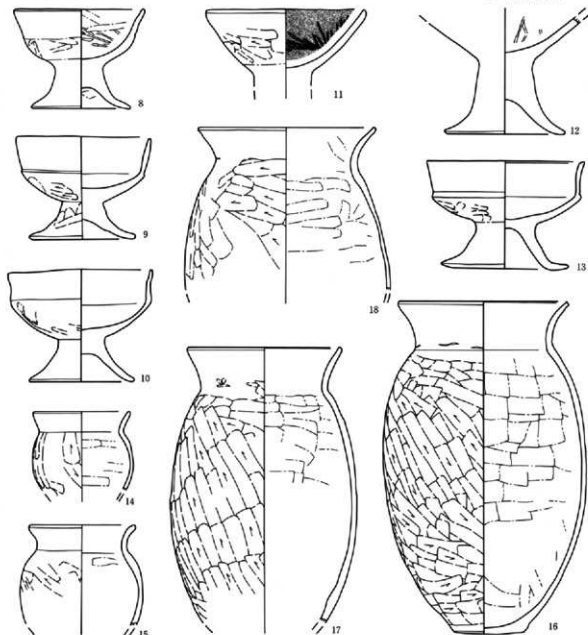
遺物出土状態 カマドとその前面及び中央部から北西隅に集中するが、埋土を含め遺物出土量は多くない。

時期 出土遺物から5世紀末～6世紀第1四半期に比定される。(斎藤)



第35図 B区20号住居跡掘り方・出土遺物(1)

1. 竪穴住居跡



第36図 B区20号住居跡出土遺物(2)

B区26号住居跡 (P.L.11・127)

埋没土はFAを主体とし、壁際の下層に黒色土の三角堆積がわずかに見られた住居であり、FA降下時には上屋等を取り払われた直後か、またはあまり時間差のない時期のものと言える。

位置 1R-21グリッド

重複 10号住居跡より古い。

形態 半分以上が10号住居跡に壊されるが、方形を呈すると思われる。

主軸方位 N-58°-W

規模 南北(2.14)m、東西(3.70)m。

壁 壁高は東辺39.0~45.0cm、南辺36.0~48.0cm、西辺30.0~34.0cmで平均38.7cmである。

カマド 不明 内部施設 不明

床 掘り方面を利用しており、ロームの崩れた層である。

掘り方 平坦に仕上げられている。

埋没状況 FAにより埋没。

第4章 冷水村東遺跡・西国分新田遺跡の遺構・遺物

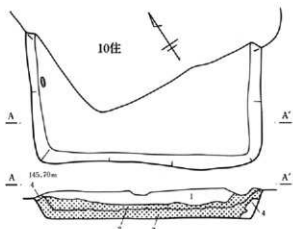
遺物出土状態 全く遺物は出土せず、本住居廃棄の際土器等はほとんど持ち出されたものと推測される。

時期 FAの堆積状況から6世紀初めに比定される。

(斎藤)

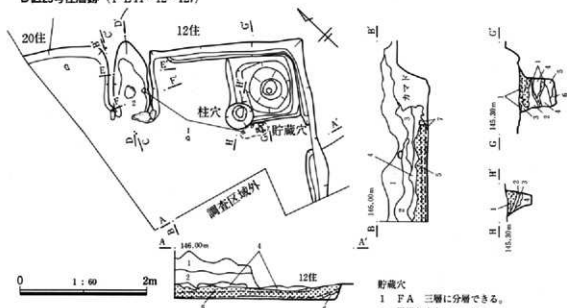
- 1 暗褐色土 FA小ブロック40%含む。
- 2 FA二次堆積層 よくしまる。
- 3 FA 4ユニットを確認。
- 4 黒褐色土 A5-C5%含む。

0 1:60 2m



第37図 B区26号住居跡

B区29号住居跡 (P.L11・12・127)



- 1 暗褐色土 炭化物、黒褐色土、黄褐色粘土粒、A5-C、砂粒を10%含む。
- 2 黒褐色土 A5-C、FA粒、砂粒を10%含む、固くしまる。
- 3 暗黄褐色土 黒褐色土とFAの混土。固くしまる。
- 4 黄褐色粘土 FA水成堆積。黒褐色土小ブロック10%含む。
- 5 FA はば三等分され、上層及び下層が9区褐色、中層が淡褐色となる。
- 6 黒褐色土 黄褐色粘土粒、砂粒を5%含む。
- 7 黒褐色土

貯蔵穴

- 1 FA 三層に分離できる。
- 2 黒褐色土とFAの混土。
- 3 暗褐色土 FA大ブロック20%含む。
- 4 暗褐色土 FA主体。
- 5 暗褐色粘質土。
- 6 暗褐色土とFAの混土。

柱穴

- 1 FA 上下に分離。
- 2 黄褐色土 FA主体。黒色土大ブロック5%含む。
- 3 黄褐色土 黒色土大ブロック20%含む。
- 4 黒褐色土、暗褐色土、FAの混土。

第38図 B区29号住居跡

壁寄りを除きFAが床面直上を覆い、住居廃棄後の状況を知る上で貴重な住居である。

位置 1Q-1R-22-23グリッド

重複 12・20号住居跡より古い。

形態 半分以上が調査区域外となるが、方形を呈す

と考えられる。主軸方位 N-46°-E

規模 南北(4.45)m、東西(2.93)m。

壁 壁高は東辺21.0-27.0cm、南辺12.0-24.0cmで平均21.0cmである。

カマド 北壁に付設され、燃焼部は住居内にある。

規模は、焚口～煙道が(1.28) m、袖焚口幅が0.45 mである。構築材として黄褐色粘土を用い、焚口部には補強材として礫を用いている。燃焼部内からは完形の小型甕が横位の状態で出土した。また火床面には灰の堆積があり、焼土ブロックの崩落も認められ、上部にF Aの乱れがあり、廃棄後崩落したと考えられる。掘り方規模は、12号住居跡に壊され不明だが、火床面から深さ10 cm程を測る。

内部施設 北東隅に周辺部がやや高くなり、一辺110 cm程の方形を呈し、内部は径82.0×70.0 cm、深さ60.0 cmの規模を持つ貯蔵穴を検出した。貯蔵穴内は乱れたF Aが堆積していることや、上部にテラスを有することなどからフタがかけられ、内部は空洞で

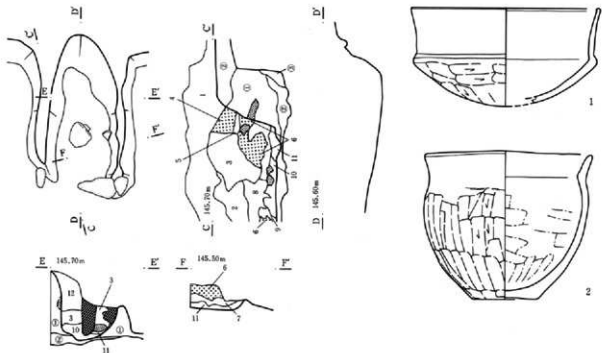
あったと思われる。また貯蔵穴に接するように径45.0×40.0 cm、深さ39.0 cmの柱穴を検出した。柱穴埋没土中にもF Aを確認し、柱材も抜き取られていた痕跡が認められた。周溝は東辺中央部以南と、東辺北側三分の一から北辺のカマド右脇まで巡る。規模は、幅5.0～15.0 cm、深さ6 cm程である。

床 掘り方面をそのまま利用している。
掘り方 平坦に仕上げられている。

埋没状況 住居廃棄時に上屋を取り除き、自然埋没途中にF Aの降下を受けた。

遺物出土状態 遺物は埋土を含め出土量はわずかであり、本住居廃棄の際土器類はほとんど持ち出されたものと推測される。

時期 出土遺物から6世紀初めに比定される。(南藤)



カマド

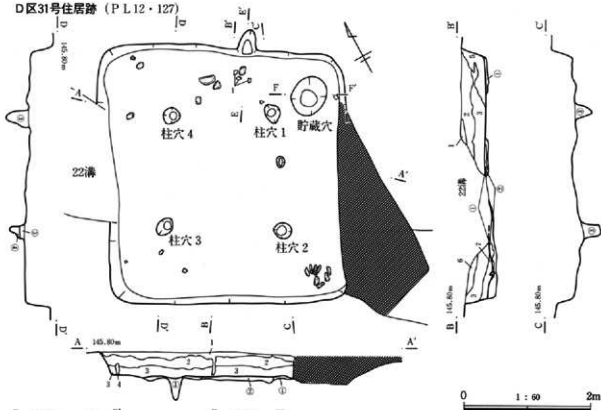
- 1 暗褐色土 F A粒、砂粒を10%含む。
- 2 黒褐色土とF Aの混土。
- 3 暗褐色土とF Aの混土 黒褐色土小ブロック10%含む。
- 4 黄褐色土 F Aの二次堆積。
- 5 灰褐色砂質土、暗褐色土、F Aの混土。
- 6 F A
- 7 焼土小ブロックとF Aの混土
- 8 黒褐色土とF Aの混土
- 9 黒褐色土
- 10 黒褐色土 灰、焼土粒、F Aの混土。

- 11 灰色灰 黒褐色土小ブロック、焼土粒を5%含む。
- 12 灰色粘土
- ① 黄褐色粘土
- ② 粘土と暗褐色土の混土
- ③ 黒褐色土 黄褐色粘土粒5%含む。

0 1 : 30 1m

第39図 B区29号住居跡カマド・出土遺物

D区31号住居跡 (P.L.12・127)



貯蔵穴

- 1 暗褐色土 総土砂層 (II) 粒, A₅-C₅を10%含む。
- 2 暗褐色土 色調暗い。
- 3 灰褐色砂質土
- 4 黒褐色粘質土 総土砂層 (II) 粒, A₅-C₅を5%含む。

- 1 暗褐色砂質土 A₅-C₅粒5%含む。
- 2 黒褐色粘質土 総土砂層 (II) 粒, A₅-C₅を5%含む。
- 3 黒褐色土 総土砂層 (II) 粒, A₅-C₅を5%含む。
- 4 灰褐色粘質土 A₅-C₅混黒色土小ブロック, 総土砂層 (II) 粒を5%含む。
- 5 灰褐色粘質土
- 6 黒褐色粘質土 総土砂層 (II) 小ブロック, A₅-C₅を10%含む。
- 7 黒褐色粘質土 A₅-C₅5%含む。
- ① 黒褐色土 総土砂層 (II) 粒, A₅-C₅を20%含む。
- ② 黄褐色砂質土 総土砂層 (II) 粒主体, A₅-C₅混黒褐色土小ブロックを10%含む。
- ③ 暗褐色土 A₅-C₅1%含む。
- ④ 暗褐色土 総土砂層 (II) 粒, A₅-C₅を10%含む。

位置 3F-3G-17-18グリッド

重複 22溝より古い。

形態 正方形

主軸方位 N-33°-E

規模 南北4.10m、東西(3.94)m。

壁 壁高は北辺33.0-37.0cm、東辺37.0-39.0cm、南辺31.0-42.0cm、西辺33.0-40.0cmで平均36.5cmである。

カマド 北壁中央に壁を掘り込んだ煙道部と、住居内に焼土・灰の広がりを確認したが、破壊されたため本体形状は不明であった。規模は、焚口～煙道が0.43m、袖焚口幅が0.16mである。燃焼部と思われる

カマド

- 1 灰褐色土 A₅-C₅混黒色土小ブロック, 総土砂層 (II) 粒を5%含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 2 灰褐色土 総土砂層 (II) 粒, A₅-C₅混黒色土小ブロックを1%含む。
- 3 灰褐色土 総土砂層 (II) 粒20%、焼土粒5%含む。
- 4 黒色粘質土 総土砂層 (II) 粒, A₅-C₅を5%含む。
- 5 焼土、灰、黒色土の混土
- ① 灰褐色土 総土砂層 (II) 粒10%含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- ② 灰褐色粘質土
- ③ 灰褐色土 総土砂層 (II) 粒5%含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- ④ 黒褐色土 総土砂層 (II) 粒, A₅-C₅を5%含む。

第40図 D区31号住居跡

1. 竪穴住居跡

る位置と左側前方に大礫が出土し、補強用に使われていたと考えられる。掘り方は、火床面から深さ28cm程を測る。

内部施設 北東隅に径62.0×50.0cm、深さ60.0cmの貯蔵穴を検出した。各隅対角線上内側1.5m程の所で4本の柱穴を確認した。柱穴1の規模は径30.0×24.0cm、深さ33.0cm、柱穴2の規模は径30.0×25.0cm、深さ34.0cm、柱穴3の規模は径31.0×22.0cm、深さ25.0cm、柱穴4の規模は径26.0×25.0cm、深さ38.0cmである。また、東壁側2本の柱穴間に小柱穴を確認し、入口施設に伴う柱穴と思われる。

床 掘り方面を利用し、地山が変質していた。

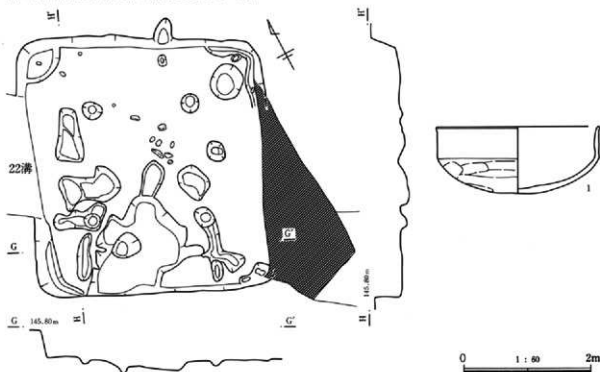
掘り方 南壁側が大きく掘り込まれ、2本の柱穴には南壁より間仕切り溝を検出した。

埋没状況 自然埋没土と考えられる。

遺物出土状態 1の土師器坏がカマド前面で出土しているが、埋土を含め遺物出土量は多くない。

時期 出土遺物から5世紀第4四半期に比定される。

(斎藤)



第41図 D区31号住居跡掘り方・出土遺物

D区32号住居跡 (PL13・127)

本住居の検出は当初F Aが地山ロームと同色に見える、漏れていたが、再確認時に焼土の痕跡が見え、F Aに埋没した住居であることがわかった。

位置 3H~3I-19~20グリッド

重複 1号井戸跡より古い。

形態 横長方形

主軸方位 N-42°-E

規模 南北3.74m、東西4.02m。

壁 壁高は北辺9.0~24.0cm、東辺7.0~11.0cm、南辺9.0~18.0cm、西辺16.0~23.0cmで平均14.6cmである。

カマド 北壁中央部に付設され、燃焼部は住居内に位置する。規模は、焚口~煙道が0.83m、袖焚口幅が0.60mである。構築には地山を芯材として掘り残り、灰褐色粘質土を貼り込んでいる。埋没土上部にF Aが堆積し、廃棄時に壊されたと考えられる。火

床面は床面と同レベルであり、奥壁で緩やかに立ち上がる。掘り方規模は、主軸方向1.07m、幅1.06mである。

内部施設 北東隅に径82.0×73.0cm、深さ73.0cmを測る円形の貯蔵穴を検出した。埋没土上部にレンズ状にF Aが堆積している。住居対角線上に4本の柱穴を検出した。柱穴1の規模は径27.0×25.0cm、深さ38.0cm、柱穴2の規模は径34.0×27.0cm、深さ37.0cm、柱穴3の規模は径34.0×31.0cm、深さ41.0cm、柱穴4の規模は径30.0×28.0cm、深さ40.0cmである。

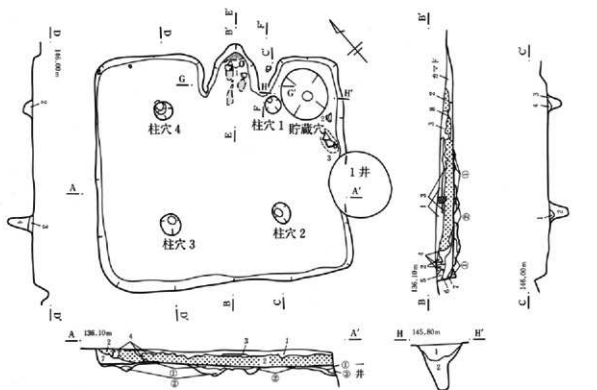
床 掘り方面をそのまま利用し、中央付近や周辺部は貼床面となる。

掘り方 南壁側の2本の柱穴には間仕切り溝が付く。

埋没状況 住居廃棄後、自然埋没の三角堆積が壁際に見られる以外は、全体をF A層に覆われている。

遺物出土状態 カマド及び貯蔵穴周辺に集中するが、埋土を含め遺物出土量は多くない。

時期 出土遺物から5世紀末～6世紀初めに比定される。(斎藤)



1 灰褐色土 A s-C混黒色土小ブロック、F A小ブロックを5%含む。

2 F A

3 黒褐色土 F Aを含み、色調明るい。

4 灰褐色粘質土 A s-C混黒色土小ブロック1%含む。鉄分の凝集斑紋あり。

5 灰褐色土とF Aの混土

6 黒褐色土 A s-C 5%含む。

7 暗褐色土 A s-C 1%含む。

8 灰色粘質土

① 黒褐色土 総杜砂層 (Ⅱ) 粒20%含む。

② 黒褐色土 総杜砂層 (Ⅱ) 粒5%含む。

③ 総杜砂層 (Ⅱ) ブロック

柱穴

1 黒褐色土

2 暗褐色粘質土

3 暗褐色土 総杜砂層 (Ⅱ) 粒10%含む。

4 黄褐色土 しまる。

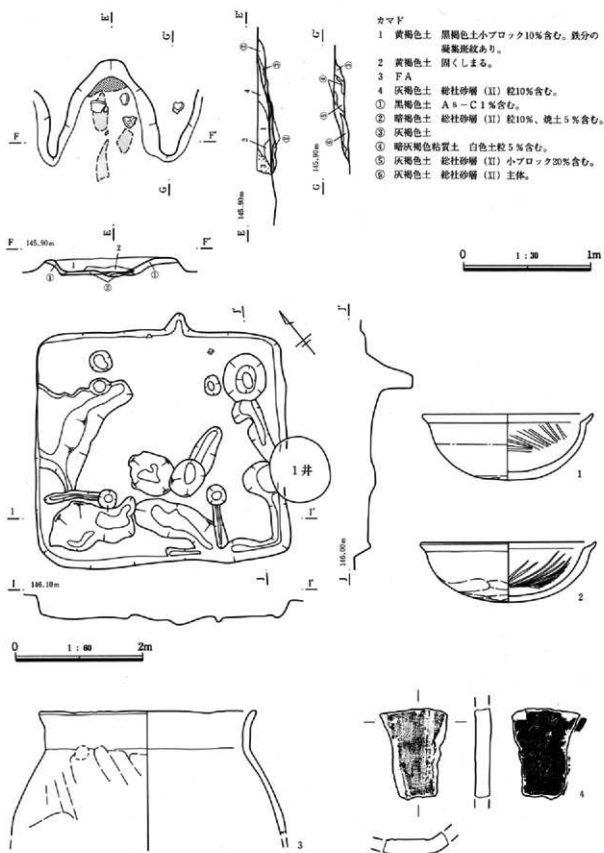
貯蔵穴

1 黄褐色砂質土 水成堆積。

2 暗褐色粘質土

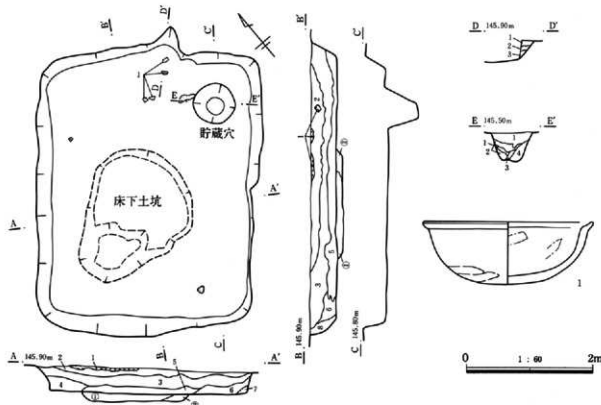
第42図 D区32号住居跡

1. 竪穴住居跡



第43図 D区32号住居跡カマド・掘り方・出土遺物

D区33号住居跡（P.L.14・128）



- 1 FA
- 2 黒褐色粘質土 A s-C 5% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 3 黒褐色粘質土 A s-C 1% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 4 黒褐色土と黒褐色土の混土 鉄分の凝集斑紋あり。
- 5 黒褐色粘質土 A s-C 5% 含む。
- 6 黒色粘質土 A s-C 5% 含む。
- 7 灰褐色土
- 8 黒褐色粘質土
- ① 黒色土 A s-C 5% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- ② 黒色粘質土 A s-C 1% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。

カマド

- 1 暗褐色粘質土 総土砂層 (II) 粒, A s-C、小礫を5% 含む。
- 2 暗褐色粘質土 総土砂層 (II) 粒, A s-C、小礫を20% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 3 暗褐色粘質土 A s-C、小礫を5% 含む。

貯蔵穴

- 1 黒褐色粘質土 鉄分の凝集斑紋あり。
- 2 灰褐色粘質土
- 3 黒色粘質土
- 4 黒褐色粘質土 砂粒20% 含む。

第44図 D区33号住居跡・出土遺物

位置 3F-3G-19-20グリッド

重複 なし 形態 縦長方形

主軸方位 N-44°-E

規模 南北4.58m、東西3.59m。

壁 壁高は北辺35.0-39.0cm、東辺25.0-38.0cm、南辺29.0-41.0cm、西辺34.0-39.0cmで平均35.0cmである。

カマド すでに廃棄時に完全に取り除かれ、北壁中央部壁に焼土が見られ、その前に焼土や灰がわずかに広がる程度であった。規模は、焚口～煙道が0.45m、袖焚口幅が0.42mである。

内部施設 北東隅に径67.0×63.0cm、深さ47.0cmの円形を呈する貯蔵穴を検出した。

床 地山面を利用し、あまり締まりは良くなく、検出しづらかった。

掘り方 中央に楕円形の床下土坑を検出した。規模は径217.0×155.0cm、深さ26.0cmである。

埋没状況 埋没土上部にFAのブロックが見られ、下部はA s-C混じりの黒色土やロームブロック混じりの混土が見られ、人為的に埋め戻されたと考えられる。

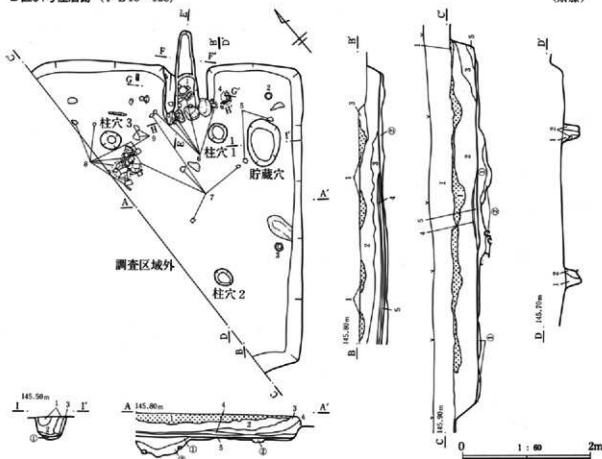
遺物出土状態 1の土師器がカマド前面で出土し

ているが、埴土を含め遺物出土量は多くない。

時期 出土遺物から5世紀末～6世紀初めに比定される。

D区34号住居跡 (PL15・128)

(斎藤)



- 1 FA
- 2 黒褐色土 A-C 5% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 3 黒褐色粘質土 A-C 1% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 4 黒灰色砂質土 焼土10%、A-C 1% 含む。
- 5 灰褐色粘質土 総社砂層 (Ⅱ) 大ブロックと暗褐色粘土大ブロックを20% 含む、よくしる。
- ① 暗褐色粘質土 総社砂層 (Ⅱ) 小ブロック、総社砂層 (Ⅱ) 粒を20% 含む。
- ② 黄暗褐色土 総社砂層 (Ⅱ) 粒5% 含む。

- 貯蔵穴
- 1 黒褐色砂質土 A-C 5%、炭化物1% 含む。
 - 2 黒褐色土 焼土粒、炭化物粒、A-C を5% 含む、しる。
 - 3 暗褐色土 灰褐色粘質土小ブロック、A-C を5% 含む。
 - ① 暗褐色粘質土 総社砂層 (Ⅱ) 小ブロック、総社砂層 (Ⅱ) 粒を20% 含む。

柱穴

- 1 黒色粘質土 A-C 1% 含む。
- 2 灰黄褐色土 総社砂層 (Ⅱ) 小ブロック20% 含む、しる。

第45図 D区34号住居跡

本住居は全掘できなかったが、上層にFAの堆積が見られ、下面では波打った畠の痕跡が断面で観察できた。

位置 3B-3C-21グリッド

重複 なし

形態 半分以上が調査区域外となるが、縦長方形を呈すると考えられる。

主軸方位 N-41°-E

規模 南北(4.36)m、東西(4.28)m。

壁 壁高は北辺20.0-34.0cm、東辺13.0-34.0cm、南辺28.0-29.0cmで平均26.3cmである。

カマド 北壁に付設され、焚口部には人頭大の大礫が出土し、補強用に用いられたと考えられる。燃焼部は住居内にあり、左袖側は崩落している。規模は、焚口～煙道が1.32m、袖焚口幅が0.31mである。また、燃焼部中央に土器が伏せられ、支脚に利用され

ていたものか。火床面は床面と同レベルであり、奥壁から煙道部へは緩やかに立ち上がる。掘り方は、火床面から深さ19cm程を測る。

内部施設 北東隅寄りに長円形を呈する貯蔵穴を検出した。規模は径74.0×52.0cm、深さ30.0cmである。柱穴は3本検出したが、不明瞭なプランであり掘り込みも浅い。柱穴1の規模は径31.0×30.0cm、深さ29.0cm、柱穴2の規模は径31.0×25.0cm、深さ20.0cm、柱穴3の規模は径32.0×28.0cm、深さ23.0cmである。

床 カマド前から貯蔵穴方向に、焼土粒を含む灰の広がりが見られた。また、中央付近には貼床を確認し、東壁側はやや高まっている。

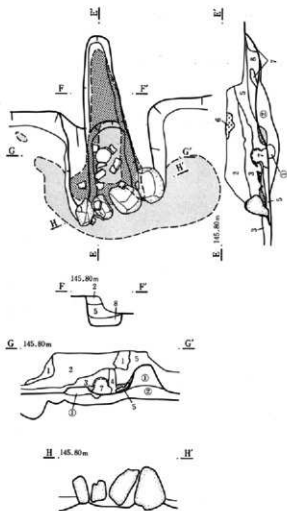
掘り方 中央付近に隅丸方形を呈する径160.0×(175.0)cm、深さ22.0cmの床下土坑を検出し、東壁際に掘り込まれている。

埋没状況 畚の耕作により攪拌されており、廃棄直後の状態は不明。

遺物出土状態 カマド及び北西隅部分に集中するが、埋土を含め出土量は多くない。

時期 出土遺物から5世紀第3四半期に比定される。

(斎藤)



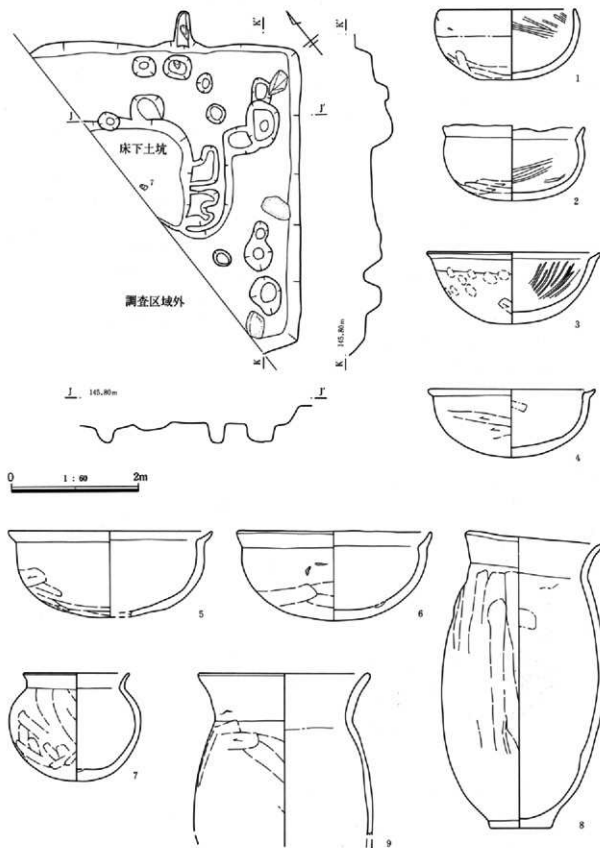
カマド

- 1 灰褐色土と暗褐色土の混土
- 2 灰褐色粘質土 A～C 炭黒色土小ブロック1%含む、固くしめる。鉄分の凝集斑紋あり。
- 3 灰褐色土 焼土5%含む。
- 4 暗褐色土 しならない。
- 5 暗褐色粘質土 焼土、A～Cを5%含む。
- 6 FA
- 7 灰褐色土 総杜砂層(Ⅱ)主体。
- 8 暗褐色土 焼土小ブロック5%含む。天井崩落土。
- ① 褐色土 焼土小ブロック、総杜砂層(Ⅱ)小ブロックを5%含む。
- ② 暗灰色シルト 総杜砂層(Ⅱ)小ブロック1%含む。

0 1:30 1m

第46図 D区34号住居跡カマド

1. 竪穴住居跡



第47図 D区34号住居跡掘り方・出土遺物

D区36号住居跡 (P L36・137)

本住居は床面付近まで耕作が及び、わずかに埋没土が残っていた。この埋没土はF Aであり、35号住居同様、当初地山との区別がつかず、カマドの確認により住居であることが判明した。

位置 3J～3K-20～21グリッド

重複 なし

形態 縦長方形

主軸方位 N-55°-E

規模 南北3.32m、東西4.07m。

壁 壁高は北辺3.0～9.0cm、東辺2.5～6.5cm、南辺2.0～6.0cm、西辺2.0～5.0cmで平均4.5cmである。

カマド 北壁中央やや東寄りに付設され、燃焼部は住居内にある。規模は、焚口～煙道が0.93m、袖焚口幅が0.33mである。袖部分の芯には地山が掘り残され、焚口には砂岩礫が鳥居状に組まれ、補強用に使われていた。また、天井礫の上部に薨がつぶれた状態で出土していた。

内部施設 北東隅に径64.0×54.0cm、深さ39.5cmの円形を呈する貯蔵穴を検出した。カマド部分を除き各壁際に周溝が巡る。規模は幅1.0～6.0cm、深さ17.5cmである。

床 掘り方面を利用している。カマド前には焼土ブロック・炭化物・灰が広がる。

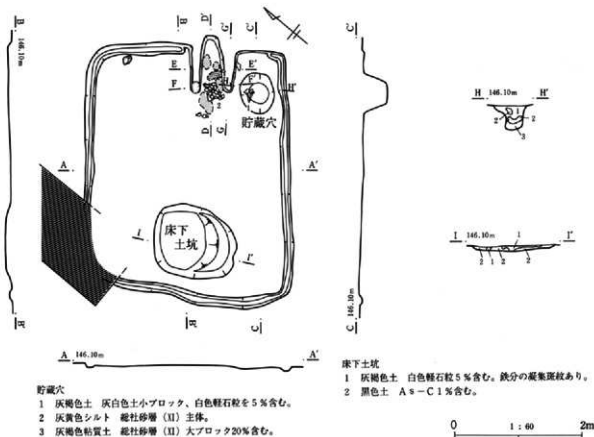
掘り方 平坦な面に仕上げられ、南壁寄りに径132.5×114.0cm、深さ16.5cmの楕円形を呈する床下土坑を検出した。

埋没状況 F Aによる自然埋没。

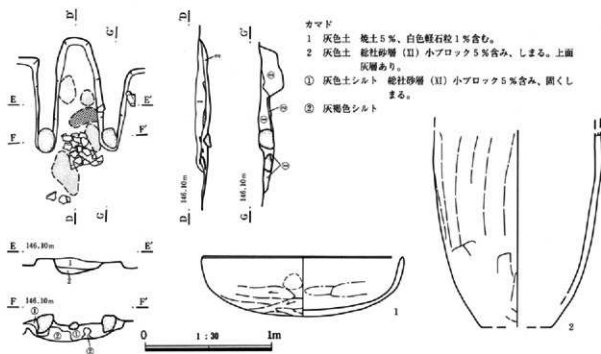
遺物出土状態 カマド及び貯蔵穴内に集中するが、埋土を含め出土量は少ない。

時期 出土遺物から5世紀後半に比定されるか。

(斎藤)



第48図 D区36号住居跡



第49図 D区36号住居跡カマド・出土遺物

(2) 奈良・平安時代

A区15号住居跡 (P L 16・128・129)

位置 ID-1E-23-24グリッド

重複 なし

形態 攪乱に半分近く壊されるが、方形を呈すると考えられる。

主軸方位 N-100°-E

規模 南北4.32m、東西(3.28)m。

壁 壁高は北辺29.5~35.5cm、東辺31.5~33.0cm、南辺9.0~13.5cmで平均25.3cmである。

カマド 東壁南隅寄りに位置し、燃焼部の中心は壁の延長上にある。規模は、焚口~煙道が1.40m、袖焚口幅が0.45mである。火床面直上から右前方にかけて、構茶材の黄褐色粘土の崩落と広がりが見られ、廃棄時にくずされた様子が窺える。火床面は床面より凹み、奥壁で急に立ち上がり煙道部へと移行する。

灰面はカマド前から貯蔵穴側に広がる。掘り方規模は、主軸方向1.44m、幅1.20mである。

内部施設 東南隅に径70.0×55.0cm、深さ33.5cmの楕円形の貯蔵穴を検出した。

床 地山ブロックを踏み締め貼床としている。

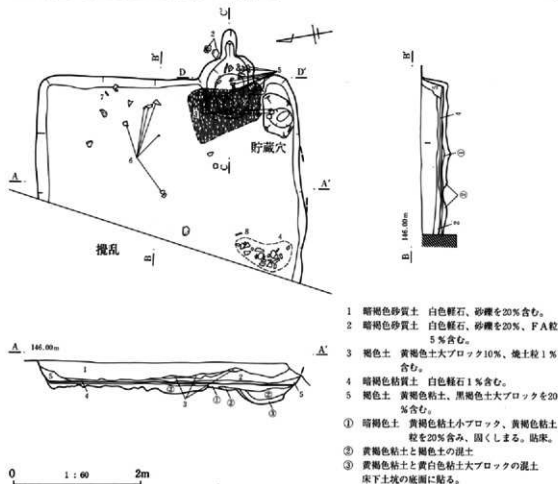
掘り方 複数の土坑が見られ、特に南壁中央際の土坑は長辺116.0cm、短辺76.0cm、深さ20.0cmの長方形形状を呈し、土器片が出土している。

埋没状況 自然埋没と考えられるが、破片の遺物が浮いた状態で多く見られることから、埋没途中で投げ込まれるような凹みの状態があったと思われる。

遺物出土状態 カマド及び貯蔵穴周辺に集中するが、南西隅床面に4の土師器甕が見られる。埋土を含め遺物出土量はやや多い。

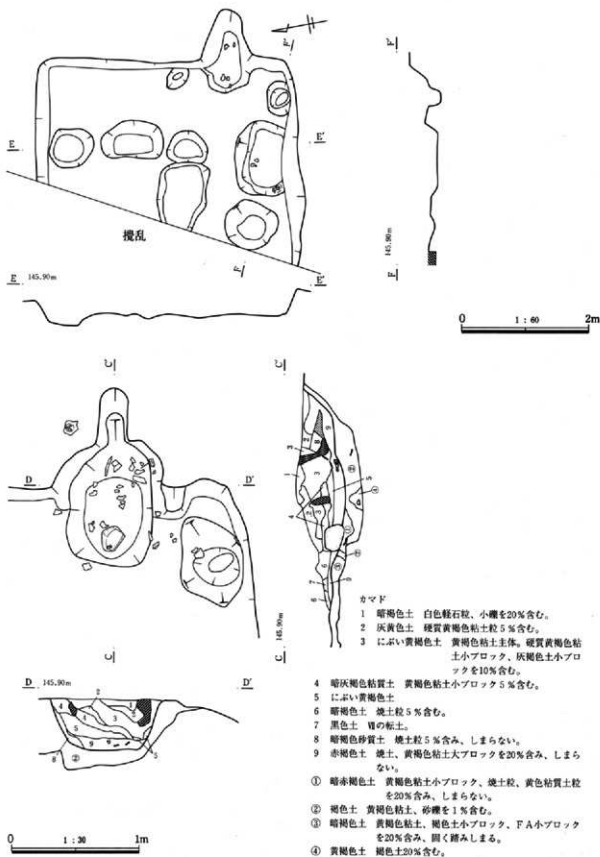
時期 出土遺物から9世紀第4四半期に比定される。

(斎藤)

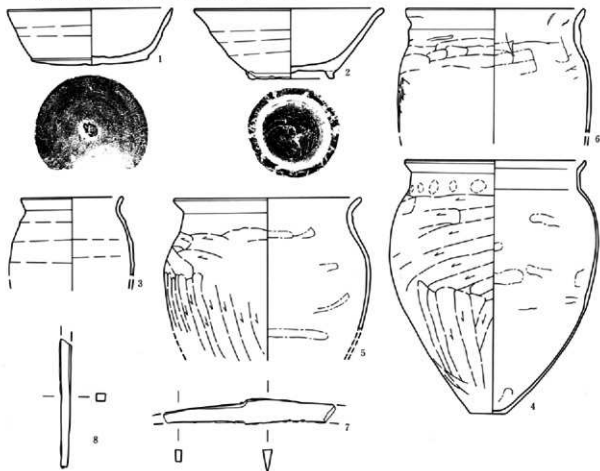


第50図 A区15号住居跡

1. 竪穴住居跡



第51図 A区15号住居跡掘り方・カマド



第52図 A区15号住居跡出土遺物

A区16号住居跡 (PL17・129)

位置 1E-1F-23-24グリッド 重複 なし

形態 半分以上が調査区域外となるが、方形を呈すると思われる。主軸方位 N-90°-E

規模 南北6.59m、東西(3.50)m。

壁 壁高は北辺33.0-36.0cm、東辺12.0-37.0cm、南辺18.0-35.0cmで平均28.5cmである。

カマド 農耕機械の掘削により、中央部は壊される。東壁南寄りに位置し、壁の延長上に燃焼部がある。規模は、焚口～煙道が1.42m、袖焚口幅が0.56mである。左袖には補強用の礎が出土し、燃焼部埋土は灰層の上にくすんだ焼土ブロック主体の層を挟み、カマド構築材の黄褐色粘土が崩落している。火床面は床面よりやや凹み、焼土小ブロックを含む灰層の堆積が見られた。煙道部への立ち上がりは急である。内部施設 東南隅に径98.0×(71.0)cm、深さ69.0cmの貯蔵穴を検出した。3本の柱穴を確認し、4本柱

穴と考えられる。柱穴1の規模は径70.0×66.0cm、深さ77.0cmである。柱穴2の規模は径(62.0)×(24.0)cm、深さ20.0cmである。柱穴3の規模は径48.0×41.0cm、深さ83.0cmである。

床 貼床面は固くしめる。カマド前から貯蔵穴方向に灰面の広がりが見られた。

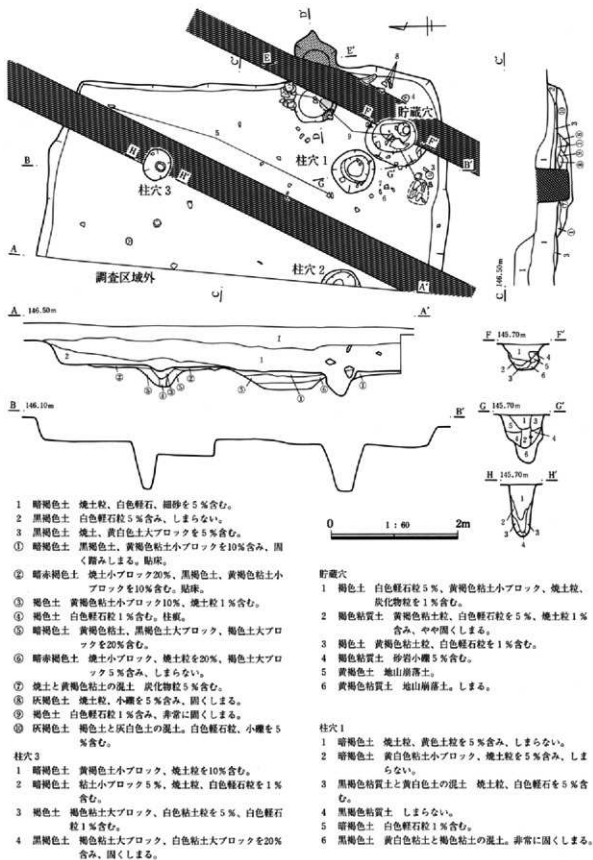
掘り方 多数の床下土坑が見られた。床下土坑1は中央部南寄りに位置し、規模は径185.0×144.0cm、深さ20.0cmである。床下土坑2は北辺中央部に位置し、規模は径107.0×97.0cm、深さ36.0cmである。土坑内は焼土粒や黄褐色粘土ブロックなどが見られ、土器類も多く出土している。

埋没状況 自然埋没土。

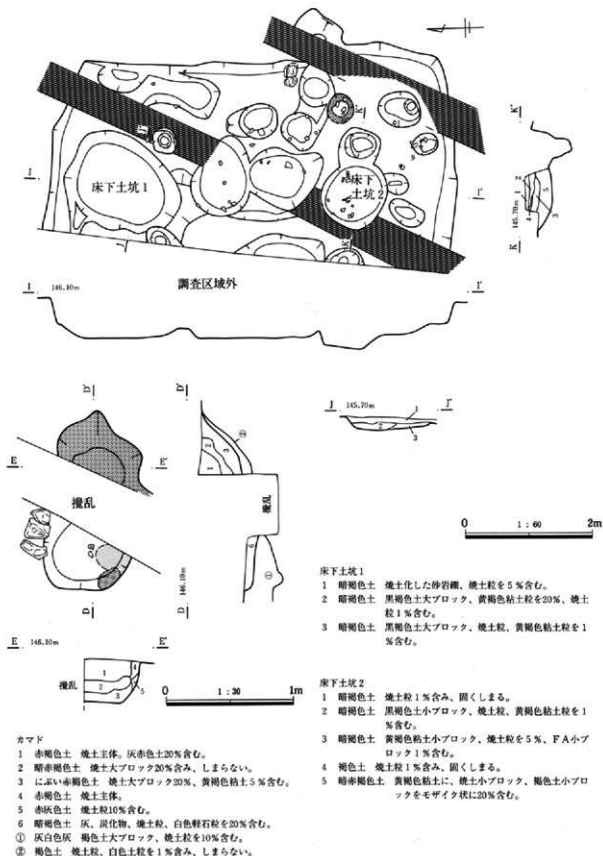
遺物出土状態 カマド及び貯蔵穴に集中し、埋土を含め遺物出土量はやや多い。

時期 出土遺物から8世紀第3四半期に比定される。

(斎藤)

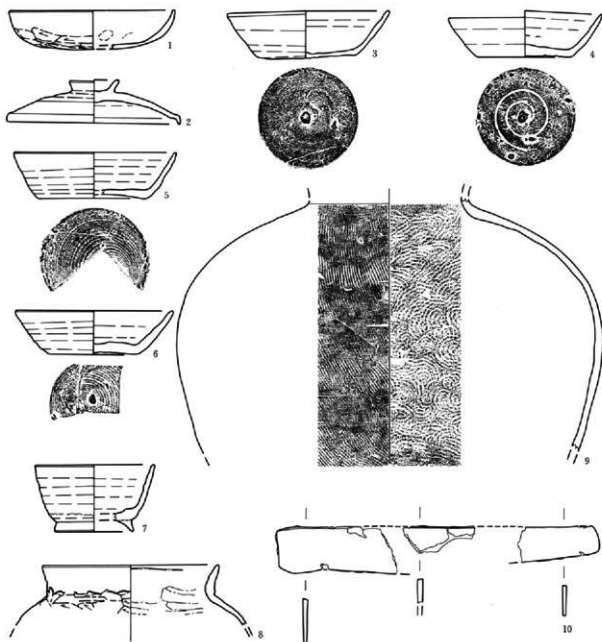


第53図 A区16号住居跡



第54図 A区16号住居跡掘り方・カマド・床下土坑

1. 竪穴住居跡



第55図 A区16号住居跡出土遺物

A区17号住居跡 (P.L. 18・129・130)

位置 1H-II-23グリッド

重複 なし

形態 横長方形

主軸方位 N-86°-E

規模 南北5.68m、東西4.36m。

壁 壁高は北辺26.0~57.0cm、東辺51.5~63.0cm、南辺51.0~55.0cm、西辺21.0~28.0cmで平均44.1cmである。

カマド 農耕機械による攪乱を受け、中央部は壊さ

れる。東壁南寄りに位置し、壁の延長上に燃焼部がある。規模は、焚口~煙道が1.95m、袖焚口幅が0.60mである。右袖や奥壁、煙道部などに礫が出土し、またカマド前に大礫の集中が見られ、補強に石組みを行った可能性が考えられる。埋没土中には黄褐色粘土が見られないことから、廃棄時に丁寧な壊し方をされたと思われる。火床面は床面よりやや凹み、煙道部への立ち上がりは急であると思われる。内部施設 東南隅に径84.0×66.0cm、深さ28.0cmの

貯蔵穴を検出した。

床 固く踏み締められた貼床面を確認した。北壁側1/3はやや高まり床面の硬さは弱く、拡張された可能性もある。

掘り方 北西寄りに楕円形の大規模な床下土坑群を検出した。床下土坑1は西辺中央部に位置し、規模は径280.0×148.0cm、深さ34.0cmであるが、2基の土坑が重複すると見られる。床下土坑2は中央部北寄りに位置し、規模は径280.0×126.0cm、深さ26.5cmである。床下土坑3は北東隅近くに位置し、規模は

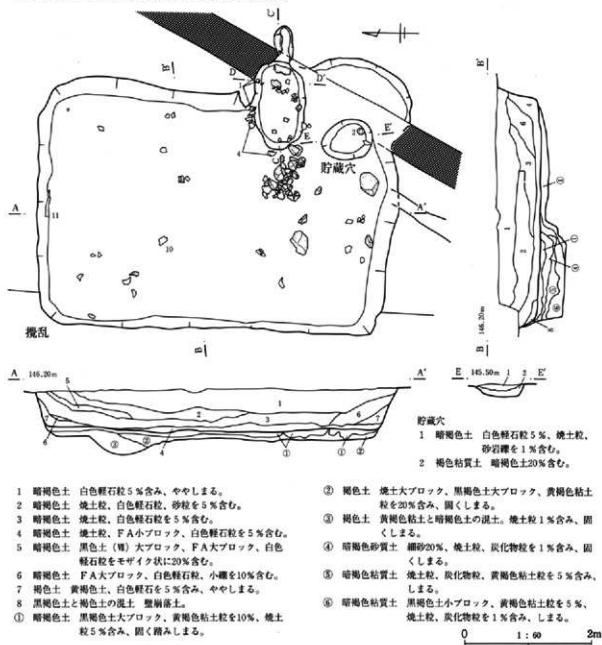
径144.0×132.0cm、深さ3.5cmである。土坑中には焼土ブロックや粘土ブロックを含むものがある。

埋没状況 北壁側はブロック混じりの人為的埋土が見られた。

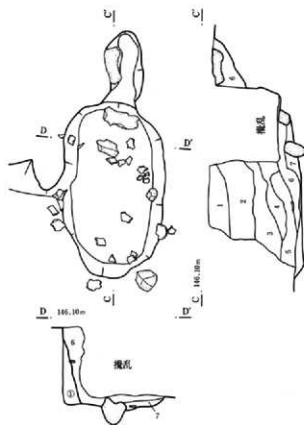
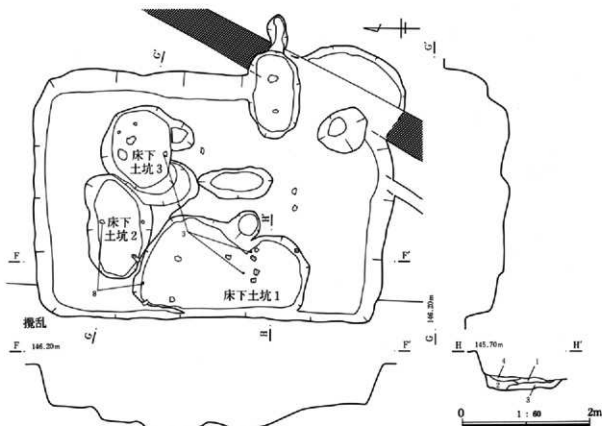
遺物出土状態 北辺壁際の床面で11のほぼ完形の鋸が横置きされた状態で出土している。遺物はカマドにやや集中し、埋土を含め出土量はやや多い。

時期 出土遺物から8世紀第3四半期に比定される。

(斎藤)



第56図 A区17号住居跡



床下土坑1

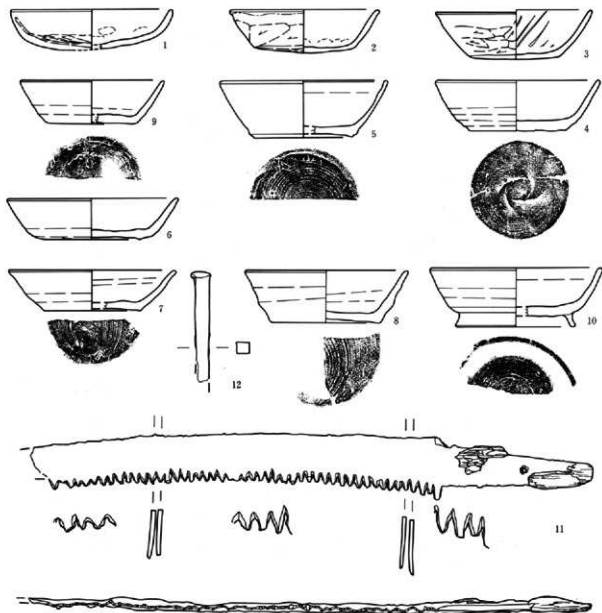
- 1 暗褐色土 焼土小ブロック、黄褐色粘土小ブロック、褐色土小ブロックを20%含む。
- 2 暗褐色土 焼土小ブロック、黄褐色粘土小ブロック、褐色土小ブロックを5%含む。
- 3 赤褐色土 焼土大ブロック主体。灰、褐色土を互層に含む。
- 4 暗褐色土 黒褐色土大ブロック、黄褐色粘土粒を10%、焼土粒5%含む。固く踏みしめる。

カマド

- 1 暗褐色土 黄色土粒、白色軽石粒を5%含む。
- 2 暗褐色土 炭化物粒、F A小ブロック、白色軽石粒、砂岩小礫を10%含む。
- 3 暗褐色土 黄色土小ブロック、焼土粒、炭化物粒、白色軽石粒を10%含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒、白色軽石粒を5%含む、しまらない。
- 5 にぶい褐色土 焼土粒、炭化物粒を5%含む。
- 6 暗赤褐色土 焼土小ブロック、焼土粒を20%、灰黄色粘質土大ブロック5%含む、しまらない。
- 7 赤褐色土 焼土大ブロック主体。灰5%含む。

① 赤褐色土

第57図 A区17号住居跡掘り方・カマド



第58図 A区17号住居跡出土遺物

A区18号住居跡 (P L 19・130・131)

位置 1E-1F-19-20グリッド

重複 30号住居跡より新しい。

形態 一部が調査区域外となるが、方形を呈すると考えられる。

主軸方位 不明

規模 南北4.98m、東西(3.77)m。

壁 壁高は北辺18.0-34.0cm、南辺19.0-25.0cm、西辺2.0-16.0cmで平均19.0cmである。

カマド 検出できなかったが、東壁に付設されていた

と考えられる。 内部施設 不明

床 中央部に固く踏み締められた貼床面を確認した。

掘り方 中央部に、黄褐色粘土を底面に張り込んだ径87.5×86.0cm、深さ17.0cmの土坑を検出した。埋没土は焼土小ブロックや粘土ブロックであり、上面は貼床面であった。

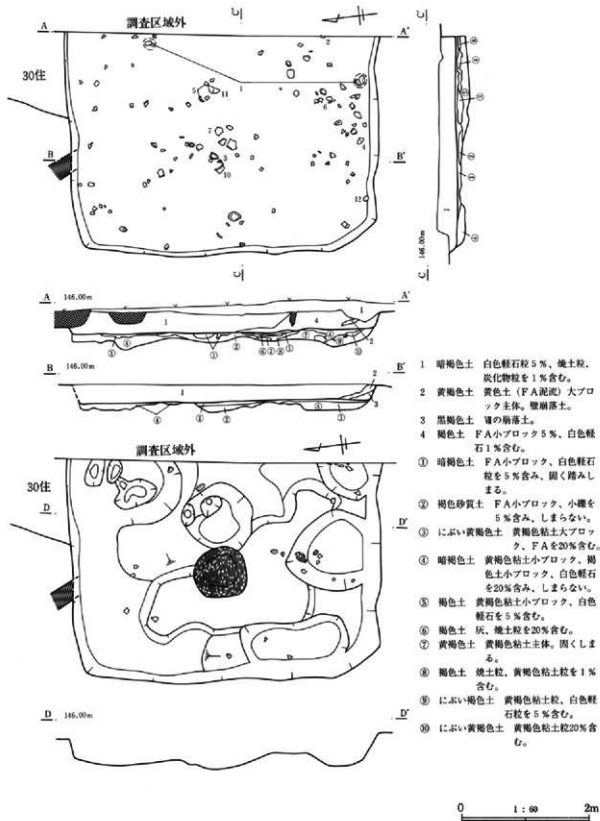
埋没状況 埋没土中に多量の土器片が出土し、埋没途中で捨てられたものと考えられる。

遺物出土状態 床面及び床面近くで1・3の墨書土

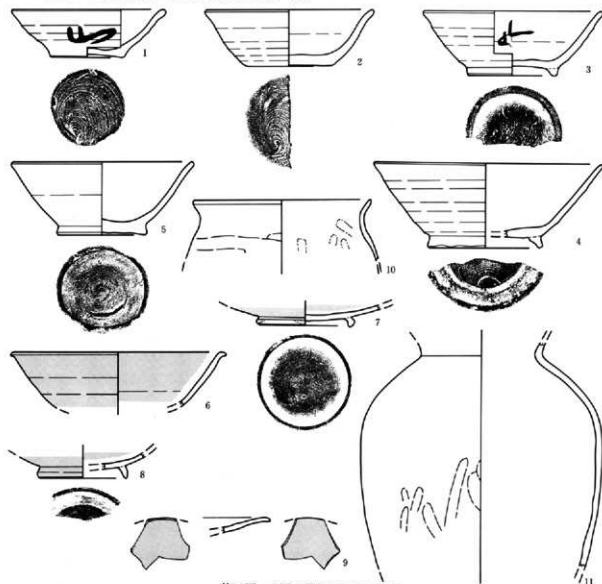
1. 竪穴住居跡

器が出土している。遺物の出土分布は特に集中する部分はないが、埋土を含め出土量は多い。

時期 出土遺物から9世紀第3～4四半期に比定される。
(斎藤)



第59図 A区18号住居跡



第60図 A区18号住居跡出土遺物

A区19号住居跡 (P L 20・131)

位置 1F-1G-20-21グリッド

重複 27A号住居跡より新しい。

形態 横長方形

主軸方位 N-99°-E

規模 南北4.12m、東西2.86m。

壁 壁高は北辺23.0-35.0cm、東辺10.5-38.0cm、南辺25.0-41.5cm、西辺28.0-37.5cmで平均29.8cmである。

カマド 東壁中央部に位置し、燃焼部は壁の延長上にある。規模は、焚口-煙道が1.02m、袖焚口幅が0.42mである。火床面には灰の堆積があり、直上にカマドの構築材に使われた黄褐色粘土ブロックがの

り、廃棄時に壊されている。煙道部へは緩やかに立ち上がる。掘り方は、火床面から深さ3cm程を測る。

内部施設 カマド右脇に径68.0×53.0cm、深さ18.5cmの貯蔵穴を検出した。

床 中央から北半分については掘り方面を利用し、南半分は貼床面が見られた。

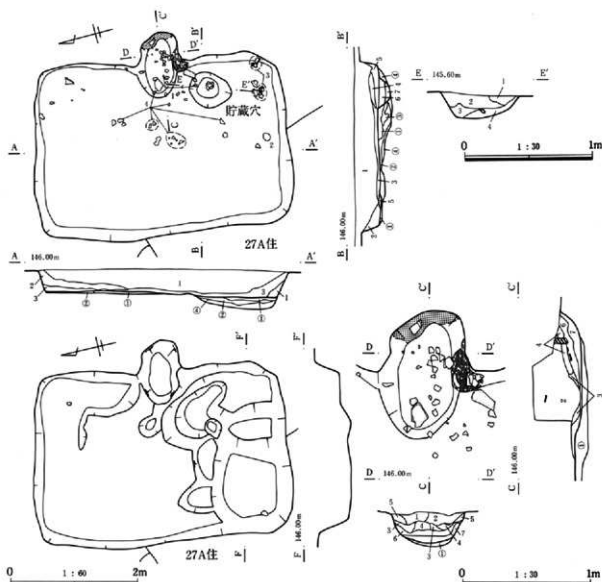
掘り方 南半分は不定形の凹凸面が掘られていたが、北側はフラットな面であった。

埋没状況 自然埋没土

遺物出土状態 カマド及び貯蔵穴周辺に集中し、埋土を含め遺物出土量はやや多い。

時期 出土遺物から9世紀第2四半期に比定される。

(斎藤)



- 1 暗褐色土 焼土、黄色土小ブロック、A 6-C、白色軽石粒を5%含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒5%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土小ブロック、白色軽石粒を1%含む。
- 4 暗黄褐色土 F A大ブロック5%含む。
- 5 黒褐色粘質土 黒褐色土 (M) 5%含む。
- 6 暗褐色土 褐色粘質土小ブロック、白色軽石を5%含む。
- 7 褐色粘質土 暗褐色土10%含む、しる。
- ① 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%、白色軽石粒5%含む、固くしる。
- ② 暗褐色土 褐色土、褐色土大ブロックを10%、白色軽石粒5%含む。
- ③ 暗褐色土 白色軽石1%含む。
- ④ 褐色土 褐色土大ブロック、F A大ブロック、白色軽石粒を10%含む。27号住居土か。

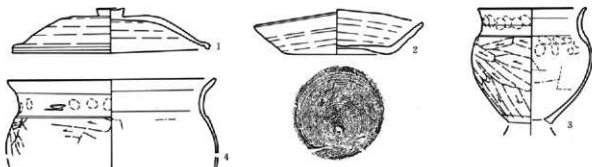
貯蔵穴

- 1 褐色粘質土 白色軽石5%含む、しる。
- 2 暗褐色土 褐色粘質土小ブロック、白色軽石を5%含む。
- 3 褐色粘質土 暗褐色土10%含む、しる。
- 4 褐色粘質土 しる。

カマド

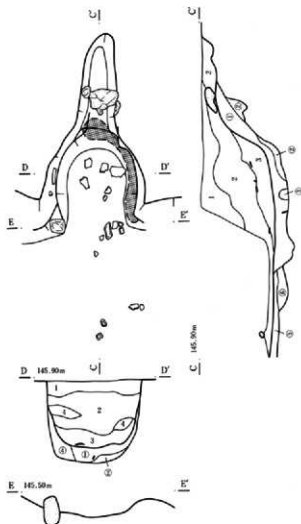
- 1 暗褐色土 焼土粒、黄色土粒、白色軽石粒を1%含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒5%含む。
- 3 にくい褐色土 黄色土小ブロック、焼土粒、白色軽石を5%含む。
- 4 黄褐色土 黄褐色粘土大ブロック、F A大ブロック主体。天井崩落土。
- 5 明赤褐色土 黄褐色大ブロック、F A大ブロックの焼土化した土。天井崩落土。
- 6 暗赤褐色土 焼土、灰を20%含む、しまらない。
- 7 暗赤褐色土
- ① 暗褐色土 黄褐色土大ブロック10%、白色軽石粒5%含む、固くしる。

第61図 A区19号住居跡



第62図 A区19号住居跡出土遺物

A区21号住居跡 (P L 21・131・132)



カマド

- 1 暗褐色土 白色軽石粒5%, 焼土粒1%含む。
- 2 ぶい褐色砂質土 焼土粒、白色軽石粒を1%含む。
- 3 暗赤褐色土 焼土大ブロック40%、灰5%含む、しまらない。
- 4 ぶい黄褐色土
- ① 赤褐色土 焼土大ブロック10%、灰5%含む、しまらない。
- ② 暗赤褐色土 白色軽石、小礫を5%、焼土粒1%含む。
- ③ 褐色土 黄褐色粘土小ブロック、焼土粒、砂岩礫を5%含む。

位置 1E-1F-21-22グリッド

重複 23号住居跡より古い。

形態 横長方形

主軸方位 N-74°-E

規模 南北4.60m、東西3.92m。

壁 壁高は北辺55.0-58.0cm、東辺9.0-47.0cm、南辺47.0-51.0cm、西辺45.0-56.0cmで平均46.0cmである。

カマド 東壁南寄りに位置し、燃焼部は壁外につくられる。規模は、焚口〜煙道が1.57m、袖焚口幅が0.44mである。燃焼部内には構築材の黄褐色粘土の崩落が見られた。火床面は床面と同レベルであり、下層には焼土・灰が互層に堆積していた。壁面は鋭角に立ち上がり、煙道部は水平にのびる。また煙道部では補強用に使われたと思われる縄が出土している。掘り方は、火床面から深さ11cm程を測る。

内部施設 東南隅に長辺91.0cm、短辺51.0cm、深さ18.0cmの規模を持つ長方形を呈する貯蔵穴を検出した。埋没土土層には焼土・炭化物を多く含む層が見られ、内部には甕が正位の状態で出土している。

床 住居中央からカマド前方向に固く締まった貼床を確認した。また、カマド前から貯蔵穴方向に灰・炭化物・焼土の広がりが見られた。

- ④ 褐色土
- ⑤ 暗褐色土 焼土粒、F A粒、白色軽石粒を10%含む、固く踏みしめる。貼床。
- ⑥ 暗褐色土 黄褐色粘土大ブロック、F A粒、白色軽石粒を10%含む。

0 1:30 1m

第63図 A区21号住居跡カマド

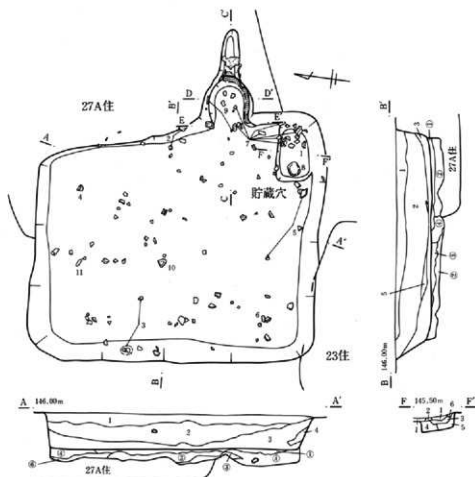
掘り方 中央部及び南壁寄りに数基の床下土坑を確認した。各土坑内より土器片も多く出土している。

埋没状況 上層より多量の土器片が出土しており、埋没途中に投げ込まれた可能性もあるが、周辺部には住居の切り合いも多く隣接する住居建築の際に入

為的に埋め込まれたとも考えられる。

遺物出土状態 貯蔵穴内で8の土師器甕が立置して出土している。遺物は特に集中する部分はなく、埋土を含め出土量はやや多い。

時期 出土遺物から8世紀に比定される。(斎藤)

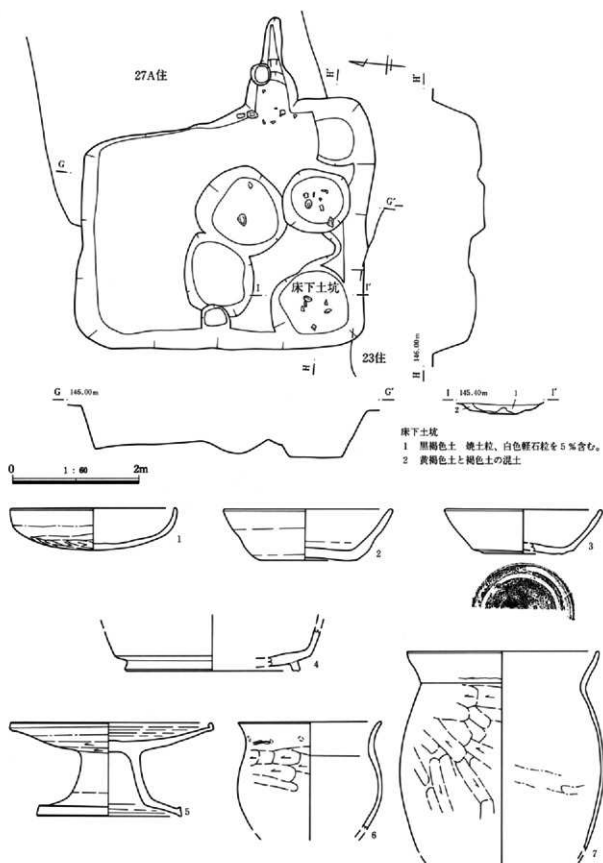


- 1 暗褐色土 白色軽石5%含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒10%、白色軽石5%含む。
- 3 暗褐色土 F A小ブロック10%、白色軽石粒1%含む。
- 4 黒褐色土 VI主体。
- 5 暗褐色土 砂粒5%、白色軽石1%含む。
- ① 暗褐色土 焼土粒、F A粒、白色軽石粒を10%含む、固く踏みしめる。貼床。
- ② 暗褐色土 黄褐色粘土大ブロック、F A粒、白色軽石粒を10%含む。
- ③ 暗褐色土とF Aの混土。
- ④ 褐色粘質土 黄褐色土、黒色土小ブロック、白色軽石を10%含む。
- ⑤ にぶい赤褐色土 焼土小ブロック、焼土粒を10%、黄褐色粘土小ブロック、黒色土小ブロックを1%含む。
- ⑥ 黒褐色土 黄褐色粘土小ブロック、白色軽石を10%含む。

貯蔵穴

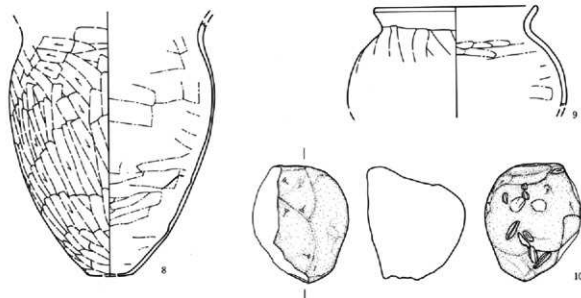
- 1 赤褐色土 焼土大ブロック40%含む。
- 2 褐色土 焼土粒10%含む。
- 3 褐色土 黄褐色粘土粒、白色軽石粒を1%含む。
- 4 暗黄褐色土 黄褐色粘土大ブロック、焼土粒、小礫を10%含む。
- 5 にぶい黄褐色土 焼土粒1%含む。
- 6 黄褐色土ブロック

第64図 A区21号住居跡



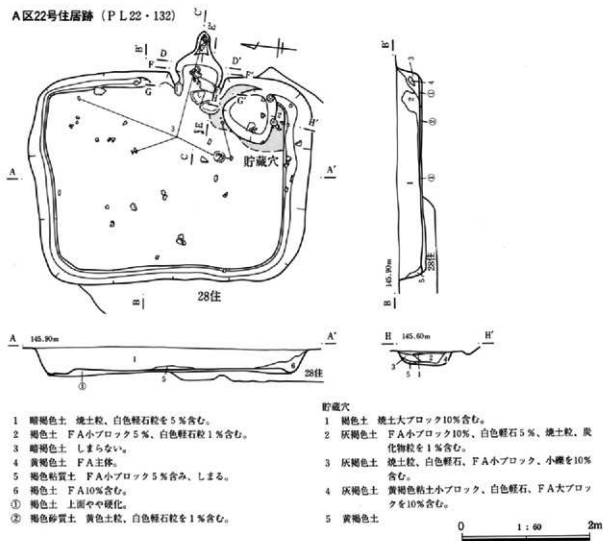
第65図 A区21号住居跡掘り方・出土遺物 (1)

1. 竪穴住居跡



第66図 A区21号住居跡出土遺物 (2)

A区22号住居跡 (PL 22・132)



第67図 A区22号住居跡

位置 1E-20-21グリッド

重複 28号住居跡より新しい。

形態 横長隅丸方形

主軸方位 N-87°-E

規模 南北4.48m、東西3.35m。

壁 壁高は北辺32.0-40.0cm、東辺26.0-37.5cm、南辺24.5-33.0cm、西辺26.0-37.0cmで平均32.0cmである。

カマド 東壁中央部に位置し、壁外に燃焼部がつくられる。規模は、焚口-煙道が1.06m、袖焚口幅が0.55mである。焚口部には鳥居状に組まれた板状礫が両袖に立ち、天井石は崩落し割れた状態で出土している。またその周囲には構築材の黄褐色粘土ブロックや焼土ブロックが見られた。燃焼部内には支脚に使われた礫が埋置されていた。火床面は床面と同レベルであり、奥壁で鋭角に立ち上がる。煙道部には臺が出土し、補強用として使われたと考えられる。

掘り方は、火床面から深さ30cm程を測る。

内部施設 カマド右脇に径85.5×84.0cm、深さ33.5cmの楕円形を呈する貯蔵穴を検出した。埋設土中には焼土ブロック・炭化物が含まれる。

床 重複部分に硬質の貼床面が見られた。また、カマド前から貯蔵穴方向に灰の広がりがあった。

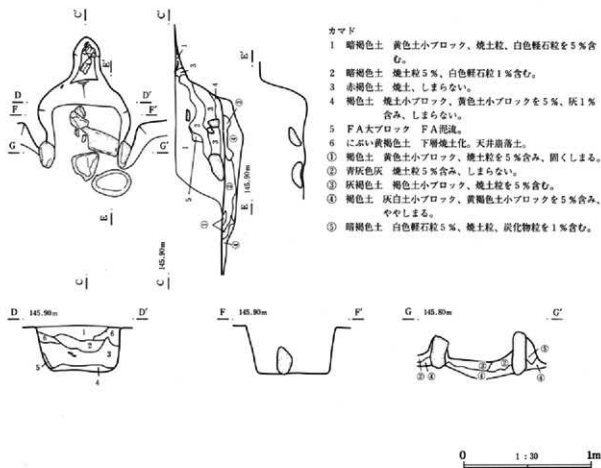
掘り方 四隅がやや凹む。

埋没状況 自然埋没土。

遺物出土状態 貯蔵穴外縁の床面で1・2の須恵器坏が出土している。遺物は特に集中する部分はなく、埋土を含め出土量はやや多い。

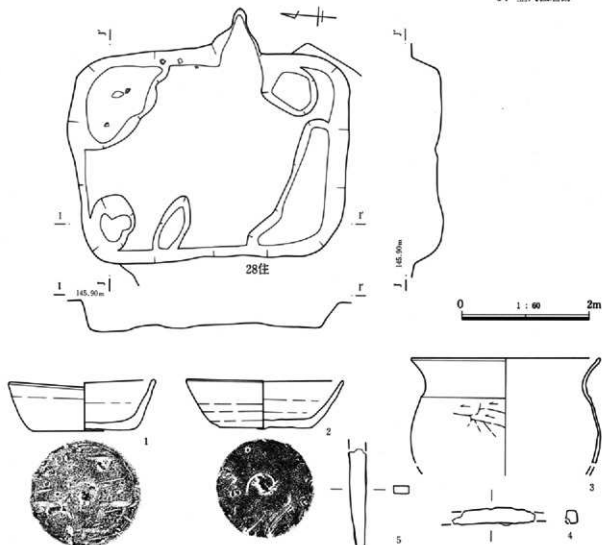
時期 出土遺物から9世紀第1四半期に比定される。

(斎藤)



第68図 A区22号住居跡カマド

1. 竪穴住居跡



第69図 A区22号住居跡掘り方・出土遺物

A区23号住居跡 (P.L.23・132・133)

位置 1E-21-22グリッド

重複 21・28号住居跡より新しい。

形態 横長隅丸方形

主軸方位 N-89°-E

規模 南北4.30m、東西3.18m。

壁 壁高は北辺6.0~33.5cm、東辺23.0~31.5cm、南辺20.0~42.0cm、西辺30.0~38.0cmで平均28.0cmである。

カマド 東壁南寄りに位置する。規模は、焚口~煙道が1.18m、袖焚口幅が0.59mである。焚口部周辺に大礫が出土し補強用に石組みが行われ、廃棄時に壊されたと考えられる。構築材として黄褐色粘土が

使われ、火床面直上に落ち込んでいる。火床面は床面よりやや凹み、奥壁に段を持ち煙道部となる。掘り方は、火床面から深さ20cm程を測る。

内部施設 南東隅に径76.0×71.0cm、深さ24.0cmの円形を呈する貯蔵穴を検出した。中からは大礫が出土している。

床 固く踏み締められた貼床を確認した。

掘り方 カマド前から貯蔵穴周辺が大きく掘り込み、南壁際中央部に径34.0×28.0cm、深さ18.0cmの小ピットを検出し、出入り口の施設用のものと考えられる。

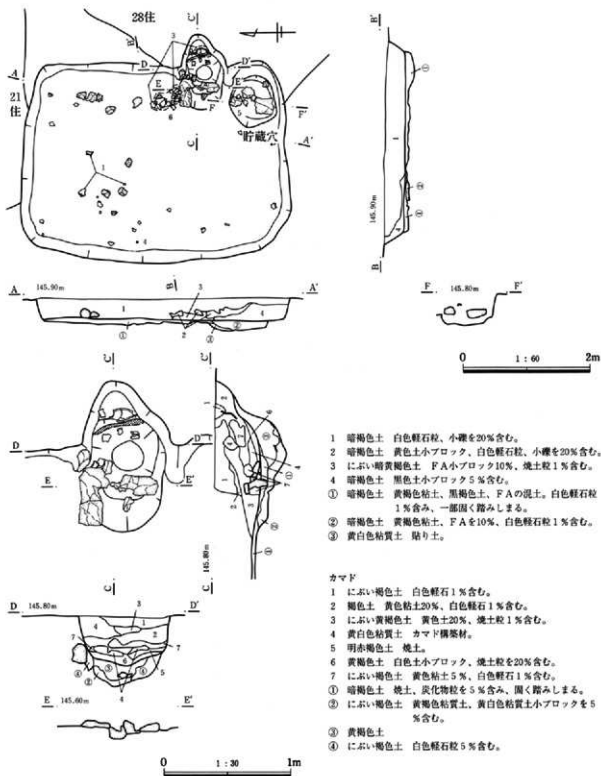
埋没状況 南寄りに土層の乱れが見られ、南方向からの人為的な埋土がある。また、中央北寄りから土

器片が多く見られ、途中凹みとして存在し、捨て場として利用されたものか。

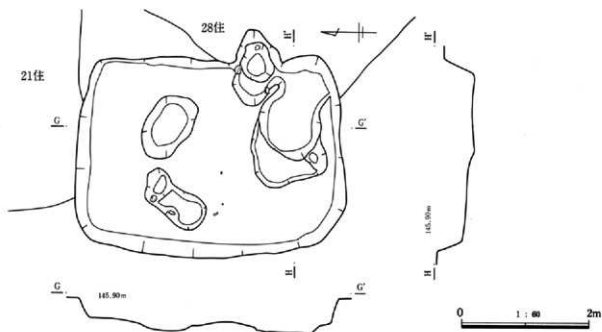
遺物出土状態 西壁際床面で4の石製紡錘車が出土している。遺物はカマドとその周辺にやや集中する

が、埋土を含め出土量は多くない。

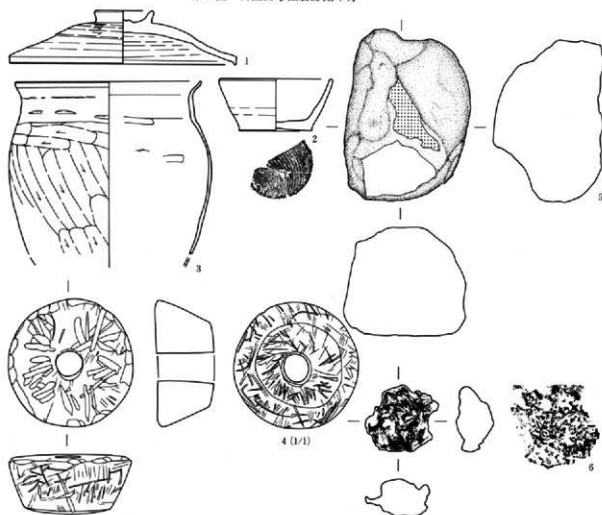
時期 出土遺物から9世紀第2～3四半期に比定される。
(斎藤)



第70図 A区23号住居跡・カマド



第71図 A区23号住居跡掘り方



第72図 A区23号住居跡出土遺物

A区24号住居跡 (P L23)

位置 1H-11-21-22グリッド

重複 なし

形態 不明

主軸方位 N-77°-W

規模 南北(1.05)m、東西(3.10)m。

壁 壁高は南辺56.5~60.0cm、西辺47.5~51.5cmで平均53.9cmである。

カマド 不明

内部施設 不明

床 地山利用

掘り方 平坦面

埋没状況 上部の攪乱が激しく、壁の崩落の三角堆積が見られた。

遺物出土状態 遺物出土量は少ない。

時期 不明

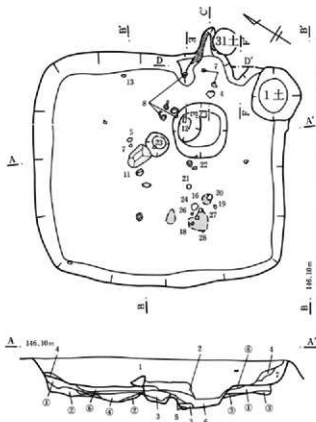
(斎藤)



- 1 暗褐色土 白色軽石粒、小礫を10%含む。
- 2 暗褐色土 炭化物粒、白色軽石粒、小礫を10%含む。

0 1 : 60 2m

B区1号住居跡 (P L24・133・134)



第73図 A区24号住居跡

- 1 暗灰黄色土 A 8-C 混黒色土小ブロック、F P を 5 %、F A 小ブロック 1 % 含む。
- 2 暗灰黄色土 A 8-C 混黒色土小ブロック、F P を 5 % 含む、鉄滓が混じる。
- 3 褐灰色土 径 1 cm 大の鉄滓、焼土小ブロックを 40 % 含む、非常に固くしめる。
- 4 黄褐色土 F A 主体。
- 5 明黄褐色土 珪主体、褐色土小ブロック、小礫を 1 % 含む。
- 6 褐灰色土 炭化物、黄褐色粘土小ブロックを 1 % 含む、ややしまらない。
- 7 黒色土
- ① 暗褐灰色土
- ② 褐色砂質土 白色軽石粒、小礫を 5 % 含む。
- ③ 褐色砂質土 黄褐色粘土小ブロック、白色軽石粒、小礫を 5 % 含む。
- ④ 褐色土 F A 大ブロック、小礫、細砂を 1 % 含む。
- ⑤ 褐灰色土 径 1 cm 大の鉄滓 40 %、黄褐色粘土大ブロック 10 % 含む、固くしめる。
- ⑥ 暗褐灰色土 黒褐色土大ブロック、F A 大ブロックを 20 % 含む、ややしまる。

0 1 : 60 2m

第74図 B区1号住居跡

位置 1L-1M-19-20グリッド

重複 1・31号土坑より古い。

形態 横長隅方形

主軸方位 N-64°-E

規模 南北4.05m、東西3.65m。

壁 壁面の崩落が目立つ。壁高は北辺33.0-43.0cm、東辺8.0-44.0cm、南辺31.5-38.0cm、西辺34.0-46.0cmで平均34.7cmである。

カマド 東壁中央やや南寄りに位置する。住居廃棄時に壊され遺存状況は悪く、灰面や壁面の状況も不明瞭であった。燃焼部の中心は壁の延長上にあり、焚口部に袖を持つ。規模は、焚口-煙道が0.86m、袖焚口幅が0.53mである。燃焼部から煙道部へは緩やかに立ち上がる。掘り方規模は、主軸方向0.91m、幅0.72mである。

内部施設 南隅は1号土坑により壊され、貯蔵穴は消失したと考えられる。またカマド前には、一辺約87.0cm、深さ96.0cmの方形の土坑がある。北脇には径37.0×36.5cm、深さ87.5cmの小土坑があり、中か

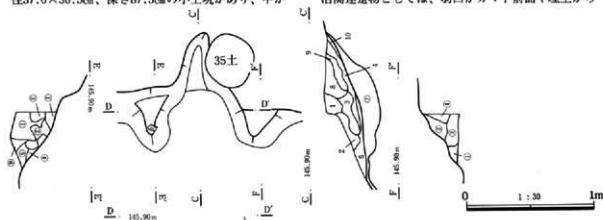
ら鉄滓等の塊が出土し、埋土は鉄分沈着が互層に堆積し、小鍛冶遺構内に見られる水槽と考えられる。また、その北脇には11の金数が配される。金数は竪打面が2面あり、出土時はやや丸みを持つ広い面を上にして出土している。他方の竪打面は出土時側面となっていたが、平坦に良く竪打されており、付着する鉄分の量も多く、より長期間竪打面として使用されていたものと想定される。なお、この竪打面は元来欠け口方向に広がっていたものと見られ、本遺物は鍛冶品の再利用であると認める。

床 ローム及びA s-C混黒色土の各ブロックを踏み固めた貼床であった。カマド前から住居内土坑周辺部は踏み締まるが、壁際のしまりは弱い。

掘り方 ほほフラットな面に仕上げられている。

埋没状況 分層のしずらい埋没状態であり、小ブロックの混入から一括埋土の可能性が考えられる。

遺物出土状況 カマド内から1・4・7の坏類が出土しているが、埋土を含め遺物出土量は少ない。鍛冶関連遺物としては、羽口がカマド前面や埋土から

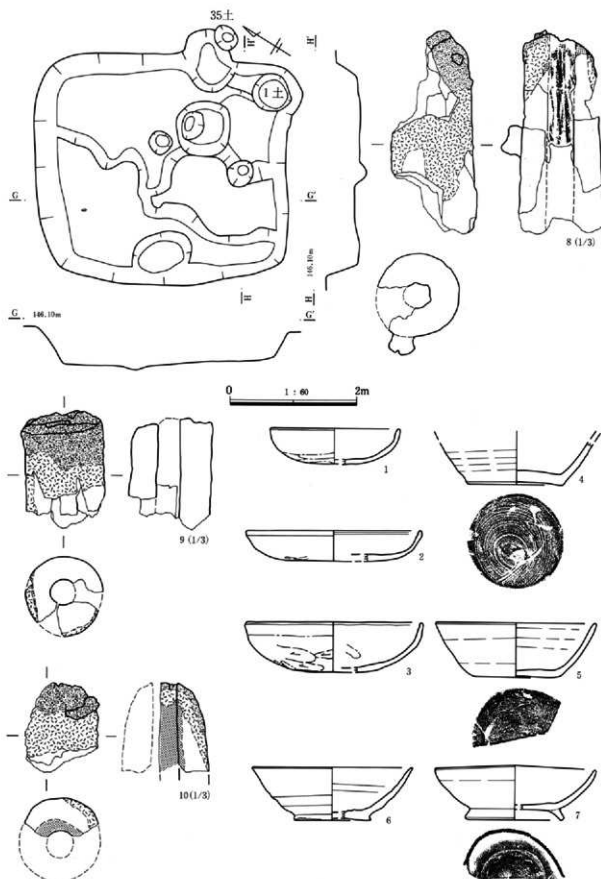


カマド

- 1 にぶい黄褐色土 黄褐色土小ブロック、A s-C混黒色土小ブロック、粗砂を10%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 黄褐色土小ブロック、A s-C混黒色土小ブロックを10%、焼土粒1%含む。
- 3 黄褐色土 黄褐色土小ブロック20%、焼土粒5%含む。
- 4 褐色土 黄褐色土小ブロック、焼土粒を10%含む。
- 5 暗褐色土 黄褐色土小ブロック、黒褐色土小ブロック、F A小ブロック、粗砂粒を10%含む。

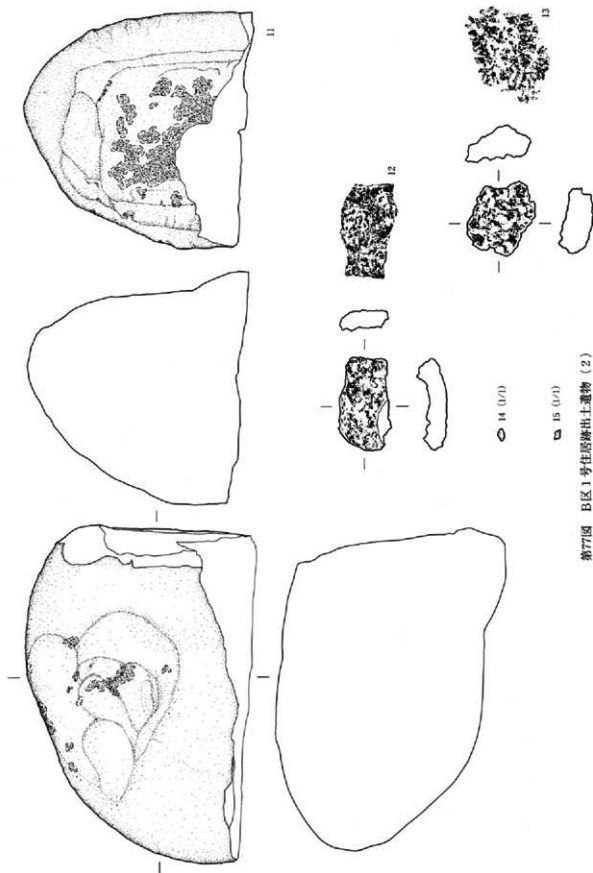
- 6 黄褐色土 焼土大ブロック20%含む。天井崩落土。
- 7 黒色土 焼土粒、黄色土粒を1%含む。
- 8 暗褐色土 焼土粒、A s-Cを5%含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒20%、A s-C 5%含む。天井崩落土。
- 10 黒色土 A s-C 10%含む。
- ① 褐色土 粗砂10%含む。
- ② にぶい褐色土 黄褐色土20%、焼土粒、白色軽石粒を1%含む。
- ③ 暗褐色土 X主体。
- ④ 黄褐色土 Y主体。
- ⑤ にぶい黄褐色土 Y主体、白色軽石、小礫を1%含む。
- ⑥ にぶい黄褐色土 Y主体。
- ⑦ 褐色土 黒褐色土大ブロック、黄褐色土小ブロック、F Aを20%含む。

第75図 B区1号住居跡カマド

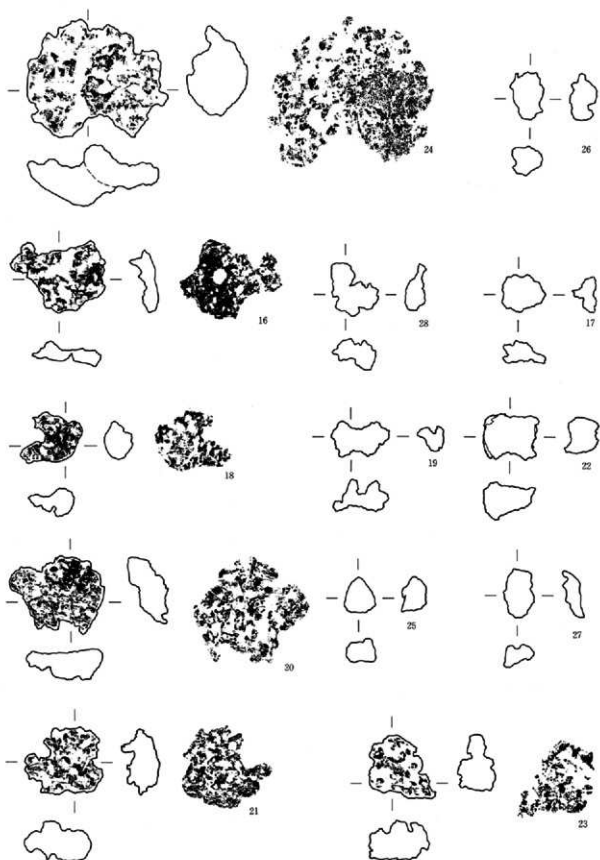


第76図 B区1号住居跡掘り方・出土遺物(1)

1. 豎穴住居跡



第77图 B区1号住居跡出土遺物(2)



第78図 B区1号住居跡出土遺物(3)

出土し、鉄滓は中央部西寄りに集中する。その他、出土総量として、重い鉄滓192片1410g・やや軽い鉄滓20片330g・軽い鉄滓25片615g・扁平状鉄滓6片76.9g・羽口片か炉壁片2片22.5g・羽口片10片118g・小石8個50.8gが出土している。

B区2号住居跡 (P L25・134)

位置 1K-1L-21-22グリッド

重複 なし

形態 横長隅丸方形

主軸方位 N-102°-E

規模 南北4.13m、東西3.25m。

壁 壁高は北辺9.0-14.0cm、東辺5.0-10.0cm、南辺8.0-12.0cm、西辺7.0-12.0cmで平均9.6cmである。

カマド 東壁中央やや南寄りに構築され、燃焼部は住居内にあり袖を持つ。規模は、焚口-煙道が0.83m、袖焚口幅が0.53mである。構築材はロームを使い、廃棄時に壊されている。火床面は床面よりやや凹み、灰の堆積は見られなかった。掘り方規模は、主軸方向0.99m、幅0.74mである。

時期 出土遺物から9世紀第1四半期に比定される。(斎藤)

内部施設 南東隅に径102.0×74.0cm、深さ44.0cmの卵形を呈する貯蔵穴を検出し、内部から須恵器坏が出土。

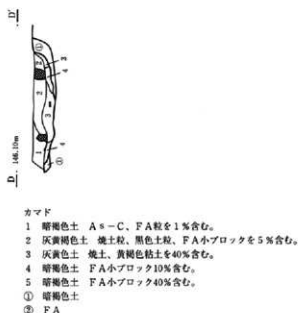
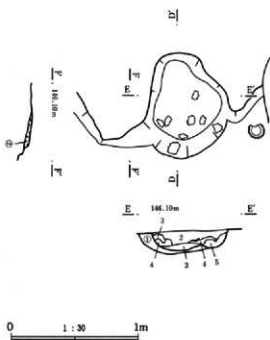
床 地山ロームとAs-C混黒色土の混土を貼床として踏み締めている。

掘り方 カマド左袖前方に一辺約98.0cm、深さ24.0cmの隅丸方形の土坑を検出した。丸底状の底面には黄白色粘土が貼り込まれていたが、硬化面は特に見られない。

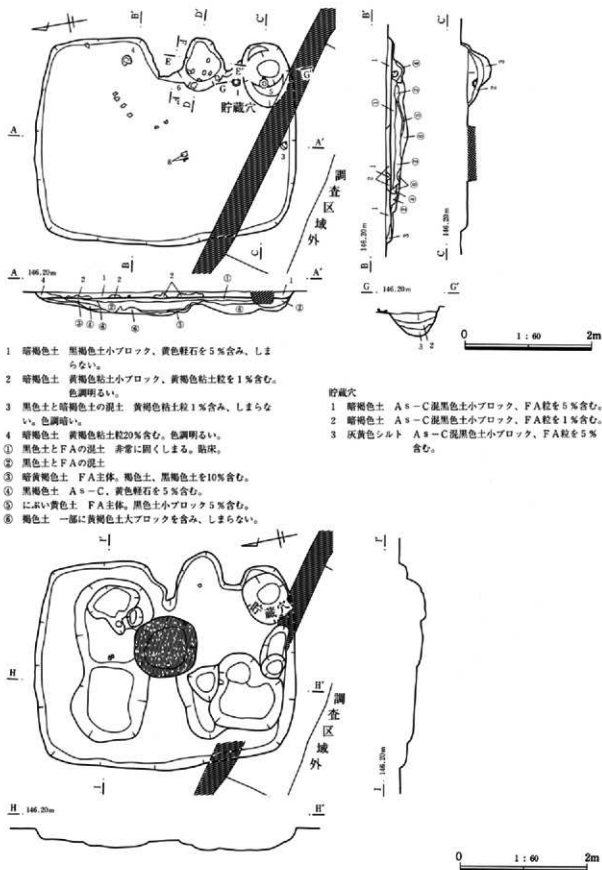
埋没状況 残存する壁高が少なく埋土の観察も困難だが、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 遺物はカマドとその前面に集中し、埋土を含め出土量はやや多い。

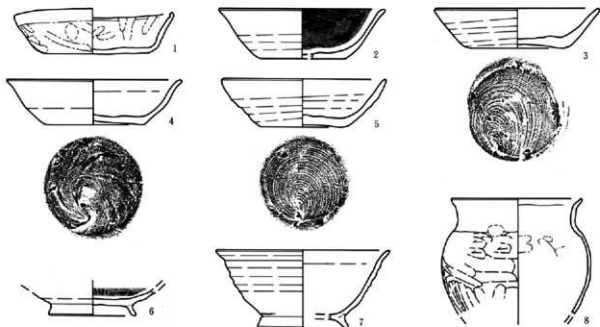
時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。(斎藤)



第79図 B区2号住居跡カマド

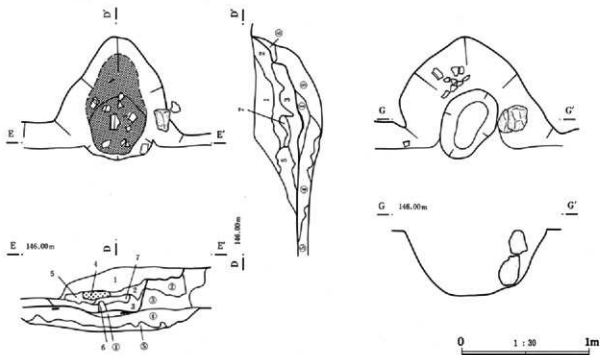


第80図 B区2号住居跡



第81図 B区2号住居跡出土遺物

B区3号住居跡 (P.L. 26・134・135)

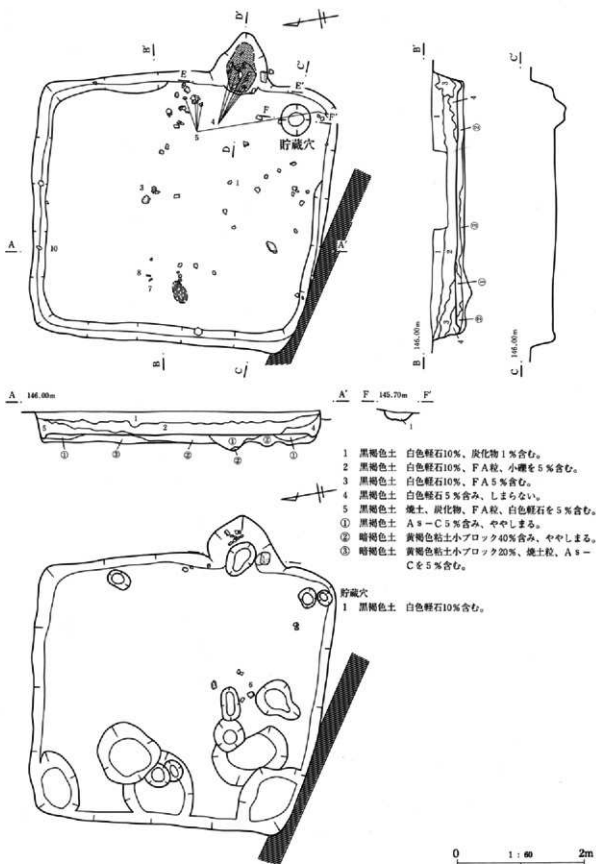


カマド

- 1 暗褐色土 灰化物、A s-C、FA小ブロックを5%含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒、A s-C、FA粒を5%含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒、FA粒を20%、A s-C 5%含む。
- 4 にぶい黄褐色土 FA
- 5 暗褐色土 FA小ブロック40%、A s-C 5%含む。
- 6 暗褐色土 FA粒20%、焼土粒5%含む。
- 7 黒褐色土 焼土、灰化物を40%、A s-C 5%含む。

- ① 黒色土 黒色灰20%、焼土粒5%含む、しまらない。
- ② 暗褐色土 FA、A s-Cを5%含む。
- ③ 暗褐色土 灰化物、A s-Cを5%含む。
- ④ 黒褐色土 焼土、A s-Cを10%含む。
- ⑤ にぶい黄褐色土 焼土、A s-C混黒土小ブロックを10%含む。
- ⑥ 黒褐色土 焼土、A s-Cを5%含む。

第82図 B区3号住居跡カマド



第83図 B区3号住居跡

位置 1L-1M-22-23グリッド

重複 なし

形態 横長方形

主軸方位 N-107°-E

規模 南北4.73m、東西4.31m。

壁 壁高は北辺20.0-44.0cm、東辺31.0-47.0cm、南辺39.0-48.0cm、西辺2.0-42.0cmで平均34.1cmである。

カマド 東壁南寄りに位置し、燃焼部の中心は壁の延長上にある。規模は、焚口～煙道が0.98m、袖焚口幅が0.48mである。構築材には地山ロームが用いられ、廃棄時には壊されていた。燃焼部右壁には大礫が積まれ、壁の補強材として使われたものか。火床面には灰の堆積が見られ、床面よりわずかに凹む。煙道部へは緩やかに立ち上がる。掘り方は、火床面

から深さ16cm程を測る。

内部施設 南東隅に径50.5×47.0cm、深さ29.5cmの円形を呈する貯蔵穴を検出した。カマド周辺部及び南東隅を除き周溝が巡る。

床 地山ロームブロックを踏み込み貼床をつくる。カマド前には灰の広がりが見られた。

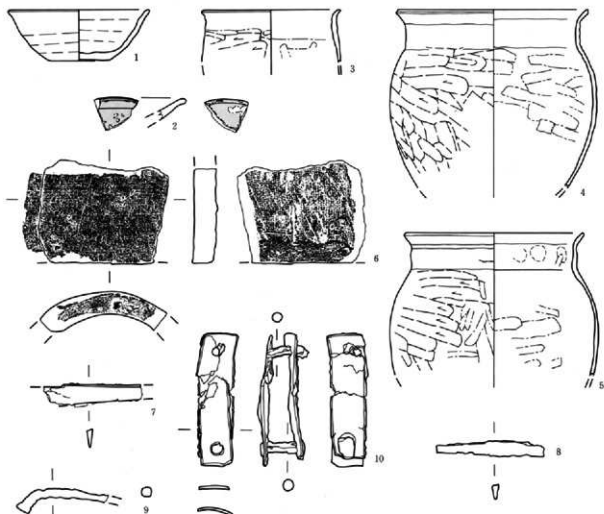
掘り方 西壁際に浅い凹みが見られた。

埋没状況 各壁際には壁崩落の三角堆積が見られた。全体としては自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 遺物はカマドとその前面に集中し、埋土を含め出土量はやや多い。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。

(斎藤)



第84図 B区3号住居跡出土遺物

B区4号住居跡 (P L 27・135)

位置 1M-23グリッド

重複 なし

形態 大部分が調査区域外となるため不明。

主軸方位 N-108°-E

規模 南北(2.42)m、東西(1.22)m。

壁 壁高は東辺16.0~24.0cm、南辺20.0~25.0cmで平均21.3cmである。

カマド 東壁は中央部に位置し、燃焼部の中心は壁の延長上にある。規模は、焚口〜煙道が0.96m、袖焚口幅が0.59mである。カマド左袖と右奥に壁が埋置されており、補強材として利用されたものと考えられる。カマド内には構架材のロームの焼土化したブロックが間層をはさみ観察でき、住居埋没途中で崩落したと思われる。燃焼部から煙道部への立ち上がりはやや急であった。掘り方規模は、主軸方向

1.01m、幅0.78mである。

内部施設 南東隅に長辺(91.0)cm、短辺91.0cm、深さ29.0cmのやや大きめの貯蔵穴を検出した。

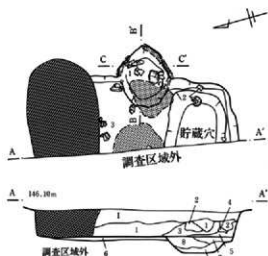
床 地山、A s-C 混黒色土を固く踏み締めている。カマド前には焼土、灰の広がりが見られる。貯蔵穴付近は同レベルで追いつけたため、土の硬軟は不明。掘り方 はほぼ平坦に掘られる。

埋没状況 貯蔵穴上部は埋没土が乱れた状態で入り、人為的埋土と考えられるが、観察ミスで別土坑との切り合いの可能性も考えられる。

遺物出土状態 遺物出土量は非常に少ないが、貯蔵穴上層から「真」の刻字を持つ埴が出土している。

時期 出土遺物から10世紀前葉に比定される。

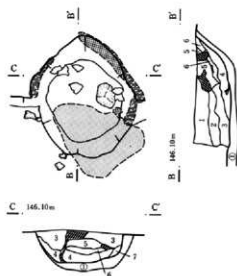
(斎藤)



- 1 褐色土 A s-C 混黒色土小ブロック、F A小ブロック、F P粒を5%含む。
- 2 褐色土 A s-C 混黒色土小ブロック、F P粒を5%含む。
- 3 暗灰黄色土 A s-C 混黒色土小ブロック、F P小ブロックを10%含む。
- 4 黄褐色土 F A主体。黒色土小ブロック5%含む。
- 5 褐色土 黒色土小ブロック、F Aを5%含む。
- 6 黒褐色土 黒色土主体。焼土、白色軽石粒を5%含む、非常に固くしめる。陥床。
- 7 褐色土 土質均質。
- 8 黒褐色土 焼土粒、F A小ブロックを1%含む、しめる。
- 9 褐色土と暗褐色土の混土 よくしめる。

0 1:60 2m

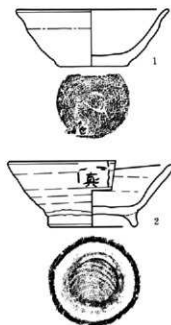
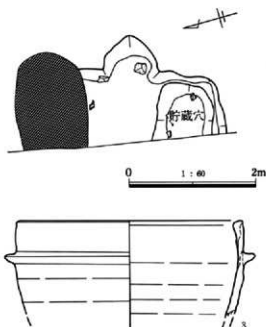
第85図 B区4号住居跡



カマド

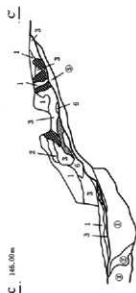
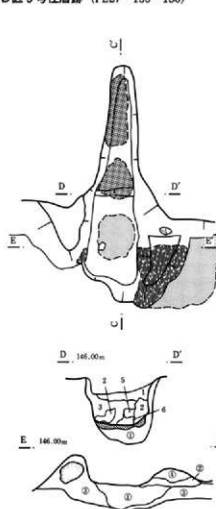
- 1 暗褐色土 褐色土小ブロック、A s-C、砂粒を5%含む。
- 2 暗褐色土 A s-C、細砂を10%含む。
- 3 暗褐色土 褐色土小ブロック、A s-Cを5%、焼土粒1%含む。
- 4 黒褐色土 焼土粒、黄色軽石、F A小ブロックを5%含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒20%、白色軽石粒1%含む。
- 6 におい黄褐色シルト 焼土化する。天井崩落土。
- 7 黒褐色粘質土 黄色軽石1%含む、しめる。
- ① 黒褐色土 灰、黄色土大ブロック、焼土粒を10%含む、しめる。

0 1:30 1m



第86図 B区4号住居跡掘り方・出土遺物

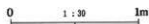
B区5号住居跡 (PL27・135・136)



カマド

- 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒、黄色軽石を5%含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒5%含む、しまらない。
- 3 暗褐色土 焼土粒、黄褐色粘土粒を5%含む。
- 5 暗褐色土 焼土小ブロック、焼土粒を40%含む。
- 6 焼土、黄褐色粘土、暗褐色土、黒褐色土の混土
- ① にぶい黄褐色土 黒色土大ブロック、FA大ブロックを20%、白色軽石1%含む。
- ② 暗褐色土 白色軽石1%含む。
- ③ 褐色土 暗褐色土大ブロック5%含む。
- ④ にぶい黄褐色土 天井崩落土?
- ⑤ 褐色土

第87図 B区5号住居跡カマド



位置 10-20-21グリッド

重複 6号住居跡より新しい。

形態 横長方形 主軸方位 N-122°-E

規模 南北3.74m、東西3.07m。

壁 壁高は北辺8.0-63.0cm、東辺18.0-48.5cm、南辺52.5-62.5cm、西辺51.5-58.5cmで平均45.3cmである。

カマド 東壁南寄りに位置する。焚口部は袖を持ち、燃焼部の中心は壁の延長上にある。規模は、焚口〜煙道が1.86m、袖焚口幅が0.39mである。構築材には黄褐色粘土を使用し、左袖には礫を補強材として用いていた。しかし、構築材の遺存状況から廃棄時に撤去されたと考えられる。燃焼部は長方形を呈し、火床面から煙道部へは段を持ち緩やかに立ち上

がる。灰面は、カマド内から右袖側に広がりが見られる。掘り方は、火床面から深さ22cm程を測る。

内部施設 貯蔵穴等はない。

床 カマド前から住居中央部は固く踏み締まる。

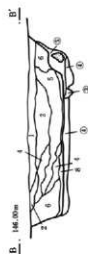
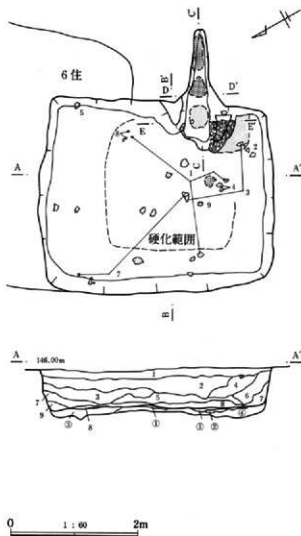
掘り方 カマド前に楕円形の掘り込みが見られ、使用時に掘られたものか。

埋没状況 南西部に土層の乱れが観察でき、廃棄当初南西部から人為的に埋められた可能性が考えられる。

遺物出土状態 床面上の出土遺物は住居内全面に散在し集中する部分はなく、埋土を含め遺物出土量は多くない。

時期 出土遺物から8世紀第3四半期に比定される。

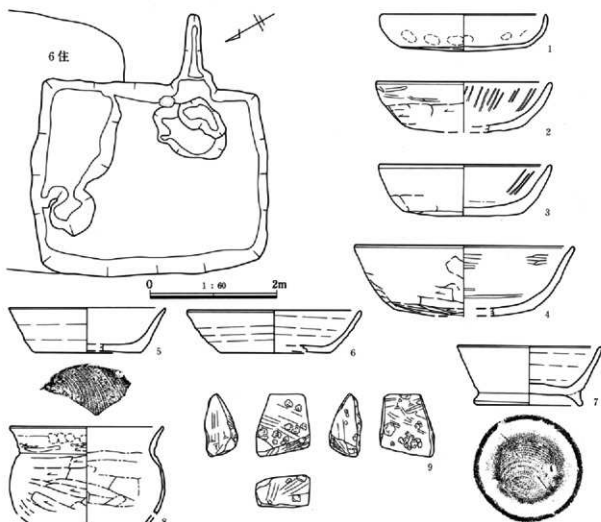
(斎藤)



- 1 暗褐色土 白色土粒5%含む。
- 2 暗褐色土 FA小ブロック1%含む。
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土 黒褐色土大ブロック、FA大ブロックを20%含む。
- 5 暗褐色土 黒褐色土小ブロック、FA小ブロックを5%含む。
- 6 暗褐色土 FA小ブロック、小礫を5%含む。
- 7 暗褐色土 黒褐色土大ブロック5%含む。
- 8 にびり黄褐色土 黒褐色土大ブロック、FA大ブロックを5%含む。
- 9 暗褐色土 黄褐色土粒1%含む。
- ① 暗褐色土 黄白色土大ブロック、黒色土大ブロックを40%、焼土粒5%含む。固く締まる。床面。
- ② 灰黄褐色土 FA主体。暗褐色土5%含む。
- ③ 暗褐色土 FA小ブロック、白色軽石粒を5%含む。
- ④ 褐色土 暗褐色土5%含む。
- ⑤ 褐色土 暗褐色土大ブロック5%含む。

第88図 B区5号住居跡

1. 竪穴住居跡



第89図 B区5号住居跡掘り方・出土遺物

B区7号住居跡 (P.L.28・136)

位置 1P-19~20グリッド

重複 2号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係不明。

形態 横長隅丸方形

主軸方位 N-103°-E

規模 南北3.33m、東西2.37m。

壁 壁高は北辺22.0~44.0cm、東辺24.5~28.0cm、南辺45.0~52.0cm、西辺21.5~55.5cmで平均36.6cmである。

カマド 東壁中央南寄りに位置し、燃焼部は壁外にある。規模は、焚口~煙道が0.66m、袖焚口幅が0.49mである。火床面は床面より若干下がり、奥壁で急に立ち上がる。焼土・灰等の堆積や遺存状態は悪く、カマドの使用期間が短かったと考えられる。

掘り方は、火床面から深さ12cm程を測る。

内部施設 貯蔵穴等はない。

床 使用による硬化面は見られない。

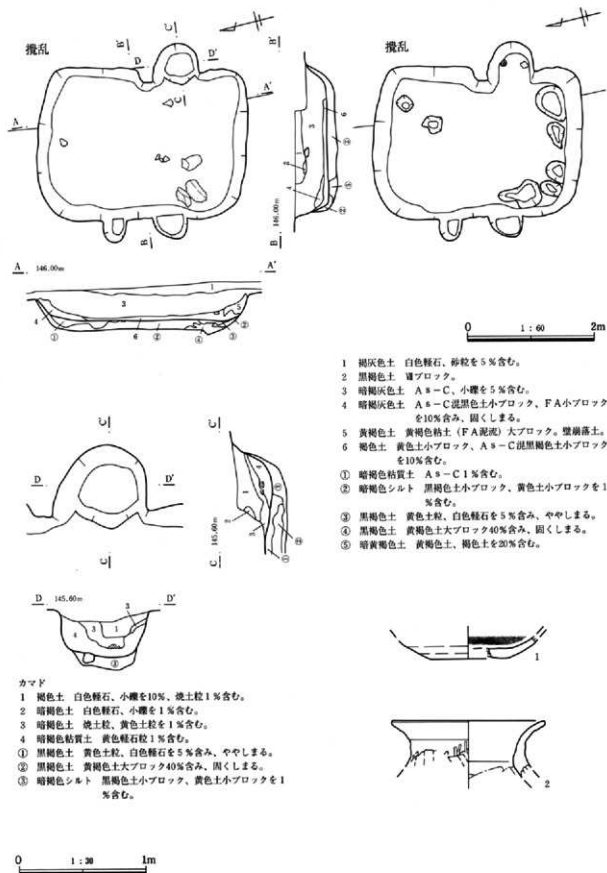
掘り方 平坦に掘られ、一部壁際に小ビットが掘られる。

埋没状況 壁の崩落が見られ、全体としては自然埋没土である。

遺物出土状態 床面からの出土遺物はなく、埋土を含め出土量は少ない。

時期 不明

(斎藤)



第90図 B区7号住居跡・出土遺物

B区8号住居跡 (P.L.29・136)

位置 1P-21-22グリッド

重複 なし

形態 縦長方形

主軸方位 N-102°-E

規模 南北3.45m、東西3.62m。

壁 壁高は北辺11.0~43.0cm、東辺17.0~40.0cm、南辺11.0~43.0cm、西辺10.0~24.0cmで平均24.9cmである。

カマド 東南隅部に位置し、燃焼部の中心は壁の延長上にある。燃焼部内には壁の焼土の崩落が見られる。規模は、焚口~煙道が0.49m、袖焚口幅が0.40mである。カマド構築材はなく、廃棄時に取り除かれたと考えられる。火床面上にも灰の堆積はない。

奥壁から煙道部へは急に立ち上がる。

内部施設 貯蔵穴等はない。

床 中央部に貼床の硬化面が見られた。

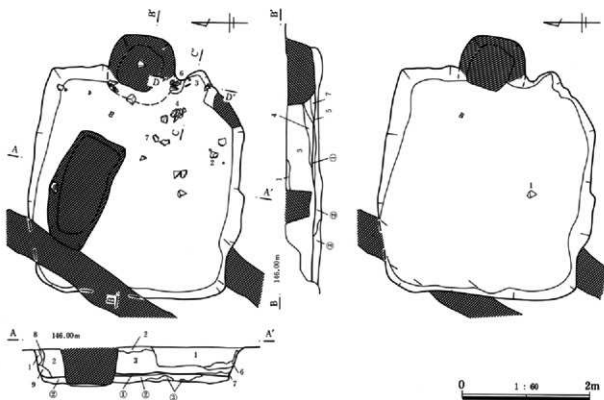
掘り方 平坦に掘られる。

埋没状況 壁の崩落以外分層しずらい土であり、自然埋没土と考えられる。

遺物出土状態 カマドとその前面に集中するが、埋土を含め遺物出土量は多くない。

時期 出土遺物から10世紀前葉に比定される。

(斎藤)

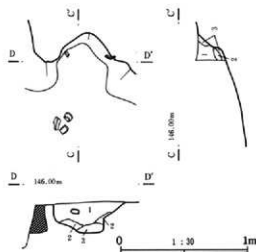


- 1 褐色土
- 2 暗褐色土 白色軽石1%含む。
- 3 褐色土 A s-C混黒色土小ブロック、FP、粗砂を10%含む。
- 4 褐色土 A s-C混黒色土小ブロック、FPを5%含む、ややしまる。
- 5 暗褐色土 白色軽石、細砂を1%含む。
- 6 褐色土 A s-C混黒色土小ブロック、FAを5%含む。

- 7 暗褐色土 黄色土粒1%含む、ややしまる。
- 8 黒色土 壁の崩落土。
- 9 暗褐色土 白色軽石、小礫、粗砂を5%含む。
- ① 暗褐色土 黄褐色土、黒色土大ブロックを10%含む、よくしまる。
- ② にぶい茶褐色土 砂礫5%含む。
- ③ 茶褐色土 砂礫1%含む。土質均質。

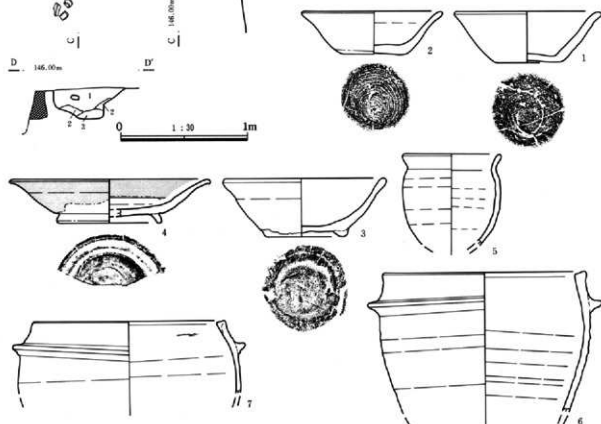
第91図 B区8号住居跡

第4章 冷水村東遺跡・西分新田遺跡の遺構・遺物



カマド

- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロック、A・B・Cを5%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 焼土大ブロック、黄褐色土大ブロックを10%含む。天井崩落土。
- 3 暗褐色土 黄褐色土小ブロック、焼土粒を5%含む。



第92図 B区8号住居跡カマド・出土遺物

B区9号住居跡 (PL30・136)

位置 1R-1S-19~20グリッド

重複 なし

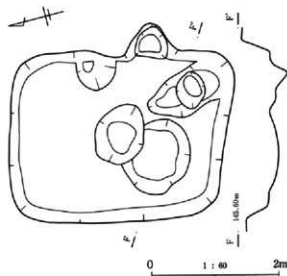
形態 横長隅丸方形

主軸方位 N-105°-E

規模 南北3.58m、東西2.72m。

壁 壁高は北辺30.0~44.0cm、東辺39.0~43.0cm、南辺36.0~41.0cm、西辺27.0~34.0cmで平均36.8cmである。

カマド 東壁やや南寄りに位置し、燃焼部の中心は壁の延長上にある。袖は不明瞭であった。規模は、焚口~煙道が0.98m、袖焚口幅が0.40mである。構築材としては黄褐色粘土を用いたと考えられる。埋没土中層に焼土等を含む層が見られた。火床面は薄



第93図 B区9号住居跡掘り方

1. 竪穴住居跡

く灰面が見られ、床面よりはほぼ水平にあり奥壁で急に立ち上がる。カマド掘り方面は、黄褐色粘土や焼土が混じり、つくり替えの可能性が考えられる。掘り方規模は、主軸方向1.00m、幅1.38mである。
内部施設 南東隅に径70.0×65.0cm、深さ25.0cmの円形を呈する貯蔵穴を検出した。
 床 硬化面は見られない。

掘り方 全体に浅い凹凸がある。

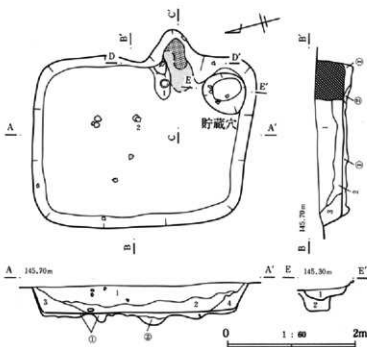
埋没状況 自然埋没土。

遺物出土状態 カマド及び貯蔵穴にやや集中するが、埋土を含め遺物出土量は少ない。

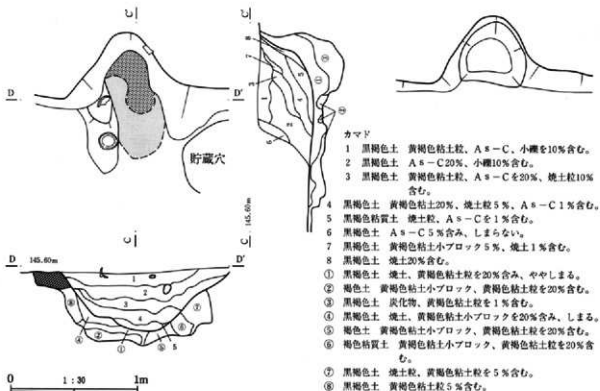
時期 出土遺物から9世紀前半に比定される。
 (斎藤)

貯蔵穴

- 1 黒褐色土 A s-C、FA小ブロックを10%含み、しまらない。
- 2 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を20%含み、しまらない。



- 1 黒褐色土 A s-C、小礫を5%、焼土、炭化物を1%含む。
- 2 黒褐色土 FA小ブロック10%、A s-C 5%含む。
- 3 黒褐色粘質土 焼土粒、A s-Cを1%含む。
- 4 黒褐色土 黄褐色粘土小ブロック10%、焼土粒、A s-Cを1%含む。
- ① 黒褐色土 黄褐色粘土粒、A s-Cを10%含み、ややしまる。
- ② 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を20%含む。



カマド

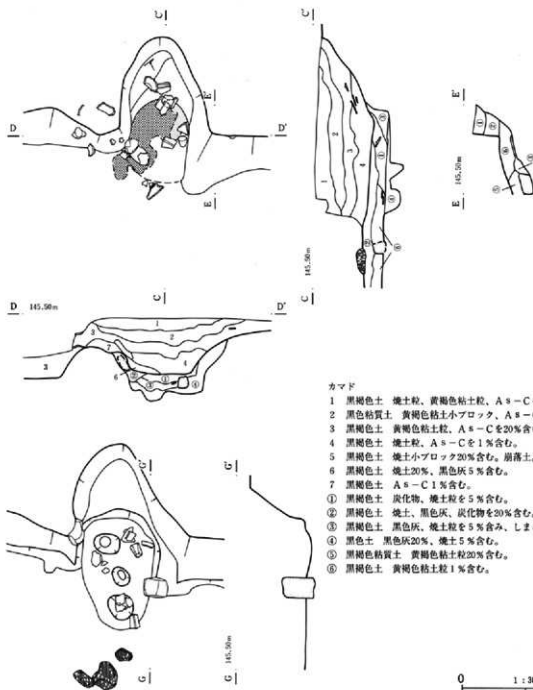
- 1 黒褐色土 黄褐色粘土粒、A s-C、小礫を10%含む。
- 2 黒褐色土 A s-C 20%、小礫10%含む。
- 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒、A s-Cを20%、焼土粒10%含む。
- 4 黒褐色土 黄褐色粘土20%、焼土粒5%、A s-C 1%含む。
- 5 黒褐色粘質土 焼土粒、A s-Cを1%含む。
- 6 黒褐色土 A s-C 5%含み、しまらない。
- 7 黒褐色土 黄褐色粘土小ブロック5%、焼土1%含む。
- 8 黒褐色土 焼土20%含む。
- ① 黒褐色土 焼土、黄褐色粘土粒を20%含み、ややしまる。
- ② 褐色土 黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を20%含む。
- ③ 黒褐色土 炭化物、黄褐色粘土粒を1%含む。
- ④ 黒褐色土 焼土、黄褐色粘土小ブロックを20%含み、しまる。
- ⑤ 褐色土 黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を20%含む。
- ⑥ 褐色粘質土 黄褐色粘土小ブロック、黄褐色粘土粒を20%含む。
- ⑦ 黒褐色土 焼土粒、黄褐色粘土粒を5%含む。
- ⑧ 黒褐色土 黄褐色粘土粒5%含む。

第94図 B区9号住居跡



第95図 B区9号住居跡出土遺物

B区10号住居跡 (P L 31・136・137)



カマド

- 1 黒褐色土 焼土粒、黄褐色粘土粒、A s-Cを5%含む。
- 2 黒色粘質土 黄褐色粘土小ブロック、A s-Cを10%含む。
- 3 黒褐色土 黄褐色粘土粒、A s-Cを20%含む。
- 4 黒褐色土 焼土粒、A s-Cを1%含む。
- 5 黒褐色土 焼土小ブロック20%含む。崩落土。
- 6 黒褐色土 焼土20%、黒色灰5%含む。
- 7 黒褐色土 A s-C 1%含む。
- ① 黒褐色土 炭化物、焼土粒を5%含む。
- ② 黒褐色土 焼土、黒色灰、炭化物を20%含む。
- ③ 黒褐色土 黒色灰、焼土粒を5%含む。しまらない。
- ④ 黒色土 黒色灰20%、焼土5%含む。
- ⑤ 黒褐色粘質土 黄褐色粘土粒20%含む。
- ⑥ 黒褐色土 黄褐色粘土粒1%含む。

第96図 B区10号住居跡カマド

位置 1R-1S-20-21グリッド

重複 26号住居跡より新しい。

形態 不整正方形 主軸方位 N-96°-E

規模 南北4.64m、東西4.07m。

壁 壁高は北辺31.0~35.0cm、東辺27.0~41.0cm、南辺38.0~48.0cm、西辺35.0~54.0cmで平均38.6cmである。

カマド 東壁中央部に位置し、燃焼部の中心は壁の延長上にある。規模は、焚口~煙道が1.15m、袖焚口幅が0.50mである。構築材等はなく、廃棄時に取り除かれている。右袖焚口部と左袖奥に補強用礫が出土。火床面上には焼土粒・灰面があり、奥壁は緩やかに立ち上がる。火床面下の埋土も焼土・炭化物が混じり、掘りかえしによる混入と思われる。掘り

方規模は、主軸方向1.45m、幅0.92mである。

内部施設 掘り方面調査時に、南東隅に一辺75.0cm、深さ22.0cmほどの浅い貯蔵穴と思われる落ち込みを確認した。

床 ややしまり、カマド前に薄い灰の広がりが見られた。

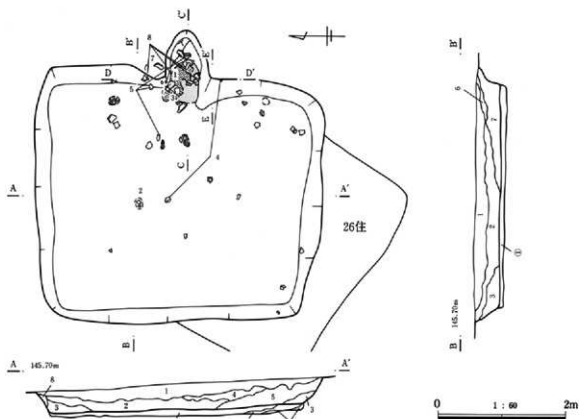
掘り方 全体に平坦に掘られる。北東隅寄りに長辺114.0cm、短辺83.0cm、深さ12.0cmの隅丸長方形の床下土坑が検出された。

埋没状況 自然埋没土。

遺物出土状態 遺物はカマドに集中するが、埋土を含め出土量は多くない。

時期 出土遺物から10世紀前半葉に比定される。

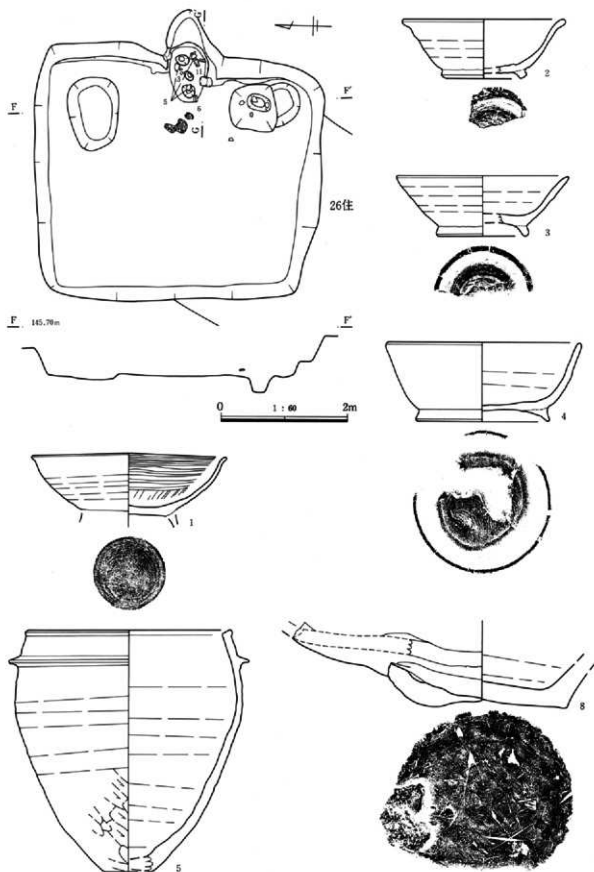
(斎藤)



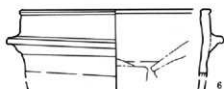
- 1 黒褐色土 A 5-C、FA粒を5%、焼土粒1%含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒、FA小ブロックを5%、A 5-C 1%含む。
- 3 黒色土 黄褐色粘土粒1%含む。
- 4 黒褐色土 焼土粒、A 5-Cを5%含む。
- 5 黒褐色土 FA小ブロック20%、炭化物、焼土粒、A 5-Cを1%含む。

- 6 黒褐色土 焼土粒、FA粒を10%含む、ややしまり。
- 7 黒褐色土 焼土粒、A 5-C、FA粒を1%含む。
- 8 黄褐色土
- ① 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック、A 5-Cを20%含む、ややしまり。
- ② 暗褐色土 A 5-C 1%含む。
- ③ 黒褐色粘質土 黒色灰1%含む。

第97図 B区10号住居跡



第98図 B区10号住居跡掘り方・出土遺物(1)



第99図 B区10号住居跡出土遺物(2)

B区11号住居跡 (PL 32・137)

位置 2C-21グリッド

重複 なし 形態 隅丸正方形

主軸方位 N-100°-E

規模 南北2.70m、東西2.56m。

壁 壁高は北辺18.0~19.0cm、東辺13.0~19.0cm、南辺14.0~19.0cm、西辺15.0~18.0cmで平均16.9cmである。

カマド 東南隅寄りに位置し、燃焼部の中心は壁外にある。規模は、焚口~煙道が0.98m、袖焚口幅が0.50mである。カマド前方部から灰のかき出しによるものか、火床面は下がる。焼土の崩落は見られるが、天井材は不明である。また、右壁上部より土器片が貼り付けられた状態で出土し、カマド内から出土した土器類の一部は補強用に使われたものも含まれていると考えられる。

内部施設 東南隅より径55.0×55.0cm、深さ17.0cmの円形を呈する貯蔵穴を検出した。その北脇の小土坑の規模は、径35.0×40.0cm、深さ13.0cmである。

床 掘り方面を加工せず直接使用した。

掘り方 平坦面に仕上げる。

埋没状況 自然埋没土。

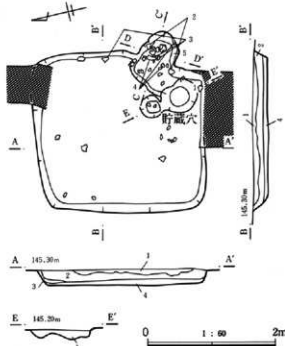
遺物出土状態 遺物はカマドに集中するが、埋土を含め出土量は少ない。

時期 出土遺物から10世紀中葉に比定される。

(斎藤)

カマド

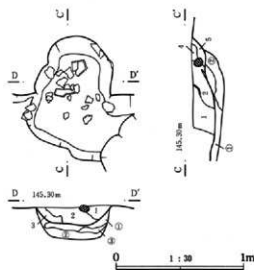
- 1 暗褐色土 A s-C 5%含む。
- 2 暗赤褐色土 焼土粒、黄褐色粘土粒を5%含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色粘土粒、黒褐色土粒を5%含む。
- 4 暗褐色土 焼土小ブロック20%含む。
- 5 暗褐色土 焼土小ブロック、黄褐色粘土粒の混土
- ① 暗褐色土 灰、焼土粒を5%含む。
- ② 褐色土
- ③ 暗褐色土 焼土、A s-Cを5%含む。



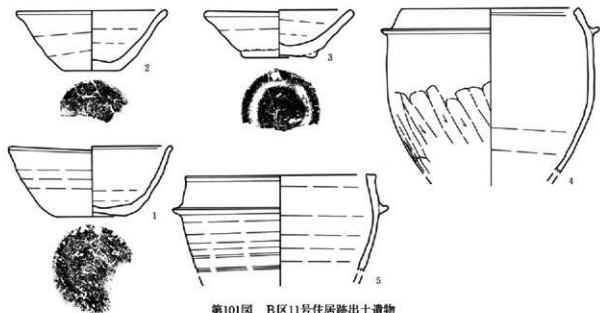
- 1 暗褐色土 A s-C 5%含む、色調暗い。
- 2 暗褐色土 A s-C 5%含む、色調明るい。
- 3 黒褐色土 A s-C 1%含む、しまらない。
- 4 黒褐色粘質土 焼土、炭化物、A s-Cを5%含む。

貯蔵穴

- 1 暗褐色粘質土 黄褐色粘土粒、A s-Cを5%含む。



第100図 B区11号住居跡



第101図 B区11号住居跡出土遺物

B区12号住居跡 (P L 33・137)

位置 1Q-1R-22-23グリッド

重複 29号住居跡より新しい。

形態 横長方形 主軸方位 N-98°-E

規模 南北3.89m、東西3.19m。

壁 壁高は北辺15.0~22.0cm、東辺20.0~25.0cm、南辺16.0~24.0cm、西辺16.0~21.0cmで平均19.9cmである。

カマド 東壁南隅に位置し、燃焼部の中心は壁の延長上にある。規模は、焚口~煙道が0.53m、袖焚口幅が0.59mである。右袖部には補強用の礫が埋置されていた。またカマド前には大礫が出土したが、カ

マド構築用のものではない。燃焼部内には黄褐色粘土や焼土の崩落が見られ、土器類も多く出土し、土器下に支脚に使われていた礫が起立状態で出土した。火床面はややくぼみ、奥壁立ち上がり部に補強用板状礫が置かれていた。掘り方規模は、主軸方向1.00m、幅0.79mである。

内部施設 貯蔵穴等はない。

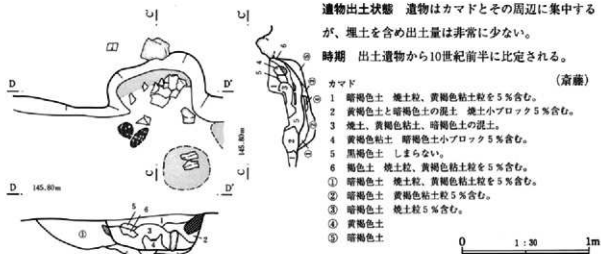
床 掘り方面をそのまま使用。カマド前方部には焼土・灰の広がりが見られやや硬化している。

掘り方 平坦面に掘られる。

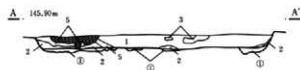
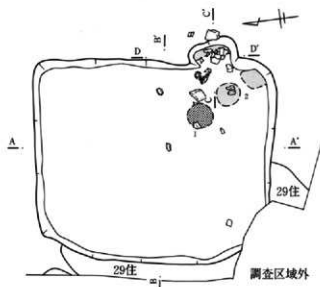
埋没状況 自然埋没土

遺物出土状態 遺物はカマドとその周辺に集中するが、埴土を含め出土量は非常に少ない。

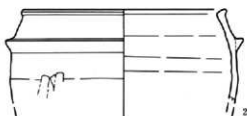
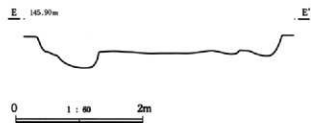
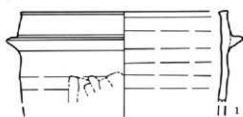
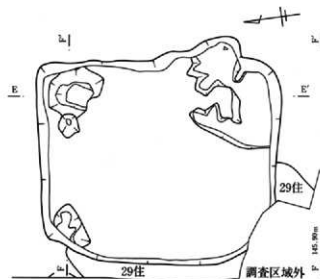
時期 出土遺物から10世紀前半に比定される。



第102図 B区12号住居跡カマド



- 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒, A s-C を 5 % 含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色粘土粒 10 %, A s-C 5 % 含む。
- 3 黄褐色土 暗褐色土小ブロック 10 % 含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色粘土粒, A s-C を 5 % 含む、しまらない。
- 5 黒褐色土 A s-C 1 % 含む。
- ① 暗褐色土 炭化物、黒色土小ブロック、焼土粒、FA を 10 % 含む。
- ② 暗褐色土 焼土粒、黄褐色粘土粒を 5 % 含む。



0 1 : 60 2m

第103図 B区12号住居跡・出土遺物

B区13号住居跡 (PL 34・137)

位置 4B-20~21グリッド

重複 なし

形態 縦長方形

主軸方位 N-105°-E

規模 南北2.76m、東西3.96m。

壁 壁高は北辺14.0~28.0cm、東辺4.0~13.0cm、南辺20.0~26.0cm、西辺15.0~23.0cmで平均17.9cmである。

カマド 東壁中央に位置し、燃焼部の中心は壁の延長上にある。規模は、焚口~煙道が0.88m、袖焚口幅が0.60mである。埋没土中に構築材と思われる黄褐色土塊が混じる。火床面は床面と同レベルであるが、火床面下やカマド前に焼土・灰の互層の堆積が見られる。掘り方規模は、主軸方向1.42m、幅1.02

mである。

内部施設 南西隅に径76.0×70.0cm、深さ30.0cmの円形を呈する貯蔵穴を検出した。住居内土坑は北辺中央部に位置し、径127.0×120.0cm、深さ8.0cmである。

床 掘り方を一部埋め込み使用し、カマド前から住居中央部に貼床が見られた。

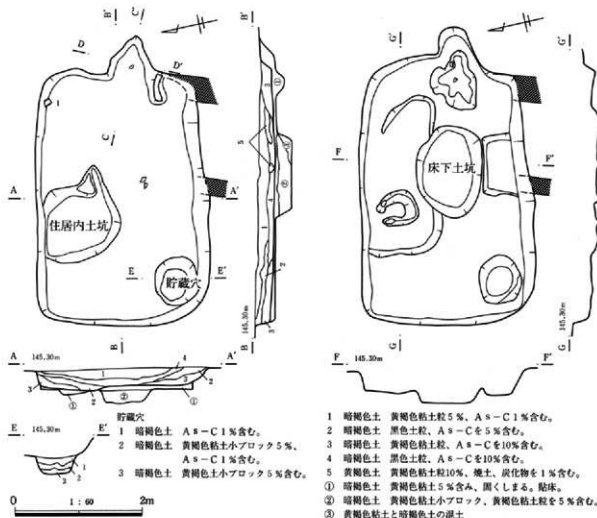
掘り方 中央部に径143.0×105.0cm、深さ23.5cmの床下土坑を検出した。上面は貼床となり、埋没土は地山ブロック混土であった。

埋没状況 自然埋没土。

遺物出土状態 掲載遺物のほか出土量はわずかである。

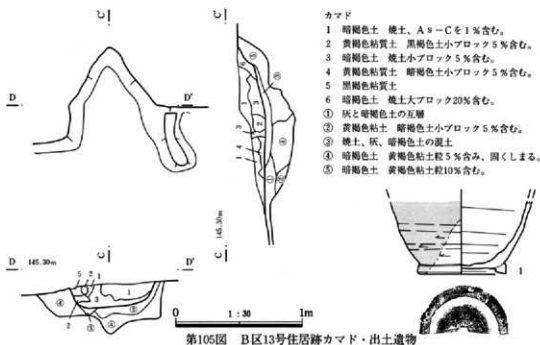
時期 出土遺物から9世紀後半以降に比定される。

(斎藤)



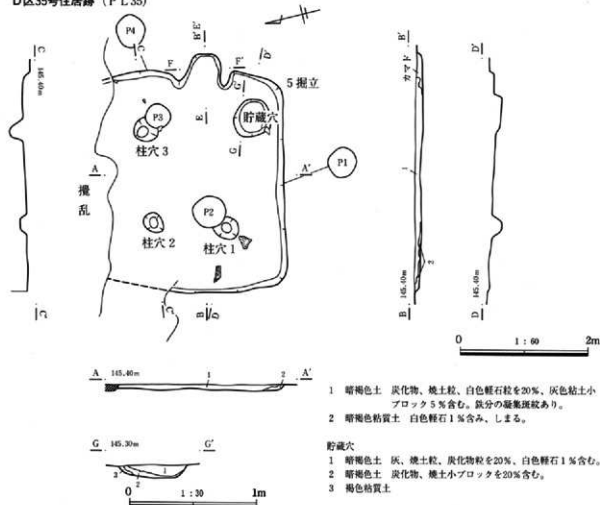
第104図 B区13号住居跡

1. 竪穴住居跡



第105図 B区13号住居跡カマド・出土遺物

D区35号住居跡 (P.L.35)



第106図 D区35号住居跡

本住居周辺は近年土の移動があり、遺存状況は悪い。

位置 2T-3A-17-18グリッド

重複 5号掘立柱建物跡より古い。

形態 攪乱により半分近く壊されるが、縦長方形を呈するものと考えられる。

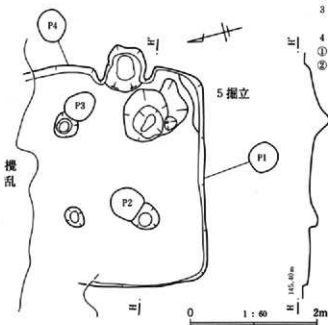
主軸方位 N-104°-E

規模 南北(2.95)m、東西3.50m。

壁 壁高は東辺6.0~11.5cm、南辺7.0~11.0cm、西辺3.0~9.0cmで平均7.9cmである。

カマド 東壁南寄りに位置し、燃焼部は壁の延長上にある。規模は、焚口~煙道が0.66m、袖焚口幅が0.53mである。燃焼部内埋没土中に焼土ブロックが見られ、一部灰色粘土が混じることから構築には灰色粘土が用いられたと思われる。火床面は床面より凹む。掘り方規模は、主軸方向0.60m、幅0.60mである。

内部施設 南隅に径60.0×59.5cm、深さ32.0cmの円形を呈する貯蔵穴を検出した。埋没土中に灰や焼土の堆積が見られた。柱穴は3本検出したが浅い。柱穴1の規模は径41.0×34.0cm、深さ30.5cm、柱穴2の規模は径34.0×26.5cm、深さ24.5cm、柱穴3の規模は径38.0×37.0cm、深さ39.5cmである。



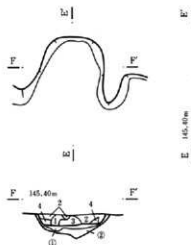
床 掘り方面をそのまま利用している。カマド前から貯蔵穴方向に灰・焼土が広がる。

掘り方 平坦に仕上げられている。

埋没状況 床面直上にわずかに堆積が見られただけであり、不明。

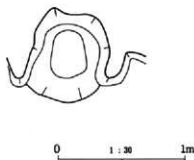
遺物出土状態 遺物出土量は非常に少ない。

時期 不明 (斎藤)



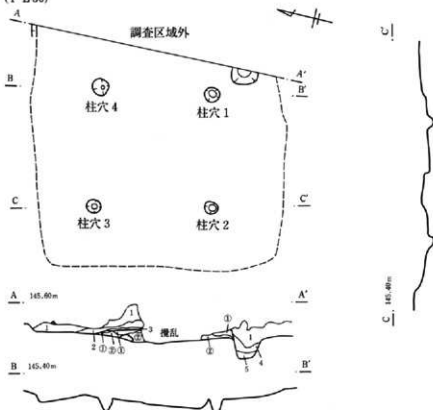
カマド

- 1 暗褐色土 炭化物、焼土粒、白色軽石粒を20%、灰色粘土小ブロック5%含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 2 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒を5%含む。
- 3 赤褐色土 焼土大ブロック主体。褐色土、炭化物粒を10%含む。
- 4 褐色土 灰、焼土粒を5%含む。
- ① 暗褐色土 焼土20%含む。
- ② 暗褐色土 焼土、A s-Cを10%含む。



第107図 D区35号住居跡カマド・掘り方

D区37号住居跡 (P.L.36)



- 1 黒褐色粘質土 A層-C層5%含む。
- 2 黒褐色土 総柱砂層(Ⅱ)小ブロック5%, A層-C層1%含む。
- 3 黒色土 焼土・炭化物を10%, A層-C層1%含む。
- 4 灰黄褐色土 総柱砂層(Ⅲ)小ブロック40%含む。
- 5 黒色土 白色軽石1%含む。
- ① 黒褐色土 総柱砂層(Ⅱ)小ブロック40%含む。
- ② 褐色土 総柱砂層(Ⅱ)小ブロック40%含む。

第108図 D区37号住居跡

本住居は最近の土取りにより壊され、掘り方面まで掘削機のツメ跡が達していたが、部分的に床面と柱穴が確認できたため、住居跡として調査を行うことができた。しかし、不明な点が多く残ってしまった。

位置 3C-3D-17グリッド

重複 なし

形態 不明

主軸方位 不明

規模 南北(4.05)m、東西(3.68)m。

壁 不明

カマド 調査区境の壁面に焼土・炭の堆積が多く残

る部分があり、カマド付近の状況に似ていることから、東側に付設されていたと思われる。

内部施設 調査区壁面に断面がかかり、内側に半円形を呈する貯蔵穴と考えられる掘り込みを検出した。径(42.0)×(25.0)cm、深さ29.0cmを測る。柱穴は4本検出し、底面付近と思われる。柱穴1の規模は径24.0×22.0cm、深さ21.0cm、柱穴2の規模は径21.0×18.0cm、深さ12.0cm、柱穴3の規模は径22.0×22.0cm、深さ10.0cm、柱穴4の規模は径26.0×25.0cm、深さ23.0cmである。

H区1号住居跡 (P L 37・138)

床 断面に貼床らしき硬化面が確認できたのみである。

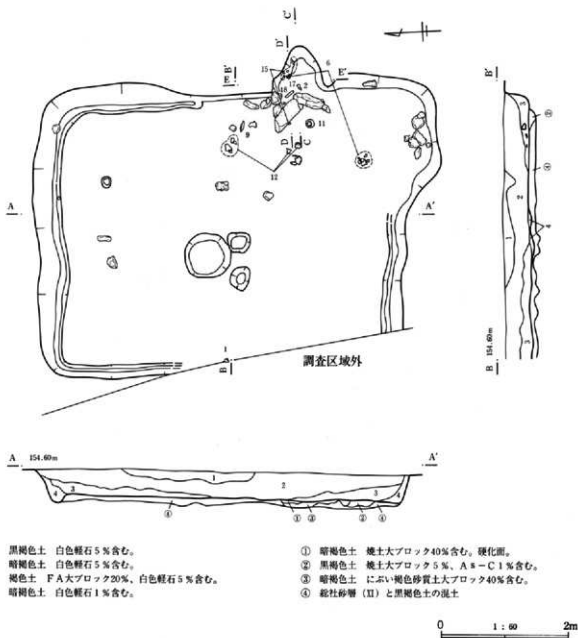
掘り方 不明

埋没状況 A s-C混じりの黒色土で埋没し、自然埋没か。

遺物出土状態 遺物は出土しなかった。

時期 不明

(斎藤)



第109図 H区1号住居跡

位置 H区南西部 7P-7Q-32-33グリッド

重複 なし

形態 南西部の一部が不明であるが、南辺の東側に張り出しをもつ長方形。主軸方位 N-92°-E
規模 南北が張り出し部分で6.42m、その西側で5.90m、東西が4.60m、張り出し部分が東西2.10m、南北0.65m、床面積は推定21.561m²を測る。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北辺42.0-47.0cm、東辺38.0-47.0cm、南辺42.0-49.0cm、西辺1.0-5.0cmで平均33.9cmである。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、笑口の一部が住居内部に位置する他は笑口・煙道は壁外に構築されている。残存状態は、天井部は崩落し、袖は両袖とも崩壊して残存していない。規模は、笑口～煙道が1.26m、袖笑口幅0.85mである。袖は崩壊しているが、径20cm前後の礫を補強に使用して灰白色粘土で構築している。天井部も崩壊しているが、前部に53×23×20cm、50×20×25cmの細長い礫を袖の間に渡して補強としている。燃焼部には、堯の支脚用の長さ25cm、径10cmの円柱状の石製品が据えられている。掘り方は、規模が主軸方向1.63m、幅

1.42mである。

内部施設 周溝が東辺中央付近から北辺、西辺、南辺の張り出し部分西側まで巡る。規模は、幅4.0-12.0cm、深さ10cm程である。柱穴や貯蔵穴は検出されなかったが、中央付近に土坑状の落ち込みが3基確認された。中央部の最大のものの規模は径72.0×70.0cm、深さ12.0cmで、その南に接して径32.0×37.0cm、深さ8.0cmのものと、径37.0×37.0cm、深さ8.0cmのものとは南北に並んでいる。また、北西隅には径15.0×17.0cm、深さ7.0cmの落ち込みが見られる。床 掘り方より10cm前後ほど褐色砂質土を入れて踏み固められている。

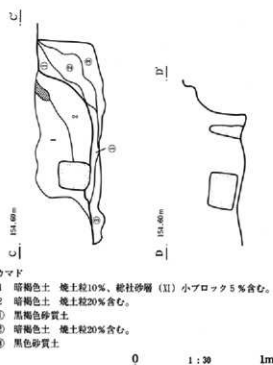
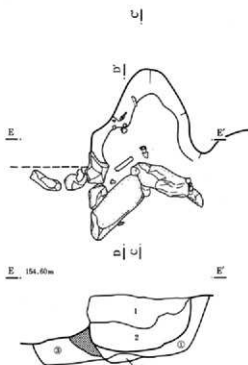
掘り方 南西部に土坑状の落ち込みが見られるが明確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 土層断面からレンズ状に堆積したことが観察されることから自然堆積によるものである。

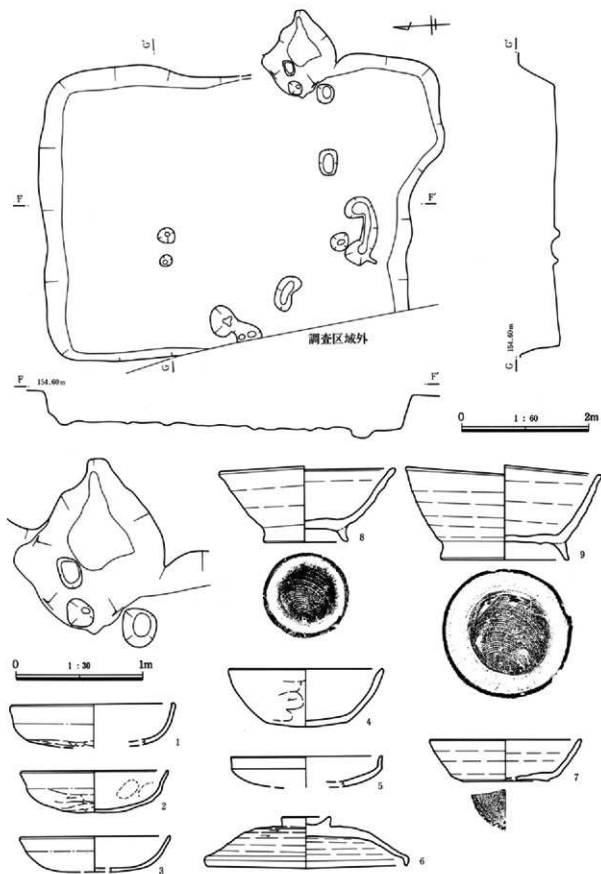
遺物出土状況 カマド及びカマドの周辺に集中しているが、北辺周溝内より16の磁石が出土している。埋土を含め遺物出土量は多くない。

時期 出土遺物から9世紀第2四半期に比定される。

(神谷)

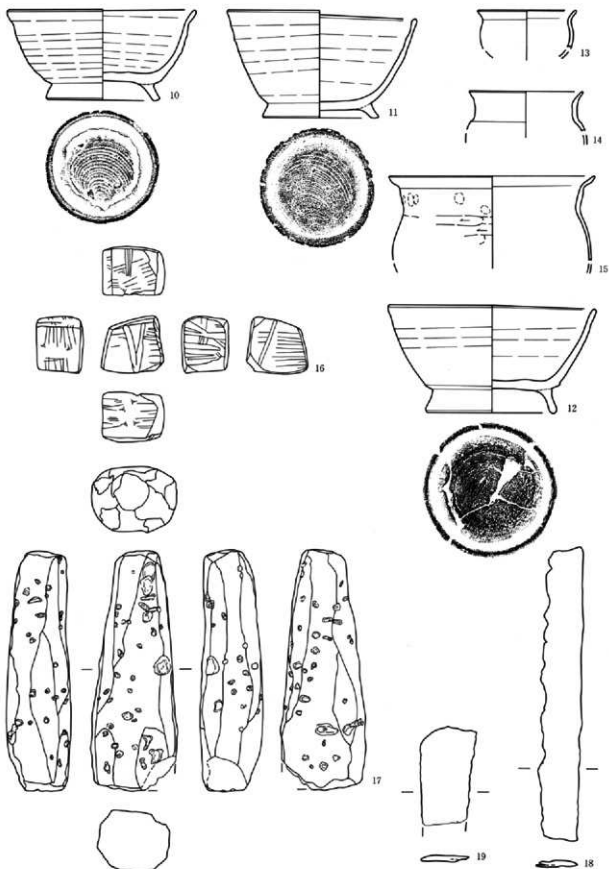


第110図 H区1号住居跡カマド



第111図 H区1号住居跡掘り方・出土遺物(1)

1. 竖穴住居跡



第112図 H区1号住居跡出土遺物 (2)

2. 掘立柱建物跡・柱列

A区3号掘立柱建物跡 (PL38)

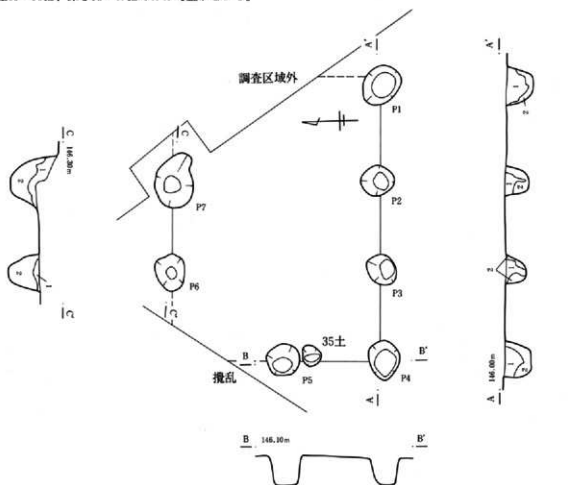
位置 北端部 1G～1H-21～22グリッド

重複 なし 主軸方位 N-88°-W

形態 北辺は未検出だが、2×3間(3.33m×4.54m・11尺×15尺)の東西棟か。柱間は4尺基準か。東辺の柱穴はほぼ等間隔に並ぶが、P3は柱軸から若干東に外れる。南西角の柱穴は攪乱に壊される。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模はP7がやや大きいが、長径50～66cm、短径43～56cm、深さ31～47cmでほぼ均整とれる。

遺物出土状態 埋土から土師器杯・甕片が少量出土している。

時期 出土遺物から周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。



- 1 暗褐色土 白色軽石5%、焼土粒1%含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石5%、黒色土小ブロック、FA小ブロックを1%含む。

0 1 : 60 2m

第113図 A区3号掘立柱建物跡

A区4号掘立柱建物跡 (P L 38)

位置 中央部西寄り 1E~1F~22~23グリッド

重複 なし 主軸方位 N-51°-E

形態 2×2間 (2.58m×3.03m・8.5尺×10尺)の南北棟。柱間は桁側が5尺、梁側が4尺基準か。北辺のP2は5cm程東寄り、P3は5cm程西寄りのため、P2・P3の間隔は狭い。東辺のP4はP3・P4のほぼ中間に設け、柱軸から若干東へ外れる。南辺のP6は5cm程西寄り、北辺とは偏りが逆となり符合しない。なお、P7は西半分を攪乱に壊される。西辺のP8は5cm程北寄り、柱軸から若干西へ外れる。柱穴は明確な区別はできないが、円形と隅丸方形が混在する。柱穴の規模はP1が小さくP8が大きいくれども、他は長径41~49cm、短径36~45cm、深さ27~51cmでほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 土師器片1片のみが出土している。

時期 埋土及び出土遺物から周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。

B区1号掘立柱建物跡 (P L 38)

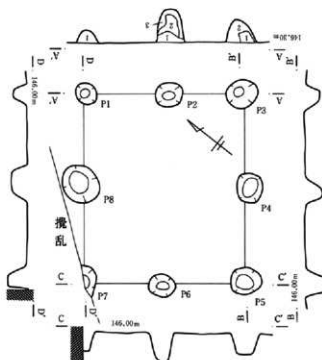
位置 南西端 1N~1P~22~23グリッド

重複 なし 主軸方位 N-75°-E

形態 2×3間 (4.24m×6.06m・14尺×20尺)の東西棟。柱間は6.5~7尺基準か。西辺のP2はP1・P3の中間に設けるが、柱軸より20cm程南に外れる。なお、P3・P11は重複しないが、柱の掘え直しによる新旧の柱穴と見られる。北辺のP5は10cm程東寄り、P5・P6の間隔を狭く設ける。P4・P5は柱軸より30cm程北へ外れ、P11と柱軸が揃っている。東辺のP7は5cm程北寄り、北西~南東方向に柱軸が大きく振れている。南辺のP10は5cm程東寄りである。柱穴は不整形ながら円形と方形が混在する。柱穴の規模は、P1~P4、P10が長径48~78cm、短径38~66cm、深さ50~72cm、P5~9が長径90~130cm、短径70~84cm、深さ56~70cmの大小2つに分類される。

遺物出土状態 なし

時期 位置及び埋土から周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。



- 1 暗褐色土 白色軽石5%、焼土粒1%含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石5%、黒色土小ブロック、FA小ブロックを1%含む。
- 3 黒褐色土 A=C1%含む。

第114図 A区4号掘立柱建物跡

B区2号掘立柱建物跡 (P L 39)

位置 中央部東寄り 1P~1Q~19~20グリッド

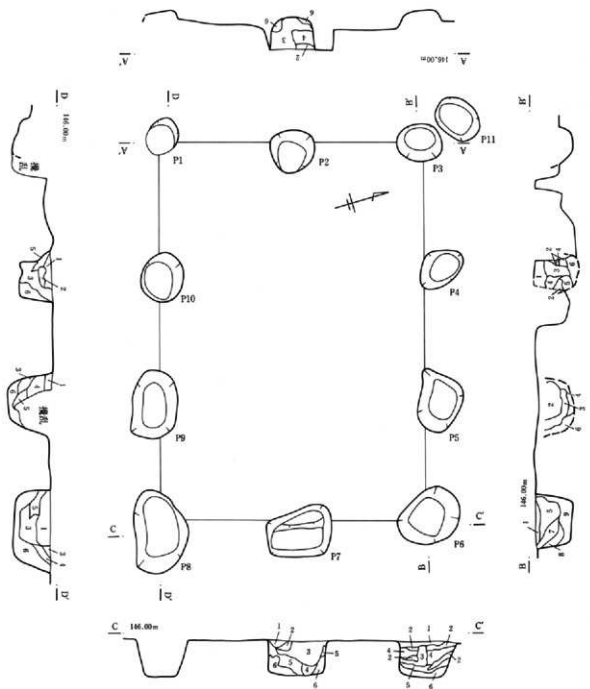
重複 7号住居跡と重複するが、新旧関係不明。

主軸方位 N-21°-E

形態 2×2間 (3.03m×4.54m・10尺×15尺)の南北棟。北辺のP2はP1・P3のほぼ中間に設ける。東辺の南東角は7号住居跡と重複し検出できなかったが、P4は東辺のほぼ中間に設けられたと見られる。南辺のP5は北辺の状況から見て30cm程東寄りである。西辺のP7は10cm程南寄りである。柱穴は不明ながら、円形と隅丸方形が混在する。柱穴の規模は、P3・P4が長径28cm、短径24~26cm、深さ14~16cm、P1・P2・P5~P7が長径42~50cm、短径30~46cm、深さ24~60cmの大小2つに分類される。

遺物出土状態 土師器片3片のみが出土している。

時期 出土遺物から周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。

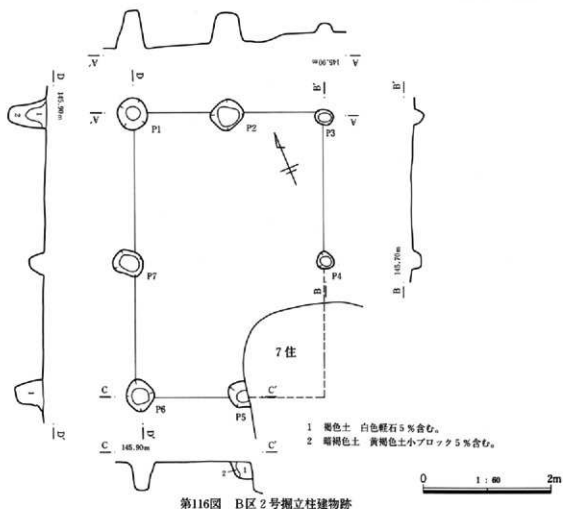


- 1 暗褐色土 細砂混入。白色軽石1%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 FA大ブロックに黒褐色土大ブロックを混入。
- 3 暗褐色砂質土 白色軽石、FA小ブロックを5%含む。
- 4 暗褐色土 しまらない。
- 5 黒色土と褐色土の混土 A=C、FA大ブロックを5%含む。
- 6 暗褐色砂質土 白色軽石、FA大ブロックを含み、しまらない。産移層。

0 1:60 2m

第115図 B区1号掘立柱建物跡

2. 掘立柱建物跡・柱列



B区1号柱列

位置 南半部 1N~10-21グリッド

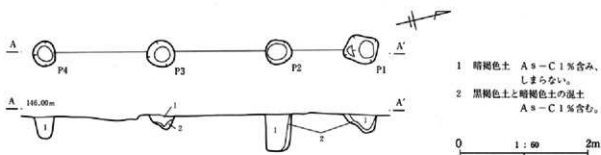
重複 なし

主軸方位 N-13°-E

形態 南北5.50mを測り、P1を除けばほぼ6尺間隔である。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は、長径37~50cm、短径34~41cm、深さ21~48cmでほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 なし

時期 位置及び埋土から周辺の竪穴住居跡の時期に近いものと考ええる。



D区5号掘立柱建物跡 (P.L.39)

位置 南東端 2T-17~18グリッド

重複 35号住居跡よりも新しく、25号土坑とは新旧関係不明。

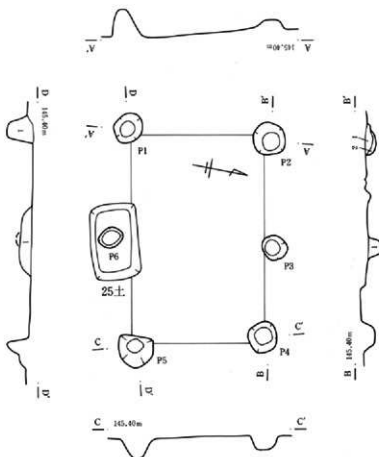
主軸方位 N-79°-E

形態 1×2間 (2.12m×3.33m・7尺×11尺) の東西棟。西辺は北西-南東方向に柱軸が大きく振れている。北辺のP3は10cm程南寄り、柱軸から15cm程東へ外れる。東辺は北西-南東方向に柱軸が大きく振れている。南辺のP6はP1・P5のほぼ中間

で、柱軸から30cm程南へ外れる。柱穴はP5を除きほぼ円形を呈する。柱穴の規模は長径38~54cm、短径35~50cm、深さ16~43cmでほぼ均整がとれている。また、25号土坑は長軸が本遺構の主軸と符合しており、関連する可能性がある。

遺物出土状態 土師器・須恵器片数片が出土している。

時期 遺物及び35号住居跡との新旧関係から平安時代と考えられる。



- 1 にぶい褐色土 灰褐色粘土粒、白色軽石粒を5%含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 2 暗褐色土 白色軽石粒1%含む。鉄分の凝集斑紋あり。

0 1 2m

第118図 D区5号掘立柱建物跡

D区6号掘立柱建物跡 (P L39・40)

位置 南半部 3C~3D-19~20グリッド

重複 なし

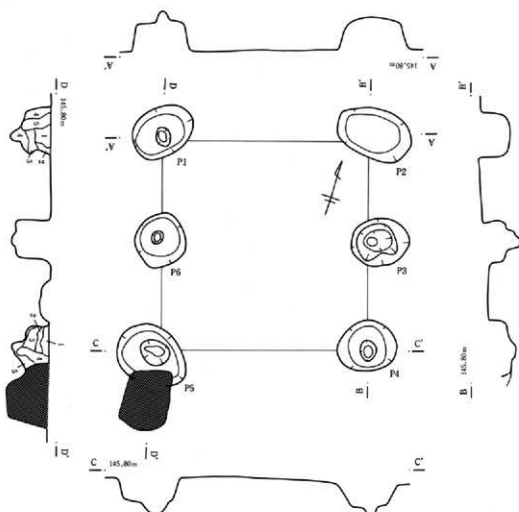
主軸方位 N-18°-W

形態 1×2間(3.33m×3.33m・11尺×11尺)のほぼ正方形。東辺のP3は、P2・P4のほぼ中間に設ける。西辺のP6は10cm程北寄りである。柱穴は大型の不整円形で、P2を除き底面に更に小穴が見られ、形態から柱痕と認める。柱穴の規模は径80~120cm、短径74~97cm、深さ44~64cmでほぼ均

整がとれている。また、底面の小穴は径18~47cmで数値にバラつきがある。

遺物出土状態 なし

時期 位置及び埋土から周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。



- 1 黒褐色土 総柱砂層(Ⅺ) 粒、白色軽石を10%含み、しめる。
- 2 黒褐色土 炭化物、総柱砂層(Ⅺ) 粒、白色軽石を5%含み、しめる。

- 3 黒色土 白色軽石5%含み、しめる。
- 4 黒色粘質土 白色軽石1%含む。
- 5 黒褐色土 白色軽石1%含む。

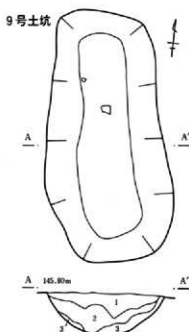
第119図 D区6号掘立柱建物跡

3. 土坑・堅穴状遺構・火葬土坑

A区 形状長方形や円形のやや規模の大きな土坑が散漫に分布しており、堅穴住居跡や掘立柱建物跡との明確な関連は見られない。なお、掲載土坑のほか形状ピットの34～46号土坑が、北端3号掘立柱建物跡周辺に集中しており関連が想定される。

9号土坑 (PL40)

隅丸長方形を呈し、壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径264×106cm、深さ44cmである。遺物は土師器・須恵器数片が出土している。



9号土坑

- 1 にぶい褐色土 白色軽石5%含む。
- 2 にぶい褐色土 F A大ブロック、F A小ブロックを5%含む。
- 3 褐色土

11号土坑

- 1 にぶい褐色土 黄褐色土大ブロック、A s-C混黒色土を5%含む。
- 2 にぶい褐色土 黄褐色土大ブロック、砂、A s-C混黒色土を5%含む。
- 3 にぶい黄褐色土 黄褐色土大ブロック10%、白色軽石1%含む。

10・32号土坑

10号土坑は不整長方形で、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径200×100cm、深さ24cmである。32号土坑は円形を呈するピット。規模は径52×47cm、深さ36cmである。両土坑の新旧関係不明。

11号土坑 (PL40)

不整形円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径134×112cm、深さ45cmである。遺物は土師器・須恵器数片が出土している。



10号土坑

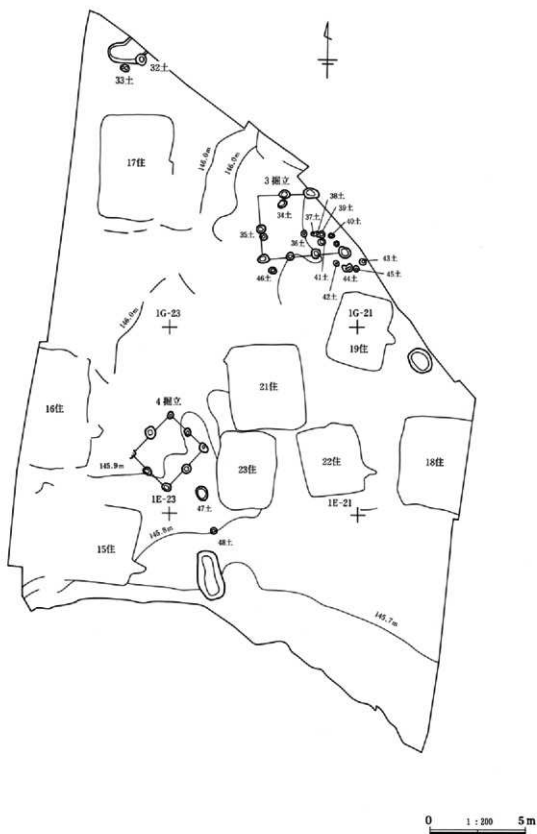
- 1 暗褐色土 A s-C、白色軽石を5%含む。
- 2 黒褐色土 暗褐色土小ブロック10%、A s-C 5%含む。

11号土坑



0 1:40 1m

第120図 A区土坑



第121図 A区土坑全体図

B区 堀土は①A s-Bを含む暗褐色砂質土、②A s-Cと一部F Aを含む黄褐色～黒褐色土、都合2つに分類できる。①は6号土坑のみであり、それ以外が②である。本区は土坑が少なく、堅穴住居跡周辺に分布する。

1号土坑 (PL40)

円形を呈し、壁は丸みをもって斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径81×66cm、深さ38cmである。

2号土坑 (PL40)

隅丸方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径78×73cm、深さ16cmである。20号住居跡より新しい。

3号土坑 (PL40)

整った円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径57×55cm、深さ11cmである。

4号土坑 (PL40)

長方形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径116×56cm、深さ17cmである。

6号土坑 (PL41)

楕円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径206×122cm、深さ14cmである。

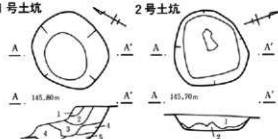
31号土坑 (PL41)

円形を呈するビット。底面は丸みを持つ。規模は径43×39cm、深さ48cmである。

4号土坑



1号土坑



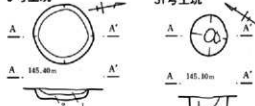
1号土坑

- 1 暗灰黄色土 A s-C混黒色土1%含む。
- 2 灰黄色砂質土 黒色土粒、F A粒を5%含む。
- 3 暗灰黄色土 灰黄色土小ブロック、F A小ブロック、小礫を10%含む。
- 4 暗オリーブ褐色土 F A大ブロック、黒色土小ブロックを10%、A s-C 5%含む。
- 5 黄褐色土 小礫5%含む。

2号土坑

- 1 暗褐色土 黄褐色粘土粒5%、白色軽石1%含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石1%含む。

3号土坑



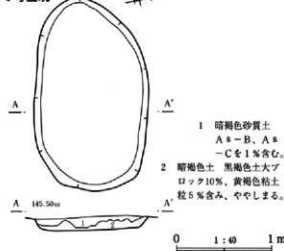
3号土坑

- 1 暗褐色粘質土 A s-C 1%含む。
- 2 暗褐色粘質土

31号土坑

- 1 暗褐色土 A s-C、軽砂を5%含む。
- 2 褐色土 A s-C混黒色土、F A小ブロックを1%含む。

6号土坑



第122図 B区土坑

D区 本区の土坑は35号住居跡、5号掘立柱建物跡周辺に集中する。特に20・22・23・25号土坑は、埋土・規模ともに類似し長方形を呈しており、5号掘立柱建物跡と主軸方位が揃う点で関連が想起される。

7号土坑 (P L 41)

不整形形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径142×103cm、深さ48cmである。

8号土坑 (P L 41)

隅丸方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径52×48cm、深さ29cmである。

13号土坑 (P L 41)

不整形形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径43×37cm、深さ20cmである。

16号土坑 (P L 41)

長楕円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径125×99cm、深さ24cmである。

20号土坑 (P L 41)

隅丸方形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径133×61cm、深さ14cmである。

21・22号土坑

21号土坑は不整形形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。規模は53×40cm、深さ17cmである。22号土坑は長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は94×60cm、深さ14cmである。両土坑の新旧関係不明。22号土坑から土師器坏片4片が出土している。

23号土坑 (P L 41・139)

歪んだ長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は107×54cm、深さ10cmである。

24号土坑

円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は48×47cm、深さ7cmである。

25号土坑

長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は115×79cm、深さ23cmである。5号掘立柱建物跡P 6と重複するが、新旧関係不明。また、主軸方位が5号掘立柱建物跡と揃っており関連が考えられる。

7号土坑



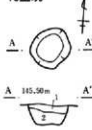
7号土坑

- 1 黒褐色粘質土 A s-C 5% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 2 黒褐色粘質土

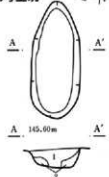
8号土坑

- 1 暗褐色粘質土 A s-C 1% 含む。固くしめる。鉄分の凝集斑紋あり。
- 2 灰褐色土 A s-C 混黒色土 1% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。

13号土坑



16号土坑



13号土坑

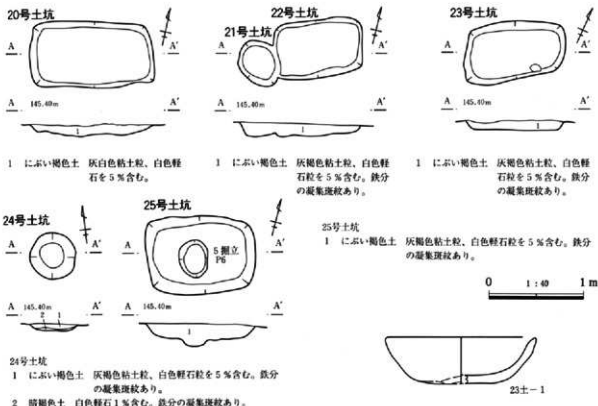
- 1 暗褐色粘質土 A s-C 1% 含む。固くしめる。鉄分の凝集斑紋あり。
- 2 灰褐色土 A s-C 混黒色土 1% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。

16号土坑

- 1 暗褐色土 A s-C 5% 含む。鉄分の凝集斑紋あり。
- 2 黒褐色粘質土 A s-C 1% 含む。

0 1:40 1m

第123図 D区土坑 (1)



第124図 D区土坑(2)・出土遺物

G区

1号火葬土壇 (P L 42・139)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径189×75cm、深さ23cmである。埋土中に焼土と炭化物が多く混入するが、壁や底面は焼土化していない。焼骨は北側隅でまとまって見られ、総計は観察したものも含めて、頭蓋骨片7片8g、腿骨片9片7g、両者混在物25gである。骨の残存状態は非常に良好であるが、1体分としては出土量が少なすぎるため、火葬した後別に納めたか火葬後埋納した可能性が高い。1の須恵器壇は中央部にややまとまって出土したが、被熱した部分は軽微であり火葬時に被熱したものとは思われない。出土遺物から10世紀半ばに比定される。

1号土坑 (P L 42)

円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦で丸みを持つ。規模は径67×65cm、深さ47cmである。

3号土坑 (P L 42)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北東角が丸く落ち込む。底面は平坦。規模は径126×70cm、深さ22cmである。

4号土坑 (P L 42)

短冊状の長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は東に傾斜する。規模は径545×70cm、深さ16cmである。

5号土坑 (P L 42)

短冊状の長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径540×44cm、深さ17cmである。近世陶器片2片が出土している。

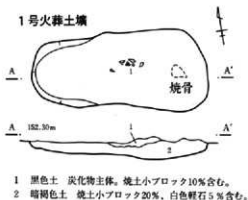
7号土坑 (P L 42)

短冊状の長方形を呈し、壁はほぼ丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径683×75cm、深さ12cmである。

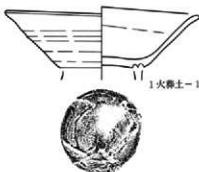
12号土坑 (P.L.42)

不整楕円形を呈し、壁は丸みを持つ。底面は凸凹する。2号溝より古い。堀土の西半分は水成堆積であり、埋没後浸食作用を受けるため、1号溝の前身となる流路が想定される。規模は径293×227cm、深さ95cmである。

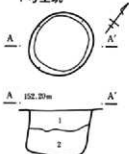
1号火葬土坑



- 1 黒色土 炭化物主体、焼土小ブロック10%含む。
- 2 暗褐色土 焼土小ブロック20%、白色軽石5%含む。

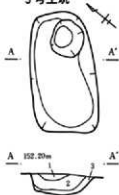


1号土坑



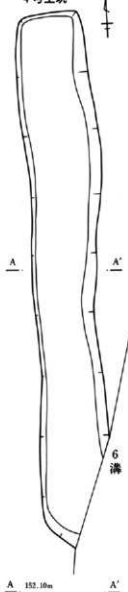
- 1号土坑
- 1 によい黄褐色土 白色軽石5%含む。
 - 2 暗褐色土 F A小ブロック10%、白色軽石5%含む。

3号土坑



- 3号土坑
- 1 によい褐色土 A s-B20%含む。
 - 2 暗褐色土 白色軽石5%含む。
 - 3 褐色土 F A大ブロック20%含む。

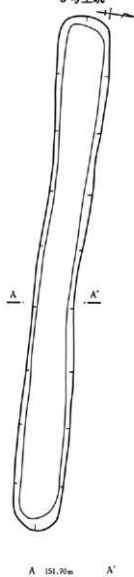
4号土坑



4号土坑

- 1 によい褐色土 A s-B20%、白色軽石1%含む。

5号土坑

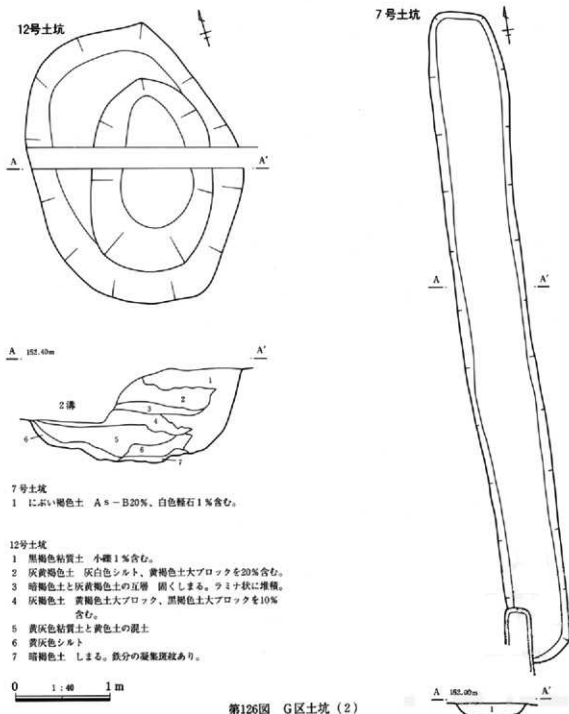


5号土坑

- 1 黒褐色土とA s-Bの混土
2 黒色粘質土

0 1:40 1m

第125図 G区1号火葬土坑・出土遺物・G区土坑 (1)



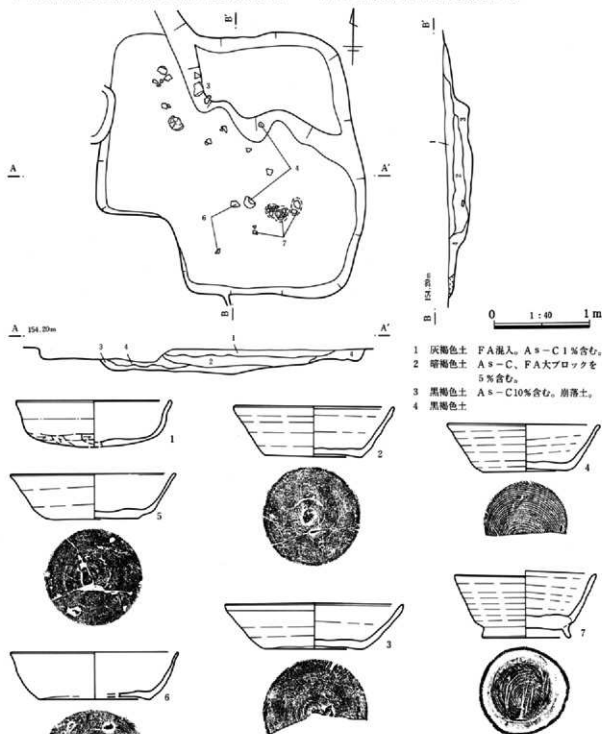
H区 埋土は、①FAを含む灰褐色～黒褐色土、②暗褐色～褐色砂質土、都合2つに大別される。①は2・3・8・10・37・47～49号土坑であり、それ以外が②である。分布では1～10・48・49号土坑が、1号島周辺に集中しており、1号井戸跡も含めて近世に比定される一連の遺構の集中すると思われるが、確定までには至らない。また、11～20号土坑も

集中して分布しており、一連の土坑群を形成するが性格不明である。それ以外の土坑は、調査区北半に広く点在する様相を示し、軸方位でもバラつきがあり、関連性を判断する材料に欠ける。

1号竪穴状遺構 (PL43・139)

南西角が欠けたL字状を呈する。北西角は攪乱により壊され底部しか残存しない。北側3分の1程が底面から約16cm高くなっていることから、南西角も1段高くなっていたものが削平されたものと思われる、元来南北2.75m、東西2.86mの正方形であった

可能性が高い。壁高は北辺5~8cm、東辺4~15cm、南辺6~7cm、西辺13cmで平均8.9cmである。床面や内部施設は認められない。遺物は中央部にやや集中するが、埋土を含め破壊類に限られる。出土遺物から8世紀第4四半期に比定される。



第127図 H区1号竪穴状遺構・出土遺物

1号土坑 (P L44)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径218×71cm、深さ51cmである。近世陶器片数片が出土している。

4号土坑 (P L44)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径108×78cm、深さ43cmである。

5号土坑 (P L44)

長方形を呈し、南壁はほぼ垂直に立ち上がり、ほかは丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は凸凹して北へ傾斜する。規模は径108×63cm、深さ30cmである。近世陶器片数片が出土している。

6号土坑 (P L44)

長方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径180×63cm、深さ33cmである。

7号土坑 (P L44)

長方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径199×37cm、深さ14cmである。

8号土坑 (P L44)

円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は径97×81cm、深さ43cmである。須恵器1片が出土している。

9号土坑 (P L44)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径121×58cm、深さ26cmである。

15号土坑 (P L44)

長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径75×46cm、深さ15cmである。

25号土坑 (P L44)

長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径82×60cm、深さ7cmである。

31号土坑 (P L45)

長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径153×84cm、深さ11cmである。

37号土坑 (P L45)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや凸凹する。規模は径140×72cm、深さ30cmである。

41号土坑 (P L45)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。中央西端が半円形に落ち込む。規模は径307×107cm、深さ34cmである。

42号土坑 (P L45)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや西へ傾斜する。規模は径178×87cm、深さ53cmである。

47号土坑 (P L45)

長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径252×83cm、深さ60cmである。

48号土坑 (P L45)

短冊状の長方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径538×56cm、深さ80cmである。

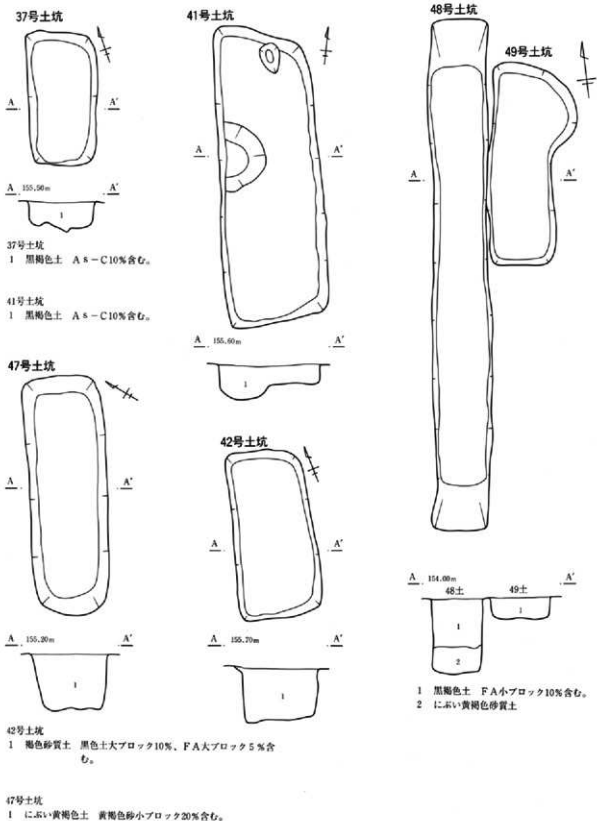
49号土坑 (P L45)

ほぼ長方形を呈し、北東角が丸く張り出す。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径212×69cm、深さ23cmである。

3. 土坑・竪穴状遺構・火葬土坑



第128図 H区土坑 (1)



0 1:40 1m

第129図 H区土坑(2)

4. 溝

概要 本調査区域はC区からG区まで緩やかな谷地形となっており、溝の分布もほぼこの範囲にピークが見られる。調査区域全体の地形は概ね南東方向に傾斜しており、この方位に走向する溝はほぼ流水痕跡をもって規模の大きなものが多い。特に平坦な現在の地形から想像できないほど、過去の地形は起伏に富んでおり、C・F・G区では旧河道や小谷地、またこの谷水を利用したF A下水田跡（古墳時代）がD区・E区で検出されるなど、過去の小規模な水路の存在が判明しており、これを利用するための溝が多く検出された。なお、C区からG区までの範囲はA s-B下段階（平安時代）の水田範囲となっており、F区ではA s-B直下または相当層位面で同様な走向方位を持った一連の溝群が十数条検出された。このため、A s-B直下の溝群はその性格上関連が深いものとして、A s-B下水田跡といっしょに扱うこととした。

B区5号溝（P L46）

位置 南東端 1J-1K-19-21グリッド

重複 F A下水田跡よりも新しい。

形態 はほぼ直線状で、東端が北へやや膨らむ。規模は10.50×1.20m、深さは断面観察部で51cmである。走向方位はN-20°-W程である。断面はU字状。流水痕跡は見られない。

出土遺物 なし

時期 不明

C区1・2・3・4号溝（P L46・139）

位置 中央部2I-2M-18-21グリッド

重複 A s-B下水田より新しく、1号道路跡とは新旧関係不明。

形態 全て直線状で重複するが、新旧関係不明。規模は1号溝で26.75×0.13m、深さ58cm、走向方位はN-45°-W程である。2号溝は26.00×0.36m、深さ16cm、走向方位はN-40°-W程である。3号溝で25.90×(0.48)m、深さ10cm、走向方位はN-40°-W程である。4号溝は(14.80)×(0.72)m、深

さ13cm、走向方位はN-45°-W程である。断面形は1・4号溝がU字状で、2・3号溝が方形を呈する。1号溝の東端は南方向に膨らみ、やや大きい石が見られる。1号溝は明確な流水痕跡は見られないものの、底面がやや荒れ、石が多く混入するとともに、土地改良前の用水路に位置的に重なっており、近年まで用水路として踏襲使用されてきた溝と認められる。また、並走する2号溝も形状から1号溝と同じ性格と思われる。

出土遺物 1号溝から土師器片と近世以降の陶磁器片がやや多く出土しているが、ガラス片も混入する。
時期 埴土及び出土遺物から近世以降と考えられる。

D区15号溝（P L46）

位置 北端30-3S-17-21グリッド

重複 17-20号溝、A s-B下水田跡より古い。

形態 L字状。北壁から長さ21.90mではほぼ垂直に東に折れ、更に13.80m走向して調査区域外へ延びる。幅は1.6m程で、深さは断面観察部で60cmである。走向方位は南北軸でN-10°-W程、東西軸でN-80°-W程である。断面は乱れたU字状で、壁や底面は浸食されて凹凸することから、相当量の流量があったものと推測される。埋土の上層にはA s-Bが厚く堆積し、A s-B下水田面でも水路として機能していた可能性もあることから、A s-B下面では6号溝という遺構名を付したが、水田跡埋没後の土圧によって陥没した可能性もある。北側町道を挟んでE区26号溝と同一の溝であると見られる。

出土遺物 なし

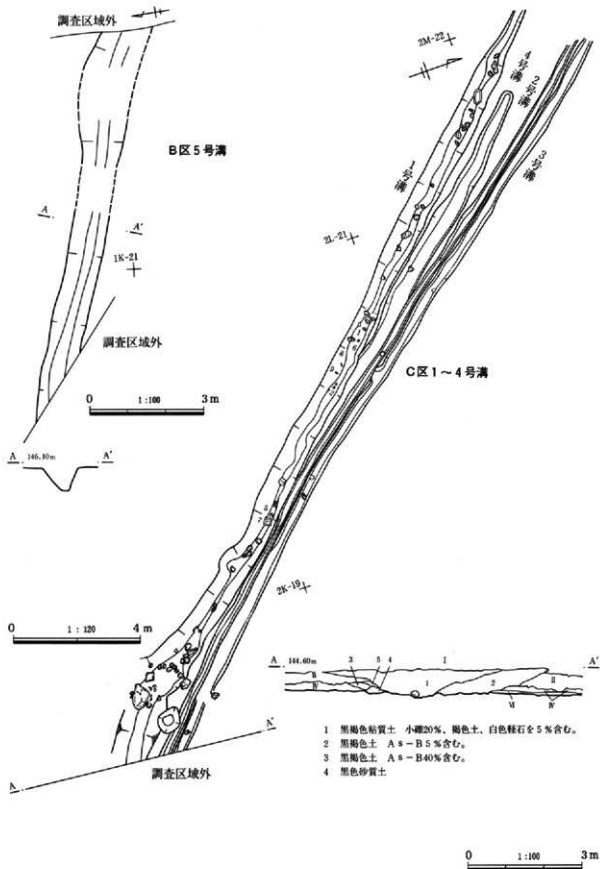
時期 F A及びA s-Bの堆積状況から奈良・平安時代に比定される。

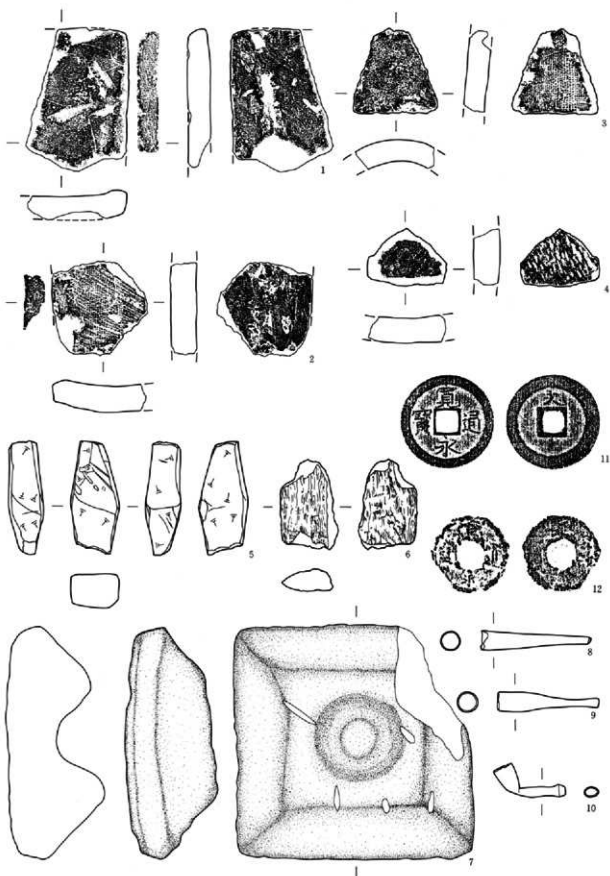
D区17号溝（P L47・140）

位置 北端3R-3S-17-21グリッド

重複 15・23号溝より新しい。

形態 はほぼ直線状。規模は16.58×1.92m、深さは断面観察部で41cmである。走向方位はN-70°-W程である。断面は皿状。埋土中に硬化面を持ち、一





第131图 C区1号清出土遺物

部は道路跡と見られることから、本遺構は道路側溝の可能性が高い。土地改良前の径道と位置的に重なっており、近年まで踏襲して使用されていた。

出土遺物 1の棒状鉄器のほかは、近世以降の陶磁器片がやや多く出土している。

時期 出土遺物から近世以降と考えられる。

D区18・19・20号溝 (P L 46)

位置 北半部30～3Q-17～21グリッド

重複 15・23号溝、A s-B下水田跡より新しい。

形態 ほは直線状で外形は波打ち、18号溝は北へやや湾曲する。19・20号溝は重複しており同一の溝である可能性が高い。規模は18号溝で21.28×2.40m、深さは断面観察部で110cm、走向方位はN-70°-95°-W程である。19号溝は7.42×1.76m、深さは断面観察部で94cm、走向方位はN-65°-W程である。

20号溝は16.60×1.48m、深さは断面観察部で85cm、走向方位はN-80°-W程である。断面はともにU字状で、調査区全体の地形と同じく、底面は南東方向に緩やかに傾斜している。また、底面は荒れており流水していたものと認める。

出土遺物 なし

時期 A s-Bとの層序から中世以降である。

D区22号溝 (P L 47・140)

位置 中央部3F～3J-17～21グリッド

重複 なし

形態 ほは直線状で、南東へ向かって若干幅が広がる。規模は13.14×2.09m、深さは断面観察部で50cmである。走向方位はN-50°-W程である。断面はU字状で、調査区全体の地形と同じく、底面は南東方向に緩やかに傾斜している。また、底面はやや荒れており、埋土に小礫を多く含むことから流水していたものと認める。本遺構は、土地改良前の用水路と位置的に重なっており、近年まで踏襲して使用されていたと見られる。近接する1号井戸と関連する可能性が高い。

出土遺物 土師器片と明治以降の陶磁器類がやや多く出土している。

時期 埋土及び出土遺物から中世以降と考えられる。

E区8・9号溝 (P L 47・140・141)

位置 南調査区北東端 4H-4O-18・19グリッド

重複 10・11・14号溝と新旧関係不明。

形態 ともに直線状。規模は8号溝で32.50×1.85m、深さは断面観察部で40cm、走向方位はN-15°-W程である。9号溝は18.00×1.30m、深さは断面観察部で33cm、走向方位はN-10°-W程である。断面はともにU字状で、調査区全体の地形と同じく、底面は南東方向に緩やかに傾斜している。砂を底面近くを含み、若干流水していたものと認める。

出土遺物 8号溝では1の棒状鉄製品のみが出土している。9号溝では少ない出土量でも、近世以降の陶磁器類が多くを占める。

時期 出土遺物から近世以降と考えられる。

E区10号溝 (付図2・P L 141)

位置 南調査区北半部 4K-4L-19・20グリッド

重複 8号溝と重複するが、新旧関係不明。

形態 直線状。規模は7.16×0.62mである。走向方位はN-75°-W程である。断面形不明。

出土遺物 掲載遺物のみが出土している。

時期 出土遺物から近世以降と考えられる。

E区12・14号溝 (P L 49)

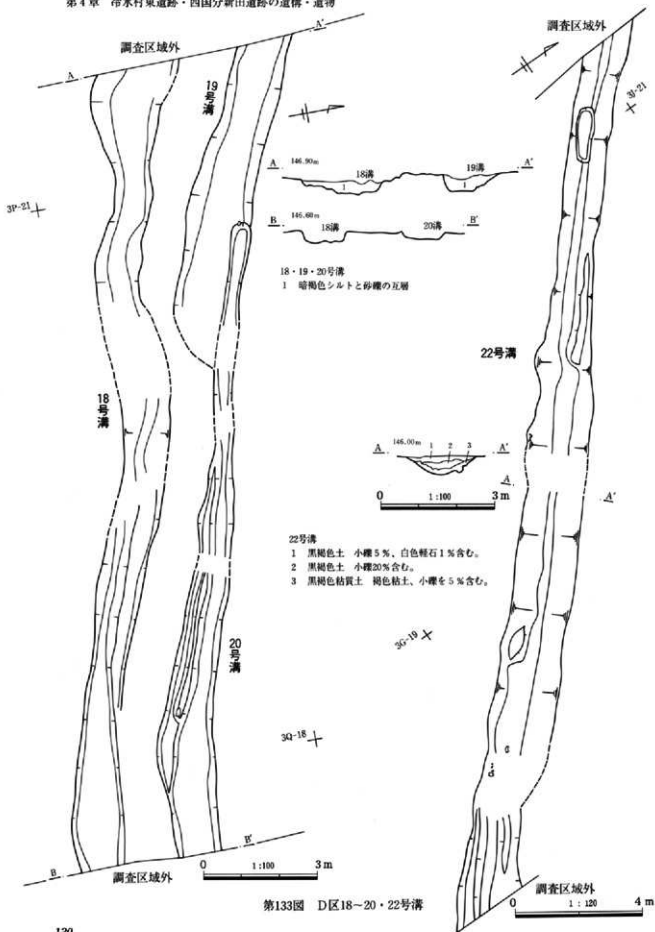
位置 南調査区中央部 4G-4H-18～21グリッド

重複 26号溝より新しい。

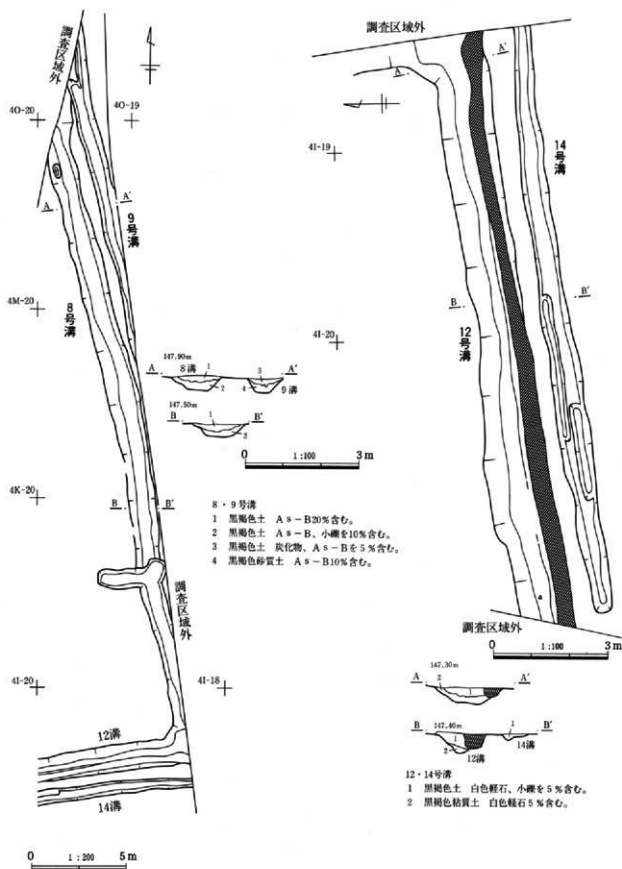
形態 ともにほは直線状。規模は12号溝で15.50×2.00m、深さは断面観察部で45cmである。走向方位はN-80°-E程である。14号溝は15.60×0.85m、深さは断面観察部で15cmである。走向方位はN-80°-E程である。断面は凸凹したU字状で、底面はほは水平。底面直上に粘質の黒色土が堆積しており、湿った状況にあった可能性が高い。本遺構は土地改良前の径道に位置的に重なっており、近年まで道路側溝として踏襲して使用されていたと見られる。

出土遺物 土師器・須恵器片がわずかに出土している。

時期 位置及び埋土から近世以降と考えられる。



第133図 D区18～20・22号溝



第134図 E区8・9・12・14号溝

E区25号溝 (PL48)

位置 北調査区東端 40-4Q-20・21グリッド

重複 A s-B下水田跡より古い。

形態 不整形を呈する。規模は3.30×8.90m、深さは断面観察部で98cmである。走向方位は不明。埋土上層にA s-Bが厚く堆積しており、A s-B下水田面でも不整形のへこみとして検出されたが、水田との並存は成立しないため、埋没後の土圧によって陥没したものと思われる。埋土に砂礫が顕著であり、相当量の流水量が推測されることから、東側調査区域外に流水痕跡をもった溝などの遺構が広がるものと想定される。この場合、位置及び埋土からE区26号溝 (E区A s-B下6・7号溝)、D区15号溝 (D区A s-B下6号溝) へと結ばれる一連の遺構である可能性が高い。

出土遺物 なし

時期 FA及びA s-Bの堆積状況から奈良・平安時代に比定される。

E区26号溝 (PL48)

位置 南調査区を南北に縦走する。

重複 12・14号溝より古い。

形態 ほぼ直線状で、外形は波打つ。規模は49.50×3.00m、深さは断面観察部で90cmである。方位はほぼ南北に走向する。断面は乱れたU字状で、壁・底面とも浸食により凸凹しており、底面近くには砂礫が厚く堆積していることから、相当量の流水量があったものと推測される。A s-B下水田面でも水路として機能していた可能性があり、6・7号溝の遺構名を付したが、埋没後の土圧によって陥没した可能性もある。位置及び埋土から、南側町道を挟んでD区15号溝と同一の溝であると見られる。

出土遺物 なし

時期 FA及びA s-Bの堆積状況から奈良・平安時代に比定される。

F区5号溝 (PL48・141)

位置 F区南側

重複 なし

形態等 F区南側に位置するA s-B層下水田から

北へ延び5 J-22グリッドではほぼ直角に走行を西へ変える。本溝は、その位置・走行関係から畑と関係するものであると考えられる。断面は、逆台形を呈す。規模は、幅が南北方向では1.00m前後、東西方向が1.50-2.00m、深度25cm前後を測る。埋没土は、畑と類似したA s-Bが混入した褐灰色である。

出土遺物 覆土内より土師器・須恵器・灰釉陶器の小片と図示した瓦・刀子片が出土している。

時期 埋没土等の状態から中世に比定される。

(神谷)

F区9号溝 (PL48・141)

位置 F区6 C-24グリッドから5 P-22グリッドにかけて調査区を斜めに横断するように位置する。

重複 現代の耕作痕との重複が見られるが、古代・中世等の遺構との重複は確認されなかった。

形態 本溝は、調査区内を北西から南東へ斜めに横断するようにN-42°-W程の走行を示す。断面は、半円形に近い形態を呈す。規模は、西側で幅2.50-2.70m、東側では1.00-1.30m、深度17-50cmを測る。埋没土は最下層にやや粘土性ある褐灰色が堆積し、その上層に褐色砂を含んでいることから水路的な性格が窺える。

出土遺物 覆土内より土師器・須恵器の小片が出土しているが図示可能な遺物は1の土師器杯1点であった。

時期 出土遺物・埋没土等から8世紀後半に比定される。

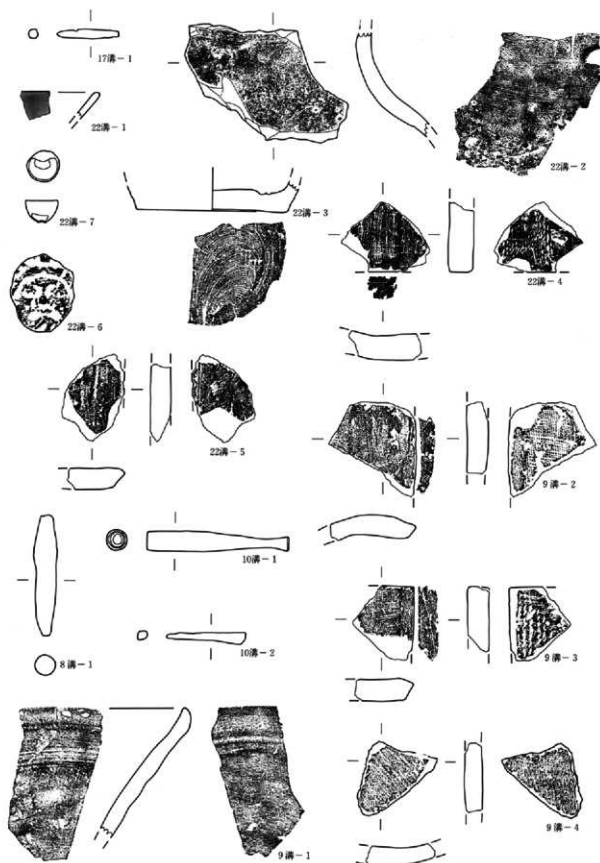
(神谷)

G区1号溝 (PL48・49)

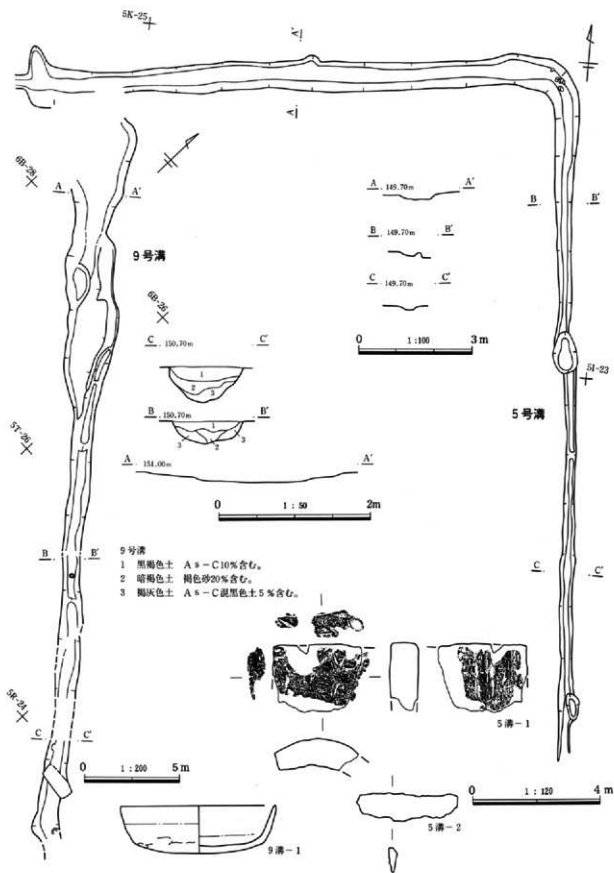
位置 G区7 A-31グリッドから6 M-25グリッドにかけて調査区を斜めに横断するように位置する。

重複 1号井戸、2号井戸、2号溝、3号溝、5号溝、8号溝、9号溝と重複するが、井戸と3号溝は後出、その他は前出である。

形態等 本溝は、蛇行が見られるが、N-30°-W程の走行を示している。断面は、三角形を呈している。規模は、幅3.70-6.00m、深度1.75-2.10mを測る。底面は、多くの凹凸が見られ、砂礫層の堆積が観察されることから水路としての機能が考えられ



第136図 D区17・22号溝・E区8～10号溝出土遺物



第137図 F区5・9号溝・出土遺物

る。埋没土は底部付近の砂礫層上部がAs-Bで覆われておりAs-B降下時に短期間に埋没している。
出土遺物 覆土内より土師器・須恵器の小片が出土しているが図示可能な遺物はなかった。

時期 1号溝は、8世紀代の2号溝と重複しそれより後出であることとAs-Bで埋没していることから9世紀から10世紀にかけて開削され、As-Bの降下年代である1108年ごろに埋没・廃棄されたと推測される。(神谷)

G区2号溝 (PL49・141)

位置 G区北側にL字状に位置する。

重複 1号墓域、1号溝と重複するが、本溝のほうが前出である。

形態等 本溝は、調査区内では7E-27グリッドから6S-28グリッドにかけては南北方向N-8°-W程、そして6S-28グリッドではほぼ直角に走行を変え、6S-28グリッドから西側は東西方向N-82°-W程へ走行を示している。断面は、逆台形状を呈す。規模は、確認面での幅1.80-2.50m、底部幅1.00-1.10m、深度75cm前後を測る。埋没土は、土層断面A-A'では明確でなかったがB-B'の観察では、最初に西側からの土砂の崩落が見られ西側に溝掘削時の土砂で土壘が構築されていた可能性が想定される。

本溝は、直角に走行を変化させていることや一部で土壘を構築していた可能性がみられることから区画溝の可能性もある。なお、本溝が区画溝とすると北辺を区画する溝はG区、H区で検出されていないことから現道の下に想定される。区画の規模は、南北約45mほどの範囲が想定される。しかし、その区画の内部からの掘立柱建物や住居等の遺構は検出は確認されなかった。

出土遺物 覆土内より須恵器杯の小片が数点出土しているが図示可能な遺物は1の須恵器長頸壺1点であった。

時期 2号溝の時期については、出土遺物、重複関係から8世紀代に比定される。(神谷)

G区3号溝 (PL50)

位置 G区の中ほどを横断するように位置する。

重複 1・5・8号溝等と重複するが本溝のほうが後出である。

形態等 本溝は、調査区内では6P-26グリッドで走行を変化させている。その走行は、6P-26グリッド以西ではN-102°-W程、6P-26グリッド以東ではN-8°-E程である。断面は、U字形を呈す。規模は、幅0.40-0.60m、深度35-40cmを測る。埋没土はAs-Bが混入した褐色土が主体である。

出土遺物 覆土内より土師器・須恵器の小片が若干出土している。

時期 重複関係・埋没土の状況から中世から近世に比定される。(神谷)

G区4号溝

位置 中央部 6K-6R-28・29グリッド

重複 3号溝、2号As-B混土島跡より古く、13号土坑、4号井戸とは新旧関係不明。

形態 ほぼ直線状で、南半から東へ若干折れてくの字状をなし、北端部は東へ若干折れる。規模は30.10×1.20m、深さは断面観察部で24cmである。走向方位はN-0°-10°-E程である。断面はU字状。流水痕跡は見られない。同様な走向方位を示す5・8号溝と近接しており関連が想定されるが性格不明。

出土遺物 なし

時期 埋土から中世以降と考えられる。

G区5号溝 (PL49)

位置 中央部 6K-6Q-28・29グリッド

重複 1・3・6号溝、2号As-B混土島跡より古い。

形態 ほぼ直線状。規模は31.80×0.80m、深さは断面観察部で18cmである。走向方位はN-80°-W程である。断面はU字状。流水痕跡は見られない。同様な走向方位を示す4・8号溝と近接しており関連が想定されるが性格不明。

出土遺物 なし

時期 埋土から中世以降と考えられる。

G区6号溝 (PL49)

位置 中央部西寄り 6L-6O-28・29グリッド

重複 4号土坑、5号溝より新しい。

形態 ほぼ直線状。規模は16.20×0.55m、深さは断面観察部で24cmである。走向方位はN-15°-E程である。断面はU字状。流水痕跡は見られない。同様な走向方位を示す7・9号溝と近接しており関連が想定されるが性格不明。

出土遺物 なし

時期 埋土から中世以降と考えられる。

G区8号溝 (P L50)

位置 南半部 6E-6Q-26・27グリッド

重複 1・11号溝より新しく、10号溝より古い。

形態 ほぼ直線状。規模は64.70×0.95m、深さは断面観察部で18cmである。ほぼ南北に走向する。断面はU字状で浅い。調査区全体の地形と同じく、底面は南方向に緩やかに傾斜している。流水痕跡は見られない。同様な走向方位を示す4・5号溝と近接しており関連が想定されるが性格不明。A8-B下である11号溝とも規模は類似するが関連不明。

出土遺物 なし

時期 埋土から中世以降と考えられる。

G区9号溝 (P L50)

位置 中央部東寄り 6L-6M-26グリッド

重複 1号溝より古い。

形態 ほぼ直線状。規模は8.00×0.55m、深さは断面観察部で12cmである。走向方位はN-15°-E程である。断面はU字状で浅い。流水痕跡は見られない。同様な走向方位を示す6・7号溝と近接しており関連が想定されるが性格不明。

出土遺物 なし

時期 埋土から中世以降と考えられる。

G区10号溝 (P L50)

位置 南半部 6J-25-28グリッド

重複 8号溝より新しい。

形態 ほぼ直線状で西半部がやや南に折れ、西に向かってやや広がる。規模は14.60×0.58m、深さは断面観察部で14cmである。走向方位はN-85°-Eである。断面はU字状で浅い。流水痕跡は見られない。

出土遺物 なし

時期 埋土から中世以降と考えられる。

H区1号溝 (P L50)

位置 南端 7I-7J-28-30グリッド

重複 2号溝より古い。

形態 ほぼ直線状。規模は10.70×0.88m、深さは断面観察部で38cmである。走向方位はN-5°-W程である。断面は逆台形で、底面は東方向に緩やかに傾斜している。流水痕跡は見られない。

出土遺物 なし

時期 埋土から中世以降と考えられる。

H区2号溝 (P L50)

位置 南東角 7I-7J-28グリッド

重複 1号溝より新しい。

形態 ほぼ直線状。規模は5.66×0.50m、深さは断面観察部で27cmである。走向方位はN-25°-Wである。断面はU字状で浅く、底面は南方向に緩やかに傾斜している。流水痕跡は見られない。

出土遺物 なし

時期 埋土から中世以降と考えられる。

H区3号溝

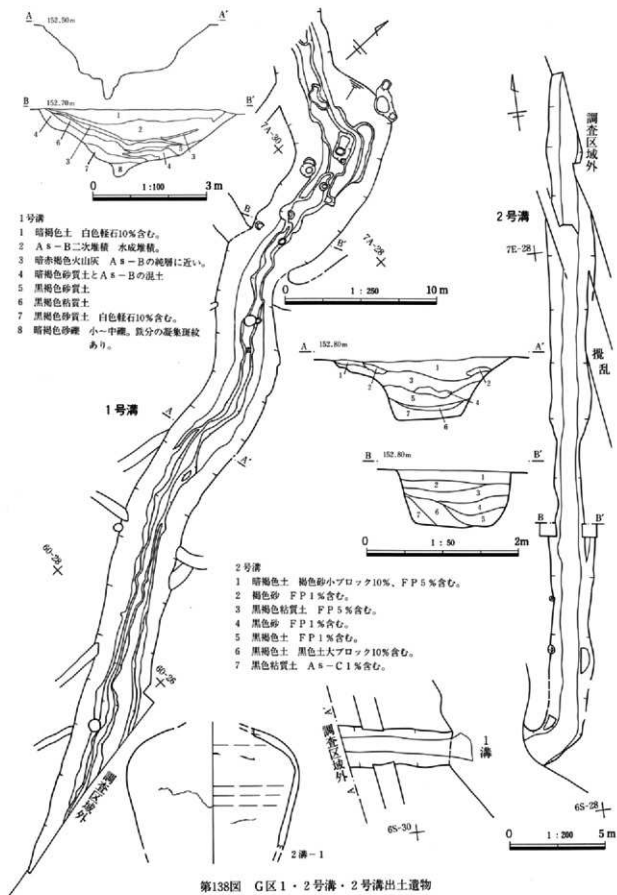
位置 北西端 8F-8I-32-36グリッド

重複 なし

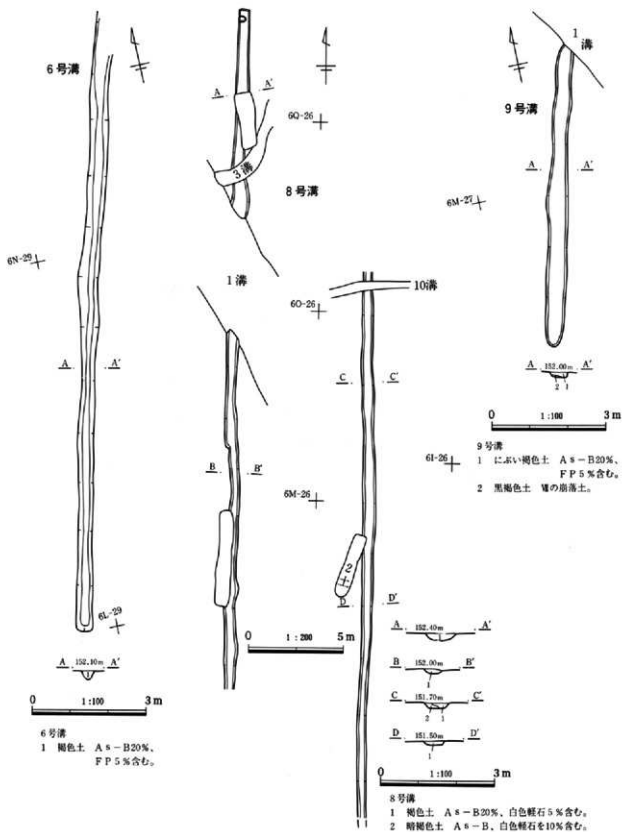
形態 ほぼ直線状。規模は19.70×1.45m、深さは断面観察部で14cmである。走向方位はN-40°-Wである。断面は皿状で浅く、底面はやや凸凹するがほぼ平坦。調査区全体の地形と同じく、底面は南東方向に緩やかに傾斜している。流水痕跡は見られない。

出土遺物 なし

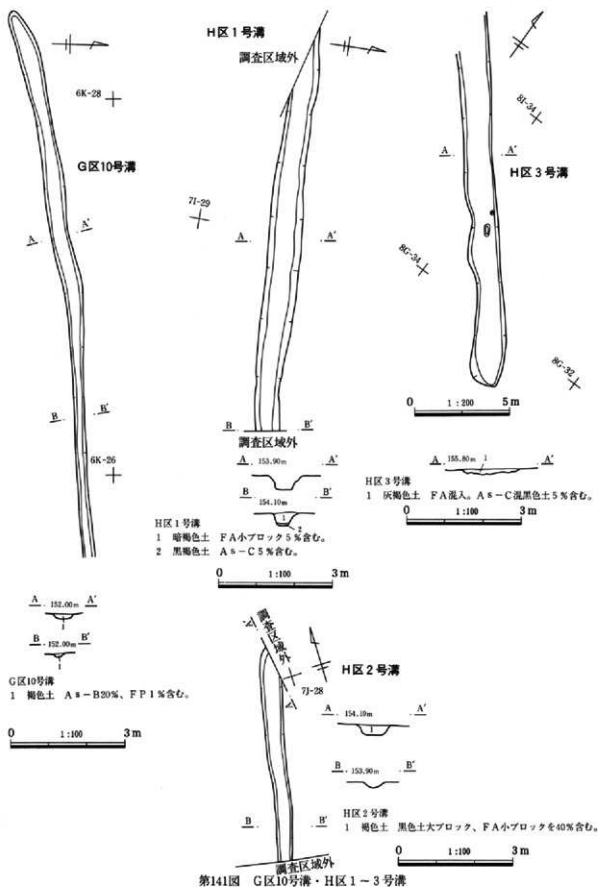
時期 埋土から中世以降と考えられる。



第138図 G区1・2号溝・2号溝出土遺物



第140図 G区6・8・9号溝



5. 井戸跡

D区1号井戸跡 (PL51)

位置 中央部 3H・3I-19グリッド

重複 32号住居跡よりも新しい。

確認面形状と規模 不整形円形。径1.05×0.82m。

底面形状と規模 不明

断面形 漏斗状

深さ 2.35m以上

標高 上面145.96m

アグリ なし

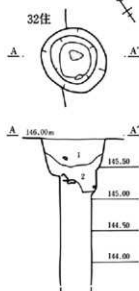
湧水層 調査時は湧水なし。

埋没状況 自然埋没か人為埋没が不明。

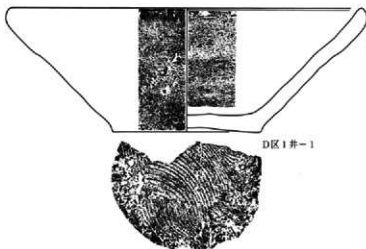
出土遺物 1の鉢のみが出土している。

時期 14世紀後半に比定される。

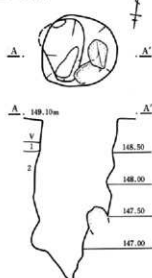
D区1号井戸



- 1 暗褐色土 FA、砂を5%含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロック、FA、砂を5%含む、しまらない。



F区1号井戸



- 1 黒褐色土 白色砂大ブロック20%含む。
- 2 灰黄褐色～暗褐色砂質土とシルトの互層 固くしまる。水成堆積。

F区1号井戸跡 (PL51・141)

位置 中央部東端 5J-22グリッド 重複 なし

確認面形状と規模 不整形円形。径1.09×0.89m。

底面形状と規模 不整形円形。径0.56×0.10m。

断面形 円筒形で、中程から底部へ円錐状を呈する。

深さ 2.60m 標高 上面149.08m、底面146.48m。

アグリ 最上部は深さ76cm、標高148.32m、最下部

は深さ200cm、標高147.08m。最下部の浸食が著しい。

湧水層 調査時は湧水なし。地山の2は水成堆積で

第142図 D区1号井戸・出土遺物・F区1号井戸

0 1:60 2m

透水性が高い。

埋没状況 暗褐色土で自然埋没か人為埋没か不明。

出土遺物 なし 時期 不明

G区1号井戸跡 (PL51)

位置 中央部 6S-28グリッド

重複 1号溝より新しい。

確認面形状と規模 1号溝の底面を確認面として、不整形円形を呈する。径0.74×0.72m。

底面形状と規模 不整形円形。径0.26×0.26m。

断面形 円筒形

深さ 1号溝の底面から1.07m、上面から2.36m。

標高 1号溝上面で152.45m底面で151.16m、井底は148.37m。

アグリ なし 湧水層 なし

埋没状況 暗褐色土で自然埋没か人為埋没か不明。

出土遺物 なし

時期 A s-Bとの層序から中世以降と考えられる。

G区2号井戸跡 (PL51)

位置 中央部東端 6N-26グリッド

重複 1号溝より新しい。

確認面形状と規模 1号溝の肩部を確認面として、不整形円形を呈する。径0.72×0.70m。

底面形状と規模 不整形円形。径0.63×0.59m。

断面形 円筒形

深さ 1号溝の肩部から2.87m、1号溝の上面から3.41m。

標高 上面151.22m、底面148.37m。

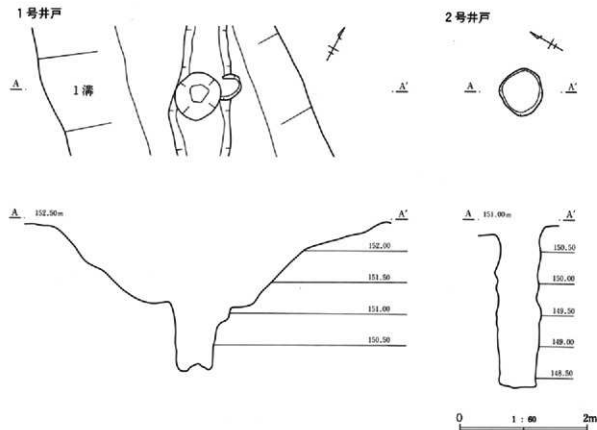
アグリ 最上部は深さ74cm、標高150.48m、最下部は深さ169cm、標高149.53mで、その中間にもう1か所見られる。浸食は小さい。

湧水層 調査時は湧水なし。深さ1m程下層から水成堆積となり透水性が高い。

埋没状況 暗褐色土で自然埋没か人為埋没か不明。

出土遺物 なし

時期 A s-Bとの層序から中世以降と考えられる。



第143図 G区1・2号井戸

G区3号井戸跡 (P.L.51・52・141)

位置 中央部 6R-26・27グリッド 重複 なし

確認面形状と規模 楕円形。径1.18×1.00m。

底面形状と規模 円形。径0.70×0.70m。

断面形 円筒形 深さ 3.04m

標高 上面152.17m、底面149.13m。

アグリ 最上部は深さ160cm、標高150.57m、最下部は深さ205cm、標高150.12mである。浸食はわずか。

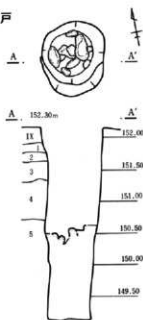
湧水層 調査時は湧水なし。地山の3以下は水成堆積で透水性高い。

埋没状況 上面から1.55m程に小礫が集中し人為埋填。その後は暗褐色土で自然埋没か人為埋填か不明。

出土遺物 出土した馬歯は全て左下顎。

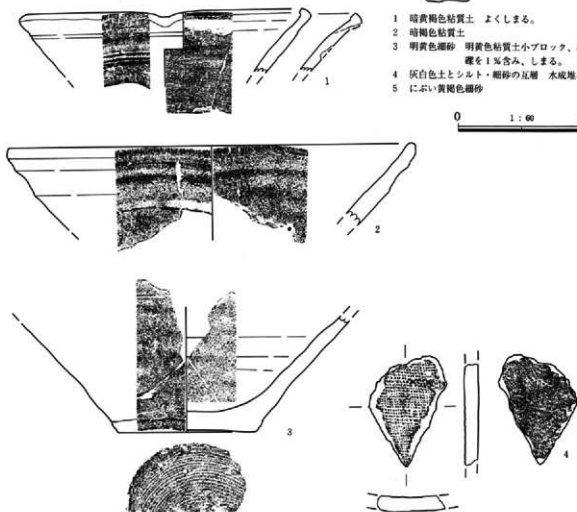
時期 出土遺物から14世紀後半に比定される。

3号井戸

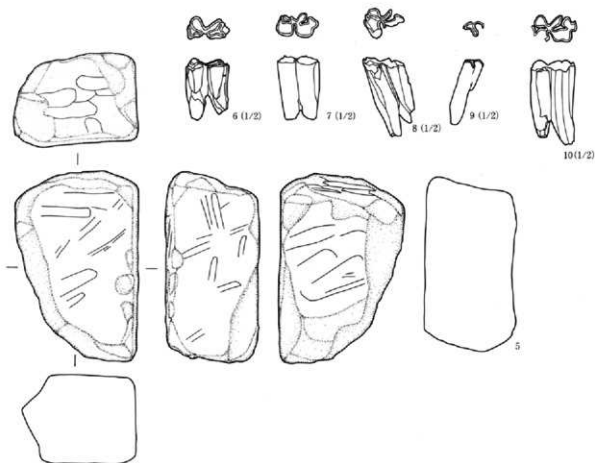


- 1 暗黄褐色粘質土 よくしまる。
- 2 暗褐色粘質土
- 3 明黄色細砂 明黄色粘質土小ブロック、小礫を1%含み、しまる。
- 4 灰白色土とシルト・細砂の互層 水成堆積。
- 5 にぶい黄褐色細砂

0 1 : 60 2m



第144図 G区3号井戸・出土遺物 (1)



第145図 G区3号井戸出土遺物(2)

G区4号井戸跡 (P.L.52・142)

位置 中央部西寄り 6Q-28・29グリッド

重複 13号土坑と重複するか新旧関係不明。

確認面形状と規模 円形。径1.28×0.90m。

底面形状と規模 円形。径0.67×0.50m。

断面形 円筒形

深さ 1.98m

標高 上面152.27m、底面150.29m。

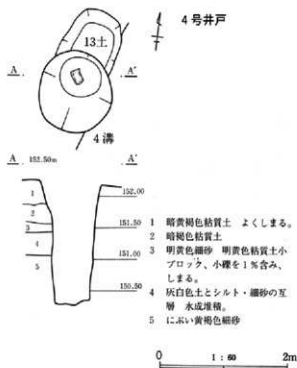
アグリ 1か所のみで、深さ128cm、標高150.99mである。浸食はわずか。

湧水層 調査時は湧水なし。地山の3以下は水成堆積で透水性高い。

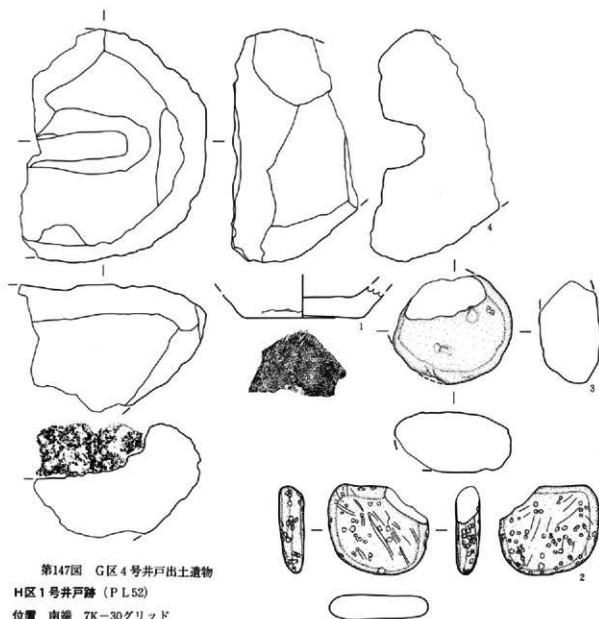
埋没状況 暗褐色土で自然埋没か人為埋没か不明。

出土遺物 掲載遺物のほか軟質陶器片2片が出土している。

時期 出土遺物から中世と考えられる。



第146図 G区4号井戸



第147図 G区4号井戸出土遺物

H区1号井戸跡 (PL52)

位置 南端 7K-30グリッド

重複 なし

確認面形状と規模 円形。径1.02×0.94m。

底面形状と規模 不明 断面形 円筒形

深さ 1.10m以上 標高 上面153.91m

アグリ なし

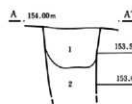
湧水層 調査時は湧水なし。

埋没状況 暗褐色土で自然埋没か人為埋没か不明。

出土遺物 使用痕跡を持つ石1点を含む石が少量出土している。

時期 不明

1号井戸



- 1 黒褐色砂質土 FA10%含む。
- 2 黒色土 FA5%含む。

0 1:60 2m

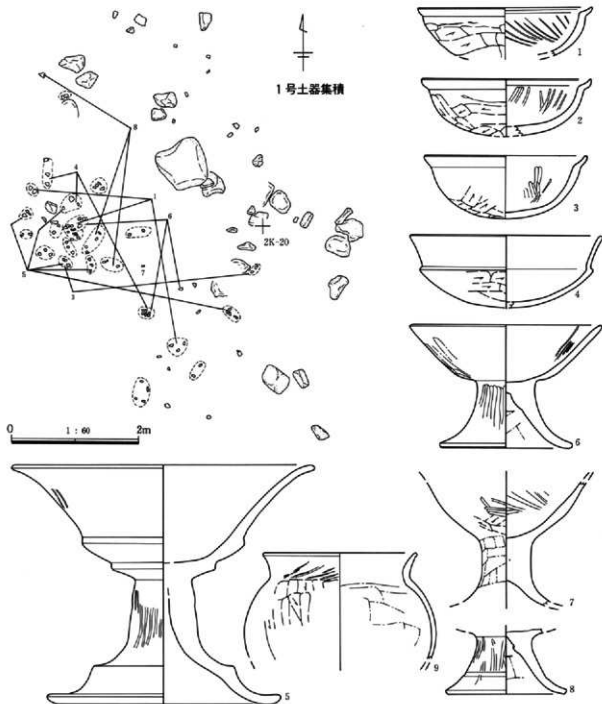
第148図 H区1号井戸

6. 土器集積

C区1号土器集積 (PL52・142)

旧河道の2つある流路の内、北側流路の南側肩部に位置し、ほぼ3.45×2.75mの範囲に集中する。周辺には多くの自然礫が見られるが、配石と考えられるものはない。本遺構は立地から居住域ではなく、

明確な遺構も確認できないことから、祭祀的性格を持つものと想定する。また、後述する旧河道でも同一層位で馬歯が出土しており注目される。出土遺物は5世紀後半から6世紀初めに比定され、やや時間幅がある。A・B・D区の住居跡との関連が想定される。



第149図 C区1号土器集積・出土遺物

7. 畠跡

(1) A s-C混黒色土下畠跡

G区1・2号A s-C混黒色土下畠跡 (PL53)

位置 南半部 6G-6L-24-28グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 1号畠跡の確認範囲は南北16.60m、東西11.70mである。サクは22条あり、削平による断裂を考慮すれば、19条と考えられる。サクの最大長は5.02mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-30°-39°-Eであり、傾斜に対してほぼ直交して直線状をなす。2号畠跡の確認範囲は南北17.10m、東西10.40mである。サクは8条あり、削平による断裂を考慮すれば、5条と考えられる。サクの最大長は4.28mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-8°-18°-Wであり、傾斜に対してほぼ並行して直線状をなす。本遺構は、黒色粘質土 (IX) 上面で上層の

A s-C混黒色粘質土 (VII) が溝状に残存するものをサクとして検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、U字形を呈する。1・2号畠跡は近接するが走向方位が異なっており、その間に区画境或いは耕作境が想定できる。

耕作土 A s-Cを含む黒色粘質土

出土遺物 なし

G区3号A s-C混黒色土下畠跡 (PL53)

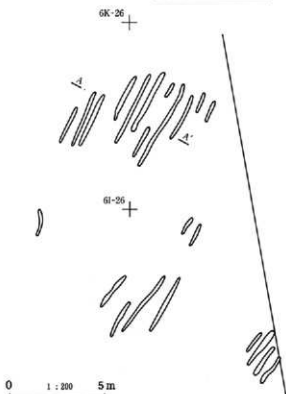
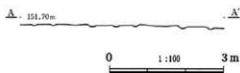
位置 北半部 6S-7G-26-31グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

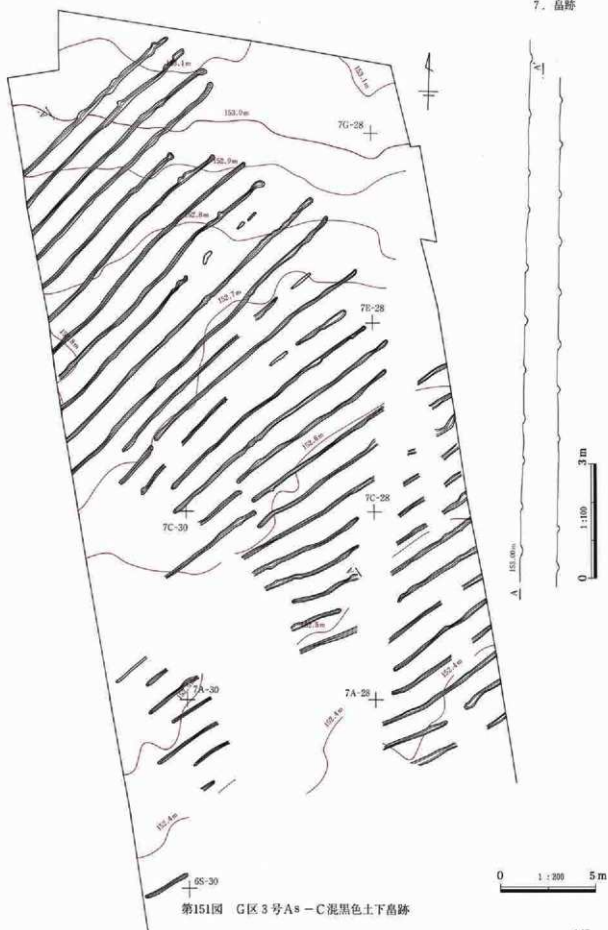
形態 全体の確認範囲は南北45.60m、東西25.50mである。サクは63条あり、削平による断裂を考慮すれば、33条と考えられる。サクの最大長は19.30mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-45°-70°-Eであり、傾斜に対してほぼ直交して直線状をなす。本遺構は、黒色粘質土 (IX) 上面で上層のA s-C混黒色粘質土 (VII) が溝状に残存するものをサクとして検出できたため、全体に緩やかに南東方向に傾斜する。ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、U字形を呈する。

耕作土 A s-Cを含む黒色粘質土

出土遺物 なし



第150図 G区1・2号A s-C混黒色土下畠跡



(2) F A下畠跡

A区F A下畠跡 (P L 53)

位置 ほぼ調査区全体

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北30.80m、東西15.01mである。サクは61条あり、削平による断裂を考慮すれば、16条と考えられる。サクの最大長は10.00mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-3-47°-Wであり、傾斜に対してほぼ直交して直線状をなす。本遺構は、サクにF Aが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、U字形を呈する。また、埋土にはF Aの純堆積と転起土の2種類があったことが、完掘後判明したため、本遺構は2時期の畠跡が重複した様相を示している。

耕作土 A s-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし

B区F A下畠跡 (P L 53)

位置 南半部 1K-1Q-19-23グリッド

地形 全体に緩やかに北東方向に傾斜する。

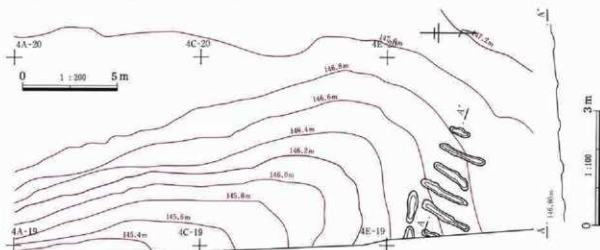
形態 全体の確認範囲は南北32.75m、東西20.90mである。サクは62条あり、削平による断裂を考慮すれば、17条と考えられる。サクの最大長は12.90mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-18-35°-Eであり、傾斜に対してほぼ並行して直線状をなす。本遺構は、サクにF Aが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、U字形を呈する。本区北半部では、削平によりF Aが全く残存していなかったため、元来本遺構も北側へ延びていたと思われる。ただし、C区のF A下で畠跡は検出されないうえ、本遺構が北側に延びても若干の範囲と考える。

耕作土 A s-Cを含む黒褐色土

出土遺物 なし



第152図 A区F A下畠跡



第154図 E区南FA下畠跡

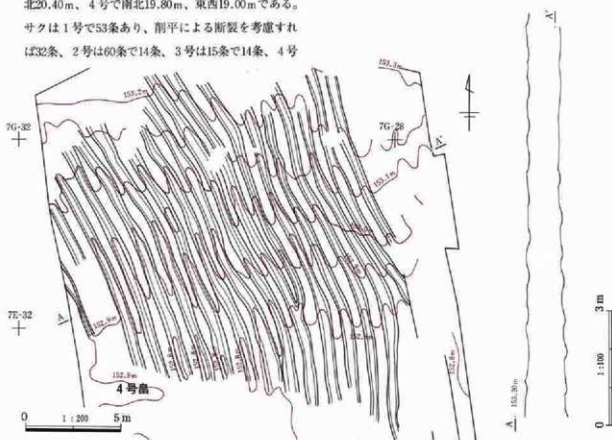
G区FA下畠跡 (P.L.53)

位置 はば調査区全域

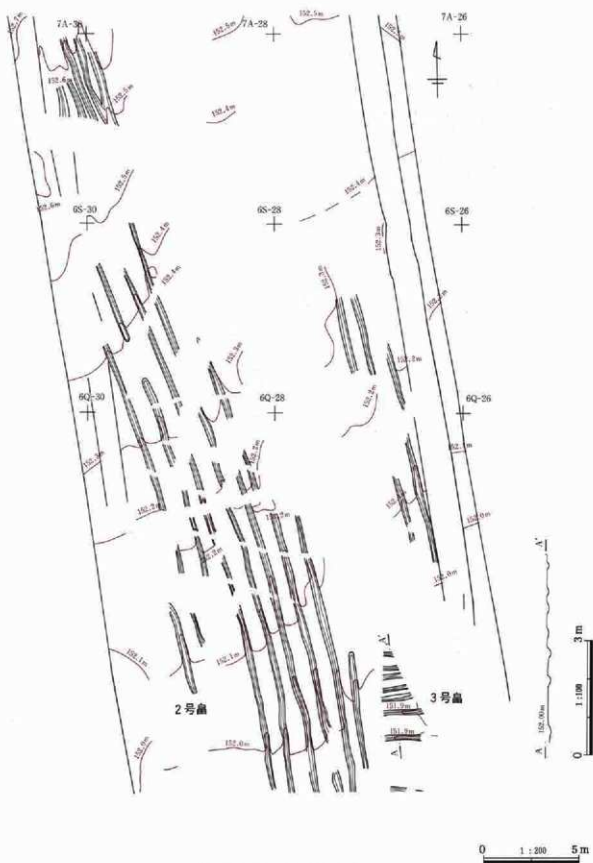
地形 全体に緩やかに南～南東方向に傾斜する。

形態 走向方位により1～4号に細分される。全体の確認範囲は1号で南北27.50m、東西23.75m、2号で南北51.35m、東西18.45m、3号で東西9.65m、南北20.40m、4号で南北19.80m、東西19.00mである。サクは1号で53条あり、削平による断裂を考慮すれば32条、2号は60条で14条、3号は15条で14条、4号

は18条で17条と考えられる。サクの最大長は1号で19.20m、2号で20.70m、3号で3.25m、4号で19.00mを測る。ウネ及びサクの走向方位は1号でN-30°-E程、2号でN-7°-20°-W、3号でN-80°-102°-W、4号でN-8°-35°-Wであり、傾斜に対して1号はほぼ直交、2・4号は並行、3号は斜めに設



第155図 G区FA下畠跡 (1)



第156图 G区FA下晶跡(2)

ける。本遺構は、サクにF Aが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、U字形を呈する。なお、2・3号でサクの間隔が広いのは、削平による残存幅の違いによる。1・2・3号の走向方位の違いは、耕作区画の違いを示すと見られる。走向方位から見て本区2号からH区まで連続する遺構であると見られ、総延長61.50mを測る。

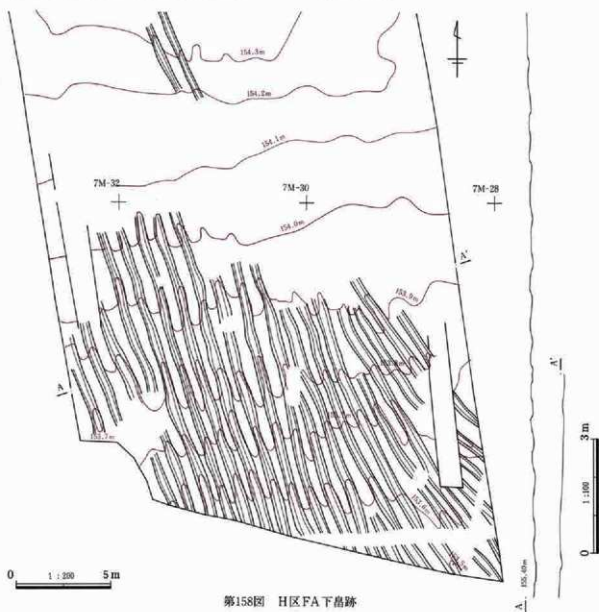
耕作土 A s-Cを含む黒褐色土 出土遺物 なし
H区F A下畛跡 (PL54)

位置 南半部 7I-7N-27-32グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北23.05m、東西19.30mである。サクは40条あり、削平による断裂を考慮すれば、22条と考えられる。サクの最大長は17.30mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-20-36°-Wであり、傾斜に対してほぼ並行して直線状をなし、東南部はやや東方向に湾曲する傾向を示す。本遺構は、サクにF Aが堆積した結果検出できたため、ウネ部は削平されて残存していない。サクの断面形は、U字形を呈する。走向方位から見てG区2号から本区まで連続する遺構であると見られる。

耕作土 A s-Cを含む黒褐色土
出土遺物 なし



第158図 H区F A下畛跡

(3) A s-B 混土畠跡

C区 A s-B 混土畠跡

位置 北東隅 2N-2P-17-19グリッド

地形 緩やかに南西方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北10.80m、東西8.70mである。サクは38条あり、削平による断裂を考慮すれば、22条と考えられる。サクの最大長は7.70mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-53°-E程であり、傾斜に対しては並行して直線状をなす。サクの断面形は、U字形を呈する。

耕作土 A s-B を含む黒褐色土 出土遺物 なし

D区 A s-B 混土畠跡

位置 中央部 3E-3K-18-20グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北26.10m、東西12.00mである。サクは28条あり、削平や22号溝による断裂を考慮すれば、20条と考えられる。サクの最大長は9.22mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-15°-E程であり、傾斜に対して斜めに設ける。サクの断面形は、U字形を呈する。

耕作土 A s-B を含む黒褐色土 出土遺物 なし

F区1号 A s-B 混土畠跡 (P L 54)

位置 中央部南寄り 5G-5J-22-25グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北16.60m、東西15.60mである。サクは173条あり、削平による断裂を考慮すれば、55条と考えられる。サクの最大長は14.70mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-85°-E程であり、確認面の傾斜とは符合しない。サクの断面形は、U字形を呈する。走向方位は、5号溝とともに土地改良前の地割に符合しており、関連する可能性がある。

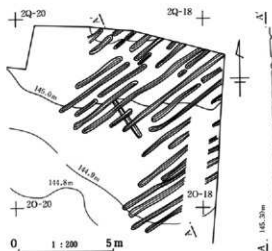
耕作土 A s-B を含む黒褐色土 出土遺物 なし

F区2・3号 A s-B 混土畠跡 (P L 54)

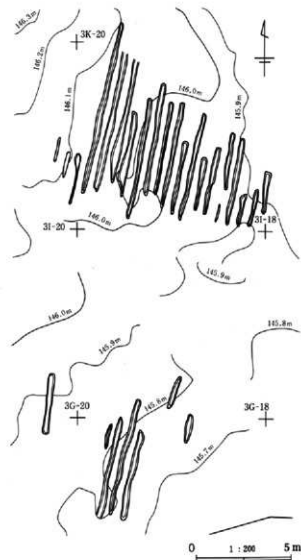
位置 北半部 5Q-6C-23-27グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

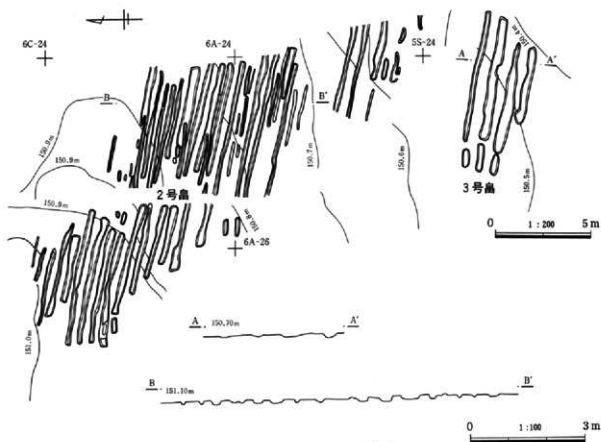
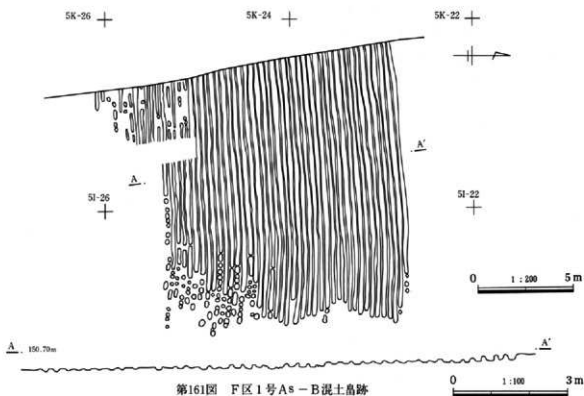
形態 全体の確認範囲は南北13.30m、東西8.65mである。サクは67条あり、削平による断裂を考慮す



第159図 C区 A s-B 混土畠跡



第160図 D区 A s-B 混土畠跡



れば、39条と考えられる。サクの最大長は15.05mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-10°-17°-Eであり、確認面の傾斜とは符合しない。サクの断面形は、U字形を呈する。

耕作土 A s-Bを含む黒褐色土 出土遺物 なし
G区1号A s-B混土畠跡 (P L 54)

位置 中央部東端 6R-6T-26-28グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北13.30m、東西8.65mである。サクは20条あり、削平による断裂を考慮すれば、10条と考えられる。サクの最大長は7.45mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-75°-80°-Wであり、確認面の傾斜とは符合しない。サクの断面形は、逆台形を呈し、最大深36cmと深い。

耕作土 A s-Bを含む黒褐色土 出土遺物 なし
G区2号A s-B混土畠跡 (P L 54)

位置 中央部西寄り 6O-6Q-27-29グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北12.90m、東西10.00mである。サクは15条あり、削平による断裂を考慮すれば、7条と考えられる。サクの最大長は4.60mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-67°-85°-Wであり、確認面の傾斜とは符合しない。サクの断面形は、U字形を呈する。

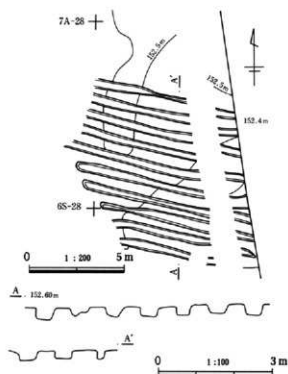
耕作土 A s-Bを含む黒褐色土 出土遺物 なし
G区3号A s-B混土畠跡 (P L 54)

位置 北半部 7D-7G-28-31グリッド

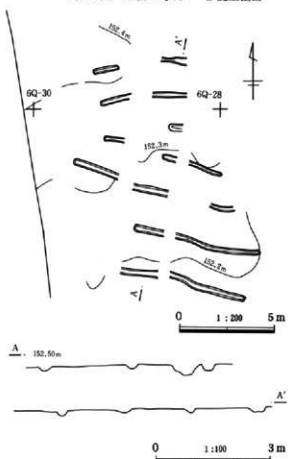
地形 全体に緩やかに南方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北15.60m、東西16.45mである。サクは16条あり、削平による断裂を考慮すれば、8条と考えられる。サクの最大長は8.60mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-80°-103°-Wであり、確認面の傾斜とは符合しない。サクの断面形は、U字形を呈する。

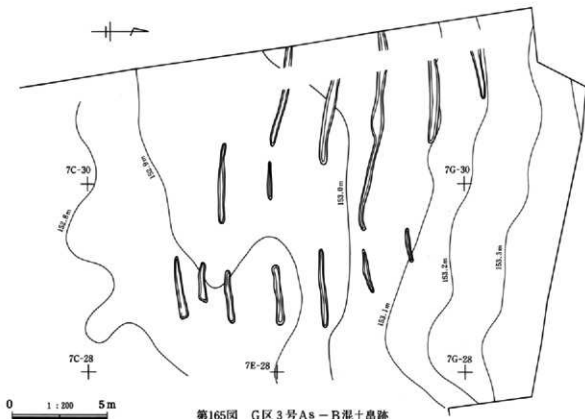
耕作土 A s-Bを含む黒褐色土 出土遺物 なし



第163図 G区1号A s-B混土畠跡



第164図 G区2号A s-B混土畠跡



第165図 G区3号As-B混土畠跡

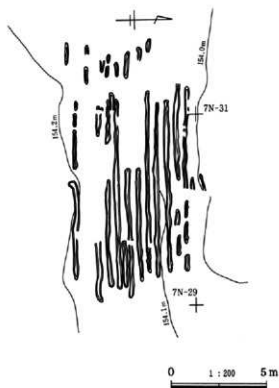
H区1号As-B混土畠跡 (PL54)

位置 南半部 7L~7N-29~31グリッド

地形 全体に緩やかに南方向に傾斜する。

形態 全体の確認範囲は南北7.60m、東西13.80mである。サクは36条あり、削平による断裂を考慮すれば、16条と考えられる。サクの最大長は9.60mを測る。ウネ及びサクの走向方位はN-89°-W程である。サクの断面形は、U字形を呈する。1号土坑や1号井戸など中近世の遺構が周辺に集中しており、関連が想定される。

耕作土 As-Bを含む黒褐色土 出土遺物 なし



第166図 H区1号As-B混土畠跡

8. 水田跡と溝群

(1) F A 下水田跡

D 区 F A 下水田跡 (P L 55)

位置 北半部

地形 3J-17グリッドから3Q-22グリッドに向かって、北西-南東方向に斜めに走向する小谷地を利用する。小谷地の規模は上幅13.60m下幅9.85mを測り、緩やかに蛇行しながら南東方向に傾斜する。走向方位はN-32°-70°-Wである。調査区全体は南東方向へ緩やかに傾斜するが、この小谷地周辺はその方向に傾斜する。

アゼの走向と区画 明確にアゼを検出できたのは、谷底部南半分に限られる。タテアゼは谷を東西に2分割する形で弧状に走向し、それをヨコアゼによって6つの区画に細分する。アゼは良好に残存しており高さ6cm前後を測る。区画の形態は、概ね正方形と長方形が混在する。谷底部北半分は中央部が著しく窪んでおり、ヒトの足跡も見られることから、水田区画ではなく水路として機能していたとも考えられる。ただし、S 6 北側の3P-19グリッド東側部分には、北側から底面へ延びるアゼ状の高まりがあり、この谷底部北半分でも何らかの区画があったことを示唆する。また、3P-21グリッド付近には、人頭大の石を配した不整形形の落ち込みがあり、水を溜めた施設と見られるが用途は不明である。なお、ヒトの足跡が重複及び数量が少ないことは、一時的な歩行を想定させ、F A 降下時に行われていた農作業の一端を示す痕跡と言える。

水田面の面積 各区画面積の詳細は別表のとおりだが、全体に7-31㎡程と全く均整がとれていない。

取配水の方法 明確な水口は見られず、北西方向の谷頭側からのかけ流しと考える。谷底部南半分へ配水するためには、地形から見てS 6へ引水する必要がある。したがって、S 6の北西端部が谷底部北半分へ向かって突き出すように見えるのは、こうした導水痕跡をとどめるものと考えられる。なお、その延長線上には不整形形の水溜施設がある。

耕作土 A s - Cを含む黒色粘質土

出土遺物 なし

E 区北 F A 下水田跡 (P L 55)

位置 北調査区の中央部 4Q-4T-20-24グリッド

地形 北調査区中央部を東西に走向する小谷地を利用する。小谷地は東端で南北に広がる傾向が見える。小谷地底面の規模は上幅最大5.20m下幅最大3.80mを測る。走向方位はN-70°-W程である。谷底面は東方向へ緩やかに傾斜するが、調査区全体はこの小谷地へ傾斜する。

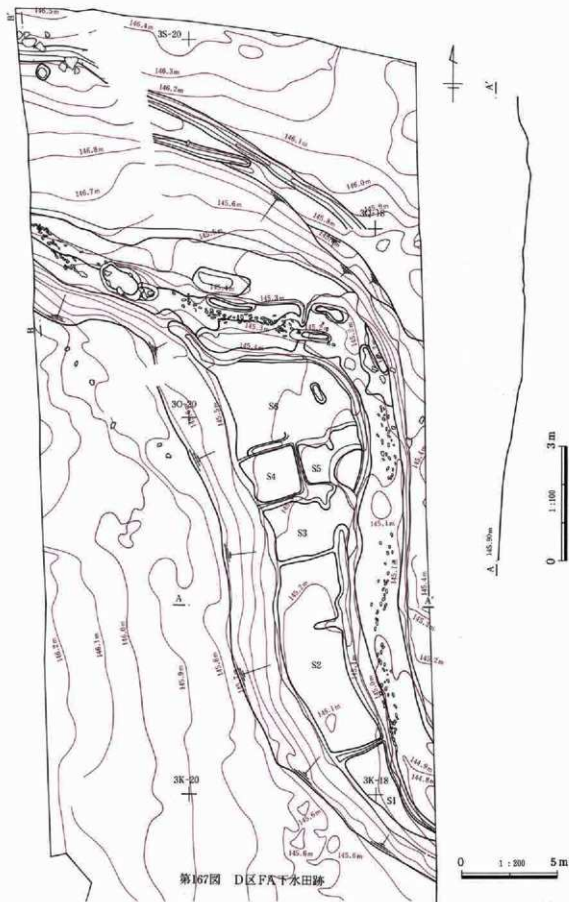
アゼの走向と区画 タテアゼを小谷地底部の中央部に設けて大きく南北に分割し、更にヨコアゼによって北側で9区画、南側で8区画に細分する。アゼの残存は不良だが、最大高さ6cm程の部分もある。区画の形状は、方形が基本である。

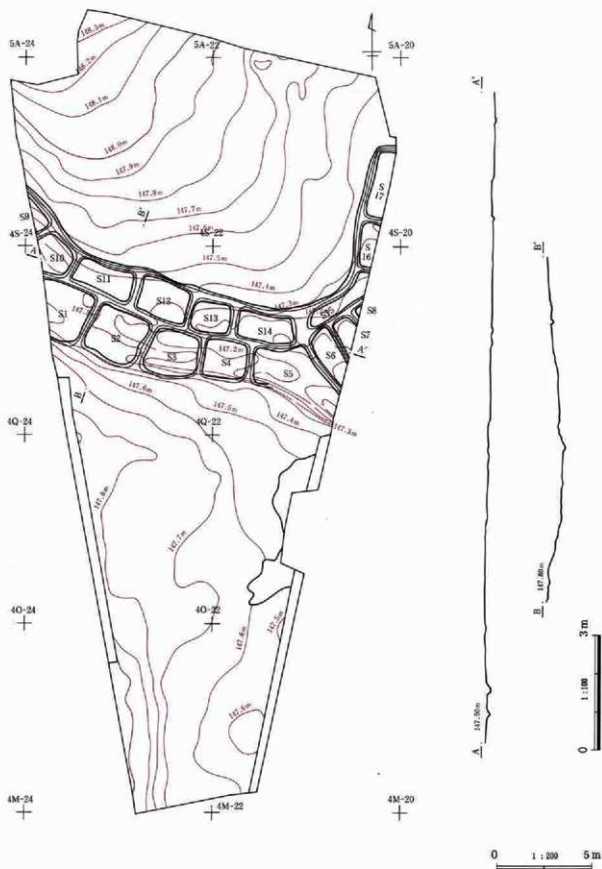
水田面の面積 1区画全てが露呈できたS 2-S 4、S 11-S 14の7区画の面積は、4-7㎡程とやや均整がとれるが、他の区画を含めると数値のバラつきが大きい。

取配水の方法 明確な水口は見られず、西方向の谷頭側からのかけ流しと考える。北東部のS 15-S 17へ配水するためには、北側アゼのすぐ北側のわずかな窪みへ導水したことも想定される。

耕作土 黒色粘質土

出土遺物 なし





第168図 E区北FA下水田跡

(2) A s-B 下水田跡と溝群

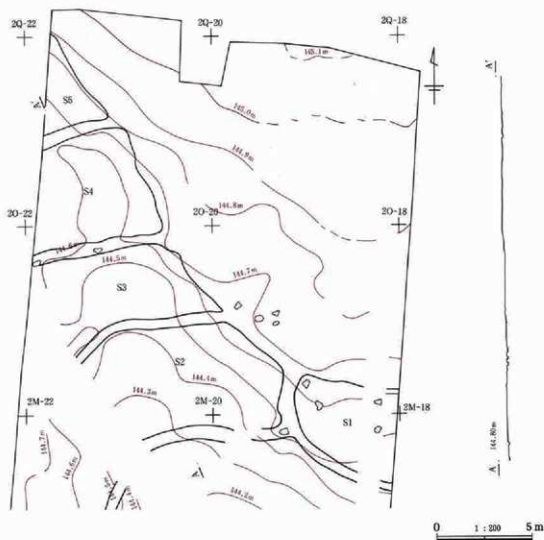
C区 A s-B 下水田跡 (P L56)

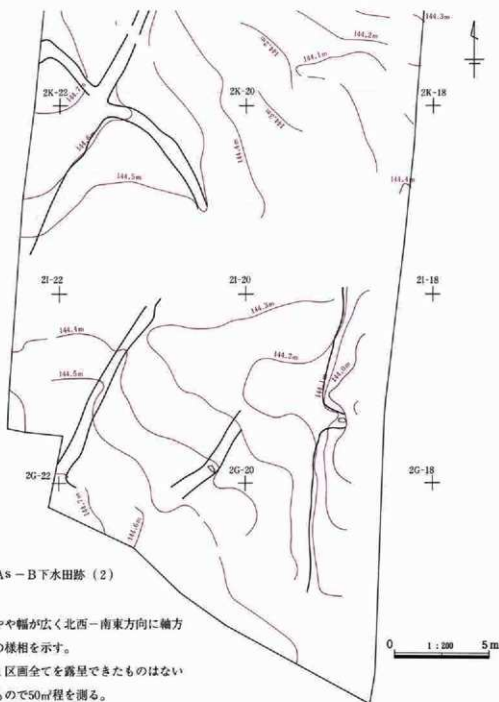
位置 北東角を除く調査区全域

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜するが、グリッド2H~2I 及び2L~2N 付近では、北西-南東方向へ谷状に窪んだ状況となっており、水田面としてはかなり起伏に富んだ地形となる。それは、北東角の水田未検出部分が緩やかに南西傾斜する状況に比して著しい起伏である。ただし、この谷状の窪みの走向する方向は、下層の旧河道底面の主軸方向に一致することから、明らかに埋没後の土圧による陥没によって形成されたものと判断できる。したがって、水田面の傾斜は全くその陥没の影響下にあり、元来

埋没以前は水平な水田面がつくられていたものと想定する。また、北東角の水田区画未検出部分は、下層旧河道面でも谷地の肩部に当り、同様に本遺構面でも斜面としてアゼが検出されず、ほぼ水田区域外と見られる。

アゼの走向と区画 傾斜に対して直交及び並行する方向に各々アゼを設け、S1を除いて谷の軸方向に対して横に長い短冊状の区画をつくる。区画は縦6m前後、横10m前後で均整がとれる。横方向のアゼは谷頭方向へ弓なりに膨らみ、アゼの残存は不良。本遺構の北限は、北東角の水田区画未検出部をその境とするが、南限は不確定ながらB区内にあると見





第170圖 C區As-B下水田跡(2)

られ、本遺構はやや幅が広く北西-南東方向に軸方向を持つ谷水田の様相を示す。

水田面の面積 1区画全てを露呈できたものはないが、完掘に近いもので50㎡程を測る。

取配水の方法 明確な水口は検出できなかったが、谷頭方向から配水すると見られる。

耕作土 A s-Cを含んで粘性の強い黒色粘質土

出土遺物 なし



D区A s-B下水田跡と溝群 (P L 56)

位置 北半部

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜するが、グリッド30-3R付近は埋没谷の影響で窪む。

アゼの走向と区画 アゼの残存状況は悪く、30cm程の段差を持つ平坦面を水田区画として認定した。区画の形状は、傾斜に対して横方向に長い短冊状か。

溝の走向 6号溝は北端から長さ20.40mで一度東方向に折れて、更に14.40m延びる。走向方位は南北軸でN-1°-W、東西軸でN-78°-Wである。21溝は7.90mで、N-7°-E程。23号溝は蛇行して南北43.20mで、N-2°-170°-Wである。21・23号溝は北西部の水田面を壊しており、水田面よりも新しいと思われるが、並走する6号溝は下層に埋没する25号溝から継続した流路として機能してきており、むしろ水田跡以前から連続する遺構である。したがって、本溝群は総じて水田跡と時期差が余りなく、水路としての利用など関連性の高いものとする。

水田面の面積 1区画全てを露呈できたものはないが、半分以上の面積と見られるS2で75㎡程を測る。

取配水の方法 明確な水口は検出できなかったが、北西方向から配水すると見られる。

耕作土 黒色土

出土遺物 なし

E区南A s-B下水田跡と溝群 (P L 56・143)

位置 南東端 3T-4F-17-19グリッド

地形 全体に緩やかに南東方向に傾斜するが、水田の範囲は南東端の大きく傾斜する部分に限られる。

アゼの走向と区画 水田面として露呈できた区画は、わずか2区画に過ぎず、アゼは東西方向の1本のみである。アゼは残存状況が良く、高さ10cm弱を測る。

溝の走向 調査区を南北に縦走する6・7号溝は長さ47.90m、走向方位はN-2°-W程である。6・7号溝は下層に埋没する15号溝から継続した流路として機能し、町道を挟んでD区6号溝と同一の溝であり、むしろ水田跡以前から連続する遺構と見られる。したがって、6号溝は水田跡と時期差が余りなく、D区方面への導水路として水田跡と関連性の高いものとする。

水田面の面積 不明 取配水の方法 不明

耕作土 黒色粘質土

出土遺物 6・7号溝の埋土から1の石帯と2の馬歯のみ出土している。

E区北A s-B下水田跡 (P L 57)

位置 調査区南全域

地形 全体に緩やかに東方向に傾斜するが、4Rグリッドライン付近は埋没谷の影響でやや窪んでいる。

アゼの走向と区画 中央部で東西方向の大きめのアゼ(仮称 中アゼ)が南北3区画ずつ計6区画に細分する。アゼは良好に残存しており、中アゼは上幅40-100cm、下幅80-150cm、高さ8cm弱、他のアゼは高さ7cm弱を測る。区画の形状は不整形であるが、中アゼより北側は北西方向を主軸とする扇型となり、中アゼより南側は南北・東西方向のアゼにより方形の区画をなす可能性がある。

水田面の面積 1区画全てを露呈できたものはなく、面積はバラつきがあると見られるが、S5で200㎡弱を測り概して大きい。

取配水の方法 明確な水口は検出できなかったが、北西方向から配水すると見られる。

耕作土 黒色粘質土

出土遺物 なし

備考 S 2の東端に見られる窪みは、下層に埋没する25号溝と一致するが、水田と併存したとは考えられず、本水田跡が埋没した後土圧によって陥没したものと見られる。

F区A s-B下水田跡 (P L 57)

位置 南部 5B-5F-20-25グリッド

地形 全体に緩やかに東方向に傾斜する。

アゼの走向と区画 傾斜に対して垂直及び並行する方向のアゼで区画し、区画の形状はほぼ東西方向に長い長方形と見られるが、南北方向の幅は3.60～

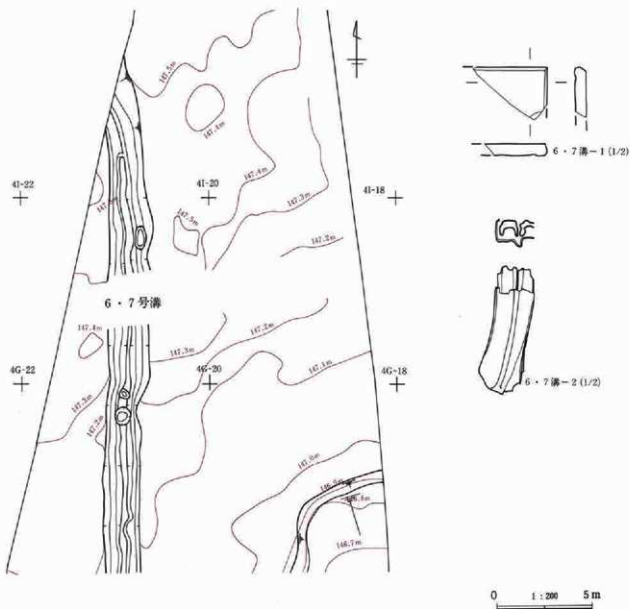
10.30 mと数値にばらつきがあり、形状もS 3が台形に近いなど均整に欠ける。アゼの残存状況は悪く、最大でも高さ4 cm程に過ぎない。

水田面の面積 1区画全てを露呈できたものはないが、区画の半分近い面積と見られるS 1で95.40 m²程を測る。

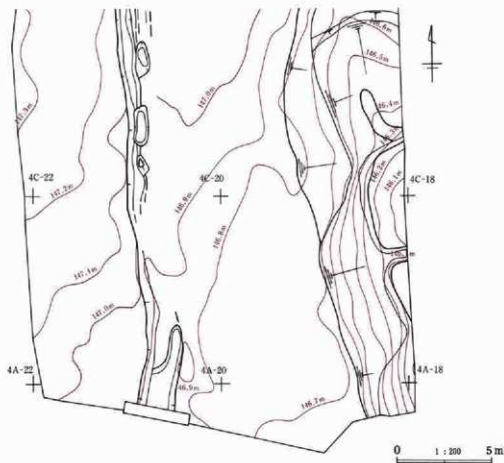
取配水の方法 明確な水口は検出できなかったが、北方向から配水すると見られる。

耕作土 黒色粘質土

出土遺物 なし



第172図 E区南A s-B下水田跡と溝群 (1)・出土遺物



第173図 E区南As-B下水田跡と溝群(2)

F区As-B下溝群 (P.L57)

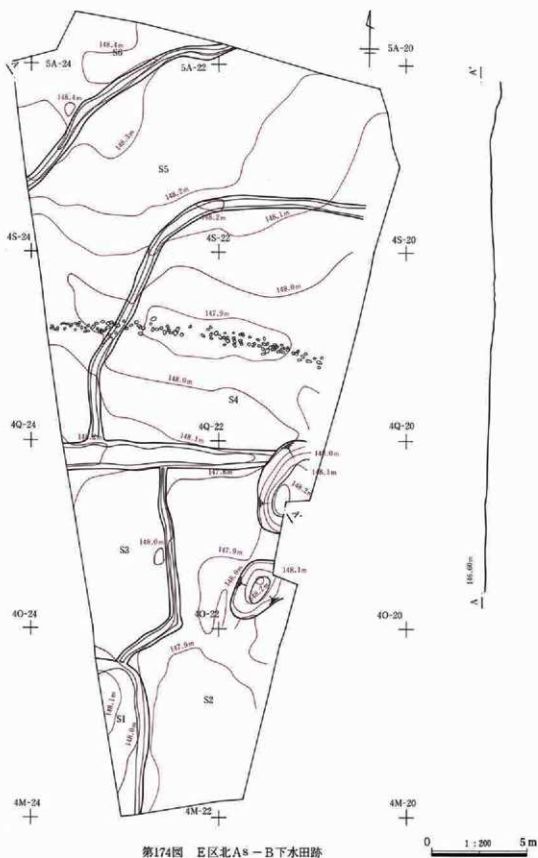
位置 中央部以北

地形 南～南東方向に緩やかに傾斜する。

溝の規模と走向 中央部に位置する溝のうち、1～4号溝を含めて、南北に走向する溝は10条である。そのうち、最も規模が大きいのは4号溝で14.20×0.41m、走向方位はN-1°-18°-Eである。東西方向に走向する溝は6・7・10号溝を含めた8条で、南北走向のものに比べやや規模が大きい。6号溝は20.10×0.85mで、走向方位はN-82°-94°-E、7号溝は15.80×0.85mで、走向方位はN-70°-W程、10号溝は19.80×1.20mで、N-82°-90°-Eである。北半部では3条の溝がほぼ南北方向に走向し、分岐・合流の状況から一連の溝と考える。8号溝は28.20×0.86mで、走向方位はN-1°-W程、9号溝は4.40

×0.38mで、N-46°-W程、11号溝は7.88×0.46mで、N-72°-98°-Wである。なお、8号溝は町道を挟んで北側G区11号溝と同一の溝である。本遺構の形状を比較すると、中央部の南北方向のものは一定間隔を持っており、畠のサクにも似る。しかし、南側の水田跡も北に延びると推測されることから、水田との関連を単純に否定することもできない。

出土遺物 なし



第174図 E区北As-B下水田跡

G区As-B下11号溝 (PL57)

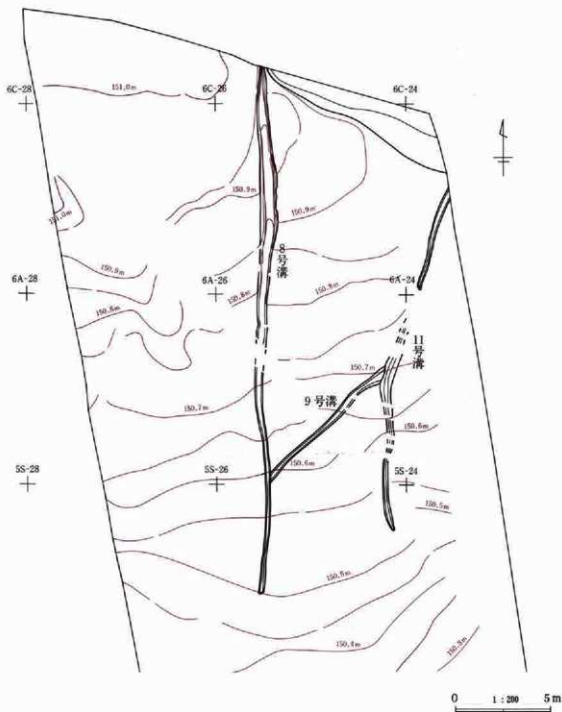
位置 南端 6D-6F-25・26グリッド

の関連が想定される。

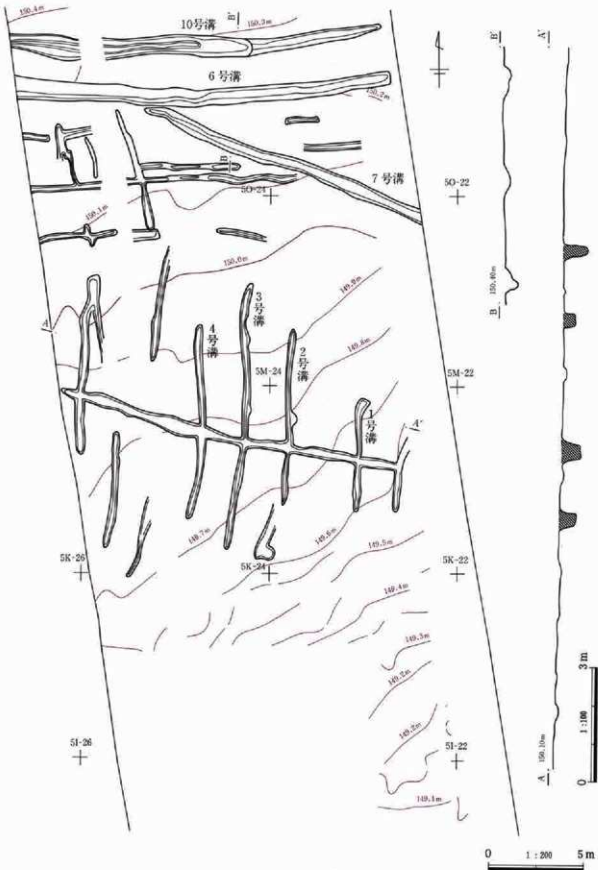
地形 南～南東方向に緩やかに傾斜する。

出土遺物 なし

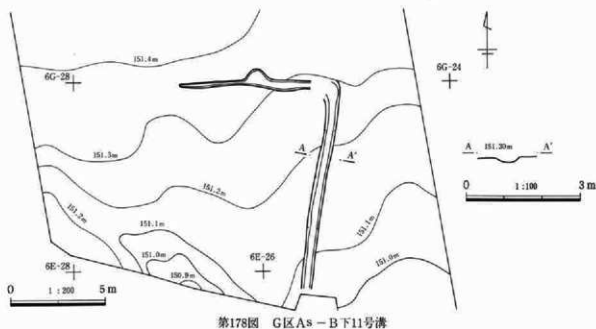
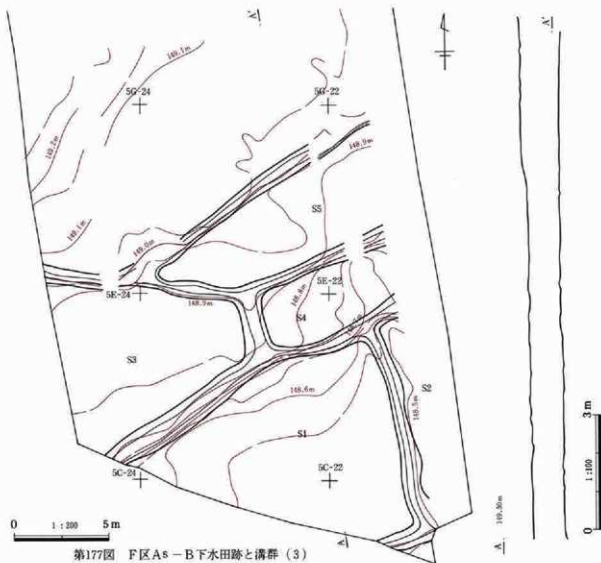
溝の規模と走向 中央部から東へ8.55mで南へ直角に折れ、更に11.10m南へ延びる。町道を挟んで南側F区8号溝と同一の溝である。F区同様田畠等と



第175図 F区As-B下水田跡と溝群 (1)



第176図 F区As-B下水田跡と溝群(2)



9. 道路跡

B区1号道路跡(付図1)

位置 南半部 2H-2J-18-22グリッド

重複 1~4号溝と重複するが新旧関係不明。

形態 ほぼ直線状で、外形は波打つ。規模は21.60×5.40mである。走向方位はN-78°-W程である。A-S-Bを掘りこんで、硬化面はA-S-Bを多く含んで固く締まる。

出土遺物 なし

時期 土地改良前の径道と位置的に重なっており、近年まで踏襲使用されてきた。上限がA-S-B降下以降である以外不明。

H区1号道路跡(PL58)

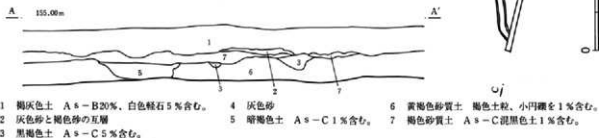
位置 H区の中ほどを北東から南東にかけて調査区を斜めに横断するように位置する。

重複 2号・3号畝と重複するが本跡のほうが前出である。

形態等 両側に側溝をもち側溝の心々距離1.5~1.8mの幅を有する。僅かな蛇行は見られるがほぼ直線的にN-36°-Wの走行を示す。路面は、後の耕作により削平されているためほとんど残存していないが路面下は側溝の外側と比べると硬化している。側溝は両側とも幅25~33cm、深度12~15cmである。側溝の埋没土はA-S-Cを含みHr-F Aが混入していない黒色土である。

出土遺物 なし

時期 出土遺物がほとんどないため側溝埋没土の状態から判断するとHr-F A降下前5世紀代の可能性があるので断定できない。(神谷)



第179図 H区1号道路跡

10. 旧河道・小谷地

C区旧河道 (P L 58・143)

調査区全域に広がり、南北に2条の流路を持つが、北側の方が規模が大きい。北側流路の規模は上幅13.60m下幅1.15mである。走向方位はN-2°~50°-Wで蛇行する。南側流路の規模は上幅7.40m下幅2.95mである。走向方位はN-72°-W程である。両流路とも検出面はF A直下面となるが、底面を除いてその堆積はわずかである。なお、基底部はトレンチ調査によって一部を確認したが、F A下面の20cm下層で総社砂層 (XI) を削り込んで形成する開析谷であることが判明した。本遺構は底面近くに砂礫が見られるが、その後安定して黒色土が堆積しており、流水量は余り見込まれない。ただし、本遺構の肩部を中心に人頭大の円礫が多量に分布しており、谷形成期には相当量の流水量があったものと推測する。北側流路の南側肩部には古墳時代の土師器杯・高杯・甕9点が集中して出土する範囲があり、1号土器集積として、6のとおり別に記載した。また、南側流路では1の土師器杯、また埋土中から馬歯が出土しており、1号土器集積との関連が想定される。

D区小谷地 (P L 58)

調査区の北半部に位置し、F A直下面では谷地形を利用した水田跡が検出された。水田面下96cmでは、総社砂層 (XI) を基底とする谷地形が露呈した。規模は上幅13.00m下幅7.30mで、F A下水田面と同じく蛇行するものと思われるが、一部をトレンチ調査するにとめたため、全容は明らかではない。底面直上の堆積土は礫を含むものの黒色土が主体であり、流水量の乏しい湧水路程度と考える。この小谷地は黒色土で安定して埋没し、F A降下段階 (古墳時代) では谷水田として利用されていたのである。

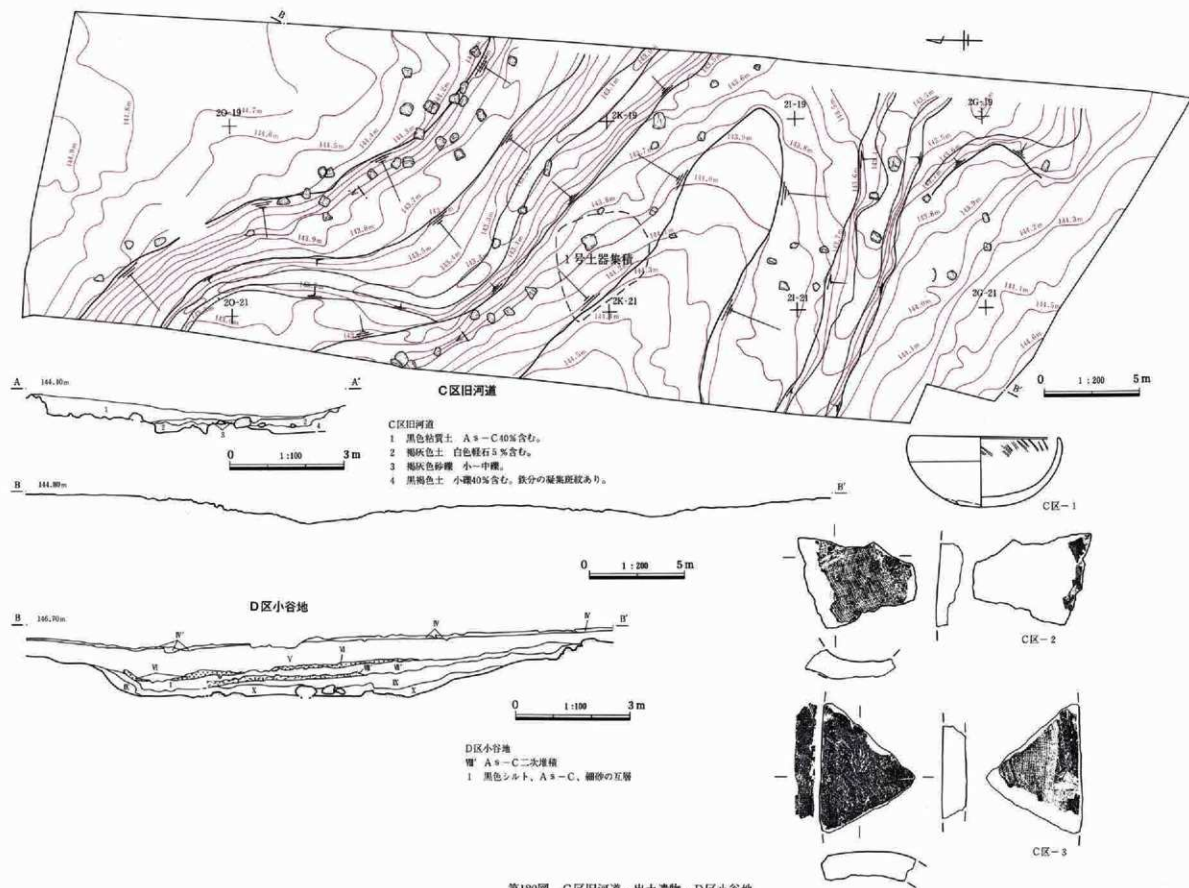
F区小谷地 (P L 58)

調査区の南端に位置し、A s-B下段階では水田化されていた。水田面下30cmでは、F Aが20cm程堆積し、更に70cm下層で総社砂層 (XI) を基底とする

谷地形が露呈した。小谷地の主体は調査区東端に所在するが、西方から13号溝が東方向へ延びて合流する。東端主体部分の規模は上幅3.30m下幅0.40m、長さ13.40mである。走向方位はN-22°~165°-Wである。13号溝の規模は長さ19.20mで、幅は0.45~2.75mである。走向方位はN-25°-W~N-20°-Eである。

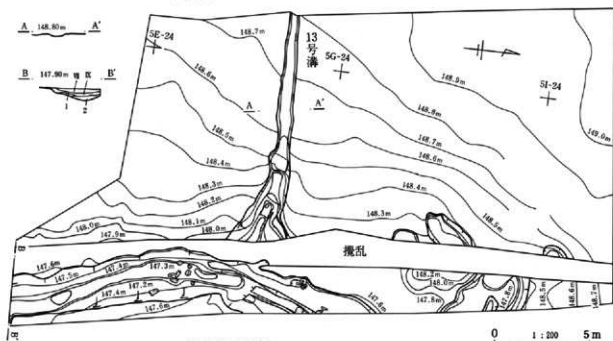
G区小谷地 (P L 58)

調査区の南西角に位置し、ほぼ調査区全域で畠跡が検出されたF A直下面でも溝状の窪みとして存在し、更に61cm下層で総社砂層 (XI) を基底とする谷地形が露呈した。規模は上幅1.93m下幅0.26m、長さ6.11mである。走向方位はN-42°~61°-Wである。底面直上の堆積土は礫を含むものの黒色土が主体であり、流水量の乏しい湧水路程度と考える。



第180図 C区旧河道・出土遺物・D区小谷地

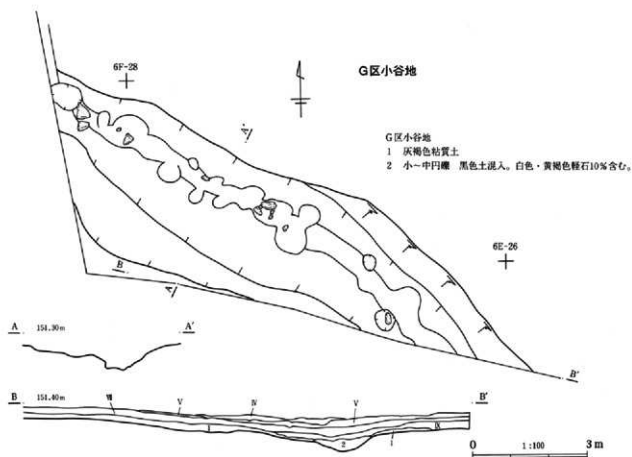
F区小谷地



F区小谷地 (13号溝)

- 1 暗褐色粘質土 灰褐色砂20%含々。
- 2 灰褐色砂質土 黑褐色土混入。

G区小谷地



G区小谷地

- 1 灰褐色粘質土
- 2 小~中円礫 黒色土混入。白色・黄褐色軽石10%含々。

第181图 F区·G区小谷地

11. 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器 (PL158・143)

前期から晩期にわたる遺物が出土したが、遺構は検出できなかった。7の安行式土器の深鉢は、H区のA8-Cを含む黒褐色土(VII)中でまとまって出土し、何らかの遺構に伴うと見られるが未確認に終わった。

(2) 弥生土器 (PL143)

土器の出土量は極めて少ない。

(3) 石器 (PL144)

土器の出土量が少なく、居住域の所在も不明であるが、C区の旧河道周辺の谷地形を中心に遺存状態の良い石器が出土している。

(4) 古墳時代出土遺物 (PL144)

出土遺物は非常に少ないが、掲載遺物は全てF区出土のものであり、特に坏3点はややまとまって出土しているが、遺構は確認できなかった。古墳時代の遺構は、A・B・D区で竪穴住居跡が見られるが、同時にA・B・E南・G・H区で畚跡、D・E北区で水田跡、C区では旧河道が埋没した小谷地と祭祀的機能が想定される1号土器集積が存在するなど、本調査区域全域でややまとまりのある遺構群として捉えられるが、F区のみ古墳時代の遺構が空白となっており、唯一記載遺物がその性格を示唆するに過ぎない。

(5) 奈良・平安時代出土遺物 (PL144・145)

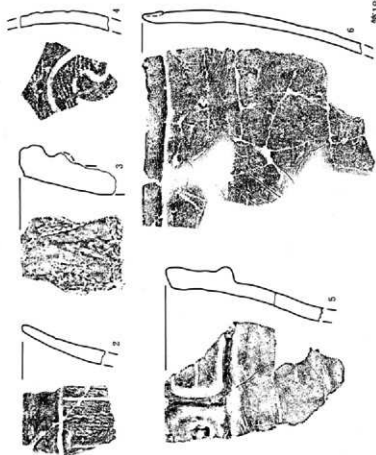
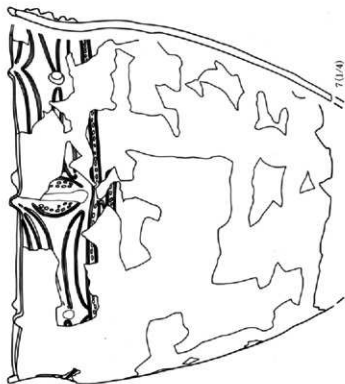
奈良・平安時代の集落は、A・B区がややまとまって分布し、D・H区では点在する様相を示す。掲載遺物は主に瓦6点を中心に取り上げたものであるが、本遺跡の瓦は観察の結果国分寺系供給という総評を得ている。また、F区ではやや遺存状態が悪いが、A8-B下面で奈良三彩小壺が出土している。F区では南側でA8-B下水田跡、中央部以北で溝群が検出されることから、混入したものとする。

(6) 中世以降出土遺物 (PL145)

中世の遺物が出土した遺構は、D区22号溝・1号井戸跡、E区9号溝、G区3・4号井戸跡であり、

建物跡などは発見できず、遺構外遺物としても掲載遺物以外ほとんど見られなかった。

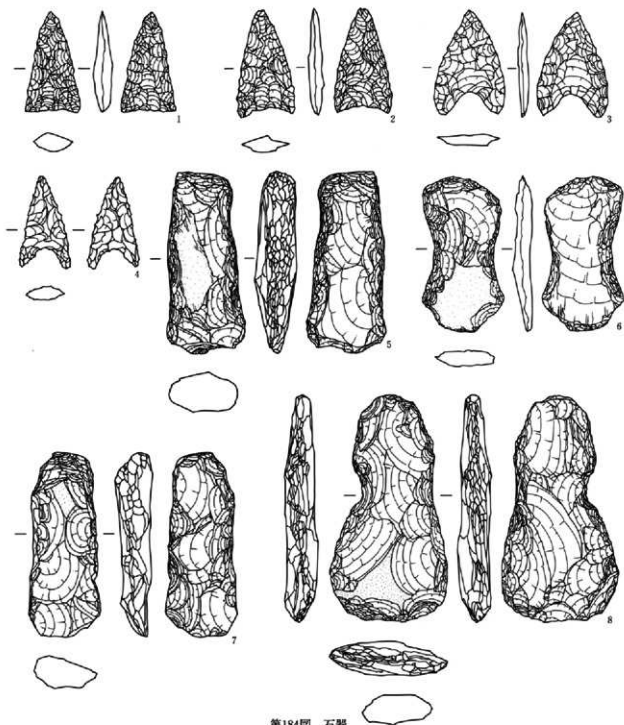
近世の遺物が出土した遺構は、C区1号溝やF区1・2号畚跡、H区南側の土坑群と1号畚跡であり、建物跡などは発見できず、掲載遺物は7・8の火打金など金属器を中心に取り上げた。



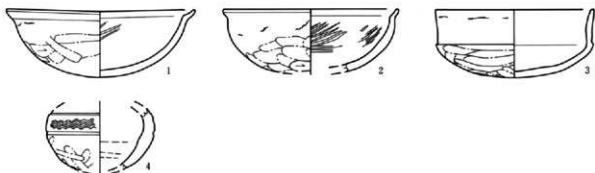
第182図 縄文土器



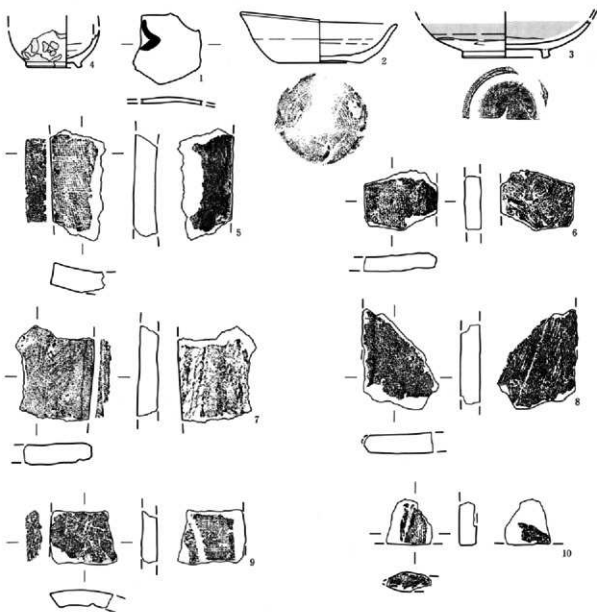
第183図 弥生土器



第184図 石器



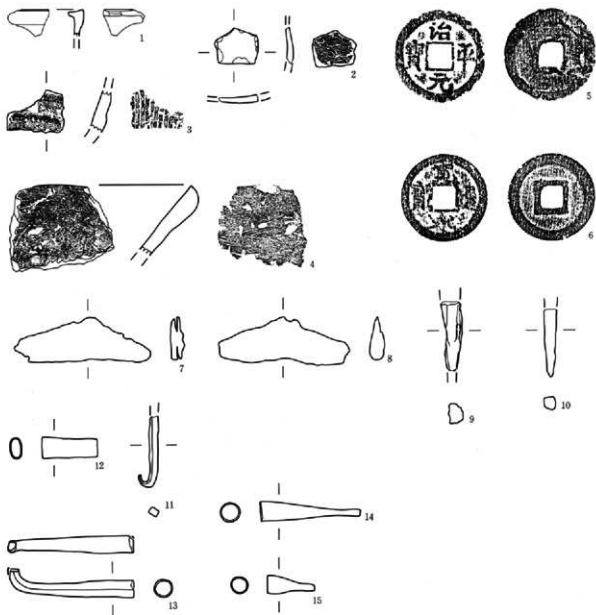
第185図 古墳時代出土遺物



第186図 奈良・平安時代出土遺物 (1)



第187図 奈良・平安時代出土遺物 (2)



第188図 中世以降出土遺物

第5章 金古北十三町遺跡の遺構・遺物

概要

本遺跡は相馬ヶ原扇状地を横断する位置にあり、牛池川に隣接する左岸の0区と、調査区域の中央付近の6・7区が埋没谷に起因する低地となっている。このため、0区ではA s-B下及びF A下旧河道跡が主な調査となり、7区では居住に関連する遺構はなくなり、専ら生産遺構の分布域であることが判明した。また、11～13区は微高地であるが遺構密度は低く、古墳時代のF A下畠跡の広がりが見込まれる以外住居跡などの遺構は皆無であり、生活環境として不十分な状況を反映するものと考えられる。したがって、本遺跡では牛池川北の微高地の南限となる1区から5区までの調査範囲が概ね奈良・平安時代の居住域、6区以北から中近世以降の散漫な居住域が分布して、現在の金古集落に隣接する14・15区でそのピークに達する。また、古墳時代後期では本遺跡全域が生産域となっていたと考えられる。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は19軒検出されており、内訳は1区で7軒、2区で2軒、4区で5軒、5区で3軒、10区で1軒、15区で1軒である。なお、この分布は遺構密度の高低とよく符合している。

掘立柱建物跡は20軒検出されており、内訳は1区で6軒、2区で1軒、5区で4軒、6区で3軒、8区で3軒、9区で1軒、14区で1軒、15区1軒である。このうち、奈良・平安時代のものは6区の3号掘立柱建物跡以南であり、6区2号掘立柱建物跡以北では中近世以降または時期不明となる。これは、竪穴住居跡の分布とも符合する。

土坑の分布は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の分布とはほぼ一致しており、1・2区で土坑が集中する状況はまさにその傾向を示している。4区では形状がピットである土坑ほか、306基と極めて多く検出された。これは奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒と関連すると推測されるが、一方で調査区を南北に縦走し北端で直角に西に屈曲してL字形を呈する区画

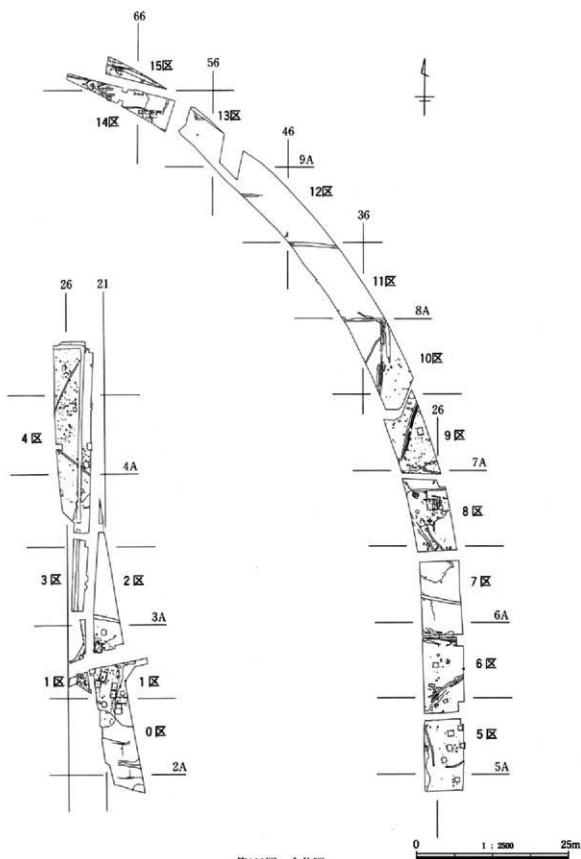
堀1・2号堀との関連も想定できる。4区の区画堀が囲い込む領域の意義付けは難しいが、土坑がその性格を反映する遺構である点で注意を要する。8・14・15区の土坑は、中近世以降の掘立柱建物跡や井戸跡を伴う生活遺構と関連しており、分布の集中が見られる。なお、8区では円形の土坑が複数基重複する形態の粘土探掘坑群が検出された。11区では遺構密度が低い中において、平安時代の基壇を調査することができた。

溝・堀は各調査区に散漫に分布するが、低地である6・7区ではF A上の溝群として各区50条前後が検出された。これらの溝群は明確ではないが、田畠耕作等による耕作痕と見られ、他の溝とは性格を異にする。3・4区では、南北150m以上を測る区画堀である3区1号堀と4区1・2号堀が検出された。15区でも形態的に区画堀に類する1号堀が検出され、字名の「上屋敷」との関連が想定できる。

井戸跡は6区で1基、8区で3基、14区で1基、15区で2基検出されたが、時期は中近世に属するものとする。また、これらの井戸跡全てが掘立柱建物跡と近接しており、相互の位置関係を見る良好の資料となる。

古墳時代後期初頭のF A下畠跡は、本遺跡に限らず周辺遺跡でも検出されているとおり、周辺の広範囲に広がりを持つ遺構と考えられ、1～13区まで検出された。なお、14・15区でF A下畠跡が検出されなかったのは、F Aの残存状況が悪いことに起因する可能性が高く、本来両区までF A下畠跡が広がっていたものと想定する。

その他の遺構では、13区・15区で一連の遺構である中世の道路跡が検出された。また、扇状地地形の複雑な地形を反映する小谷地が3区・4区で確認され、古墳時代の復元に有用な資料が得られた。



第189図 全体図

1. 竪穴住居跡

1区1号住居跡 (P L 64・146)

位置 20-2P-16-17グリッド

重複 なし

形態 は半分が調査区域外となるため不明。

主軸方位 N-86°-E

規模 南北(2.16)m、東西4.34m。

壁 壁高は南辺2.0-5.0cm、西辺2.0-3.0cmで平均3.0cmである。

カマド 東辺に位置し、住居内に燃焼部を有する。天井部は崩落し、袖は両袖部とも崩壊して残っていない。規模は、焚口-煙道が1.10m、袖焚口幅が0.54mである。左袖は崩壊しているが、構築材とする円礫が残存する。火床面は床面よりやや下がり、灰が薄く堆積している。掘り方規模は、主軸方向1.10m、幅0.90mである。

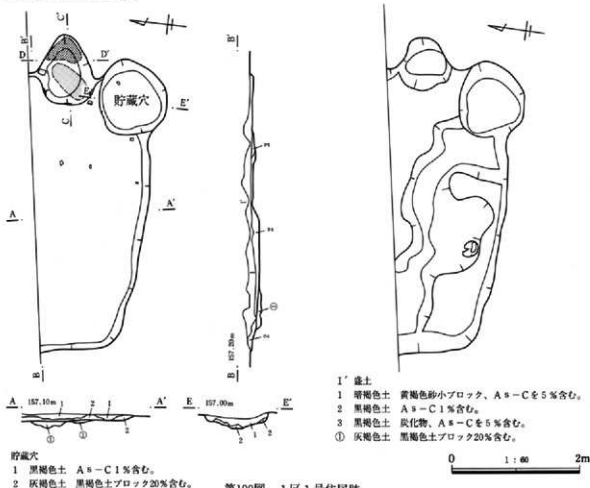
内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し楕円形を呈する。規模は径120.0×107.0cm、深さ17.0cmである。床 凸凹するがほぼ平坦で、西側がやや窪む。貼床及び硬化面は見られない。掘り方より5cm程灰褐色土を盛る。

掘り方 一部帯状に掘り込むほか、明確な床下土坑などは存在しない。

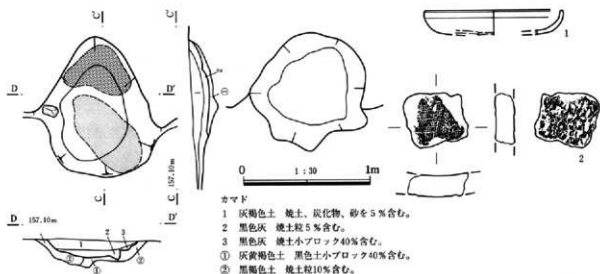
埋没状況 削平が著しく、残存する埋土からは人為か自然か埋没状況を判断できない。

遺物出土状態 カマド・貯蔵穴に集中しているが、中央部床面で1の須恵器坏が出土している。遺物出土量は極めて少ない。

時期 出土遺物から9世紀前半かと考えられる。



第190図 1区1号住居跡



第191図 1区1号住居跡カマド・出土遺物

1区2号住居跡 (P L65・146)

位置 2K-18グリッド

重複 なし

形態 隅丸横長方形

主軸方位 N-84°-E

規模 南北2.95m、東西2.52m。

壁 壁高は北辺3.0-27.5cm、東辺5.5-13.0cm、南辺4.5-15.0cm、西辺25.5-30.0cmで平均15.5cmである。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内に燃焼部を有する。天井部は崩落し、袖は両袖部とも崩壊して残存していない。規模は、焚口-煙道が0.81m、袖焚口幅が0.41mである。燃焼部には天井部から崩落した未固結凝灰岩礫が見られる。両袖は崩壊しているが、構築材とする未固結凝灰岩礫が残存する。火床面は床面よりやや下がり、全面に灰が薄く堆積している。掘り方規模は、主軸方向1.16m、幅(0.89)mである。

内部施設 なし

床 平坦では水平。貼床及び硬化面は見られない。掘り方より5cm程黒褐色土を盛る。

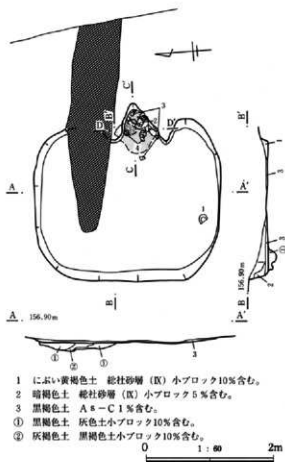
掘り方 床下土坑は南西隅に位置し円形を呈する。規模は径66.0×56.0cm、深さ17.0cmである。南・西部に土坑状の落ち込みが見られる。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没

と考えられる。

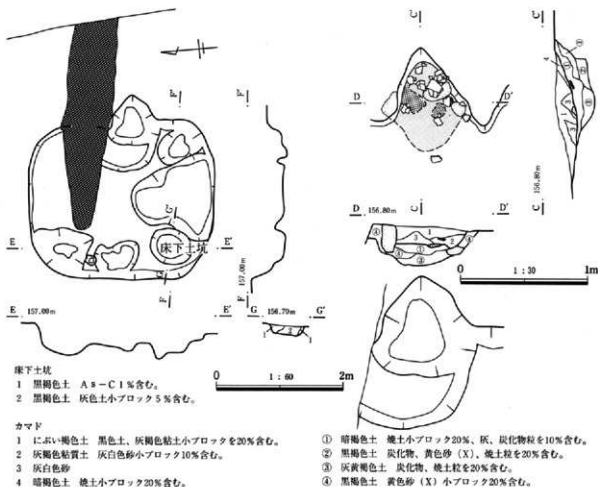
遺物出土状態 カマドに集中しているが、南端床面で1の須恵器坏が出土している。

時期 出土遺物から9世紀第2四半期に比定される。

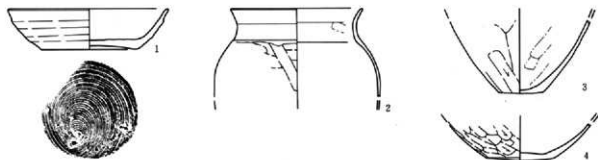


第192図 1区2号住居跡

1. 竪穴住居跡



第193図 1区2号住居跡掘り方・カマド



第194図 1区2号住居跡出土遺物

1区3号住居跡 (PL66・67・146)

位置 21-18~19グリッド

重複 1区4号住居跡よりも新しい。

形態 縦長方形 主軸方位 N-92°-E

規模 南北3.81m、東西4.44m。

壁 壁高は北辺14.5~20.0cm、東辺8.0~18.0cm、南辺8.0~31.5cm、西辺29.5~39.0cmで平均21.1cmである。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内に燃焼部を有する。天井部は崩落し、袖は左袖が崩壊して右袖のみ残存する。規模は、焚口~煙道が0.41m、袖焚口幅が0.45mである。燃焼部には天井部から崩落した円礫が見られる。火床面は床面と変わらず平坦で、灰が若干見られる。掘り方規模は、主軸方向2.95m、幅1.24mである。

内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し楕円形を呈する。

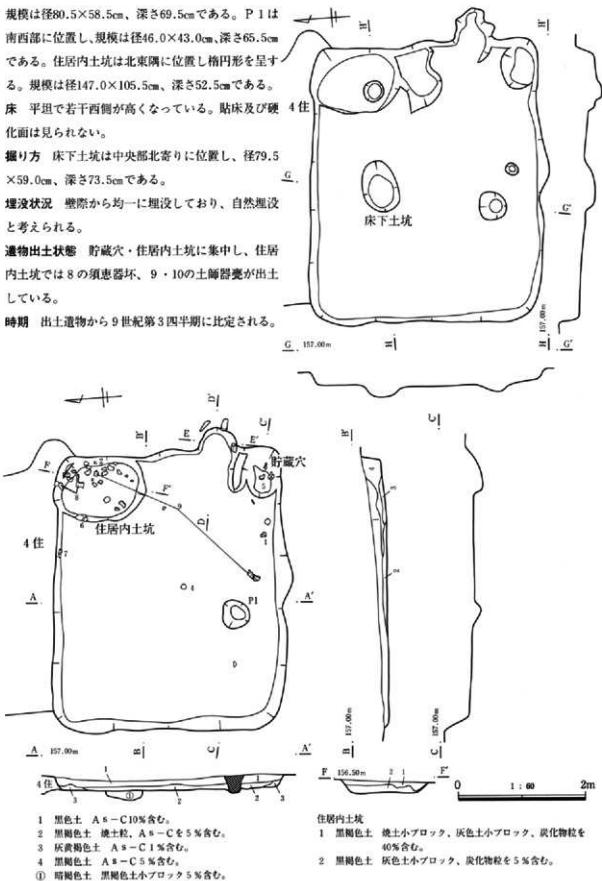
規模は径80.5×58.5cm、深さ69.5cmである。P1は南西部に位置し、規模は径46.0×43.0cm、深さ65.5cmである。住居内土坑は北東隅に位置し楕円形を呈する。規模は径147.0×105.5cm、深さ52.5cmである。床 平坦で若干西側が高くなっている。貼床及び硬化面は見られない。

掘り方 床下土坑は中央部北寄りに位置し、径79.5×59.0cm、深さ73.5cmである。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

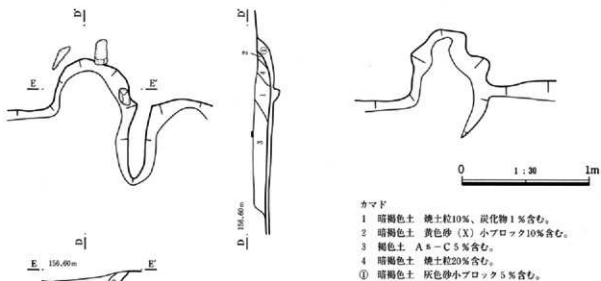
遺物出土状態 貯蔵穴・住居内土坑に集中し、住居内土坑では8の須恵器坏、9・10の土師器甕が出土している。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。

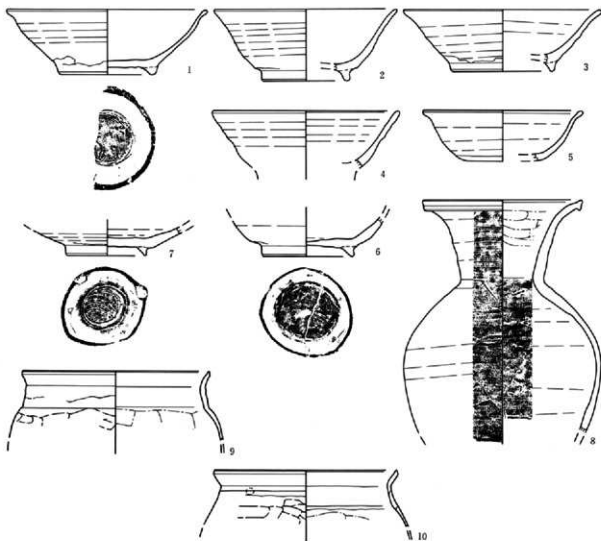


第195図 1区3号住居跡

1. 竪穴住居跡



第196図 1区3号住居跡カマド



第197図 1区3号住居跡出土遺物

1区4号住居跡 (P L 67・146)

位置 21~2J-18~19グリッド

重複 1区3号住居跡よりも古い。

形態 横長方形

主軸方位 N-92°-E

規模 南北(3.30)m、東西(3.93)m。

壁 壁高は北辺19.0~44.5cm、東辺20.0~29.5cm、西辺27.5~47.0cmで平均31.3cmである。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内に焼焼部を有する。天井部は崩落し、袖は両袖部とも崩壊して残存していない。規模は、焚口~煙道が1.00m、袖焚口幅が(0.37)mである。火床面は床面よりやや下がり、灰の堆積が見られる。掘り方は、火床面から深さ11cm程を測る。

内部施設 周溝が東辺の中央付近から北辺、西辺ま

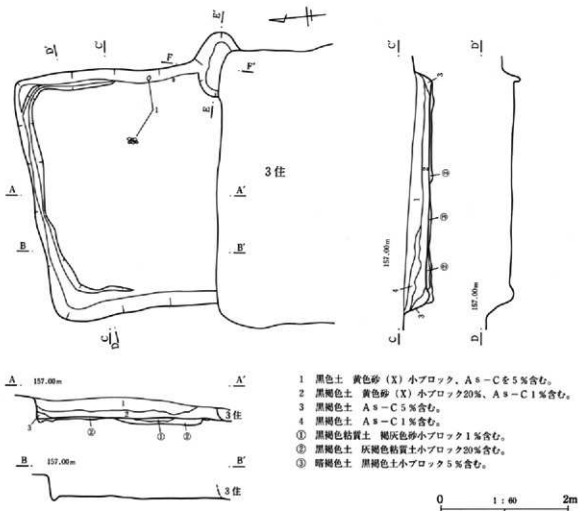
で巡る。規模は幅7.0~39.0cm、深さ7.0cmである。床 平坦で若干西側が高くなっている。貼床及び硬化面は見られない。掘り方より10cm程黒褐色土を盛る。

掘り方 床下土坑1は北西隅に位置し楕円形を呈する。規模は径91.0×67.0cm、深さ28.5cmである。床下土坑2は北東隅に位置し不整形を呈する。規模は径97.0×86.0cm、深さ17.5cmである。中央部・南端部に土坑状の落ち込みが見られる。

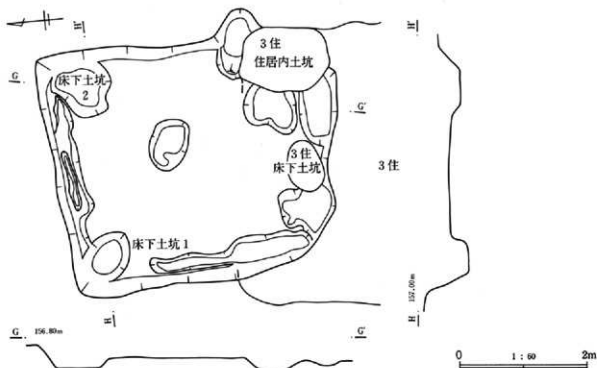
埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 中央部床面で1の土師器が出土している。出土遺物は埋土からが多く細片である。

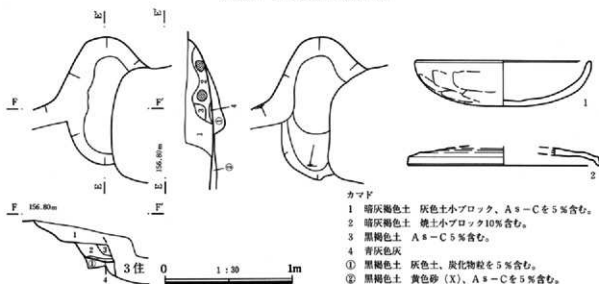
時期 出土遺物から8世紀後半に比定される。



第198図 1区4号住居跡



第199図 1区4号住居跡掘り方



第200図 1区4号住居跡カマド・出土遺物

1区5号住居跡 (PL68・146・147)

位置 2J~2K-21~22グリッド 重複 なし

形態 隅丸横長方形 主軸方位 N-95°-E

規模 南北3.76m、東西2.95m。

壁 壁高は北辺26.5~36.0cm、東辺24.5~31.0cm、
南辺28.5~40.5cm、西辺33.5~41.5cmで平均32.8cm
である。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内

に燃焼部を有する。天井部は崩落し、袖は両袖部とも崩壊して残存していない。規模は、焚口~煙道が1.08m、袖焚口幅が0.41mである。左袖は崩壊しているが、構築材とする円礫が残存する。火床面は床面よりやや下がる。カマドの前には支脚用の長さ23cm、径8cmの円柱状の石製品が転倒して出土している。掘り方規模は、主軸方向1.08m、幅0.66mである。

内部施設 なし

床 平坦では水平。貼床及び硬化面は見られない。

掘り方より5cm程黒褐色土を盛る。

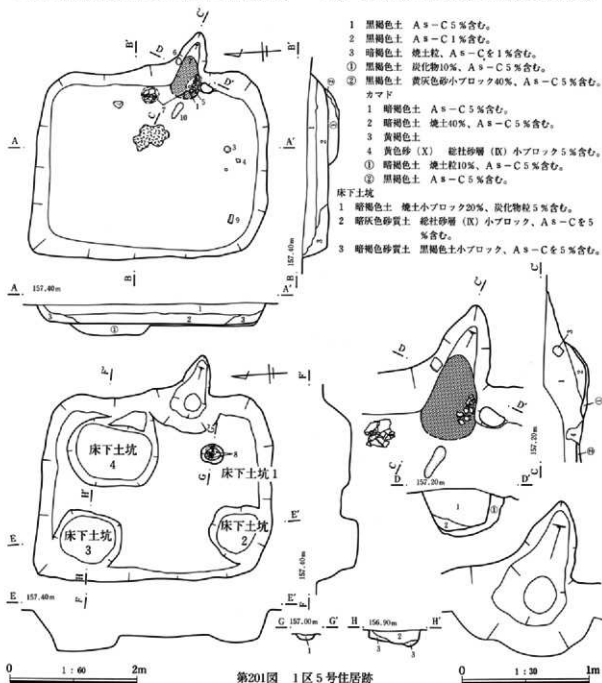
掘り方 床下土坑1は南東部に位置し円形を呈する。規模は径35.0×30.0cm、深さ9.0cmである。床下土坑2は南西隅に位置し不整形を呈する。規模は径90.0×(70.0)cm、深さ11.0cmである。床下土坑3は北西隅に位置し楕円形を呈する。規模は径104.0×(77.0)cm、深さ25.0cmである。床下土坑4は北東

隅に位置し楕円形を呈する。規模は径143.0×110.0cm、深さ17.5cmである。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 カマドに集中しており、1の土師器坏、7の土師器甕が出土し、南西部床面で9の砥石が出土している。また、中央部床面でカマド支脚と同じ石材が見られる。

時期 出土遺物から9世紀第2四半期に比定される。



1. 竖穴住居跡



第202图 1区5号住居跡出土遺物

1区6号住居跡 (P L 69・147・148)

位置 2N-20-22グリッド

重複 なし

形態 はほぼ半分が調査区域外となるため不明。

主軸方位 N-98°-E

規模 南北(3.53)m、東西(3.89)m。

壁 壁高は東辺3.0-12.0cm、南辺10.0-18.0cmで平均10.8cmである。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内に焼部を有する。天井部は崩落するが、袖は両袖部とも残存する。規模は、焚口-煙道が1.02m、袖焚口幅が0.39mである。右袖には25×15×15cmの礫を構築材として使用する。火床面は床面よりやや下がる。掘り方規模は、主軸方向1.46m、幅0.64mである。

内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し楕円形を呈す

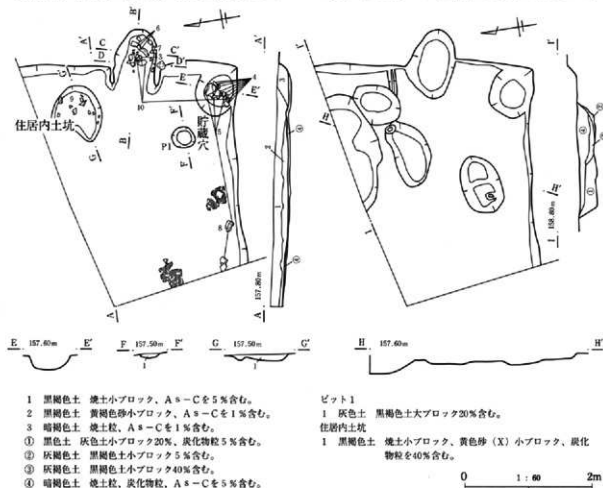
る。規模は径75.0×71.0cm、深さ21.0cmである。P1は貯蔵穴のすぐ西に位置し円形を呈する。規模は径36.0×34.0cm、深さ5.0cmである。住居内土坑はカマド前左側に位置し不整形を呈する。規模は径84.0×70.0cm、深さ11.0cmである。

床 平坦で若干西側が高くなっている。貼床及び硬化面は見られない。掘り方より5cm程暗褐色土を盛る。掘り方 中央部に土坑状の落ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

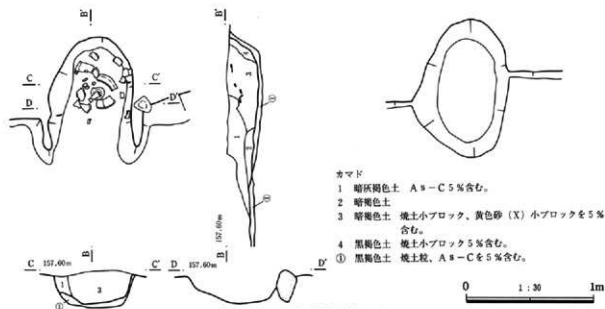
埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 カマド・貯蔵穴・住居内土坑に集中しており、カマドから6・7の土師器甕、貯蔵穴から4・5の土師器甕が出土している。また埋土からではあるが、11の緑釉陶器碗が出土している。

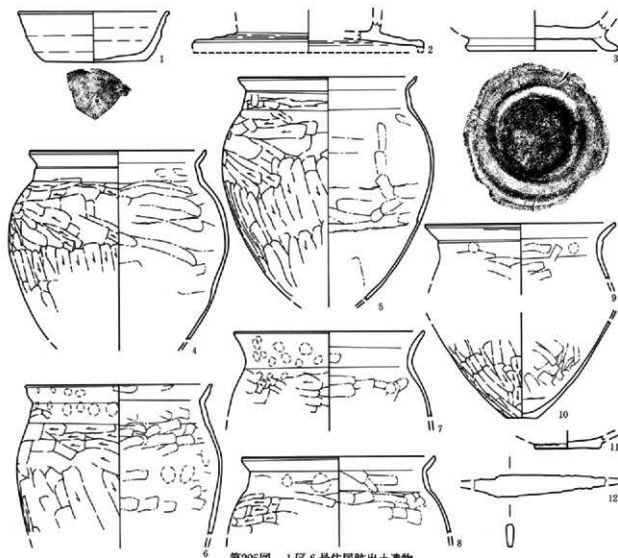
時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



第203図 1区6号住居跡



第204図 1区6号住居跡カマド



1区7号住居跡 (PL70・148)

位置 西区画東隅 2K-2L-22-23グリッド

重複 なし

形態 ほぼ半分が調査区域外となるため不明。

主軸方位 不明

規模 南北(2.72)m、東西(1.66)m。

壁 壁高は北辺69.0-95.0cm、西辺38.0-43.0cmで平均61.3cmである。

内部施設 なし。

床 平坦ではほぼ水平。貼床はないがやや硬化する。掘り方より10cm程黒褐色粘質土を入れて踏み固められている。

掘り方 全体に掘り込み、北端・南端に土坑状の落

ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

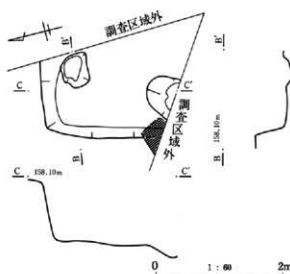
埋没状況 均質であり人為埋填と考えられる。床面でクリ等の炭化材(第7章参照)が見られるが、数量は少なく焼失住居とは言い難い。

遺物出土状態 中央部床面近くで6の完形の須恵器碗、11の須恵器甕が出土している。6の内部には炭化物が検出され、分析の結果クリと判明したことから、内容物とは考えられない。出土遺物は埋土からの出土が多い。

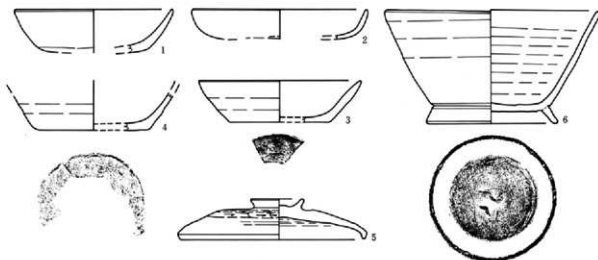
時期 出土遺物から8世紀第4四半期に比定される。



- 1 黒褐色土 A・B・C、FA小ブロックを5%含む。
- 2 黒褐色土 FA小ブロック10%含む。
- 3 黒褐色土 炭化物小ブロック10%、A・B・Cを5%含む。
- 4 黒褐色土 FA小ブロック5%、炭化物、A・B・Cを1%含む。
- ① 黒褐色粘質土 FA小ブロック10%含む。

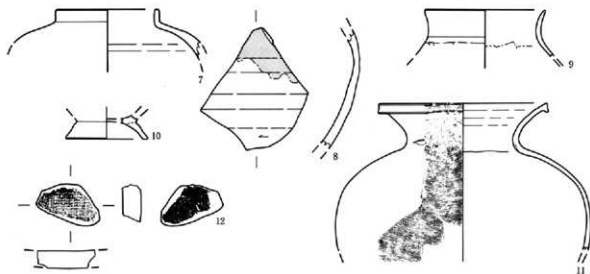


第206図 1区7号住居跡



第207図 1区7号住居跡出土遺物(1)

1. 竪穴住居跡



第208図 1区7号住居跡出土遺物(2)

2区1号住居跡 (P.L.71・148・149)

位置 2S-2T-21グリッド

重複 なし

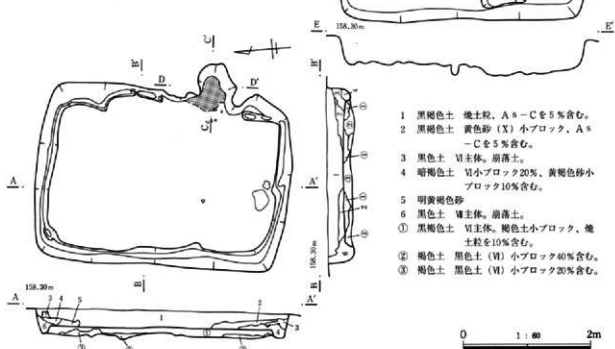
形態 横長方形

主軸方位 N-99°-E

規模 南北4.04m、東西2.84m。

壁 壁高は北辺31.0cm、東辺27.0-32.0cm、南辺29.0-34.0cm、西辺33.5-36.0cmで平均31.8cmである。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内



第209図 2区1号住居跡

に燃焼部を有する。天井部は崩落し、袖は左袖が崩壊して右袖のみ残存する。規模は、焚口～煙道が0.77m、袖焚口幅が0.34mである。火床面は床面よりやや下がり、灰が全面に堆積し最大10cm程を測る。掘り方規模は、主軸方向0.94m、幅0.78mである。

内部施設 周溝が東辺の中央付近から北辺、西辺、南辺、東辺のカマド脇まで巡る。規模は幅1.0～15.0cm、深さ52.5cmである。

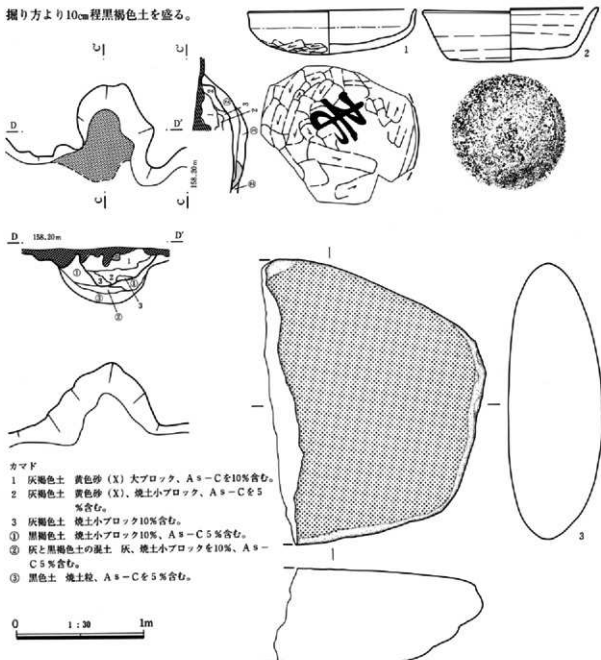
床 平坦ではほぼ水平。貼床及び硬化面は見られない。掘り方より10cm程黒褐色土を盛る。

掘り方 全体に掘り込まれる。西・南端に土坑状の落ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 南辺壁際床面で底部に墨書を持つ土師器坏と、よく使用された磨石が出土している。遺物出土量は少ない。

時期 出土遺物から8世紀第3四半期に比定される。



第210図 2区1号住居跡カマド・出土遺物

1. 竪穴住居跡

2区2号住居跡 (PL72)

位置 西区画 2P-24グリッド

重複 なし

形態 ほぼ半分が調査区域外となるため不明。

主軸方位 不明

規模 南北(2.83)m、東西(2.46)m。

壁 壁高は北辺37.0~46.5cm、西辺30.0~39.0cmで平均38.1cmである。

内部施設 なし

床 ほぼ平坦で、掘り方より5cm程暗褐色粘質土を入れて踏み固めている。

掘り方 全体に掘り込み、明確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 埋土から土師器片がわずかに出土しているにすぎない。

時期 不明

4区1号住居跡 (PL72・149)

位置 3R-3S-23-24グリッド

重複 1号堀よりも古い。

形態 ほぼ半分以上を1号堀に壊されるため、全貌は不明ながら隅丸方形である。

主軸方位 N-96°-E

規模 南北2.60m、東西(1.70)m。

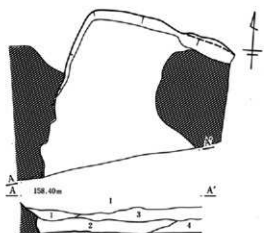
壁 壁高は北辺13.0~17.5cm、東辺11.0~17.5cm、南辺11.0~11.5cmで平均13.6cmである。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内に燃焼部を有する。天井部は崩落し、袖は右袖が崩壊して左袖が攪乱され残存しない。規模は、焚口~煙道が0.45m、袖焚口幅が0.28mである。燃焼部には天井部から崩落した24×19×17cmの礫が見られる。火床面は床面よりやや下がる。掘り方は、火床面から深さ11cm程を測る。

内部施設 なし

床 平坦でほぼ水平。貼床及び硬化面は見られない。掘り方より10cm程暗褐色土を盛る。

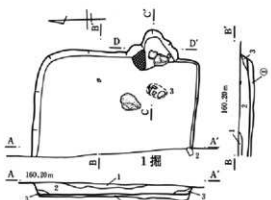
掘り方 南端に土坑状の落ち込みが見られるが、明



- 1 暗褐色土 A s-C 5% 含む。
- 2 黒褐色土 黄褐色土小ブロック10%、A s-C 5% 含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色土大ブロック40%、A s-C 5% 含む。
- 4 黒褐色土 VI 主体。

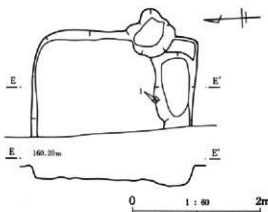
① 暗褐色粘質土 Ⅴ主体。黒褐色土大ブロック20% 含む、ややしめる。

第211図 2区2号住居跡



- 1 暗褐色砂質土 A s-C 5% 含む。
- 2 に近い黄褐色土。
- 3 黒褐色土 A s-C、FA 小ブロックを5% 含む。

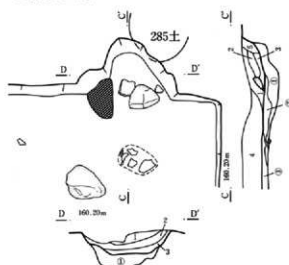
① 暗褐色土 A s-C 5% 含む。



第212図 4区1号住居跡

確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

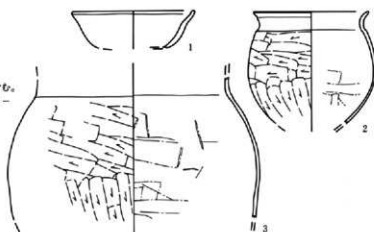
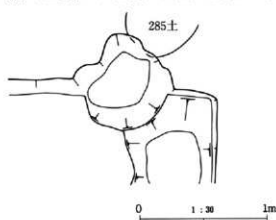


カマド

- 1 にぶい黄褐色粘質土 焼土大ブロック40%含む。
- 2 にぶい黄褐色粘質土 焼土粒、A s-Cを5%含む。
- 3 にぶい黄褐色粘質土 炭化物10%、焼土粒、A s-Cを5%含む。
- 4 にぶい黄褐色土
- 5 黒褐色土 A s-C 5%含む。
- ① にぶい黄褐色粘質土 A s-C 5%含む。
- ② 暗褐色土 焼土粒、灰粒を10%含む。
- ③ 暗褐色土 A s-C 5%含む。

遺物出土状態 カマドで3の土師器甕が出土している。遺物出土量は少ない。

時期 出土遺物から9世紀第2四半期に比定される。



第213図 4区1号住居跡カマド・出土遺物

4区2号住居跡 (PL73・149)

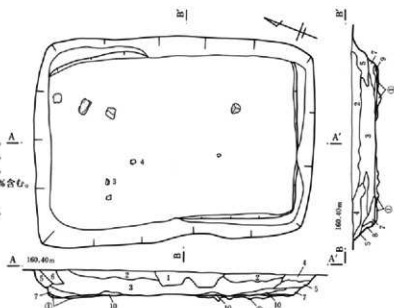
位置 中央東側 4A-4B-23グリッド

重複 33・34号土坑よりも古い。

形態 横長方形でカマドが見られない。

主軸方位 東辺を基準にN-67°-E

- 1 黒褐色土 FA小ブロック10%、A s-C 5%含む。
- 2 暗褐色土 FA小ブロック20%、A s-C 5%含む。
- 3 暗褐色土 FA小ブロック40%、A s-C 5%含む。
- 4 にぶい黄褐色土 FA小ブロック20%、A s-C 5%含む。
- 5 褐色土 FA小ブロック10%、A s-C 5%含む。
- 6 黒褐色土 FA小ブロック10%、A s-C 5%含む。
- 7 黒褐色土 A s-C 1%含む。
- 8 灰褐色土 礫の崩落土。
- 9 にぶい黄褐色土 黒褐色土小ブロック40%含む。
- 10 暗オリーブ褐色土 A s-C 5%含む。
- ① 暗褐色土



第214図 4区2号住居跡

規模 南北4.46m、東西3.34m。

壁 壁高は北辺44.0~44.5cm、東辺35.5~37.5cm、南辺33.0~37.0cm、西辺35.5~38.0cmで平均38.1cm。

カマド なし 内部施設 なし

床 平坦でほぼ水平。貼床及び硬化面は見られない。

掘り方より最大5cm程暗褐色土を盛る。

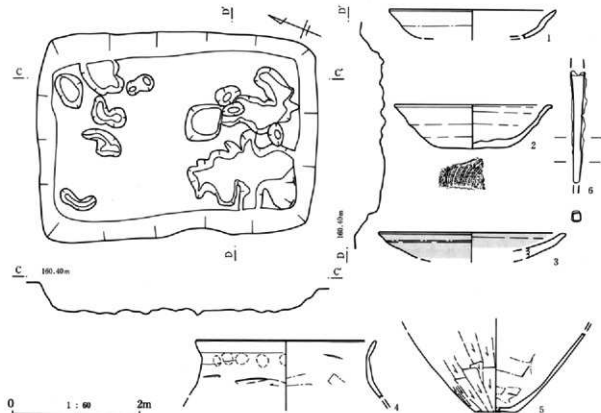
掘り方 全体に掘り込み、北・南側にやや凹凸が見

られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状況 北側床面で3の灰軸陶器皿、25×15×12cmの未固結凝灰岩の載石が出土している。遺物出土量は少ない。

時期 出土遺物から9世紀第2四半期に比定される。



第215図 4区2号住居跡掘り方・出土遺物

4区3号住居跡 (P L 74・149)

位置 中央北寄り 41-24-25グリッド

重複 277号土坑より古い。

形態 隅丸横長方形

主軸方位 N-83°-E

規模 南北3.08m、東西2.22m。

壁 壁高は北辺22.0~28.0cm、東辺15.0~20.0cm、南辺15.0~24.0cm、西辺29.0~31.0cmで平均23.0cmである。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内に燃焼部を有する。天井部は崩落し、袖は両袖部とも攪乱され残存していない。規模は、焚口~煙道が

0.78m、袖焚口幅が0.27mである。火床面は床面よりやや下がる。掘り方規模は、主軸方向1.50m、幅1.12mである。

内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し楕円形を呈する。規模は径47.0×46.5cm、深さ25.0cmである。P1は貯蔵穴の北脇に位置し円形を呈する。規模は径20.5×19.5cm、深さ13.5cmである。

床 平坦で若干西側が低くなっている。中央部を中心に壁際を除いて硬化している。掘り方より20cm程褐色土を入れて踏み固めている。

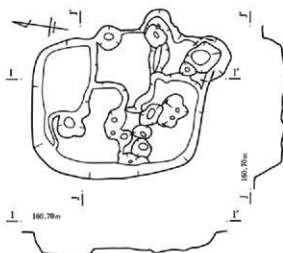
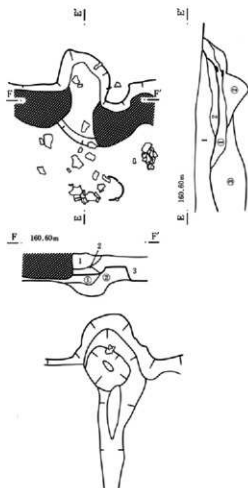
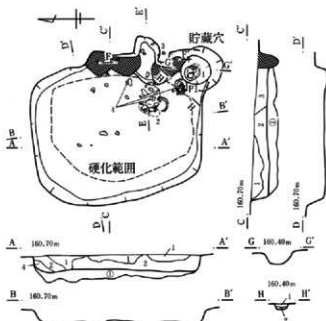
掘り方 全体に土坑状の落ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 カマド・貯蔵穴に集中しており、貯

蔵穴から1の須恵器壺、カマド周辺の床面で2・4の土師器甕が出土している。遺物出土量は少ない。

時期 出土遺物から9世紀第2・4半期に比定される。



- 1 にぶい黄褐色土 F A主体。黒褐色土大ブロック20%含む。
- 2 黒褐色土 F A小ブロック10%、A s-C 1%含む。
- 3 にぶい黄褐色土 F A主体。黒褐色土大ブロック10%含む。
- 4 褐色土 珪の崩落土。黒色土大ブロック10%含む。
- ① 褐色土 黒色土大ブロック20%含む。

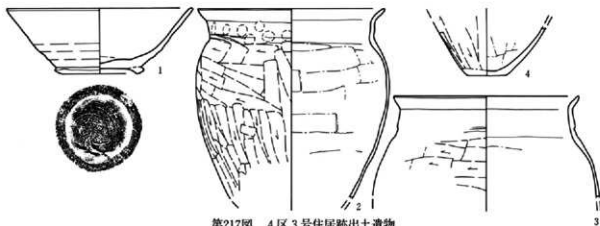
ピット1

- 1 暗褐色土 F A小ブロック5%、A s-C 1%含む。
- 2 褐色土 黒色土大ブロック20%含む。

カマド

- 1 にぶい黄褐色土 F A主体。黒色土大ブロック20%、焼土粒1%含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒10%、F A小ブロック5%含む。
- 3 暗褐色粘質土 F A小ブロック10%含む。
- ① 黒褐色土 灰20%、焼土小ブロック10%含む。
- ② 暗褐色土 焼土小ブロック10%含む。
- ③ 褐色土 黒色土大ブロック20%含む。

0 1:30 1m



第217図 4区3号住居跡出土遺物

4区4号住居跡 (P L 75・149・150)

位置 中央部東端 4D~4E-22~23グリッド

重複 なし

形態 南東隅周辺が調査区域外となるが、横長方形を呈すると見られる。

主軸方位 不明

規模 南北4.70m、東西(3.02)m。

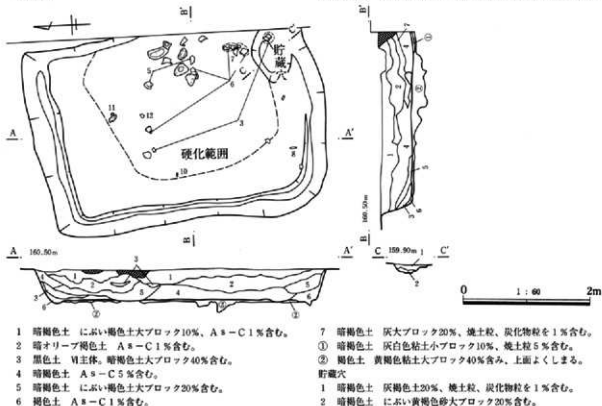
壁 壁高は北辺46.0~52.0cm、東辺33.0~48.0cm、南辺43.0~56.0cm、西辺35.0~52.0cmで平均45.6cmである。

内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し楕円形を呈する。規模は径77.5×54.0cm、深さ19.0cmである。周溝が北辺東隅から西辺、南辺中央付近まで巡る。規模は幅9.0~22.0cm、深さ4.0cmである。

床 平坦でほぼ水平。中央部を中心に壁際を除いて硬化している。掘り方より5cm程褐色土を入れて踏み固めている。

掘り方 南東部に土坑状の落ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没

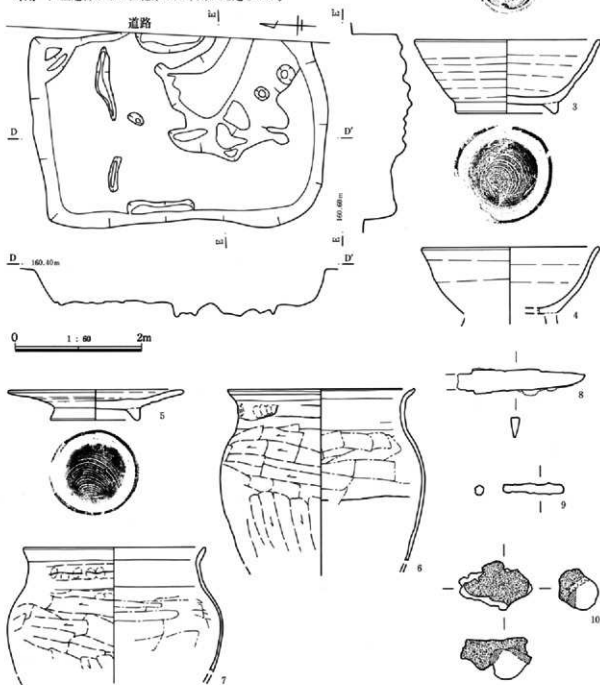


第218図 4区4号住居跡

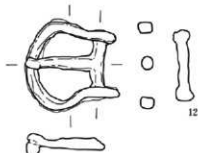
と考えられる。

遺物出土状況 貯蔵穴から3の須恵器埴、6・7の土師器甕、中央部床面で5の須恵器皿が出土している。また、堀土中ながら10の羽口片、11の椀形鉄洋が出土し、鍛冶との関連が想定され、12の鉄製鋳帯も出土している。東端中央部の床面に最大33×15×16cmの円礫数個があり、カマドの構築材と見られる。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



第219図 4区4号住居跡掘り方・出土遺物(1)



第220図 4区4号住居跡出土遺物(2)

4区5号住居跡 (P L 75)

位置 中央部東端 4I~4J-22グリッド

重複 なし

形態 はば3分の2が調査区域外となるため不明。

主軸方位 不明

規模 南北(3.14)m、東西(1.20)m。

壁 壁高は北辺20.0cm、南辺12.0~17.0cm、西辺19.0~24.0cmで平均18.4cmである。

内部施設 なし

床 調査できた範囲では凸凹する。掘り方より10cm

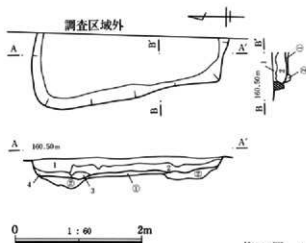
程黒褐色土を入れて踏み固めている。

掘り方 全体に土坑状の落ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 埋土から土師器片1片、須恵器片2片が出土しているが、遺物出土量は極めて少ない。

時期 不明



- 1 にぶい褐色土 黒褐色土小ブロック、A s-Cを5%含む。
- 2 にぶい褐色土 A s-C 5%含む。
- 3 黒褐色土 A s-C 1%含む。
- 4 褐色土 A s-C 1%含む。
- ① 黒褐色土 にぶい褐色土大ブロック20%、A s-C 5%含む、ややしまる。
- ② 黒褐色土 褐色土小ブロック20%、A s-C 1%含む。

第221図 4区5号住居跡

5区1号住居跡 (P L 76・150)

位置 中央部東端 5D~5E-22~23グリッド

重複 なし 形態 隅丸正方形

主軸方位 N-93°-E

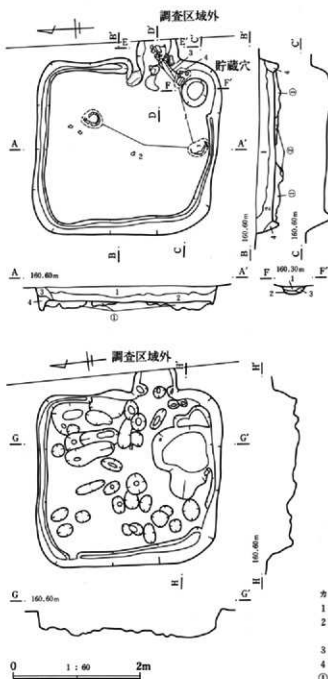
規模 南北2.94m、東西2.74m。

壁 壁高は北辺29.0~36.5cm、東辺23.5~27.5cm、南辺27.5~34.0cm、西辺33.5~41.0cmで平均31.6cm。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内に燃焼部を有するが、煙道部は調査区域外となる。

天井部は崩落し、袖は右袖が崩壊して左袖のみ残存する。規模は、焚口~煙道が(0.74)m、袖焚口幅が0.45mである。燃焼部には天井部から崩落した円礫、未固結凝灰岩礫が見られる。左袖は30×20×18cmの礫を袖石に使用し、右袖は崩壊しているが、構築材

とする円礫が残存する。火床面は床面とほぼ同じ。
カマド主軸方向は調査区域外となるが残存部分で、
掘り方規模は主軸方向(0.90)m、幅0.68mである。
内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し円形を呈する。
規模は径45.0×40.0cm、深さ14.0cmである。周溝が
東辺の中央付近から北辺、西辺、南辺中央付近まで
巡る。規模は幅5.0~21.0cm、深さ10.5cmである。
床 平坦では水平。貼床及び硬化面は見られない。



掘り方より10cm程黒色土・褐色土を盛る。

掘り方 全体に小規模な土坑状の落ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

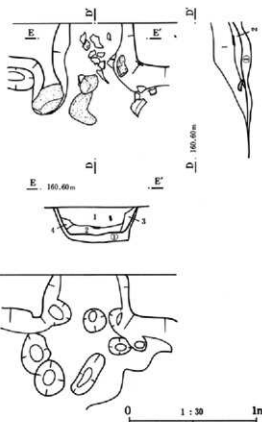
埋没状況 均質であり人為垣か。

遺物出土状態 カマドに集中しており、1・3・4の土師器甕が出土し、中央部床面で2の土師器甕が出土している。遺物出土量は多くない。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。

- 1 暗褐色土 F A混入。焼土粒、A-S-Cを1%含む。
- 2 暗褐色土
- 3 にぶい黄褐色土 焼土粒、A-S-Cを1%含む。
- 4 黒色土 VIの崩落土。
- ① 黒色土と褐色土の混土 にぶい褐色土小ブロック10%、
焼土粒、炭化物粒、A-S-Cを5%含む。
- ② 暗褐色土 A-S-C 5%含む。

- 貯蔵穴
- 1 暗褐色土 焼土粒、A-S-Cを5%含む。
 - 2 黒色土
 - 3 暗黄褐色砂質土 焼土大ブロック10%含む。

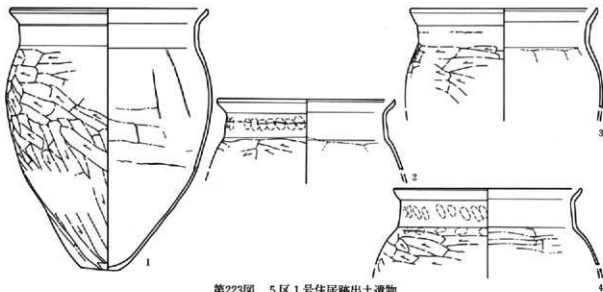


カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒5%、A-S-C 1%含む。
- 2 灰褐色土 灰黄褐色粘土大ブロック、焼土小ブロックを40%含む。
- 3 黒褐色土 焼土小ブロック20%含む。
- 4 黒色土 VI主体。崩落土。
- ① 暗褐色土 焼土粒5%含む。

第222図 5区1号住居跡

1. 竪穴住居跡



第223図 5区1号住居跡出土遺物

5区2号住居跡 (P.L. 77・150・151)

位置 中央部 5D-5E-24グリッド

重複 なし 形態 横長方形

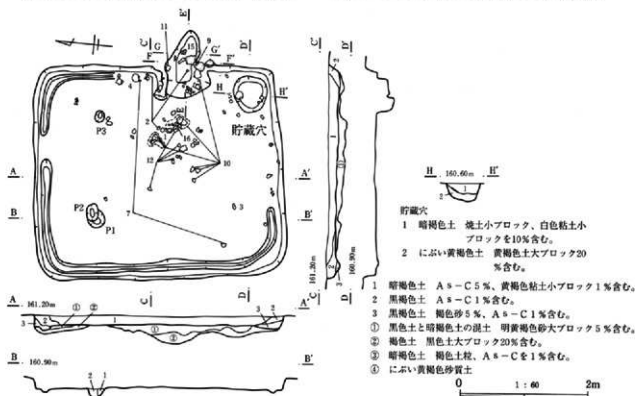
主軸方位 N-85°-E

規模 南北4.00m、東西3.40m。

壁 壁高は北辺3.0~20.0cm、東辺12.0~28.5cm、南辺17.5~23.0cm、西辺17.0~22.0cmで平均17.9cm

である。

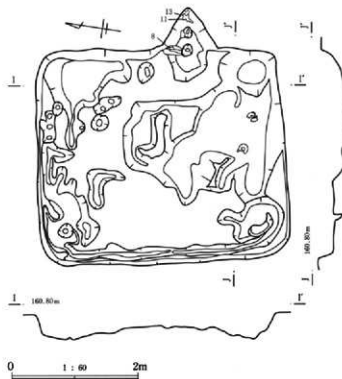
カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内に燃焼部を有する。天井部は崩落し、袖は右袖が崩壊して左袖のみ残存する。規模は、焚口~運道が1.04m、袖焚口幅が0.31mである。燃焼部には天井部から崩落した礫が見られる。右袖は崩壊しているが、16×13×10cmの礫など構築材とする円礫数個が



第224図 5区2号住居跡

残存する。火床面は床面より20cm程下がる。焼焼部には天井部から崩落した支脚用の長さ19cm、径5～7cmの円柱状の石製品が据えられている。掘り方規模は、主軸方向1.10m、幅0.81mである。

内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し楕円形を呈する。規模は径57.0×52.0cm、深さ19cmである。周溝が東辺の中央付近から北辺、西辺、南辺の一部まで巡る。規模は幅7.0～19.0cm、深さ9.0cmである。P1・P2は北西部に位置し、規模は各々径26.0×(12.0)cm、深さ13.5cmと径20.0×25.0cm、深さ29.5cmである。P3は北東部に位置し、規模は径15.0×18.0cm、深さ7.5cmである。



カマド

- 1 黒褐色土 焼土粒、A s-Cを5%含む。
- 2 黄褐色粘土 天井崩落土。
- 3 暗褐色土 黄褐色粘土大ブロック10%、A s-C 5%含む。
- 4 にぶい黄褐色土 焼土粒5%含む。
- 5 黒褐色土 炭化物、灰、焼土粒を20%含む。
- ① 黒褐色土 黄色砂(X)小ブロック20%、A s-C 1%含む。
- ② 暗褐色土 焼土小ブロック、灰小ブロックを20%含む。

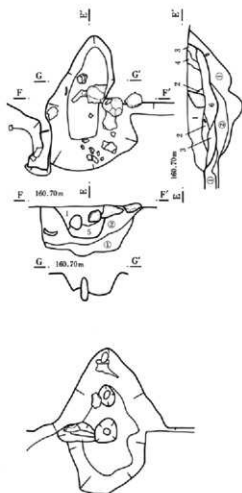
床 平坦ではほぼ水平。貼床及び硬化面は見られない。掘り方より10cm程黒色土と暗褐色土の混土を盛る。

掘り方 中央部及び四隅に土坑状の落ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状況 カマド及びその前面、貯蔵穴に集中しており、カマドでは8の須恵器埴、9・11の土師器甕、その前面で2の須恵器杯、10・12の土師器甕、貯蔵穴では5の須恵器皿が出土している。遺物出土量は埋土からも含めてやや多い。

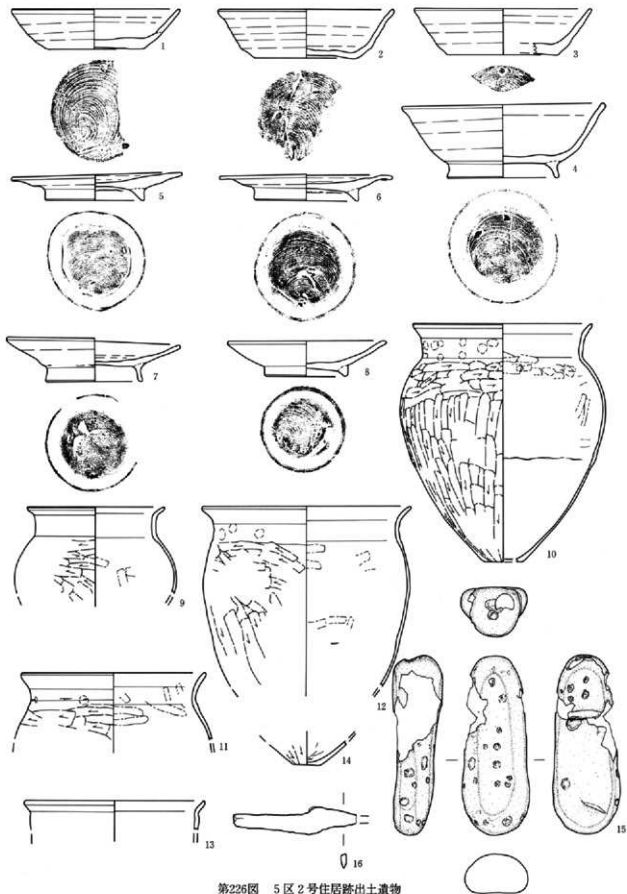
時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



0 1 : 30 1m

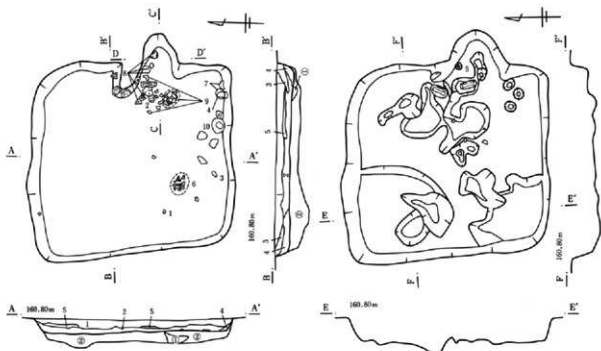
第225図 5区2号住居跡掘り方・カマド

1. 豎穴住居跡

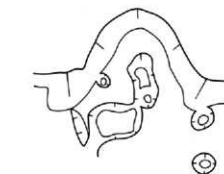
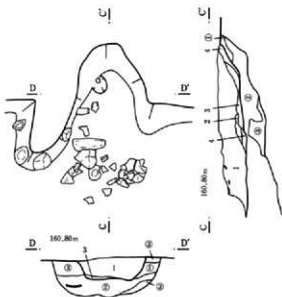


第226图 5区2号住居跡出土遺物

5区3号住居跡 (PL78・151・152)

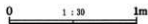


- 1 暗褐色土 A s-C, FA小ブロックを5%含む。
- 2 暗褐色土 A s-C 1%含む。
- 3 にぶい黄褐色土 A s-C, FA小ブロックを5%含む。
- 4 褐色土 A s-C, FA小ブロックを20%含む。
- 5 灰黄褐色土 黒色土大ブロック20%含む。
- ① 黒褐色土 焼土粒10%含む。
- ② 褐色土 A s-C 5%含む。



カマド

- 1 暗褐色土 灰黄褐色粘土大ブロック10%, 焼土粒5%, A s-C 1%含む。
- 2 灰黄褐色粘土 炭化物、焼土粒を5%含む。
- 3 黒褐色土 焼土、灰、炭化物を10%含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒10%, 灰黄褐色粘土大ブロック5%含む。
- ① 暗褐色土 焼土小ブロック40%含む。
- ② 褐色土 焼土小ブロック、灰小ブロックを5%含む。
- ③ 褐色土



第227図 5区3号住居跡

位置 中央部 5B-5C-24-25グリッド

重複 なし

形態 やや歪んだ正方形

主軸方位 N-90°-E

規模 南北3.33m、東西3.18m。

壁 壁高は北辺24.5-27.5cm、東辺8.5-28.0cm、南辺21.5-25.5cm、西辺22.0-26.0cmで平均22.9cmである。

カマド 東辺の中央よりやや南側に位置し、住居内に燃焼部を有する。天井部は崩落し、袖は右袖が崩壊して左袖のみ残存する。規模は、焚口-煙道が0.99m、袖焚口幅が0.55mである。燃焼部には天井部から崩落した25×10×10cmの未固結凝灰岩礫ほかが見られる。左袖は11の磨石や未固結凝灰岩礫を構

築材として使用する。火床面は床面とはほぼ同じ。掘り方規模は、主軸方向2.88m、幅1.74mである。

内部施設 なし

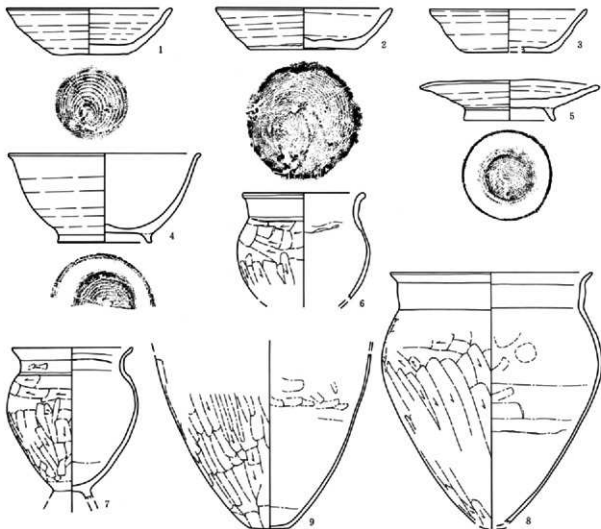
床 平坦で若干北東方向に傾斜している。貼床及び硬化面は見られない。掘り方より20cm程褐色土を盛る。

掘り方 中央部・西側の南北隅に土坑状の落ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

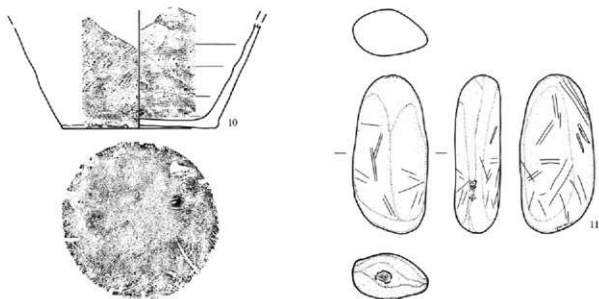
埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 カマド及び南端部に集中しており、カマドでは2の須恵器坏、8・9の土師器甕が出土している。

時期 出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



第228図 5区3号住居跡出土遺物(1)



第229図 5区3号住居跡出土遺物(2)

10区1号住居跡 (P.L.79・152)

位置 南西隅 71~7J-32~33グリッド

重複 なし

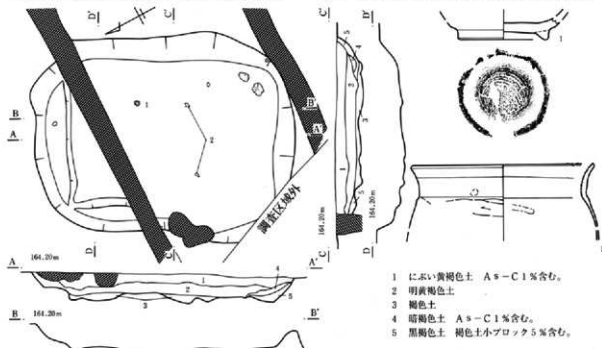
形態 横長方形でカマドが見られない。

主軸方位 不明

規模 南北4.15m、東西3.36m。

壁 壁高は北辺20.0~23.0cm、東辺21.0~33.0cm、

南辺27.0~32.0cm、西辺20.0~26.0cmで平均25.3cm



第230図 10区1号住居跡・出土遺物

である。

カマド なし 内部施設 なし

床 床面は確認できなかった。

埋没状況 壁際から均一に埋没しており、自然埋没と考えられる。

遺物出土状態 堀土から1の須恵器埴、2の土師器甕が出土している。遺物出土量は極めて少ない。

時期 出土遺物から9世紀第2四半期に比定される。

- 1 にぶい黄褐色土 A-S-C 1%含む。
- 2 明黄褐色土
- 3 褐色土
- 4 暗褐色土 A-S-C 1%含む。
- 5 黒褐色土 褐色土小ブロック5%含む。

15区1号住居跡 (P L 80・152)

位置 西端 9N~90-69グリッド

重複 1号堀よりも古い。

形態 ほぼ半分が調査区域外となるため不明。

主軸方位 不明

規模 南北4.94m、東西(1.65)m。

壁 壁高は北辺13.0~15.5cm、東辺16.5~23.5cm、

南辺13.0~21.5cmで平均17.2cmである。

内部施設 貯蔵穴は南東隅に位置し楕円形を呈する。規模は径(64.0)×(50.0)cm、深さ11.0cmである。

周溝が東辺の中央付近から北辺まで巡る。規模は幅8.0~16.0m、深さ5.0mである。

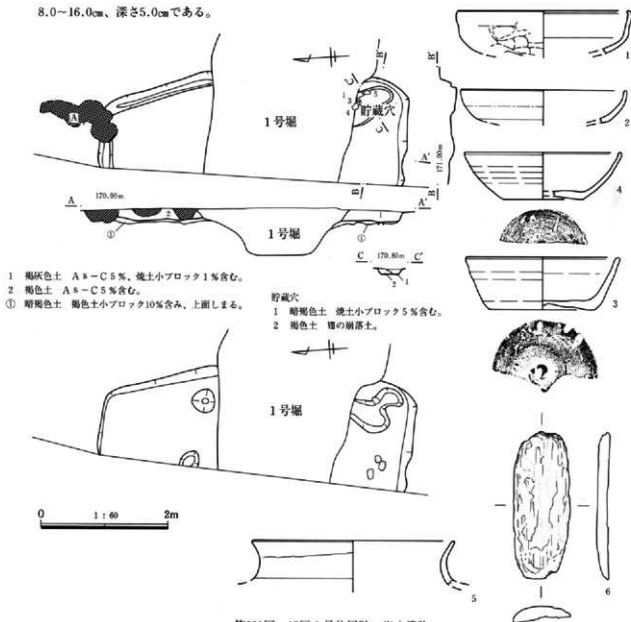
床 ほぼ平坦。掘り方より5cm程暗褐色土を入れて踏み固めている。

掘り方 北部に土坑状の小さな落ち込みが見られるが、明確な床下土坑などは存在しない。

埋没状況 均質だが残存する深さが浅く、埋土からは人為か自然か埋没状況を判断できない。

遺物出土状態 貯蔵穴から1・3・4の土師器坏、5の土師器甕が出土している。遺物出土量は少ない。

時期 出土遺物から9世紀第1四半期に比定される。



第231图 15区1号住居跡・出土遺物

2. 掘立柱建物跡・柱列

1区1号掘立柱建物跡 (PL81)

位置 北西部 2M~2N~20~21グリッド

重複 P1と116号土坑が重複するが、新旧関係不明。P8は3号掘立柱建物跡のP3よりも古い。P5は122号土坑よりも古い。

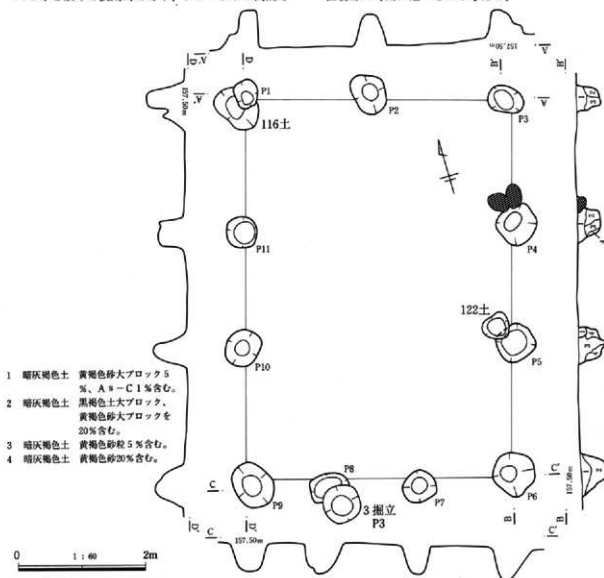
主軸方位 N-16.5°-E

形態 2×3間 (4.24m×6.06m・14尺×20尺)の南北棟。柱間は6.5尺〜7尺が基本か。北辺のP2はP1・P3のはば中間に設ける。東辺のP5は10cm程北寄りである。南辺では2間幅にP7・P8の2本を設けて変則的であり、P8・P9の間隔を

狭く取っている。西辺のP10は10cm程北寄り、P11は10cm程南寄りであり、P10・P11の間隔を狭く取っている。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模はP1がやや小さいが、長径42~76cm、短径34~70cm、深さ36~58cmではほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 土師器坏片がP7で、土師器甕片がP3・P4・P6・P7・P11で出土している。

時期 詳細は不明ながら、出土遺物から周辺の堅穴住居跡の時期に近いものと考えられる。



1区2号掘立柱建物跡 (P L 81)

位置 中央部 2K-2M-19-20グリッド

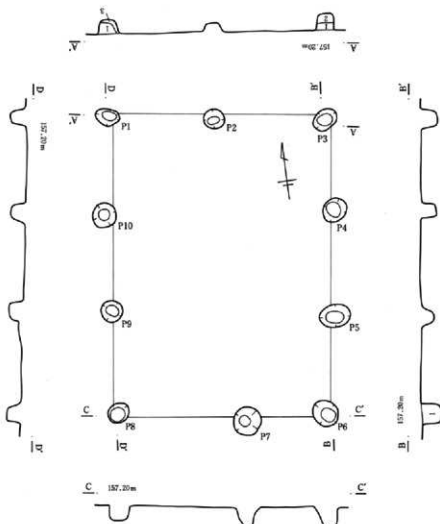
重複 なし 主軸方位 N-8°-E

形態 2×3間 (3.48m×4.85m・11.5尺×16尺)の南北棟。柱間は5.5尺が基準か。北辺のP2は5cm程西寄りである。東辺のP4は10cm程北寄りで、P4・P5の間隔を広く取っている。東辺のP7は35cm程東寄りであり、P7・P8の間隔をかなり広く取っている。西辺はほぼ均等に柱間が取られるが、

P10が柱軸から西側へやや外れている。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は長径33~50cm、短径26~42cm、深さ12~32cmでほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 柱穴から遺物は出土しなかった。

時期 位置及び埋土から、周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。



- 1 灰褐色土 FA大ブロック20%含む。
- 2 灰褐色土 FA大ブロック5%含む。
- 3 灰褐色粘質土。

第233図 1区2号掘立柱建物跡

1区3号掘立柱建物跡 (P.L.81)

位置 中央部西端 2L-2M-21-22グリッド

重複 P 3は1号掘立柱建物跡のP 8及び98号土坑よりも新しい。

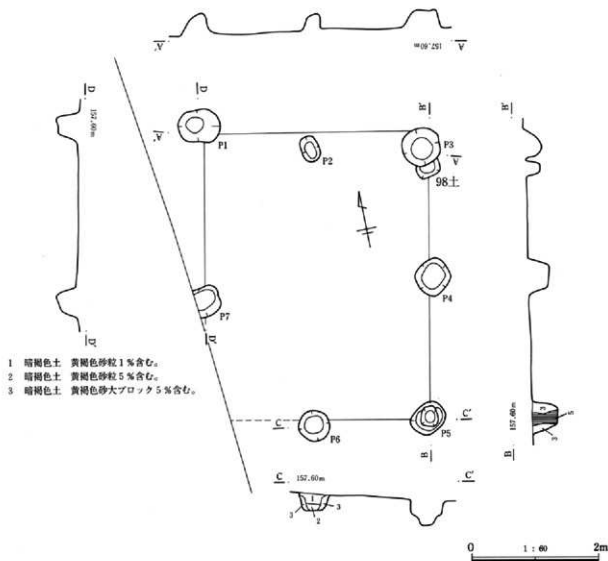
主軸方位 N-12°-E

形態 南西部が調査区域外だが、2×2間 (3.64m×4.54m・12尺×15尺)の南北棟と考えられる。柱間は桁側7尺、梁側6尺が基準か。北辺のP 2はP 1・P 3のはほぼ中間に設けられるが、規模が小さくやや変則的である。北辺は北西-東南方向に柱軸が若干振れている。東辺のP 4は10cm程北寄りである。南辺のP 6は西隅が不明だが、状況から南辺の中間

にあると考えられる。西辺のP 7は東辺と比較して50cm程南寄りで、P 1・P 7の間隔をかなり広く取っている。柱穴はほぼ円形を呈する。柱痕はP 5で確認され、断面で幅18cmを測る。柱穴の規模はP 2が小さい以外、長径50-66cm、短径45-60cm、深さ27-40cmではほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 土師器坏片がP 7で、土師器亮片がP 1-7で、須恵器坏片がP 4で、須恵器亮片がP 1・P 5で出土している。

時期 詳細は不明ながら、出土遺物から周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。



第234図 1区3号掘立柱建物跡

1区4号掘立柱建物跡 (PL82)

位置 中央部 2L~2M-19~21グリッド

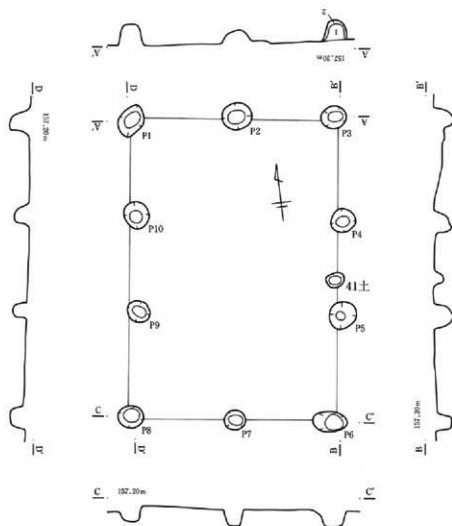
重複 なし 主軸方位 N-9°-E

形態 2×3間 (3.33m×4.85m・11尺×16尺) の南北棟。柱間は5.5尺が基準か。北辺のP2はP1・P3のほぼ中間に設ける。東辺のP4・P5の間隔はやや狭い。P4・P5とも柱軸から若干東へ外れている。南辺のP7はP6・P8のほぼ中間に設ける。西辺のP9・P10とも柱軸から若干東へ外

れており、東辺と符合する。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は長径34~55cm、短径32~41cm、深さ22~33cmで均整がとれている。

遺物出土状況 P8から土師器壺片、須恵器坏類片が出土している。

時期 詳細は不明ながら、出土遺物から周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。



- 1 黒褐色土 F A 混入。
2 灰褐色土 灰白色砂小ブロック5%含む。

0 1 : 60 2m

第235図 1区4号掘立柱建物跡

1区5号掘立柱建物跡 (PL82)

位置 南東部 2J~2K-18~19グリッド

重複 P7と39号土坑が重複するが、新旧関係不明。

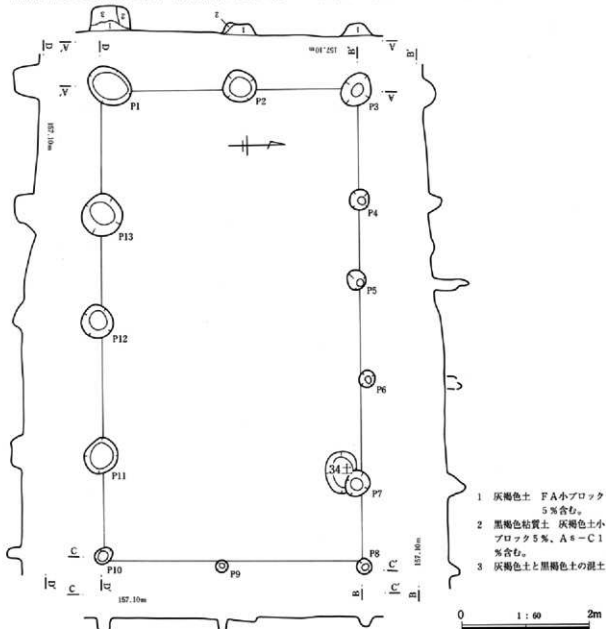
主軸方位 N-89°-W

形態 2×4間 (4.09m×7.57m・13.5尺×25尺)の東西棟。柱間は変則的で想定できない。西辺のP2は10cm程南寄りである。北辺は6本の柱穴を設け変則的で、P4・P7が20cm程東寄りである。P6が柱軸から北へ若干外れている。東辺のP9は15cm程南寄りである。東辺は北東-南西方向に柱軸が若干

干振れている。南辺のP13が20cm程東寄り、P11が30cm程東寄りである。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は、P1~3、P11~13が、長径50~71cm、短径45~60cm、深さ18~40cm、P4~10が、長径20~41cm、短径18~37cm、深さ18~55cmの大小2つに分類される。

遺物出土状態 P7から土師器破片が出土している。

時期 詳細は不明ながら、出土遺物から周辺の竪穴住居跡の時期に近いものと考ええる。



第236図 1区5号掘立柱建物跡

1区6号掘立柱建物跡 (P.L.82・83・152)

位置 西區画 2M-2N-23-24グリッド

重複 P4と176号土坑が重複するが、新旧関係不明。P7は203号土坑よりも古い。

主軸方位 N-80°-W

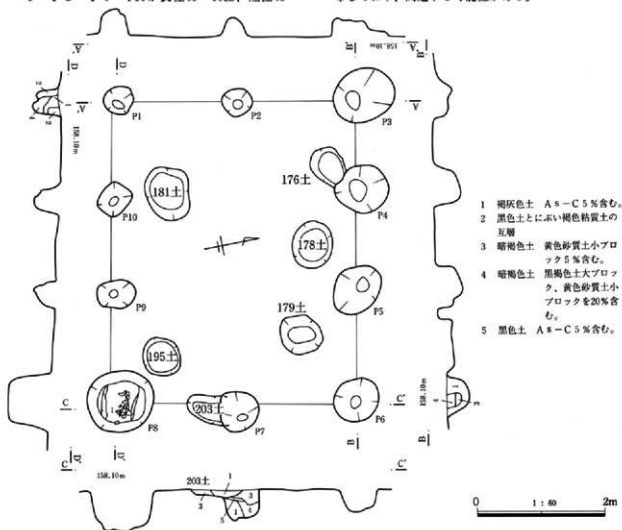
形態 2×3間(3.94m×4.85m・13尺×16尺)の東西棟。柱間は桁側5尺、梁側6.5尺が基準か。西辺のP2はP1・P3のほぼ中間に設ける。北辺の柱間はP3~P4、P4~P5が143・151cm(5尺程度)で、P5~P6が35cm程(1尺程度)長く186cmをとり変則的である。東辺のP7はP6・P8のほぼ中間に設ける。南辺の柱間は北辺同様P8~P9が20cm程長く、北辺と符合する。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は、P1・P2・P9・P10が長径45~60cm、短径43~

45cm、深さ30~40cm、P3~P7が長径65~78cm、短径62~76cm、深さ28~48cm、P8が径101×100cm、深さ63cmの大中小3つに分類される。ただし、P8は別の新しい土坑と重複している可能性がある。

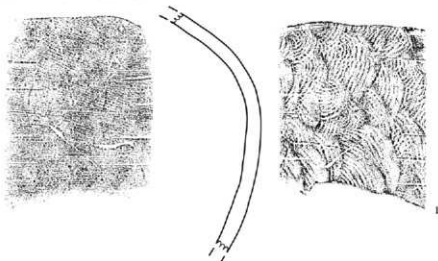
遺物出土状態 P6の覆土及び上層から1の須恵器甕が出土している。その他土師器坏片がP3・P5・P8で、土師器甕片がP1・P3・P5・P8で、須恵器坏類片がP5・P8で、須恵器甕片がP3・P5・P8で出土している。

時期 詳細は不明ながら、出土遺物から周辺の堅穴住居跡の時期に近いものと考ええる。

備考 規模・形態ともに類似する178・179・181・195号土坑が、北辺・南辺に沿って本遺構内側に分布しており、関連する可能性がある。



第237図 1区6号掘立柱建物跡

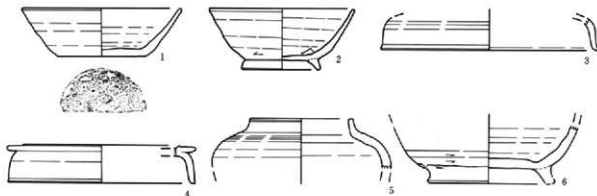


第238図 1区6号掘立柱建物跡出土遺物

1区6号掘立柱建物跡周辺遺物 (P L 152・153)

6号掘立柱建物跡周辺(2M-23及び2L-23)では、土坑等の遺構に直接伴わないが、ややまとまりのある遺物が出土しており、周辺遺物として取り上げた。2L-23グリッドで2の須恵器杯、2M-23グリッドで3・4の須恵器蓋、5・6の須恵器壺が出土している。グリッド別の出土遺物総量は、2M-23グリ

ッドで土師器杯類片が180g、土師器甕片が1630g、須恵器杯類片が1270g、須恵器甕片が291片5190gである。2L-23グリッドは須恵器甕片が7片140g出土している。以上によれば、須恵器甕の出土量が圧倒的に多い傾向が読み取れる。また、前述のとおり6号掘立柱建物跡P 8でも須恵器甕が出土しており、別の新しい土坑が重複している可能性がある。



第239図 1区6号掘立柱建物跡周辺出土遺物

2区1号掘立柱建物跡 (P L 83・84・153)

位置 南西隅 2Q-2R-21-22グリッド

重複 なし 主軸方位 N-18°-E

形態 2×3間(4.24m×6.06m・14尺×20尺)の南北棟。柱間は7尺が基準か。北辺のP 2・P 5は15cm程西寄りである。東辺のP 4・P 5の間隔は1尺分狭く柱間は6尺である。南辺のP 7は15cm程西寄り、北辺に符合する。西辺のP 9・P 10の間隔も15cm程狭く、東辺に符合する。柱穴はほぼ円形を

呈する。柱穴の規模は長径55-73cm、短径50-65cm、深さ50-61cmでよく均整がとれている。柱痕は柱穴底面で圧痕として確認できた。柱痕は不整円形を呈し、規模はP 1で径19×16cm、P 2で径13×13cm、P 3で径21×21cm、P 4で径22×17cm、P 6で径13×15cm、P 7で径13×14cm、P 8で径27×23cm、P 9で径18×16cm、P 10で径16×16cmである。

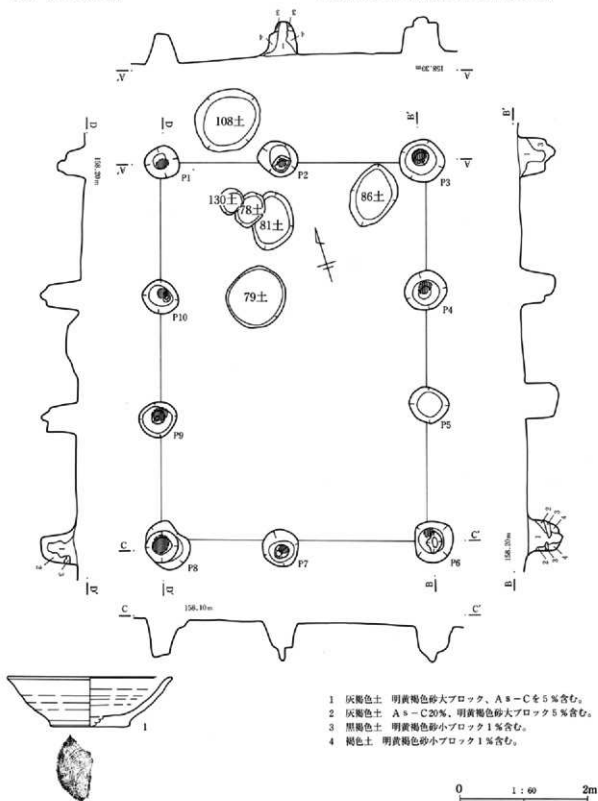
遺物出土状態 P 1から須恵器杯片1片が出土して

2. 掘立柱建物跡・柱列

いる。

時期 位置及び埋土から、周辺の竪穴住居跡の時期に近いものとする。

備考 規模・形態ともに類似する79・81・86・108号土坑が、本遺構内側北半部及び北辺の外側に隣接して分布しており、関連する可能性がある。



第240図 2区1号掘立柱建物跡・出土遺物

2区1号柱列 (P L84)

位置 西區画 2S~2T-24グリッド

重複 P 3と143号土坑が重複するが、新旧関係不明。

主軸方位 N-9°-E

形態 南北4.01mを測り、柱穴の間隔は一様ではない。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は長径25~35cm、短径22~27cm、深さ26~41cmでほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 なし

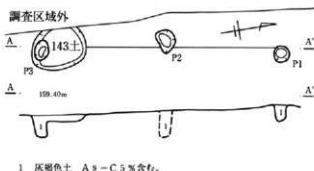
時期 位置及び埋土から、周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。

5区1号掘立柱建物跡 (P L84)

位置 南東部 4S~4T-23~24グリッド

重複 なし 主軸方位 N-90°-E

形態 2×2間 (2.73m×3.33m・9尺×11尺)の東西棟。柱間は桁側5.5尺、梁側4.5尺が基準か。西辺のP 2は若干北寄り、柱軸より東に15cm程外れる。北辺のP 4は若干西寄りである。東辺のP 6は若干北寄り、柱軸より20cm程東へ外れ、西辺に符合する。南辺のP 8はP 1・P 7のほぼ中間に設け、柱軸より25cm程南へ外れている。柱穴は明確な区別



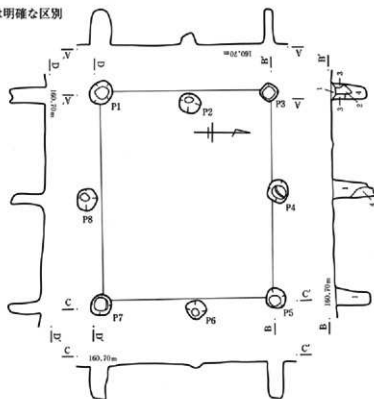
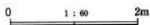
第241図 2区1号柱列

はできないが、円形と隅丸方形が混在する。柱穴の規模はP 2・P 6が浅い以外、長径25~38cm、短径24~32cm、深さ52~72cmでほぼ均整がとれている。柱痕はP 3で確認され、断面で幅10cm程を測る。

遺物出土状態 P番号は不明だが、土師器甕片1片が出土している。

時期 位置及び埋土から、周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。

- 1 暗褐色砂質土 褐色砂小ブロック、A・B・Cを5%含む。
- 2 暗褐色砂質土 黒色土小ブロック、褐色砂小ブロックを10%含む。
- 3 暗褐色砂質土 黒色土大ブロック10%含む。
- 4 暗褐色土 褐色土粒1%含む。



第242図 5区1号掘立柱建物跡

5区2号掘立柱建物跡 (PL84)

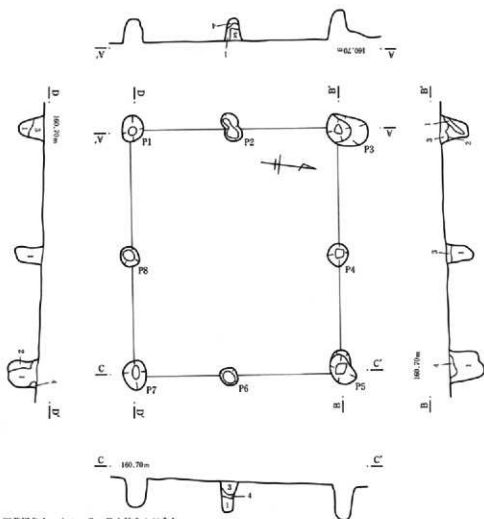
位置 北部 5E-5F-24-25グリッド

重複 なし 主軸方位 N-84°-E

形態 2×2間 (3.33m×3.94m・11尺×13尺) の東西棟。柱間は桁側6.5尺、梁側5.5尺が基準か。西辺のP2はやや南寄りで、新旧関係は不明だが1度掘え替えがなされている。北辺のP4・P5の間隔はやや狭い。東辺のP6は10cm程南寄りで、北辺に符合する。南辺のP8・P9の間隔は狭く、北辺に符合する。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見

られない。柱穴の規模は4隅のP1・P3・P5・P7が長径42~65cm、短径34~45cm、深さ40~54cmで、P2・P4・P6・P8は長径28~32cm、短径34~45cm、深さ40~54cmの大小2つに分類される。遺物出土状態 P番号は不明だが、土師器甕片1片、須恵器坏片が出土している。

時期 位置及び埋土から、周辺の堅穴住居跡の時期に近いものと考えられる。



- 1 灰黄褐色土 A-B-C, F A粒を1%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 褐色砂小ブロック10%含む。
- 3 にぶい黄褐色土 F A小ブロック10%含む。
- 4 黒褐色砂質土 A-B-C 1%含む。

0 1 : 60 2m

第243図 5区2号掘立柱建物跡

5区3号掘立柱建物跡 (PL85)

位置 中央部西端 5D-27グリッド

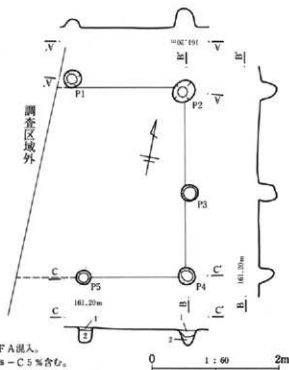
重複 1号柱列と重複するが、新旧関係不明。

主軸方位 N-78°-E

形態 1以上×2間 (1.82m以上×3.03m・6尺以上×10尺) の東西棟か。北辺のP1は柱軸から北へやや外れる。P1・P2の間隔は柱間として一番広い。東辺のP3は10cm程南寄りである。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は、P1・P2が長径37cm、短径32・36cm、深さ14・28cmで、P3～P5は長径22～26cm、短径22～26cm、深さ23～29cmの大小2つに分類される。

遺物出土状態 P番号は不明ながら土師器甕片2片が出土しているが、遺物出土量は極めて少ない。

時期 不明



- 1 褐色土 F A混入。
- 2 褐色土 A 5～C 5% 含む。

第244図 5区3号掘立柱建物跡

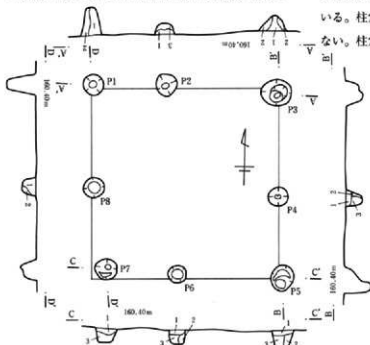
5区4号掘立柱建物跡 (PL85)

位置 北隅 5F-5G-22-23グリッド

重複 なし 主軸方位 真北

形態 2×2間 (3.03m×3.03m・10尺×10尺) の正方形。北辺のP2は30cm程西寄りである。東辺の

P4は15cm程南寄りである。南辺のP6が15cm程西寄りで、北辺と符合する。南辺は北西-南東方向に柱軸が若干振れている。西辺のP8は15cm程南寄りである。西辺は北西-南東方向に柱軸が若干振れている。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模はP3がやや大きい以外、長径28



- 1 灰黄褐色土 F A混入。
- 2 灰黄褐色土 F A小ブロック10% 含む。
- 3 暗褐色粘質土。

第245図 5区4号掘立柱建物跡

2. 掘立柱建物跡・柱列

～41cm、短径27～36cm、深さ18～44cmで、平面形は大小2つに分類されるが、深さは一様ではない。

遺物出土状態 P番号は不明ながら土師器片4片、須恵器片2片が出土しているが、遺物出土

量は極めて少ない。

時期 位置及び埋土から、周辺の堅穴住居跡の時期に近いものとする。

5区1号柱列

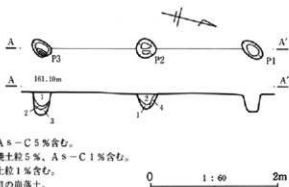
位置 中央部西端 5D～5E-27グリッド

重複 3号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係不明。
主軸方位 N-15°-W

形態 南北368mを測り、柱間は5.5尺が基準か。

遺物出土状態 なし **時期** 不明

- 1 暗褐色土 A S-C 5%含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒5%、A S-C 1%含む。
- 3 褐色土 焼土粒1%含む。
- 4 黒褐色土 VIの前落土。



第246図 5区1号柱列

6区1号掘立柱建物跡 (P L85)

位置 中央部西寄り 50-26グリッド

重複 南東隅の柱穴がF A上溝と重複していたと見られるが確認できなかった。新旧関係不明。

主軸方位 N-8°-E

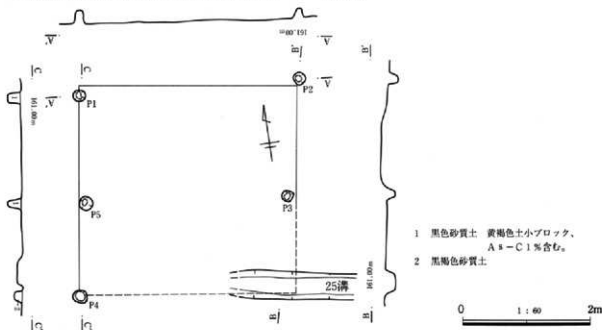
形態 1×2間 (3.33m×3.48m・11尺×11.5尺) のほぼ正方形。北辺は北東-南西方向に柱軸が若干振れている。東辺は南東隅柱が未検出だが、状況から見て、東辺のP3は20cm程南寄り、柱軸からも15cm程西に外れる。西辺のP5は10cm程南寄り、

柱軸からも若干東に外れる。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は長径18～22cm、短径18～21cm、深さ13～20cmでほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 なし

時期 位置及び埋土から、2号掘立柱建物跡と同様に中近世以降と考える。

備考 位置及び埋土から、3号土坑との関連が想定される。



第247図 6区1号掘立柱建物跡

- 1 黒色砂質土 黄褐色土小ブロック、A S-C 1%含む。
- 2 黒褐色砂質土

6区2号掘立柱建物跡 (PL86)

位置 中央部西寄り 5L~5M-27グリッド

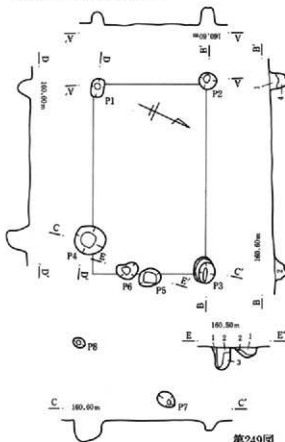
重複 なし 主軸方位 N-77°-W

形態 1×2間 (1.52m×3.94m・5尺×13尺) の東西棟。西辺のP1は15cm程東寄り、西辺は北西-南東方向に柱軸が若干振れている。北辺のP3は若干南寄り、柱軸から20cm程北に外れる。東辺のP5は若干東寄りである。南辺のP6は若干東寄り、柱軸から20cm程南に外れる。P7も柱軸に載っており、使用されていた可能性がある。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は、P4・P5が長径50・54cm、短径43・48cm、深さ56・61cmで、P1~P3、P6・P7が長径26~38cm、短径23~34cm、深さ26~77cmで、平面形は大小2つに分類されるが、深さは様々ではない。

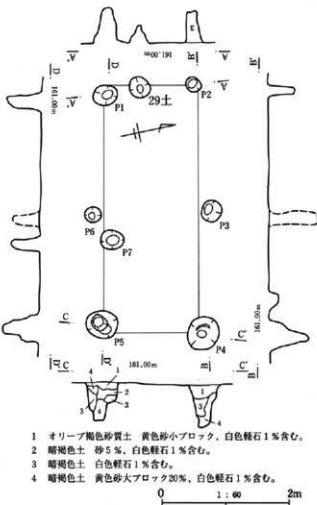
遺物出土状態 なし

時期 位置及び埋土から、中近世以降と考える。

備考 埋土が18・19号土坑及び1号井戸跡と類似しており、関連が想定される。



第249図 6区3号掘立柱建物跡



第248図 6区2号掘立柱建物跡

6区3号掘立柱建物跡 (PL86)

位置 南部5J~5K-24グリッド

重複 なし 主軸方位 N-65°-E

形態 1×1間 (1.82m×3.03m・6尺×10尺) の東西棟。東辺のP4は60cm程西寄り、東辺は北東-南西方向に柱軸が大きく振れている。P5・P6は変則的だが柱軸に載っており、使用されていた可能性がある。P7・P8も関連するか。柱穴はP1を除いてほぼ円形を呈する。柱痕はP6で確認され、

- 1 にぶい黄褐色土 Aス-C5%、FA小ブロック1%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 FA大ブロック40%、Aス-C5%含む。
- 3 黒褐色土 FA大ブロック40%、Aス-C5%含む。
- 4 暗褐色土 Aス-C、FA小ブロックを1%含む。

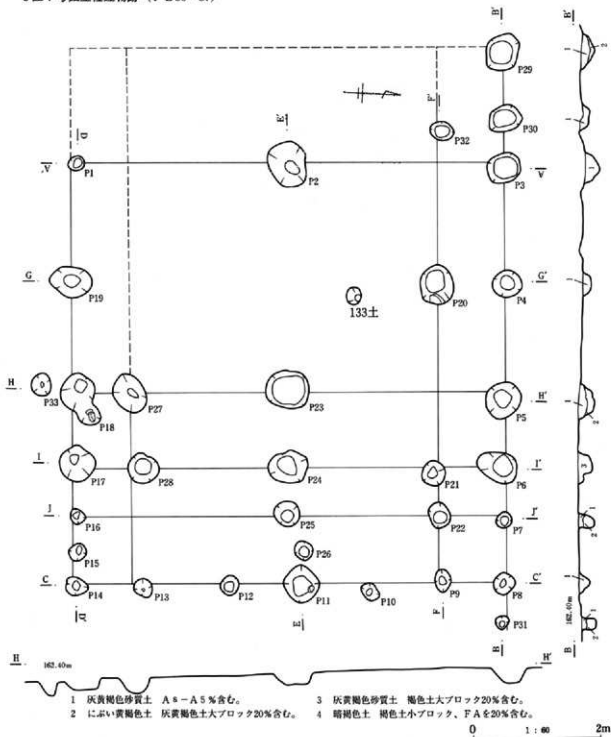
断面で幅9cmを測る。柱穴の規模はP3・P4が長径40・48cm、短径32・44cm、深さ15・36cmで、P1・P2・P5～P7が長径28～34cm、短径20～30cm、深さ14～36cmで、P8が更に小さく、大中小3つに

分類される。

遺物出土状態 なし

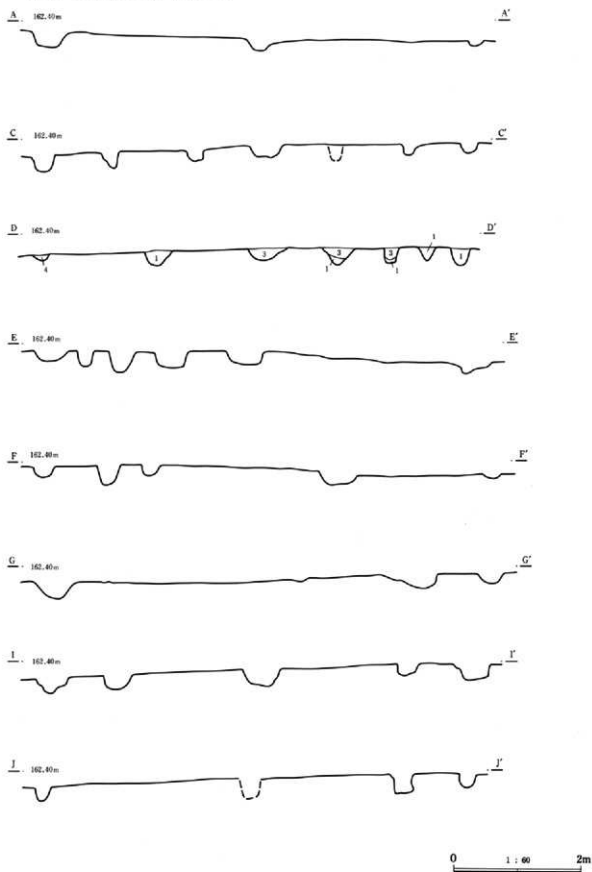
時期 位置及び埋土から、5区の堅穴住居跡及び掘立柱建物跡の時期に近いものとする。

8区1号掘立柱建物跡 (PL86・87)



第250図 8区1号掘立柱建物跡 (1)

第5章 金古北十三町遺跡の遺構・遺物



第251図 8区1号掘立柱建物跡(2)

位置 中央部北寄り 60～6Q-25～27グリッド

重複 なし

主軸方位 N-3°-E

形態 6.67×6.58mのほぼ正方形を呈し、東西に長い軸線を持つ。柱穴の配置は、P 6～P 17の南北軸を境にして東西で異なる（以下これを境に西側部・東側部という）。西側部四辺のP 2・P 4・P 19・P 24は、ともに各辺のほぼ中間に設けられ、P 28は南辺から1.08m程に配置される。またP 5～P 18南北軸のP 24もそのほぼ中間で、P 27は南辺から0.82mをとって設ける。東側部北辺のP 7は、P 6・P 8のほぼ中間に設ける。東側部東辺は7本の柱穴を設け、間隔は0.96～1.36mで数値にややばらつきがある。南辺のP 16は、P 14・P 17のほぼ中間で、更に東側の中間にP 15を交差的に設け、P 26と対応

している。西側部の柱穴は隅丸方形を呈するものが多く大型で、明確な柱痕は見られない。規模はP 1・P 21が小さい以外、長径47～73cm、短径42～60cm、深さ16～27cmでほぼ均整がとれている。東側部の柱穴はほぼ円形を呈し小型で、明確な柱痕は見られない。規模はP 11が大きい以外、長径21～40cm、短径21～39cm、深さ16～33cmでほぼ均整がとれている。なお、柱痕は確認できないが、P 11・P 18・P 20で小塚が見られる。

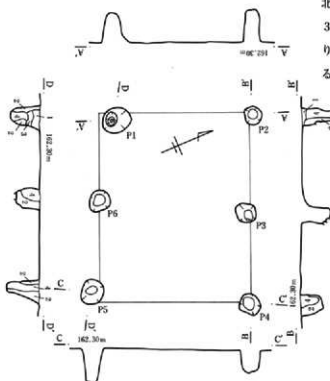
遺物出土状態 なし

時期 位置及び埋土から、1・5・64号土坑と関連すると考える。

8区2号掘立柱建物跡（P L 87）

位置 北西部 6Q-28グリッド

重複 3号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係不明。



第252図 8区2号掘立柱建物跡

主軸方位 N-68°-W

形態 1×2間 (2.42m×3.03m・8尺×10尺) の東西棟。西辺のP 1は20cm程北寄りであり、西辺は北西-南東方向に柱軸が若干振れている。北辺のP 3は10cm程西寄りである。東辺のP 5は10cm程南寄り、東辺は北東-南西方向に柱軸が若干振れている。南辺のP 6は若干西寄り、南辺は北西-南東方向に柱軸が大きく振れている。柱穴はほぼ円形を呈する。柱痕は4つの柱穴で確認され、断面で測定できた幅は、P 1・P 2で11cm、P 4で12cm、P 5で10cmである。柱穴の規模は長径31～44cm、短径28～39cm、深さ37～56cmでほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 なし 時期 不明

- 1 ぶい黄褐色土 黒褐色土大ブロック20%含む。
- 2 暗褐色土 A=C1%含む。
- 3 暗褐色土と黒褐色土の混土 固くしめる。
- 4 灰黄褐色土と黒褐色土の混土

0 1:60 2m

8区3号掘立柱建物跡 (P.L.87)

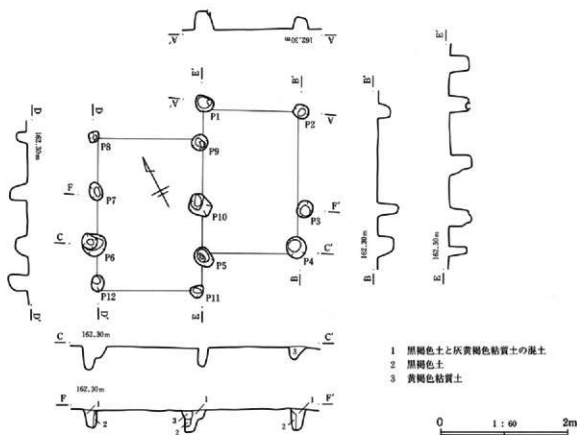
位置 北西部 6Q-28グリッド

重複 2号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係不明。主軸方位 N-27°-E

形態 東側に1×1間(2.27m×1.52m・7.5尺×5尺)の南北棟(仮称 東棟)と、西側に1×1間(2.42m×1.67m・8尺×5.5尺)の南北棟(仮称 西棟)のほぼ同じ規模の2つの建物が接続した形態をなす。あるいは2軒として扱うべきかもしれないが、接続部の柱軸を共有している可能性があり、1軒扱いとした。東棟の北辺は北西-南東方向に柱軸が若干振れている。東辺のP3は南辺から58cm(2尺程度)をとって配置されるが、柱軸から10cm程東に外れる。なお、P2・P3の間に柱穴を設けないのは、他の南北柱軸と比べて変則的である。南辺は北東-南西方向に柱軸が大きく振れている。西辺は西棟の東辺と重複または共有し、P9が北辺から67cm(2尺程度)をとって配置される。したがって、

P9以北は西棟北辺の柱軸から2尺程の造り出しを設けた形態となる。西棟の北辺は北西-南東方向に柱軸が若干振れている。東辺は東棟の西辺と重複または共有し、P5が南辺から54cm(2尺程度)をとって配置される。したがって、P5以南は東棟南辺の柱軸から2尺程の造り出しを設けた形態となり、東棟の北辺と対照的である。南辺は北西-南東方向に柱軸が若干振れている。西辺のP6も南辺から62cm(2尺程度)をとって配置され、東辺とよく符合している。柱穴はほぼ円形を呈する。柱痕はP3で確認され、断面で幅10cmを測る。また、P1・P8・P9の底面に小礫が見られる。柱穴の規模はP4・P6・P10が長径33~39cm、短径31~35cm、深さ27~36cmで、P1~P3、P5・P7~P9が長径17~29cm、短径16~29cm、深さ17~36cmで大小2つに分類される。

遺物出土状態 なし 時期 不明



第253図 8区3号掘立柱建物跡

9区1号掘立柱建物跡 (P.L.97)

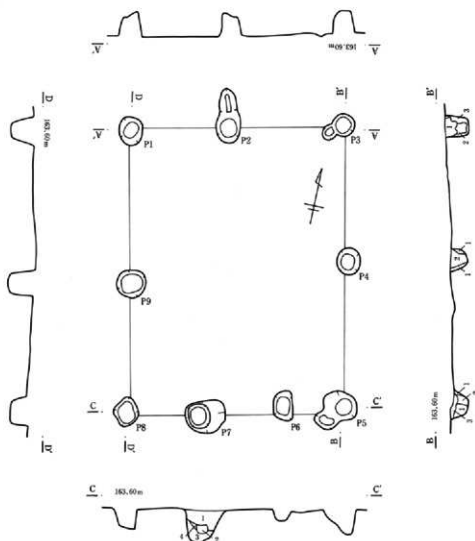
位置 中央部東寄り 7E~7F-27グリッド

重複 なし 主軸方位 N-77°-E

形態 2×2間 (3.48m×4.55m・11.5尺×15尺)の南北棟。北辺のP2は10cm程西寄りである。東辺のP4はP3・P5のほぼ中間に設けられるが、P5は10cm程北寄りである。南辺4本の柱穴を設け変則的で、P6・P7の間隔を広くとっている。南辺は北東-南西方向に柱軸が若干振れている。西辺のP9は15cm程南寄りである。柱穴は明確な区別はで

きないが、円形と隅丸方形が混在する。柱痕は3つの柱穴で確認され、断面で測定できた幅は、P3で8cm、P4・P5で7cmである。柱穴の規模はP5・P7が長径58・64cm、短径42・50cm、深さ36・50cm、P1~P4・P6・P8・P9が長径36~47cm、短径30~44cm、深さ16~41cmの大小2つに分類される。

遺物出土状態 なし 時期 不明



1 灰褐色土 にくい黄褐色土小ブロック40%、A5-C1%含む。

2 にくい黄褐色土

3 にくい褐色土 にくい黄褐色土小ブロック5%含む。

4 暗褐色土 黄褐色砂小ブロック20%含む。

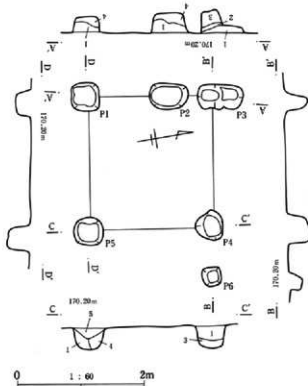
第254図 9区1号掘立柱建物跡

14区1号掘立柱建物跡 (P L 88・153)

位置 中央部南寄り 9G-9H-64-65グリッド

重複 なし 主軸方位 N-83°-W

形態 1×1間 (1.97m×2.12m・6.5尺×7尺) のほぼ正方形。西辺のP2は北辺から66cm (2尺程度) をとって設け、変則的である。柱穴は隅丸方形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模はP2がやや横長である以外、長径40-48cm、短径30-45cm、

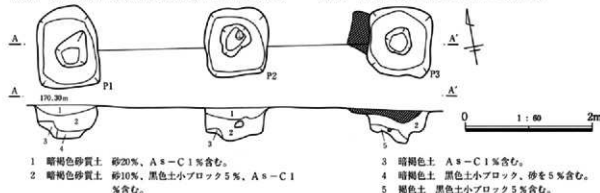


14区1号柱列 (P L 88)

位置 中央部北側 9I-64-65グリッド

重複 なし 主軸方位 N-82°-W

形態 東西6.26mを測り、柱間は2.6m程 (9尺程度)



1 暗褐色砂質土 砂20%, A s-C 1%含む。

2 暗褐色砂質土 砂10%, 黒色土小ブロック5%, A s-C 1%含む。

3 暗褐色土 A s-C 1%含む。

4 暗褐色土 黒色土小ブロック、砂を5%含む。

5 褐色土 黒色土小ブロック5%含む。

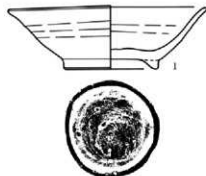
第256図 14区1号柱列

深さ20-34cmではほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 P6の埋土からはほぼ完形の1の須恵器坑が出土している。

時期 位置及び埋土から、27・36・37号土坑及び7号溝と関連すると思われる、1の須恵器坑は混入の可能性がある。西側の土坑等の時期に近接すると思われる。

- 1 に多い黄褐色砂質土 砂20%, 黒色土小ブロック、A s-C を5%含む。
- 2 暗褐色砂質土 A s-C 1%含む。
- 3 暗褐色土 しまらない。
- 4 に多い黄褐色砂質土 黒色土小ブロック10%, A s-C 1%含む。
- 5 暗褐色砂質土 砂40%, 褐色土粒1%含む。



第255図 14区1号掘立柱建物跡・出土遺物

をとる。柱穴は方形で、中段をとって更に中央部に小穴を設ける。明確な柱痕は見られないが、P2で小穴が置かれている。柱穴の規模は長径104-127cm、短径97-100cm、深さ52cmではほぼ均整がとれている。遺物出土状態 P2の埋土から陶磁器片3片が出土している。

時期 出土遺物から近世以降かと考える。

2. 掘立柱建物跡・柱列

15区1号掘立柱建物跡 (PL88)

位置 中央部西寄り 9M-67-68グリッド

重複 1号柱列と重複するが、新旧関係不明。1号道路跡より新しい。

主軸方位 N-80°-W

形態 1×2間 (1.97m×4.09m・6.5尺×13.5尺)の東西棟。柱間は6.5尺が基準か。西辺は北西-南東方向に柱軸が若干振れている。北辺のP3は若干西寄りである。東辺は北東-南西方向に柱軸が若干振れている。南辺のP6は若干東寄りである。柱穴はほぼ円形を呈し、明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は長径23-33cm、短径20-28cm、深さ21-28cmではほぼ均整がとれている。

遺物出土状態 なし

時期 1号道路跡の重複関係から中世以降と考える。



第257図 15区1号掘立柱建物跡出土遺物

15区1号柱列 (PL153)

位置 中央部西寄り 9M-67-68グリッド

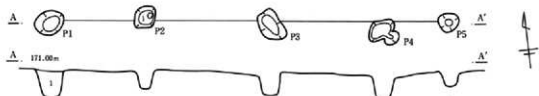
重複 1号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係不明。1号道路跡より新しい。

主軸方位 N-81°-W

形態 東西6.74mを測り、柱穴の間隔は一様ではない。P4は柱軸から15cm程西に外れる。柱穴は隅丸方形と円形が混在する。明確な柱痕は見られない。柱穴の規模は長径33-51cm、短径28-39cm、深さ22-44cmではほぼ均整がとれている。

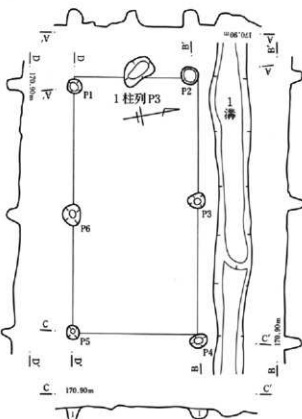
遺物出土状態 なし

時期 1号道路跡の重複関係から中世以降と考える。



1 オリーブ褐色砂質土 砂20%、黒色土小ブロック10%含む。

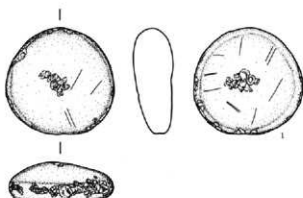
第259図 15区1号柱列・出土遺物



1 オリーブ褐色砂質土 砂20%、黒色土小ブロック10%含む。

0 1:60 2m

第258図 15区1号掘立柱建物跡



1 オリーブ褐色砂質土 砂20%、黒色土小ブロック10%含む。

第259図 15区1号柱列・出土遺物

3. 土坑・土墳墓・堅穴状遺構・粘土採掘坑群・被熱土坑

0区 A s-B下河道路面で確認された1号土坑は、A s-Bの転起土を埋土とするA s-B降下以降の土坑である。2-13号土坑は、9号土坑がA s-Bを含む以外一様に、にぶい黄褐色～灰褐色土を埋土とし、形状はビットであり、多くは1区の堅穴住居跡等に関連すると見られる。

1号土坑 (P L 89)

ほぼ円形を呈し浅く、底面はほぼ平坦。規模は径78×57cm、深さ7cmである。埋土は混入の少ないA

1区 1-5号土坑はA s-Bの二次堆積に被覆される一連の土坑、6-7号土坑はA s-Bを含み長方形を呈し、形状から芋穴と位置づけられ、調査前に存在した径道に並行する。8-214号土坑はA s-Cを含む灰褐色土～黒褐色土を埋土とする一連の土坑で、形状はビットであり、多くは堅穴住居跡・掘立柱建物跡等に関連すると見られる。このうち8・40・133号土坑は、他に比べてやや規模が大きい。

1号土坑 (P L 89)

楕円形を呈し、底面はやや荒れる。規模は径107×58cm、深さ17cmである。埋土がA s-Bの二次堆積であることから、表流水の影響も考えられるため、自然形成された可能性を残す。遺物は出土しなかった。

2号土坑 (P L 89)

不整形を呈し、底面はやや荒れる。規模は径76×50cm、深さ11cmである。1号土坑同様に、自然形成された可能性を残す。土師器片・須恵器片1片ずつが出土している。

6号土坑 (P L 89)

長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径220×72cm、深さ9cmである。芋穴か。埋没は人為埋堀による。遺物は出土しなかった。

8号土坑 (P L 89)

長方形を呈し、底面中央部がやや丸く落ち込む。

s-Bの転起土。確認面がA s-B下面であるため、A s-B堆積を考慮すれば、周辺の状況から40cm以上の深さを加算することが見込まれる。形態及び立地から見て井戸跡も考慮される。遺物は出土しなかった。

11号土坑 (P L 89)

円形を呈する浅いビット。底面はほぼ平坦。規模は径35×29cm、深さ12cmである。遺物は出土しなかった。

規模は径226×135cm、深さ65cmである。壁は東・南側は垂直に近く、北・西側は緩く立ち上がる。上面では各面に1か所ずつ外側に張り出した平坦部分があり、特に西側は他に比べて広い。性格不明。遺物は土師器片5片・須恵器片8片が出土している。

40号土坑

西端部を攪乱が壊すが、隅丸方形を呈すると見られ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平らでやや丸みを持つ。規模は径110×61cm以上、深さ18cmである。遺物は土師器片2片・須恵器片2片が出土している。

114号土坑 (P L 153)

ほぼ円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる浅いビット。底面はほぼ平坦。規模は径55×49cm、深さ14cmである。遺物は1の須恵器蓋のほか、土師器片・須恵器片1片ずつが出土している。

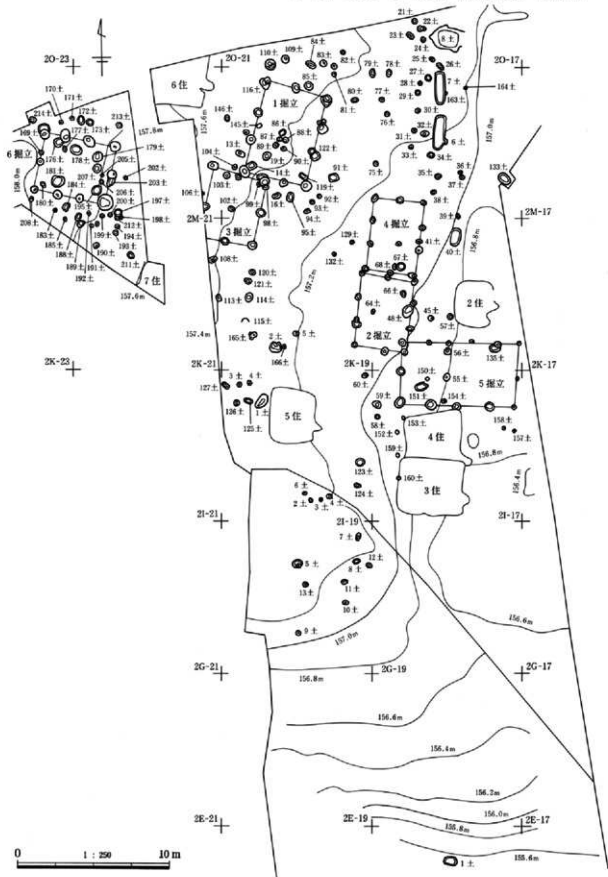
121号土坑 (P L 153)

楕円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径43×30cm、深さ10cmである。遺物は埋土から1の土師器甕片ほか数片が出土している。

133号土坑 (P L 89・153)

上面底面ともに楕円形を呈し深く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径84×65cm、深さ42cmである。遺物は1・2の須恵器杯のほか、土師器片9片・須恵器片1片が出土している。

3. 土坑·土壙墓·豎穴狀遺構·粘土探掘坑群·被熟土坑



第260图 0区・1区土坑全体图

169号土坑 (P L153)

円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径80×28cm、深さ28cmである。遺物は1の鉄滓のみが出土している。

176号土坑 (P L90)

不整円形を呈し浅く、壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径63以上×45cm、深さ17cmである。6号掘立柱建物跡のP4と重複するが、新旧関係不明。遺物は土師器甕片6片、須恵器甕片1片を出土している。

178号土坑 (P L90)

円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径74×63cm、深さ17cmである。遺物は出土しなかった。規模・形態が類似する179・181・195号土坑とともに、分布から6号掘立柱建物跡との関連が想定される。

179号土坑 (P L90)

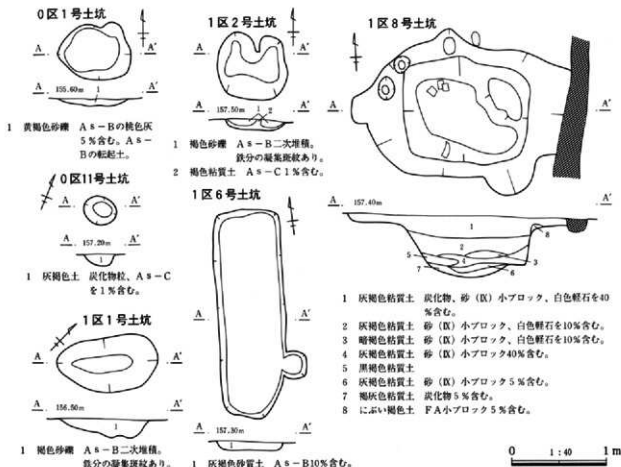
不整円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径68×61cm、深さ9cmである。遺物は出土しなかった。178号土坑同様、6号掘立柱建物跡との関連が想定される。

181号土坑 (P L90)

不整円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径88×68cm、深さ23cmである。遺物は土師器坏片2片、土師器甕片2片、須恵器坏類片2片が出土している。178号土坑同様、6号掘立柱建物跡との関連が想定される。

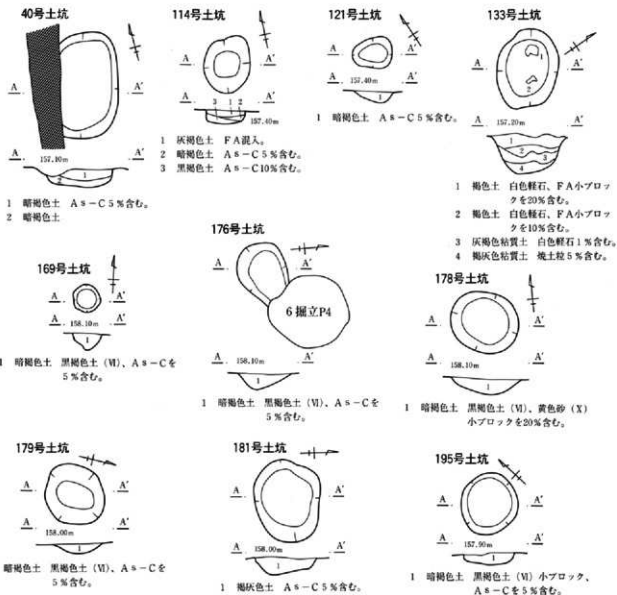
195号土坑 (P L90)

円形を呈し浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径63×58cm、深さ13cmである。遺物は出土しなかった。178号土坑同様、6号掘立柱建物跡との関連が想定される。



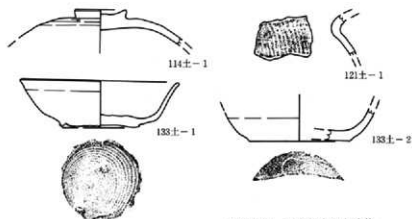
第261図 0区・1区土坑(1)

3. 土坑・土壇墓・堅穴状遺構・粘土採掘坑群・被熱土坑

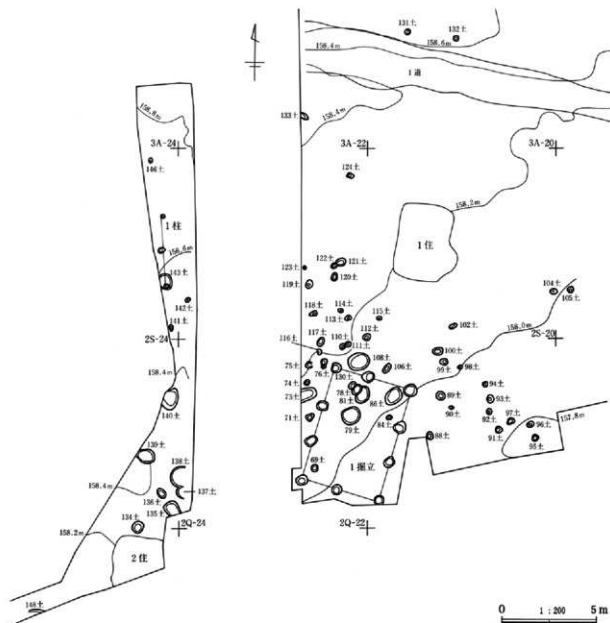


第262図 1区土坑 (2)

0 1:40 1m



第263図 1区土坑出土遺物



第264図 2区土坑全体図

2区 1～66欠番。埋土は全てA s - C、F Aを含むにぶい黄褐色土～灰褐色土であり、多くは堅穴住居跡・掘立柱建物跡等に関連すると見られる。このうち79・108・130・138号土坑は、規模や形態で類似する。148号土坑では唯一古墳時代遺物が出土した。以上を除く土坑の形状はビットである。

78・81・130号土坑 (P L 90)

3基ともほぼ円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は全て平坦。78号土坑の規模は径96×93cm、深さ9cmである。81号土坑の規模は径98×

70cm、深さ16cmである。130号土坑の規模は径45×34cm、深さ16cmである。新旧関係は、81・78・130号土坑の順に新しい。130号土坑は規模・形態ともに79・86・108号土坑に類似し、1号掘立柱建物跡との関連が想定される。遺物は81号土坑のみ土師器片2片が出土している。

79号土坑 (P L 90)

整った円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦。規模は径96×93cm、深さ9cmである。130号土坑同様に、1号掘立柱建物跡との関連が想

定される。遺物は土師器片2片が出土している。

86号土坑 (P L 90)

楕円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径86×76cm、深さ19cmである。130号土坑同様に、1号掘立柱建物跡との関連が想定される。遺物は出土しなかった。

104号土坑 (P L 90・153)

円形を呈しやや深いビット。底面はやや丸みを持つ。規模は径39×26cm、深さ34cmである。遺物は1の須恵器坏のみが出土している。

108号土坑 (P L 90)

整った円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦。規模は径103×96cm、深さ25cmである。130号土坑同様に、1号掘立柱建物跡との関連が想定される。遺物は土師器片2片と円礫1個が出土している。

3区 2・3号土坑の埋土は、ともにオリブ褐色砂質土である。3区の遺構密度は薄いのが、1号堀との関連は考慮できない。

2号土坑 (P L 90・153)

137・138号土坑

ほぼ半分が調査区域外だが、円形を呈すると見られ浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦。137号土坑の規模は径43以上×59cm、深さ8cmである。138号土坑の径75以上×111cm、深さ13cmである。新旧関係不明。138号土坑は規模・形態ともに79・86・108・130号土坑に類似する。遺物は出土しなかった。

140号土坑

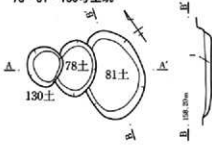
半分が調査区域外となるが、ほぼ楕円形を呈すると見られる。底面はほぼ平らで丸みを持つ。規模は径115×77cm、深さ36cmである。壁は緩やかに立ち上がりやや深い。遺物は出土しなかった。

148号土坑 (P L 153)

攪乱が著しく、また大部分が調査区域外となるため形状不明。壁は斜めに立ち上がりやや深い。底面はほぼ平坦。規模は径115以上×39以上cm、深さ41cmである。遺物は1の土師器坏のみが出土している。

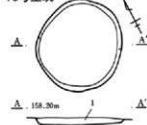
楕円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり不分明。底面は丸みを持つ。規模は径75×56cm、深さ17cmである。1号堀よりも古い。遺物は1の須恵器把手付瓶の把手部のみが出土している。

78・81・130号土坑



- 1 灰褐色土 FA混入。A s-C 5% 含む。
2 灰褐色土 色調暗い。

79号土坑



- 1 灰褐色土 FA混入。A s-C 5% 含む。

86号土坑



- 1 灰褐色土 FA混入。A s-C 5% 含む。

104号土坑

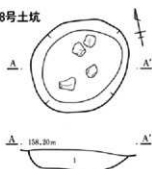


- 1 灰褐色土 FA混入。A s-C 5% 含む。
2 灰褐色土 黒褐色土小ブロック10%。A s-C 5% 含む。

0 1:40 1 m

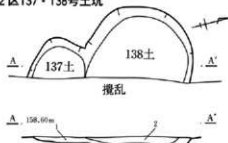
第265図 2区土坑

2区108号土坑



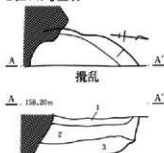
- 1 灰褐色土 F A混入。A s-C 5%含む。

2区137・138号土坑



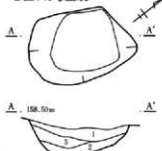
- 1 灰褐色土 IV主体。A s-C 5%含む。
2 灰褐色土 IV主体。黒色土 (VI) 小ブロック20%、A s-C 5%含む。

2区148号土坑



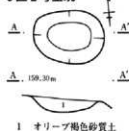
- 1 黒褐色土 VI主体。
2 灰褐色土 IV主体。黒色土 (VI) 小ブロック20%、A s-C 5%含む。
3 黒褐色土 黄褐色土大ブロック20%、A s-C 1%含む。

2区140号土坑



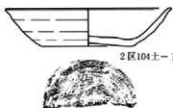
- 1 灰褐色土 IV主体。A s-C 5%含む。
2 灰褐色土 IV主体。黒色土 (VI) 小ブロック20%、A s-C 5%含む。
3 黒褐色土 VI主体。

3区2号土坑

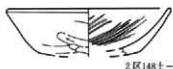


- 1 オリーブ褐色砂質土

第266図 2区・3区土坑



2区104土-1



2区148土-1



3区2土-1 (1/3)

第267図 2区・3区土坑出土遺物

4区 本区は調査面積が大きいこともあり土坑の数量が多いが、大部分はピットである。分布は、1号堀の西側全域及び1号堀の東側の2・4号住居跡周辺には集中している。したがって不分明ながら、土坑は竪穴住居に関連するものと1・2号堀に関連するものとが混在すると想定する。埋土は、①表土に近いオリーブ褐色砂質土、②黒色砂礫主体のもの、③F Aの純粋層、④A s-C、F Aを含むにふ

い黄褐色～黒褐色土、都合4つに分類できる。①は82・83・161・163・245・266・288号土坑であり、後述する82・83号土坑を除いて形状から芋穴と位置づけられ、245号土坑を除いて調査前の地境及び径道に並行する特徴がある。②は225号土坑だけであり、

1号堀の一部に類似した埋土が見られる。③は273～276号土坑だけに見られ、調査区の北東隅に集中する。④は上記以外の土坑全てであり、掲載した16・17・60・72・77・79・99・133・173・182・206・217・223・284号土坑を除いて、形状はビットである。

16号土坑 (P L 90)

ほぼ半分が重複する1号堀に壊されるが楕円形を呈すると見られ、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径195×125cm以上、深さ32cmである。遺物は出土しなかった。位置及び埋土から、周辺の堅穴住居跡に関連すると考える。

17号土坑 (P L 90)

大部分を重複する1号堀に壊され形状は不明。壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径141×55cm以上、深さ33cmである。遺物は出土しなかった。埋土・形態ともに16号土坑に類似し、周辺の堅穴住居跡に関連すると考える。

60号土坑 (P L 90)

ほぼ半分が重複する1号堀に壊されるが円形を呈し、壁は丸みを持ってやや垂直に立ち上がる。底面は平らでやや凸凹する。規模は径113×98cm、深さ29cmである。遺物は出土しなかった。埋土・形態ともに16・17号土坑に類似し、周辺の堅穴住居跡に関連すると考える。

72号土坑 (P L 91)

不整形円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦。規模は径88×76cm、深さ20cmである。2号溝よりも新しい。遺物は出土しなかった。2号溝の比定年代から平安時代以降である。

77号土坑

不整形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径88×76cm、深さ20cmである。2号溝より新しい。遺物は出土しなかった。2号溝の比定年代から平安時代以降である。

79号土坑 (P L 153)

不整形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径87×45cm、深さ16cmである。遺物は1の須恵器境のみが出土している。

82号土坑 (P L 91)

円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを持ち、硬化面は認められない。規模は径50×46cm、深さ22cmである。遺物は土器などは出土していないが、最大20×18×10cmの円礫を含む24個の小～中円礫が出土している。性格・時期ともに不明。

83号土坑 (P L 91)

不整形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持ち、南側が丸くくぼむ。規模は径160×109cm、深さ14cmである。遺物は土器などは出土していないが、最大22×16×12cmの円礫を含む8個の小～中円礫が出土している。82号土坑に類似する。性格・時期ともに不明。

99号土坑

楕円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径105×70cm、深さ8cmである。遺物は出土しなかった。

111号土坑

円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径75×65cm、深さ23cmである。遺物は出土しなかった。

133号土坑

長楕円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は凸凹する。規模は径96×52cm、深さ32cmである。遺物は出土しなかった。

173号土坑

隅丸長方形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径116×64cm、深さ16cmである。遺物は出土しなかった。

180号土坑

ほぼ円形を呈するやや深いビット。底面は丸みを持つ。規模は径34×25cm、深さ35cmである。遺物は出土しなかった。

182号土坑 (P L 91)

円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦。規模は径153×146cm、深さ15cmである。遺物は出土しなかった。埋土に炭化物が混入する。

206号土坑

不整楕円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径93×60cm、深さ11cmである。遺物は出土しなかった。

211・217号土坑

211号土坑は不整円形を呈するピット。217号土坑は不整方形を呈し浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。新旧関係不明。211号土坑の規模は径27×19cm、深さ21cmである。217号土坑の規模は径66×67cm、深さ11cmである。遺物は出土しなかった。

223号土坑

不整形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸する。規模は径89×65cm、深さ20cmである。遺物は出土しなかった。

225号土坑 (P L 91)

円筒形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径91×82cm、深さ84cmである。砂礫

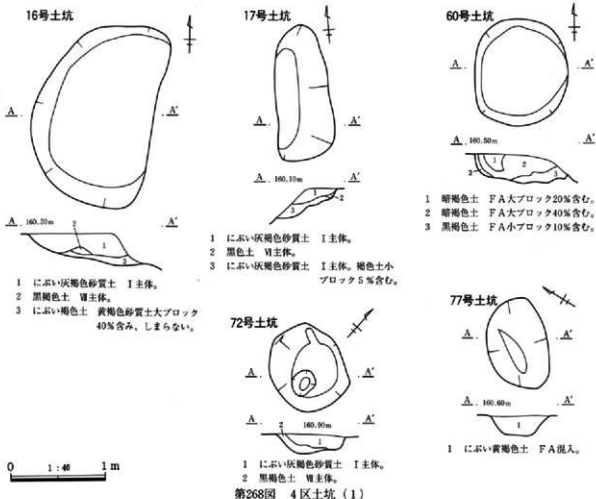
により人為埋填される。砂礫は還元しており、埋填時は湛水状態であったと考えられ、水場施設であった可能性がある。4区1号堀北西部の埋土の上層に同様な砂礫の堆積があり、関連が想定される。底面で小円礫が多く出土し、土師器薄片1片が出土しているが混入か。壁面に掘削時の工具痕が見られる。

254号土坑

楕円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は径117×72cm、深さ18cmである。遺物は出土しなかった。

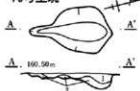
288号土坑

長方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面はやや凹凸するが平坦。芋穴か。規模は径136×62cm、深さ67cmである。南側から人為埋填される。調査前の耕作道脇に位置する。



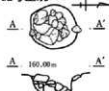
第268図 4区土坑 (1)

79号土坑

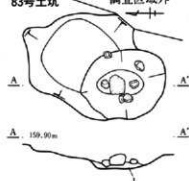


- 1 暗オリーブ褐色土 埴土粒、A s-Cを1%含む。
- 2 暗オリーブ褐色土 黄色砂(X)、A s-Cを5%含む。

82号土坑

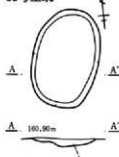


83号土坑



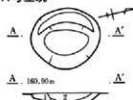
- 1 オリーブ褐色砂質土

99号土坑



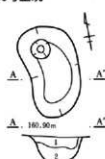
- 1 オリーブ褐色土とにぶい褐色土の混土 A s-C 1%含む。

111号土坑



- 1 にぶい黄褐色土 F A主体。
- 2 オリーブ褐色土 暗褐色土大ブロック40%含む。
- 3 暗褐色土 にぶい黄褐色土小ブロック20%、A s-C 1%含む。

133号土坑



- 1 にぶい黄褐色土 F A主体。黒色土小ブロック5%、A s-C 1%含む。
- 2 にぶい黄褐色土 黒色土大ブロック40%含む。

173号土坑



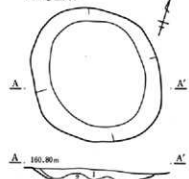
- 1 オリーブ褐色土 暗褐色土大ブロック40%、A s-C 1%含む。

180号土坑

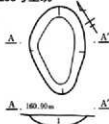


- 1 にぶい黄褐色土 A s-C、F A小ブロックを5%、炭化物粒1%含む。
- 2 灰黄褐色土 A s-C 1%含む。

182号土坑



206号土坑



- 1 灰黄褐色土 A s-C 1%含む。

- 1 にぶい黄褐色土 A s-C、F A小ブロックを5%、炭化物粒1%含む。
- 2 にぶい黄褐色土と黒色土の混土 炭化物粒1%含む。

0 1:40 1m



第270図 4区土坑(3)・出土遺物

5区 埋土は全てA s-C, FAを含む灰褐色~暗褐色土であり, 掲載した14・35・36号土坑及び溝に類似する15・16号土坑を除いて, 形状はビットであり, 多くは竪穴住居跡・掘立柱建物跡に関連するものと見られる。

14号土坑

隅丸長方形を呈し浅く, 壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦で硬化面は見られない。規模は径97×58cm, 深さ13cmである。埋土に焼土, 炭化物を含む。FAよりも新しい。遺物は出土しなかった。

17号土坑 (P L 91・153)

隅丸方形を呈しやや深いビット。底面は丸みを持つ。規模は径31×23cm, 深さ27cmである。埋土に焼土を含む。遺物は1の土師器甕のほか, 土師器片8

片が出土している。

28号土坑 (P L 153)

円形を呈しやや深いビット。底面は丸みを持つ。規模は径26×26cm, 深さ45cmである。位置及び出土遺物から見て, 2号住居跡との関連が考えられる。遺物は1の須恵器境のみが出土している。

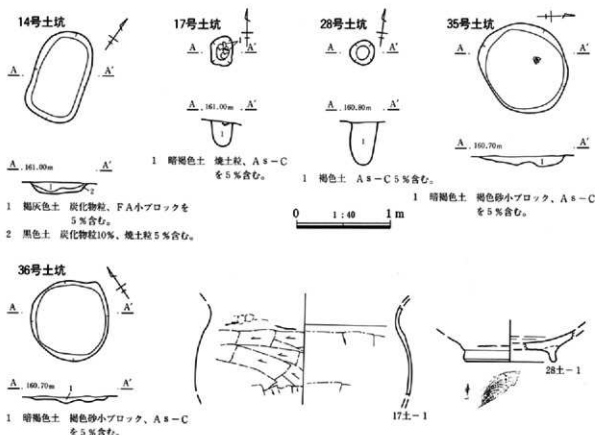
35号土坑 (P L 91)

楕円形を呈し浅く, 壁は緩やかに立ち上がり不分明。底面は凸凹する。規模は径94×92cm, 深さ13cmである。遺物は土師器片6片が出土している。

36号土坑 (P L 91)

ほぼ円形を呈し浅く, 壁は緩やかに立ち上がり不分明。底面は凸凹する。規模は径84×82cm, 深さ22cmである。規模・形態ともに35号土坑に類似する。

3. 土坑・土壌墓・堅穴状遺構・粘土採掘坑群・被熱土坑



第271図 5区土坑・出土遺物

6区 埋土は、①表土に近いオリーブ褐色砂質土、②砂の混入が著しいオリーブ褐色～黒褐色砂質土、③A s-C、FAを含むにぶい黄褐色～黒褐色土、都合3つに分類できる。①は調査区北端の1号土坑と中央の6・7・8号土坑及び南側の36～38・41・42号土坑であり、形状から芋穴と位置づけられ、6号土坑を除いて土地改良後の地割に基づいた地境に並行する。②は3・15・18・19・27・29・30号土坑であり、掲載土坑以外の15・27・29・30号土坑はビットである。また②は、1・2号掘立柱建物跡のビット埋土と共通し、分布もこれらの周辺に位置することから関連が想定される。③は上記以外の土坑全てであり、掲載した1号被熱土坑23・24・39・49号土坑を除いて形状はビットであり、同じく③を埋土とする3号掘立柱建物跡周辺に集中し、その多くは関連するものとする。

1号被熱土坑 (P L 92)

楕円形を呈し浅く、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径95×82cm、深さ22cmである。東半分は、確認段階で内側に焼土と炭化物が巡っており、断面でも同様に焼土が壁面に垂直に見られた。このため、木枠を埋設した後、被熱したものと推測する。また、調査は西半分が先行し、断面観察に基づいて東半分を拡張した結果調査精度が異なるが、西半分では確認面で焼土が外周する状況は認められなかった。ただし、底面に壁からの崩落とみられる焼土塊があることから、この土坑は被熱後、西半分を破壊して内側のものを取り出した可能性がある。出土遺物は土器等はなく、広葉樹などの炭化材(第7章2参照)及び粘土塊が出土した。

1号土坑 (P L 92)

長方形を呈し深く、壁は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径172×74cm、深さ68cmである。

芋穴か、埋没は10cm程自然埋没した後、人為埋没される。遺物は須恵器片1片があるが混入と考えられる。

3号土坑 (P L 92・153)

不整形円形を呈しやや深く、壁は垂直で途中1か所軽く段を持つ。底面は平坦。規模は径67×50cm、深さ39cmである。埋土は上層が砂質で、下層に粘土塊が顕著に見られる。粘土塊の状況は、桶埋設土坑と類似するが、木杵の痕跡は平面断面ともに認められなかった。埋土及び位置から見て1号掘立柱建物跡に関連すると考える。遺物は1の鉄器片のみが出土している。

18号土坑

整った円形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径57×50cm、深さ7cmである。埋土は砂質で、3号土坑に似る。埋土及び位置から見て2号掘立柱建物跡に関連すると考える。遺物は出土しなかった。

19号土坑 (P L 92)

整った円形を呈し浅く、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径102×93cm、深さ24cmである。埋土は砂質で、18号土坑に似る。形状は桶埋設土坑に類似するが、粘土及び木杵の痕跡は認められなかった。18号土坑同様に2号掘立柱建物跡との関連が想定される。遺物は出土しなかった。

23号土坑 (P L 92)

整った円形を呈し浅く、壁は丸みを持って斜めに

7区 本区の特徴は、土坑が極めて少ないことであり、低地であることに起因するものと見られる。埋土は、①にぶい黄褐色～褐色砂質土、②A s-C、F Aを含む灰褐色粘質土、都合2つに分類される。①は1～3号土坑であり、形状から芋穴に位置づけられる。また、2号土坑は土地改良前の径道に、3号土坑は土地改良後の地割りに基づく地境に並行する。②は4・5号土坑であり、形状はピットである。

2号土坑 (P L 93)

整った長方形を呈し浅く、壁はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径126×53cm、深さ11cm

立ち上がる。底面は植物攪乱が著しいがほぼ平坦。規模は径117×115cm、深さ28cmである。埋土から見て、1・2号掘立柱建物跡との関連は考慮し難い。遺物は出土しなかった。

24号土坑

ほぼ楕円形を呈し浅く、壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径95×87cm、深さ8cmである。23号土坑に似る。遺物は出土しなかった。

39号土坑 (P L 92)

半分が調査区域外となるため形状は不明。規模は径52以上×53cm以上、深さ14cmである。また上面も42号溝に壊されており、壁は残存部分では垂直に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

45号土坑

円形を呈しやや深いピット。底面はほぼ平坦。規模は径38×35cm、深さ33cmである。遺物は出土しなかった。

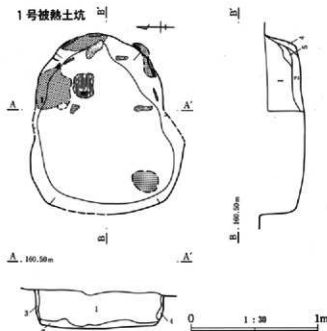
49号土坑 (P L 92)

不整形を呈し浅く、壁は緩やかに立ち上がり不明。底面は植物攪乱が著しく凸凹する。規模は径181×114cm、深さ14cmである。埋土に焼土塊を多量に含み炭化物も見られるが、土坑自体が被熱したというよりも、焼土等が投棄された様相を示す。性格不明。53号溝よりも古い。遺物は出土しなかった。

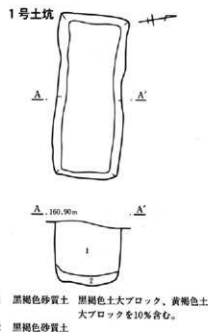
である。芋穴か。埋没は人為埋没による。埋土にA s-Bが多いのは、上層にA s-Bの二次堆積(Ⅲ')が厚く堆積しているためである。遺物は出土しなかった。

5号土坑 (P L 93)

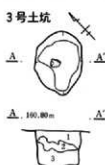
ほぼ円形を呈し浅いピット。底面は丸みを持つ。規模は径34×24cm、深さ16cmである。遺物は出土しなかった。



- 1 にぶい黄褐色粘質土 IV主体。A-C I%含む。
- 2 暗褐色粘質土 焼土粒、炭化物粒を1%含む。
- 3 赤褐色土 焼土。
- 4 黄褐色土 焼土。
- 5 にぶい黄褐色粘質土 IV主体。炭化物40%含む。



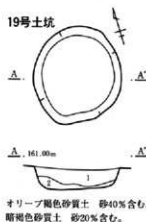
- 1 黒褐色砂質土 黒褐色土大ブロック、黄褐色土大ブロックを10%含む。
- 2 黒褐色砂質土



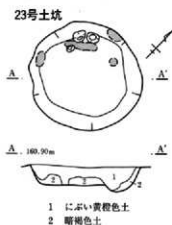
- 1 灰黄褐色砂質土 黒褐色土大ブロック20%含む。
- 2 黒褐色土 VI主体。黄褐色粘土大ブロック40%含む。
- 3 黒褐色土 VI主体。黄褐色粘土小ブロック10%含む。



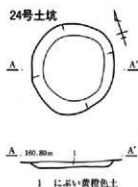
- 1 オリーブ褐色砂質土 砂40%含む。



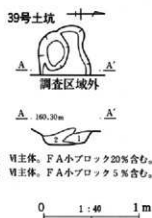
- 1 オリーブ褐色砂質土 砂40%含む。
- 2 暗褐色砂質土 砂20%含む。



- 1 にぶい黄褐色土
- 2 暗褐色土



- 1 にぶい黄褐色土



- 1 黒褐色土 VI主体。F A小ブロック20%含む。
- 2 黒褐色土 VI主体。F A小ブロック5%含む。

第5章 金古北十三町遺跡の遺構・遺物

6区45号土坑



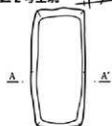
- 1 にぶい黄褐色土 F A小ブロック20%、
A s-C 1%含む。
2 黒褐色土 F A小ブロック5%、A s
-C 1%含む。

6区49号土坑



- 1 黒褐色土 焼土粒、炭化物粒、A s-Cを5%含む。
2 褐色土 焼土粒1%含む。
3 黒褐色土 焼土粒1%含む。
4 褐色土と黒褐色土の混土。

7区2号土坑



- 1 灰黄褐色土 A s-B 40%含む。

7区5号土坑



- 1 灰褐色粘質土 F A、A s-C
を5%含む。



6区3土-1

0 1:40 1m

第273図 6区・7区土坑・出土遺物

8区 埋土は、①A s-C、F Aを含む黒褐色土、
②A s-A、A s-Bを含むにぶい黄褐色～褐色砂
質土、都合2つに分類できる。①は7・9・11・13・
15・17・19・54・67・71・122号土坑であり、形状は
ピットである。②は上記以外の土坑全てであり、形
状から3つのグループに細分できる。②-1は、44
・60・115・116・118・119・121・131号土坑であり、
形状から手穴と位置づけられ、地境との関連は明確
ではないが、後述するA s-B混土畠跡とよく主軸
方位が一致しており関連が想定される。②-2は、3
・5・6・16・64・65号土坑であり、規模が大きく特
徴は後述のとおりである。②-3は上記以外の土坑
全てであり、形状はピットである。なお、②は1号
掘立柱建物跡及び1・2・3号井戸跡の埋土と共通して
おり、②-2・3の多くは関連するものと見られる。
1号粘土探掘坑群 (P L93)

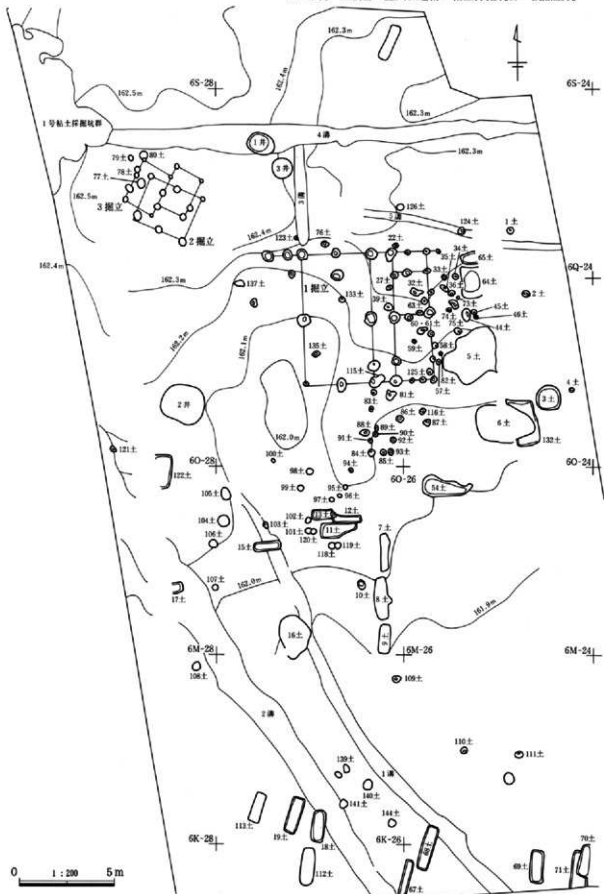
不整円形を呈する土坑7基程が重複すると見られ

る。壁は概ねオーバーハングし、底面はほぼ平坦。
全体の規模は南北9.30m、東西3.90m以上を測る。
各土坑個別の規模は明確でないが、東端が最も新し
いものと断面観察から判断され、くぼ地側の西方向
から掘り進めた結果であると考え。残存状況が最
も良好であるP 1の規模は、径195×155cm以上、深
さ63cmである。底面はほぼ褐色砂質土 (Ⅸ)で止ま
っており、壁は褐色土 (Ⅶ)を中心に掘り込まれて
いる。したがって、本遺構は褐色土 (Ⅶ)を採掘す
る繰り返しの形成されたものである。遺物は
底面から1・2の肥前系統、埋土から3の瀬戸美濃
系皿が出土しているが、遺物出土量は少ない。出土
遺物から18世紀前半に比定される。

1号土坑 (P L94)

円形を呈するピット。底面は丸みを持つ。規模は
径32×31cm、深さ25cmである。遺物は1の陶器碗が
出土している。

3. 土坑·土墳墓·豎穴狀遺構·粘土採掘坑群·被熟土坑



第274图 8区土坑全体图

3号土坑 (P L 94)

ほぼ円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径126×124cm、深さ35cmである。遺物は陶磁器片1片が出土している。位置及び埋土から、1号掘立柱建物跡との関連が想定される。

5号土坑 (P L 94・153)

不整形円形を呈し、壁はやや丸みを持って斜めに立ち上がる。底面は平坦。規模は径282×124cm、深さ48cmである。遺物は1の焼締陶器すり鉢、2・3の寛永通宝などの銅銭が出土している。位置及び埋土から、1号掘立柱建物跡との関連が想定される。

6・132号土坑 (P L 94)

6号土坑は楕円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。底面は東側が丸く落ち込む。規模は径316×140cm、深さ61cmである。132号土坑は方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径242×114cm、深さ44cmである。両土坑の新旧関係は

不明。遺物は陶器片2片、磁器片2片が出土している。位置及び埋土から、1号掘立柱建物跡との関連が想定される。

8号土坑

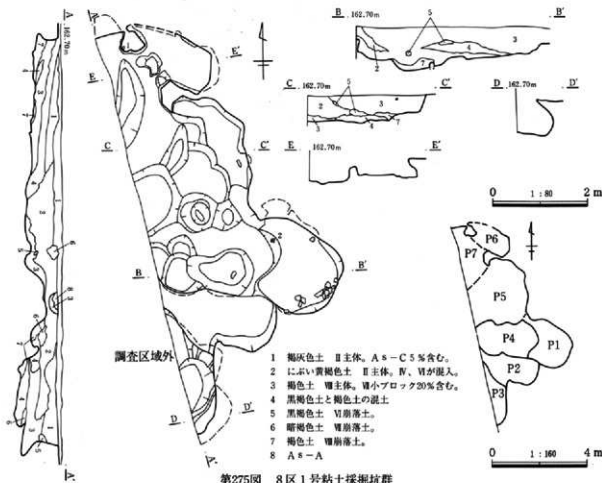
方形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。規模は径224×56cm、深さ50cmである。芋穴か。埋没は10cm程自然埋没した後、人為埋没される。遺物は土師器・須恵器片が出土するが混入と考えられる。

44号土坑

円形を呈するピット。底面は丸みを持つ。規模は径51×42cm、深さ32cmである。遺物は出土しなかった。

64号土坑 (P L 94)

方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は径170×94cm、深さ35cmである。遺物は出土しなかった。位置及び埋土から、1号掘立柱建物跡との関連が想定される。



第275図 8区1号粘土採掘坑群